

## 第6章 近世の遺構・遺物

近世の遺構としては、M地区西半部の今池・剣池間の堤（堤M-1）と剣池の東側の堤（堤M-2）を中心に調査を行っている。堤M-1では、その下層から水田跡（水田M-1）を検出しているほか、両池間をつなぐ樋1基（樋M-1）を検出している。また、剣池東側の堤M-2においても堤を横断するかたちで西側の農業用水路を結ぶ樋1基（樋M-2）を検出している。

以下、個別に記述を進めていくことにしたい。

### 第1節 M地区今池・剣池間堤の調査

#### 1. 堤

##### (1) 堤M-1（図III-96、写III-22,23-4）

堤M-1はその全域を調査せず、4M～8Mトレンチと呼称する5箇所のトレンチを設定して調査を行っている。そのうちの4Mトレンチは堤盛土の状況を把握するために先行して調査を行った部分であり、その成果を踏まえて5Mトレンチの調査を行い、堤盛土の下層に埋没する水田跡を検出している。

また、これ以外に堤に平行する6M・7Mトレンチ、樋門M-1の調査を対象とした8Mトレンチを設定し、これらの4箇所でトレンチを北側に拡張し、土層断面の観察および実測を行っている。

剣池と今池間に築かれた堤M-1は東西方向に約180m、幅は狭い所で約15m前後、北に大きく張り出すところで約50m前後である。なおこの張り出し部分を、以下、堤M-1突出部と呼称する。堤M-1突出部は図III-96に示したように堤本体を構築している盛土よりも確実に新しく、後に拡張されたものである。規模からみて元来は西側部分とほぼ同規模の幅を有する堤が続いているものと考えられる。

当該堤上面のレベルはほぼ52.0mを測り、平坦である。

なお、調査トレンチが連続していない点を考慮し、個別に記述を進めていくことにしたい。なお、下層から水田跡を検出した5Mトレンチおよび樋門の調査を中心とした8Mトレンチについては別項で報告を行う。

4Mトレンチは堤の盛土の状況を把握することを目的とした2m×2mの試掘トレンチであり、地表面から1.95mの深度までの掘削を行っている。この部分は堤M-1と堤M-1突出部の境界部分に該当しており、土層観察により、両者の境界を明瞭に確認している。

6Mトレンチは東西に約100m、幅約5mである。剣池内の泥の堆積は重機で掘削し、地山直上の灰色粘土のみ人力掘削を行った。地山はトレンチ中央部付近で北から南に段をつけて落ち込んでいく。当該トレンチからは浅い溝・土坑等を数箇所で検出したが、その性格は不明である。

灰色粘土中からは、埴輪・須恵器・土師器・瓦器の破片が出土しているが、図示できるものはない。

7Mトレンチは東西20m、幅約5mである。当初トレンチを東側に拡張する予定であったが、谷がはいりこんで現地表面からの深度が2m以上に達したため、安全上調査を断念した。谷はトレンチ西端から約10mで急に落ちはじめ、東に向かって深くなる。後述する樋M-1の部分では地山のレベルは高くなるので、7Mトレンチと樋M-1の間に南北方向の谷が存在するものと判断できる。

遺物は埴輪・須恵器・瓦器等の破片が出土しているが、いずれも細片である。また東側の谷の中から比較的多くの須恵器が出土しており、剣池西岸の須恵器窯で焼成された須恵器が、谷に沿って流出し

たものであると考えられる。

堤M-1の横断面は4個所で観察を行った。共通の特徴としては、①黄褐色系の粘質土と褐色系の粘質土を交互に積んでいる ②積み方は中央部よりも今池側に重心を置いている ③堤を築いた後に堤中央部に1m強の幅で、地山近くまで真っ直ぐに掘り、粘土を楔状に埋め込んでいる、等があげられる。

上記の堤構築における技術的特徴は、ことさらにいうまでもなく、堤の構造上の強度向上を目指したものであると判断される。

## 2. 橋

剣池では、池からの取水を目的とした樋を2個所で検出している。北側の堤M-1に設定した5Mトレンチで検出したものを樋M-1、東側の堤M-2で検出したものを樋M-2とする。樋は樋門と樋管とから構成されている。

### (1) 樋M-1 (図III-96, 97、写III-23-1~3)

樋門は台座・脚部・天井からなり、鳥居状の形態を呈する。前面からみて左の台座は横×奥行き×高さが50cm×60cm×35cm、右の台座は35cm×52cm×30cmである。その台座上に約7cmの深さで23cm四方の掘り込みがあり、約20cm四方の柱石が垂直に立てる。柱石の頂部には天井石をのせるための「ほぞ」が作り出されている。幅が6cmで高さが7cmである。脚の長さは底部からほぞ頂部まで約2mである。天井石は横が185cm、奥行き40cm、高さ20cmで横からみるとかまばこの両端を切り落としたような形である。天井石の中央には木製の鉛筆状の栓を差し込むための穴が18cm四方に開けられている。樋門下を通る樋管上部の中央にこの栓を差す穴が開けられ、この木を上下させることで池の水を調節することができる。東側脚には「原寺村 北村 立会」、西側脚には「字鶴喜池」の線刻がある。

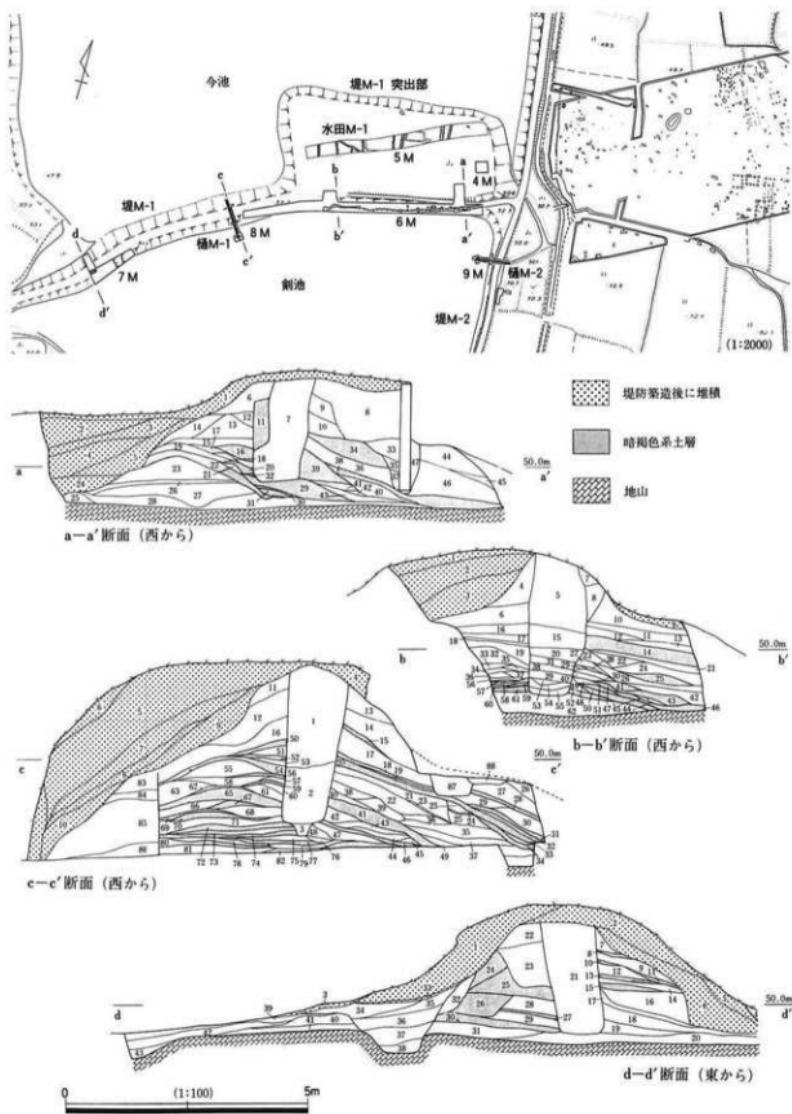
樋門の後ろ側には、台座の上に脚に添うようにして長さ約80cmの木の杭を立て掛け、その後ろにさらに板石を2枚立て掛けている。前面からの水圧に対応するための補強であると考えられる。

樋管はすべて板木を組み合わせて作ったもので、全部で6本の管と木栓からなっており、全長は17.2mに達する。それぞれの管の長さは南から2.9m、3.0m、2.8m、2.9m、2.6m、2.5mとなる。南北から2番目の管では南半分に後から補修をうけた跡があり、別の木が上部にはめこまれている。その補修部分には漆喰状の粘土で補強している。レベルは南端と北端では、わずかに12cm南の方が高く、明らかに剣池から今池に水を流出させるための樋であることが分かる。

樋管の天板と底板は、幅約32cm、厚さが約10cmあり、端部には幅約12cm、厚さ約10cmの側板をはさみ、それらは釘を一切使わずに、ほぞで接合されている。樋管は上記のように厚みのある板材を用いており、通水部は約12cm四方にすぎない。また天板と底板は、端部を丁寧に面取りしている。それぞれの樋管は入れ込み式で連結しており、北に凸、南に凹となるように作られている。

また、南から2番目と3番目の樋管の間には側板に隙間があり、それをふさぐための板を両側に立てている。南端の木栓は一本を削って作ったものである。また接合される2つの樋管上面の端部には墨で同じ記号が記されていた状況を看取ることが可能である。現状では2個所で明瞭に観察され、宝珠形および分銅形の墨書を確認することができる(写III-23-2)。他の接合部でも墨書の痕跡はあったがはっきりせず、記号の形を確認することもできなかった。

この樋管の東側に約40cmの間隔をおいて、平行に木質が遺存していた。非常に残りは悪く、ほとんど木の皮のみで、それらもはっきりしない部分もあった。中央部に残した土層観察用のあぜをみると、樋管を埋める以前にこの木は人為的に埋められていたことが分かる。現在みられる樋管より前に利用さ



図III-96 堤M-1断面図

## a-a' 断面

1. 黒褐色10YR3/2砂質土  
2. 黄褐色10YR5/6シルト  
3. 黄褐色10YR5/8シルト  
4. 明黄褐色10YR6/8シルト  
5. 褐色10YR4/4シルト  
6. 明黄褐色10YR6/8シルト  
7. 黄褐色10YR5/8シルト  
8. 喀黃茶色10YR6/4シルト  
9. 黄褐色10YR5/6シルト  
10. 黄褐色10YR5/8シルト  
11. 暗褐色10YR3/4シルト  
12. 黄褐色10YR6/5シルト  
13. 明黄褐色10YR6/8シルト  
14. 黄褐色10YR5/8シルト  
15. 黄褐色10YR5/6シルト  
16. 黄褐色10YR4/6シルト  
17. 黄褐色2.5Y4/6シルト  
18. 褐色10YR4/6シルト  
19. 黄褐色10YR5/8シルト  
20. 黄褐色10YR5/6シルト  
21. 黄褐色10YR5/6シルト  
22. 褐色10YR4/6シルト  
23. 黄褐色10YR5/8シルト  
24. 褐色5YR4/6粘質土  
25. 赤褐色5YR4/8粘質土  
26. 黄褐色2.5Y5/6シルト  
27. 赤褐色5YR4/8粘質土  
28. 褐色5YR4/6シルト  
29. 褐色5YR4/6シルト  
30. 褐色10YR4/4シルト  
31. 暗褐色10YR3/4シルト  
32. 黄褐色10YR5/8シルト  
33. 明黄褐色2.5Y7/6シルト  
34. 褐色10YR4/6シルト  
35. 黄褐色10YR5/8シルト  
36. 黄褐色10YR6/8シルト  
37. 黄褐色10YR5/6シルト  
38. 褐色10YR4/4シルト  
39. 褐色10YR4/6シルト  
40. 黄褐色10YR5/6シルト  
41. 喀黃茶色10YR6/4粘質土  
42. 反黄褐色10YR5/2粘質土  
43. 暗褐色10YR5/4粘質土  
44. 黄褐色2.5Y4/6シルト  
45. 明黄褐色10YR3/2砂質土  
46. 黄褐色10YR4/4シルト  
47. 黄褐色10YR5/8シルト

## b-b' 断面

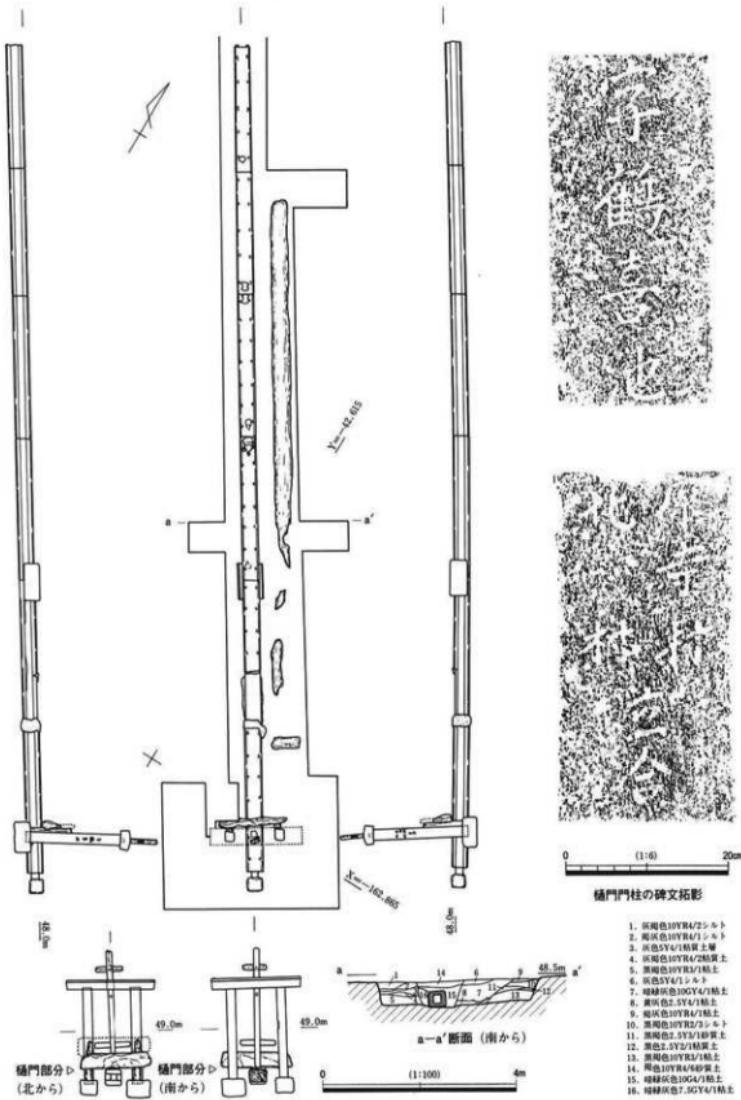
1. 暗褐色10YR4/3砂質土  
2. 褐色10YR4/4シルト  
3. 黄褐色10YR5/3砂質土  
4. 明黄褐色10YR6/6シルト  
5. 喀黃茶色10YR6/3粘質土  
6. 黄褐色10YR4/4シルト  
7. 暗褐色10YR5/3砂混じりシルト  
8. 黄褐色10YR4/6粘混じりシルト  
9. 黄褐色10YR5/6シルト  
10. 黄褐色10YR4/4シルト  
11. 黄褐色10YR4/6シルト  
12. 黄褐色10YR4/6粘質土  
13. 黄褐色10YR5/6シルト  
14. 黄褐色10YR3/3砂混じりシルト  
15. 黄褐色10YR4/6粘混じりシルト  
16. 黄褐色10YR4/6粘混じりシルト  
17. 黄褐色10YR5/6砂混じりシルト  
18. 黄褐色10YR4/6粘混じりシルト  
19. 黄褐色10YR5/6シルト  
20. 黄褐色10YR4/6シルト  
21. 黄褐色10YR4/6シルト  
22. 黄褐色10YR5/6シルト  
23. 黄褐色7.5YR4/4シルト  
24. 黄褐色10YR4/6シルト  
25. 暗褐色10YR3/4シルト  
26. 暗褐色10YR5/4粘質土  
27. 黄褐色10YR4/6シルト  
28. 黄褐色10YR4/3粘質土  
29. 黄褐色10YR4/6シルト  
30. 黄褐色10YR4/6シルト  
31. 黄褐色10YR4/6シルト  
32. 黄褐色10YR4/6シルト  
33. 黄褐色10YR5/6シルト  
34. 黄褐色10YR5/6シルト  
35. 黄褐色10YR4/6粘質土  
36. 黄褐色10YR5/8粘質土  
37. 黄褐色10YR5/8シルト  
38. 黄褐色7.5YR4/6粘質土  
39. 黄褐色10YR4/6粘質土  
40. 黄褐色10YR5/8シルト  
41. 黄褐色10YR5/8シルト  
42. 暗褐色10YR3/4シルト  
43. 暗褐色10YR4/4シルト  
44. 黄褐色10YR4/4シルト  
45. 黄褐色7.5YR3/2シルト  
46. 黑褐色7.5YR3/2シルト  
47. 黑褐色7.5YR3/3粘質土  
48. 黑褐色7.5YR3/3シルト  
49. 黄褐色10YR5/6粘質土  
50. 黄褐色10YR5/6粘質土  
51. 黄褐色10YR5/3粘質土  
52. 黄褐色10YR5/3粘質土  
53. 黄褐色10YR5/8粘質土  
54. 黄褐色10YR5/8粘質土  
55. 黄褐色10YR5/8粘質土  
56. 黄褐色10YR5/8シルト  
57. 黄褐色7.5YR3/3シルト  
58. 黄褐色7.5YR3/3シルト  
59. 黑褐色7.5YR3/1シルト  
60. 黑褐色7.5YR4/4シルト  
61. 明褐色7.5YR5/6粘質土  
62. 暗褐色10YR5/6粘質土  
63. 黄褐色10YR5/6粘質土  
64. 黄褐色10YR5/6粘質土  
65. 黄褐色10YR5/6粘質土  
66. 黄褐色10YR5/6粘質土  
67. 黄褐色10YR5/6粘質土  
68. 黄褐色10YR4/4粘質土  
69. 黄褐色10YR4/4粘質土  
70. 黄褐色10YR4/4粘質土  
71. 黄褐色10YR4/4粘質土  
72. 黄褐色10YR4/4粘質土  
73. 黄褐色10YR4/4粘質土  
74. 黄褐色10YR4/4粘質土  
75. 黄褐色10YR4/4粘質土  
76. 黄褐色10YR4/4粘質土  
77. 黄褐色10YR4/4粘質土  
78. 黄褐色10YR4/4粘質土  
79. 黄褐色10YR4/4粘質土  
80. 黄褐色10YR4/4粘質土  
81. 黄褐色10YR4/4粘質土  
82. 黄褐色10YR4/4粘質土  
83. 黄褐色10YR4/4粘質土  
84. 黄褐色10YR4/4粘質土  
85. 黄褐色10YR4/4粘質土  
86. 黄褐色10YR5/1粘質土  
87. 黄褐色10YR4/1粘土  
88. 黄褐色10Y4/1粘土

## c-c' 断面

1. 赤黄褐色10YR6/2粘土  
2. 灰色5Y6/1粘土  
3. 灰オーリーブ5Y6/3砂混じり粘土  
4. 黑褐色土  
5. 黄褐色10YR5/4砂質土  
6. 4と同じ  
7. 5と同じ  
8. 6と同じ  
9. 褐色7.5YR4/6砂質土  
10. 9と同じ  
11. 黄褐色10YR5/6砂質土  
12. 黄褐色10YR4/1粘土  
13. 11と同じ  
14. 12と同じ  
15. 13と同じ  
16. 14と同じ  
17. 15と同じ  
18. 16と同じ  
19. 17と同じ  
20. 黄褐色10YR4/6粘質土  
21. 黄褐色10YR5/6粘質土  
22. 黄褐色2.5Y4/6粘質土  
23. 黄褐色2.5Y4/6粘質土  
24. 黄褐色2.5Y4/6粘質土  
25. 黄褐色10YR5/6粘質土  
26. 黄褐色10YR5/6粘質土  
27. 黄褐色10YR5/6粘質土  
28. 黄褐色10YR5/6粘質土  
29. 黄褐色10YR5/6粘質土  
30. 黄褐色10YR5/6粘質土  
31. 黄褐色10YR5/6粘質土  
32. 黄褐色10YR5/6粘質土  
33. 黄褐色10YR5/6粘質土  
34. 黄褐色10YR5/6粘質土  
35. 黄褐色10YR5/6粘質土  
36. 黄褐色10YR5/6粘質土  
37. 黄褐色10YR5/6粘質土  
38. 黄褐色10YR5/6粘質土  
39. 黄褐色10YR5/6粘質土  
40. 黄褐色10YR5/6粘質土  
41. 黄褐色10YR5/6粘質土  
42. にぶい黄褐色10YR5/4粘質土  
43. にぶい黄褐色10YR5/4粘質土  
44. にぶい黄褐色10YR5/4粘質土  
45. 黄褐色2.5Y4/6粘質土  
46. 41と同じ  
47. 42と同じ  
48. 43と同じ  
49. 44と同じ  
50. 18と同じ  
51. 19と同じ  
52. 20と同じ  
53. 黄褐色2.5Y4/6粘質土  
54. 22と同じ  
55. 黄褐色10YR4/6粘質土  
56. 黑褐色2.5Y4/6粘質土  
57. 黄褐色10YR5/6粘質土  
58. にぶい黄褐色10YR5/4粘質土  
59. 黄褐色10YR5/6粘質土  
60. 黄褐色10YR5/6粘質土  
61. にぶい黄褐色10YR5/3粘質土  
62. 黑褐色10YR5/1  
63. 61と同じ  
64. 黄褐色10YR5/4粘質土  
65. 黄褐色10YR5/4粘質土  
66. 黄褐色10YR5/4粘質土  
67. 56と同じ  
68. 67と同じ  
69. 黄褐色10YR4/5粘質土  
70. にぶい黄褐色10YR5/3粘質土  
71. 黄褐色2.5Y5/1粘質土  
72. 黄褐色10YR4/5粘質土  
73. 黄褐色2.5Y3/1砂層  
74. 黄褐色10YR5/3粘質土  
75. 73と同じ  
76. 74と同じ  
77. 75と同じ  
78. 黄褐色2.5Y3/1砂層  
79. 黑褐色2.5Y4/6粘質土  
80. 77と同じ  
81. 黄褐色10YR5/6粘質土  
82. 黄褐色10YR5/5粘質土  
83. にぶい黄褐色10YR5/4粘質土  
84. 黄褐色10YR5/4粘質土  
85. にぶい黄褐色10YR5/3粘質土  
86. 黄褐色10YR5/1粘質土  
87. 黄褐色10YR4/1粘土  
88. 黄褐色10Y4/1粘土

## d-d' 断面

1. 明黄褐色10YR6/6砂質土  
2. 黄褐色10YR4/4粘質土  
3. 黄褐色10YR4/4粘質土  
4. 黑褐色植土  
5. 明黄褐色2.5Y7/6粘土  
6. 褐色10YR4/4砂質土  
7. 黄褐色7.5YR4/6粘質土  
8. 暗褐色10YR3/4粘質土  
9. 7と同じ  
10. 8と同じ  
11. 9と同じ  
12. 7と同じ  
13. 8と同じ  
14. 7と同じ  
15. 8と同じ  
16. 9と同じ  
17. にぶい黄褐色10YR5/3粘質土  
18. にぶい黄褐色10YR6/4粘質土  
19. 黄褐色7.5YR4/3粘質土  
20. 黄褐色10YR4/3粘質土  
21. にぶい黄褐色10YR5/4粘土  
22. 黄褐色10YR4/4粘質土  
23. 黄褐色7.5Y4/4粘質土  
24. 黄褐色10YR4/2粘質土  
25. 黄褐色10YR4/6粘質土  
26. 黄褐色10YR4/6粘質土  
27. 25と同じ  
28. 27と同じ  
29. 黄褐色10YR4/6粘質土  
30. 29と同じ  
31. 黄褐色10YR4/6粘質土  
32. 黄褐色2.5Y5/4粘質土  
33. 黄褐色5Y5/1砂混じり粘土  
34. 黄褐色10YR5/8粘質土  
35. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土  
36. 黄褐色10YR5/8粘質土  
37. 黄褐色10YR5/8粘質土  
38. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土  
39. オリーブ褐色2.5Y4/4砂層  
40. 黄褐色10YR5/6粘質土  
41. にぶい黄褐色10YR5/4砂層  
42. 黄褐色10YR5/2粘質土  
43. 黄褐色10YR5/2粘質土  
44. にぶい黄褐色10YR5/4粘質土  
45. 黄褐色10YR5/4粘質土  
46. 黄褐色10YR5/4粘質土  
47. 黄褐色10YR5/4粘質土  
48. 黄褐色10YR5/4粘質土  
49. 黄褐色10YR5/4粘質土  
50. 黄褐色10YR5/4粘質土  
51. 黄褐色10YR5/4粘質土  
52. 黄褐色10YR5/4粘質土  
53. 黄褐色10YR5/4粘質土  
54. 黄褐色10YR5/4粘質土  
55. 黄褐色10YR5/4粘質土  
56. 黄褐色10YR5/4粘質土  
57. 黄褐色10YR5/4粘質土  
58. 黄褐色10YR5/4粘質土  
59. 黄褐色10YR5/4粘質土  
60. 黄褐色10YR5/4粘質土  
61. 黄褐色10YR5/4粘質土  
62. 黄褐色10YR5/4粘質土  
63. 黄褐色10YR5/4粘質土  
64. 黄褐色10YR5/4粘質土  
65. 黄褐色10YR5/4粘質土  
66. 黄褐色10YR5/4粘質土  
67. 黄褐色10YR5/4粘質土  
68. 黄褐色10YR5/4粘質土  
69. 黄褐色10YR5/4粘質土  
70. 黄褐色10YR5/4粘質土  
71. 黄褐色10YR5/4粘質土  
72. 黄褐色10YR5/4粘質土  
73. 黄褐色10YR5/4粘質土  
74. 黄褐色10YR5/4粘質土  
75. 黄褐色10YR5/4粘質土  
76. 黄褐色10YR5/4粘質土  
77. 黄褐色10YR5/4粘質土  
78. 黄褐色10YR5/4粘質土  
79. 黄褐色10YR5/4粘質土  
80. 黄褐色10YR5/4粘質土  
81. 黄褐色10YR5/4粘質土  
82. 黄褐色10YR5/4粘質土  
83. 黄褐色10YR5/4粘質土  
84. 黄褐色10YR5/4粘質土  
85. 黄褐色10YR5/4粘質土  
86. 黄褐色10YR5/4粘質土  
87. 黄褐色10YR5/4粘質土  
88. 黄褐色10YR5/4粘質土



図III-97 橋M-1平面・立面図

れていた木製の樋管で、組み合わせのしっかりしたものではなく、丸太をくりぬいた程度のものであったと考えられる。これらの樋管が堤防の構築後に作られたものかどうかは、堤防と樋管の直交する断面を観察できなかったので不明であるが、少なくとも組み合わせの樋管は堤防構築後のものであろうと考えられる。樋管掘り方内や樋門周辺からは、須恵器や瓦器の破片が出土している。

### 3. 水田

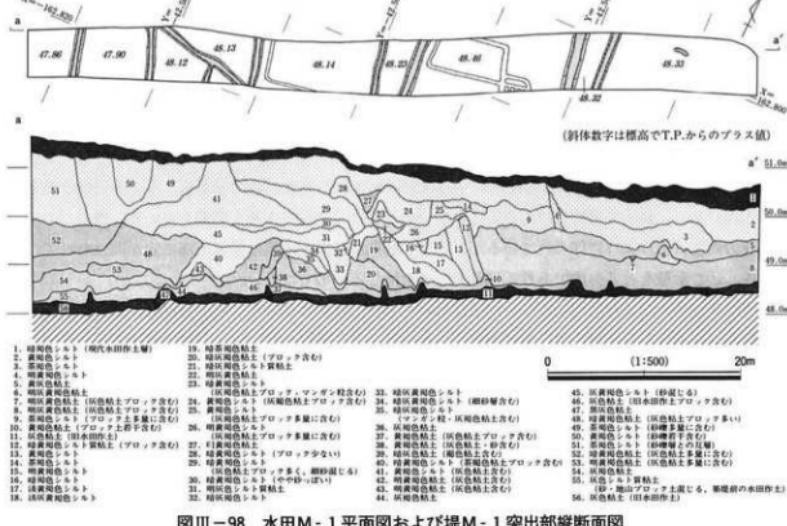
#### (1) 水田M-1 (図III-96, 98、写III-22-2)

他の調査区の調査成果を含めても、近世以降においては当調査区周辺は現況のようにほぼ完全に水田化したようであり、検出される遺構は犁溝や農業用井戸などの耕作関連のものに限られる。また、これらの水田は現代にいたるまで存続しており、したがって、検出される耕作関連の遺構も井戸等を除けば、遺存状態は良好であるとはいえない。

しかし、堤M-1突出部に設定した長さ75m、幅6mの5Mトレーナーでは、厚さ2.0~3.4mの盛土下から水田面が姿をあらわし、それに伴って畦畔等の遺構を非常に良好な状態で検出している。

調査トレーナーが細長いこともある、全体の状況は把握しがたいが、水田作土上面のレベルは東側で48.33m、西側で47.86mを測り、東から西にむかって47cmの比高差を生じている。検出した畦畔は南北方向を指向するものが多いが、地割等に明確な規格性は見いだしがたい。また、畦畔の設定は地形の傾斜に対応しており、基本的には南北方向を指向しているものの、棚田状を呈する谷水田であった可能性が高い。このほか、水田作土上面から掘り込まれた細長い溝を数条検出しており、稲刈り後に排水のために掘削された溝である可能性が高い。堤の造成が当該水田面での稲刈り後、すなわち秋から冬にかけて着工された可能性が示唆される。

水田面に伴う遺物は近世の陶磁器細片が若干出土しているのみである。



図III-98 水田M-1平面図および堤M-1突出部縦断面図

## 第2節 M地区剣池東堤の調査

### 1. 堤

#### (1) 堤M-2 (図III-96,99)

剣池の東側の堤である堤M-2の調査は、後述する樋M-2の調査を対象とした9Mトレンチにおける土層断面の観察を中心としており、平面的な調査は行っていない。したがって、以下では断面の観察から得られた所見について報告を行う。

堤M-2造成に伴う盛土の土層断面図は図III-99の下段の土層断面図に掲げた通りである（以下、本項で用いる番号は上記の土層断面図の土層番号に対応する）。

66は堤が造成時の基盤層であり、その上に積み上げられた盛土は大きく3分される。堤の盛土層下部は薄い版築層が山なりに盛り上げられている。さらに、盛土層上部は16~27、46~61等の薄層による版築土層である。この盛土層上部には30~36によるはがね土が確認される。

以上の土層観察の所見から、当該堤は盛土下層のみによる低い堤の段階と上部の盛土層によって修築した段階の2時期に分かれる可能性がある。しかし、部分的な調査による所見であり、あるいは連続する築造過程における工程上の境界である可能性も十分に考えられる。

土層観察の結果、後述する樋M-2の樋管埋設時の掘り方ははがね土の部分には確認できず、したがって、樋M-2の造営ははがね土に先立って行われたものであると判断される。

なお、下層から検出した高位段丘層は西側へと傾斜しており、剣池がこの堤M-2を東限とする開析谷を利用した谷池であること示している。

また、板築土層内からは、図には示していないが土師器の小皿が出土しており、さらに樋M-2の樋門付近からは瓦質羽釜の口縁部が出土している。いずれも直接的な時期決定資料とはならないが、堤の造成が中世にさかのぼる可能性も示唆される。

### 2. 樋

#### (1) 樋M-2の調査 (図III-96,99,100、写III-24)

樋M-2は剣池の東側の堤である堤M-2において検出したものであり、剣池から東側の水田への給水を目的として造営されたものである。

樋の構造は堤M-2から約7mの地点に花崗岩で構築された門形の樋門である。その中央には上下に動く木栓があり、加えて樋管口にあるもう1つの木栓によって流出水量を調節している。樋管口の木栓は樋管の内径に合うように作られているが、一方の樋門の上部の木栓は樋管上部に穴が開けられて、そこにさし込む形態をとるものであり、樋管の全面を閉じるものではない。

樋門は花崗岩の石材を門形に組み、中央に木栓と男柱と呼ばれる柱がある。石材は、横石はかまぼこ形、柱石は四角材からなり、下に基礎石が2つありこの上に置かれていた。石材で構築された部分の規模は高さ2.10m、幅1.75mを測る。

#### A 樋門

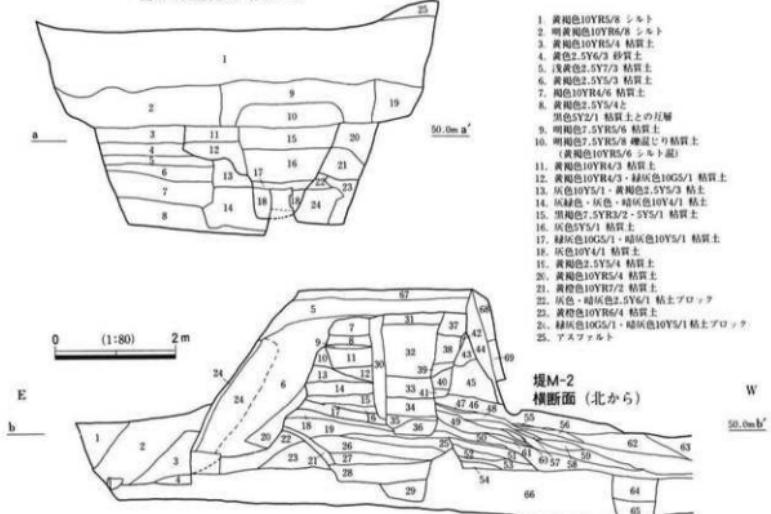
樋門は少し南東側に傾いている。樋門上部の横石材は断面がかまぼこ形で、長さ1.75m、上端幅37.0cm、下端幅34.5cm、厚さは最も厚い部分では約23cmを測る。樋門の柱石材は下部の基礎石から約1.75mを測り、断面約22cm×18cmを測る。2本の柱石材は0.83mの距離を置いて立てられ、それぞれ男柱の側に長方形やL字形のえぐりがある。これは現在使用されていないが、かつて男柱の下部にある横木が長

く、樋の石柱まで伸び、男柱が浮き上がるのを防ぐための細工と考えられる。これは現在では用をなしていない。現状では、この代わりに男柱の上部に樋管方向の径約3cmほどの穴が開けられ、棒を差し込んで男柱が浮き上がるのを防ぐ働きをしている。

樋柱石材は2つの基礎石にはぞを約3cm掘り込んで組み合わせている。現在は樋柱石材や樋管の一部をコンクリートで補強している。男柱は1辺約14.5cmの四角柱で上下2本の横木が組み込まれ、上方に近い部分に穴が開けられている。樋管に差し込まれる先端は裁頭円錐形である。樋柱石材の堤側に、板状の花崗岩が狭い面を上にして横に置かれている。さらに樋柱と板状石材の間に五輪塔、および舟形石碑が挟まれている。なお、五輪塔は上下さかさまに、舟形石碑は文字を刻んだ面を西に、樋柱石材に向けて横向きに挟み込まれている。

石材の樋門および基礎石を撤去した下に柱痕が数個所認められた。柱を掘り込んだ跡門が過去に設けられていた可能性も考えられる。しかし構造は解明しえなかった。

樋M-2部分断面（西から）



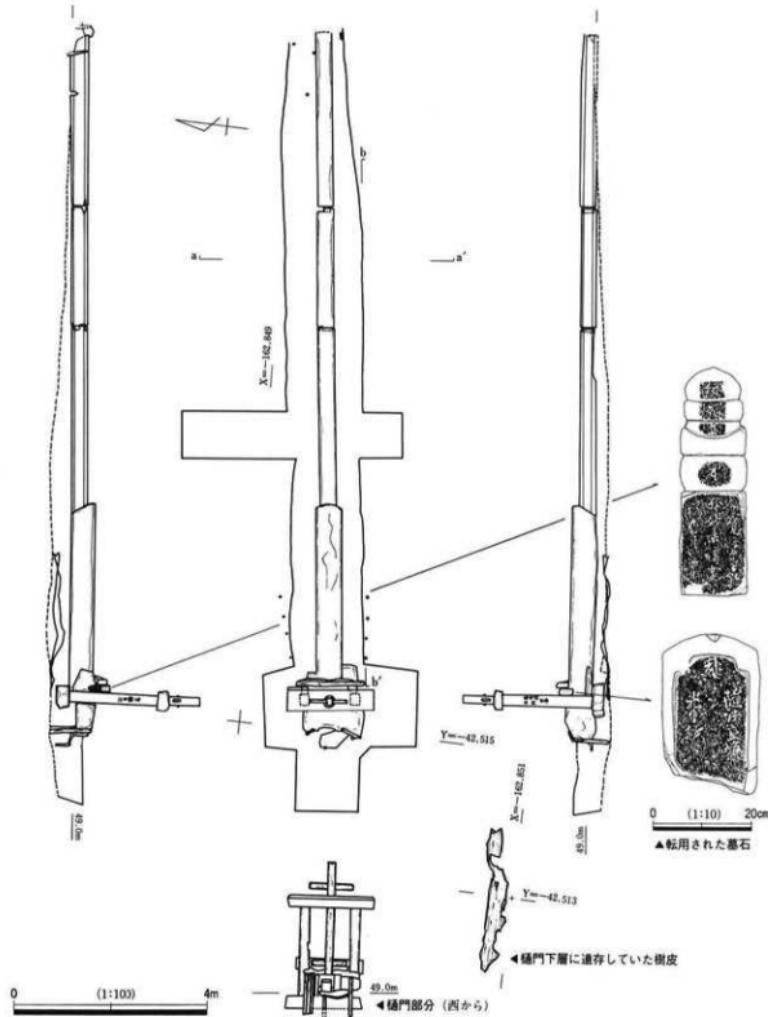
1. 黄褐色10YR4/4 粘質土
2. 濃灰土
3. 紫褐色10YR8/6 シルト
4. 明褐色10YR8/8 粘土
5. 7.5YR4/2 砂石
6. 10YR4/1 粘質土
7. 黄褐色30YR5/3 粘質土  
(明褐色10YR6/6 粘質土)
8. 黄褐色10YR6/6 粘質土
9. 黄褐色10YR6/6 混凝セメント
10. 暗褐色10YR4/6 シルト
11. 黄褐色10YR5/6 シルト
12. 黄褐色10YR5/4 シルト
13. 黄褐色10YR5/8 粘質土
14. 黄褐色10YR5/6 シルト
15. 黄褐色10YR4/4 シルト
16. 黄褐色10YR5/6 粘質土
17. 黄褐色10YR5/6 シルト

18. 黄褐色2.5Y5/3 シルト
19. 明褐色10YR5/6 シルト
20. 黄褐色10YR5/6 シルト
21. 黄褐色10YR5/4 シルト
22. 黄褐色10YR5/8 粘質土
23. 黄褐色10YR5/4 粘質土
24. 黄褐色10YR5/6 粘質土
25. 黄褐色10YR5/6 シルト
26. 黄褐色10YR5/6 シルト
27. 黄褐色10YR5/6 シルト
28. 黄褐色10YR5/6 粘質土
29. 青灰色10BG6/1 混凝
30. 明褐色7.5YR5/6 シルト
31. 黄褐色10YR5/6 粘質土
32. 明褐色10YR6/6 粘質土
33. 明褐色10YR6/6 混凝セメント
34. 黄褐色10YR5/6 混凝セメント
35. 黄褐色2.5Y5/3 シルト
36. 黄褐色2.5Y5/3 シルト
37. 明褐色10YR6/8 粘質土
38. 黄褐色10YR7/6 粘質土
39. 明褐色10YR6/8 シルト
40. 明褐色10YR4/6 シルト
41. 黄褐色10YR5/6 粘質土
42. 黄褐色10YR5/6 シルト
43. 黄褐色2.5Y5/6 粘質土
44. 黄褐色10YR5/6 シルト
45. 黄褐色2.5Y5/6 シルト
46. 明褐色2.5Y5/6 シルト
47. オリーブ色2.5Y4/4 粘質土
48. 黄褐色10YR5/6 シルト
49. 黄褐色10YR5/6 シルト
50. 黄褐色10YR5/6 シルト
51. 黄褐色10YR5/6 シルト
52. 明褐色10YR4/6 シルト
53. 黄褐色2.5Y5/6 シルト
54. 黄褐色10YR4/6 シルト
55. 黄褐色10YR4/6 シルト
56. 黄褐色10YR5/6 シルト
57. オリーブ色2.5Y4/6 粘質土
58. 黄褐色10YR5/6 粘質土
59. 黄褐色10YR5/6 粘質土
60. 黄褐色10YR5/6 粘質土
61. 明褐色10YR4/6 粘質土
62. 黄褐色2.5Y5/4 シルト
63. 明褐色2.5Y5/4 粘質土
64. 黄褐色10YR5/8 シルト
65. 黄褐色2.5Y3/3 粘質土
66. オリーブ色2.5Y4/2 粘土
67. コンクリート
68. 木板のかたまり
69. コンクリートブロック

1. 黄褐色10YR5/8 シルト
2. 明褐色10YR6/8 粘質土
3. 黄褐色10YR5/4 粘質土
4. 濃色2.5Y6/3 砂質土
5. 浅褐色5.5Y7/3 粘質土
6. 黄褐色5.5Y5/6 粘質土
7. 明褐色10YR4/6 粘質土
8. 黄褐色10YR5/6 粘質土  
(明褐色10YR5/6 粘質土)
9. 黄褐色10YR4/3 粘質土
10. 明褐色5.5Y8/5 混凝じり粘質土  
(黄褐色10YR5/6 粘土)
11. 黄褐色10YR4/3 粘質土
12. 黄褐色10YR5/3 緑灰色10G5/1 粘質土
13. 濃色10Y5/1 黄褐色2.5Y5/3 粘土
14. 黄褐色10YR4/3 緑灰色10G4/1 粘土
15. 明褐色7.5YR5/2 2.5Y5/1 粘質土
16. 深褐色5Y5/1 粘質土
17. 緑灰色10G5/1 混凝じり10Y5/1 粘質土
18. 深褐色10Y4/1 粘質土
19. 黄褐色2.5Y5/4 粘質土
20. 黄褐色10YR5/4 粘質土
21. 黄褐色10YR7/2 粘質土
22. 黄褐色10YR5/4 混凝ブロック
23. 黄褐色10YR5/6 粘質土
24. 緑灰色10G5/1 混凝じり10Y5/1 粘土ブロック
25. アスファルト

堤M-2  
横断面（北から）

図III-99 堤M-2・樋M-2断面図



図III-100 桶M-2 平面・立面図

## B 横管

横管は厚さ6cmの板材をL字形の鉄釘で留めて、外径約32.0~33.5cm、内径約20~22.5cmの四角に近い管を作る。

樋門から4本の樋管を組み合わせて堤の外へ通している。それぞれの樋管の長さは西側の樋管から、長さ4.11m、4.13m、2.52m、4.11mを測る。接合部は3cmの厚さで入れ子状に組み合わせ、西側が凹で東側が凸に組んでいる。東側の樋管は池の水に洗われたり、乾燥したりして腐食がいちじるしく、コンクリートを巻いて補強している。堤下部の樋管の遺存状況が最も良いが、部分的に穴が開き、堤の内部がえぐれていた所もある。樋管は全長約14.87mを測り、東の水路側の標高はT.P.48.919m、樋門の標高T.P.48.926mを測り、外側が低く流れ出すように設計されている。樋管は長さの約1/2が池に突き出て、残りの長さ約1/2ほどが堤の下にある。

現在の木製の樋管を除去した直下約30cmに、松らしい針葉樹の丸太の樹皮が長さ約3mで丸みを残し



つつ遺存していたが、丸太材は全く残存していなかった。樋管の掘り方は北側は浅く南側が現在より約30cm以上も深くなる状況を示している。このことは針葉樹の樹皮の遺存と考え合わせて、現在の樋管以前に、南側に針葉樹の丸太の樋管が埋設されており、旧樋管を撤去する時に遺存した樹皮である可能性が想定される。

#### C 出土遺物（図III-101、写III-47-5,6）

樋M-2に関連して出土した遺物は樋門の構築に際して2次的に転用されていた墓石2点である。

(1)は一石五輪塔であり、高さ46.0cm、幅12.5cmを測る。石材は砂岩である。1面にのみ陰刻が確認できる。空輪、風輪、火輪、水輪、地輪には不明瞭ながらも梵字で「キャ、カ、ラ、バ、ア」の文字が刻まれており、地輪にはその下方に法名（戒名）と位号に加えて年号が記されている。

その内容は中央に「妙法信女」、向かって右側には「寛文二年」、左側に「九月十日」である。法名に「妙」が選字されていることや、位号が「信女」である点などから成人女性の墓碑であると判断される。

ちなみに年号の寛文二年は1662年にあたり、これにより樋M-2の築造が1662年以降であったものと判断される。

(2)は舟形の墓石である。高さは残存で33.0cm、幅19.5cm、厚さ8.5cmを測り、下部を欠損している。石材は砂岩である。一段低く彫り込まれた表面には中央上部に梵字で「キリーク」が刻まれ、その下方には向かって右側に「隨法良順」、左側に「光月妙□」の文字が彫られている。下方は欠損しており、これ以下にも文字が連続していた可能性があるが、詳細は不明である。

法名と位号からみて、男女2名の墓碑である可能性が高い。

## 第7章 近代以降の遺構・遺物

### 第1節 K地区の遺構・遺物

近代以降の遺構としては農業用の井戸等を検出したにとどまる。調査前においても当調査区はそのほとんど全域が水田あるいは畑であり、その景観は少なくとも近世以前に形成されたものであると考えられる。したがって、当調査区周辺の景観は近代においても現在の景観と大過ないものといえる。

しかしながら、明治29年1月26日には高野鉄道株式会社によって狭山一堺東間の高野線（現在の南海電鉄高野線の前身）が開通する。直接的に関連するか否かは不明であるが、高野線に近いK地区からは第2次世界大戦時に米軍機から発射されたと考えられる銃弾が出土している。

わずか1点の銃弾ではあるが、戦争の傷痕を示す考古学的な物証として、ここに1章を設けて報告しておくことにした。

#### 1. 銃弾（図III-102）

銃弾は1Kトレンチの現代の水田作土層（I層）から出土したものである。

法量は長さ5.8cm、最大径12.6mmを測る。先端部は面をなし、中心から後端部に向かって細くなり、末端では直径8mmを測る。後端部はさらに直径7mm前後でくぼんでおり、この部分には白い粉状の物質が確認される。また、中位には8条のライフルマークが観察される。形態および直径12.6mmという規格からP51などの米軍機に搭載されていた機関銃から発射された曳光弾であると判断される。



図III-102 銃弾

## 第8章 まとめ

III調査区で検出した主な遺構は古墳時代の須恵器窯、奈良・平安時代の掘立柱建物群、鎌倉時代の土墳墓群ならびに近代の池堤・樋門等である。その詳細については、すでに報告してきた通りである。ここでは調査成果を時代順に簡単にまとめておくことにしたい。

### 1. 古墳時代

古墳時代の遺構としてはL地区西側の谷部斜面から検出した須恵器窯をあげることができる。出土した須恵器から、田辺編年TK-10型式で6世紀中葉～後葉にかけて操業されていたものと判断する。

当該須恵器窯は非常に浅い谷地形を利用して営まれた須恵器窯である点が特徴的であり、窯体から排出される炭化物や不良品を人為的に掘削した土坑によって処理している状況が明らかとなっている。

この須恵器窯は奈良時代～平安時代の建物群の造営に伴って上部が大きく削平されており、さらには中世以降の水田開発によても破壊が進んでいる。

なお、当該須恵器窯で出土した須恵器については全てを観察の対象とし、破片数・重量・口縁計測によるカウントを行っている。その詳細については基礎分析の項に譲るが、器種では圧倒的に蓋杯類が多く、口縁計測のデータによると実に9割以上を占めるという状況が明らかとなっている。そのほか、器種ではバケツ形を呈する特異な形態の鉢が複数出土しており、いずれも胴部中位に穿孔を有する点が共通している。成形・調整とともに粗雑なものが多く、穿孔位置の高さが一定していないなどの特徴を抽出可能であり、その用途については不明である。

また、出土須恵器の技法的特徴では、杯蓋では口縁部の外端部に刻み目状の調整をもつものが確認されるほか、杯身とともに内面に同心円紋スタンプを押捺するものが多い。

陶邑縁辺部における須恵器生産の実態を知る上で重要な調査成果であるといえる。

また、この須恵器窯の上部は後述する奈良時代以降の開発によって大きく削平されており、大規模土地開発の時期を推定する上においても非常に重要な情報を提供している。

### 2. 奈良時代

奈良時代の遺構と考えられるものとしては、掘立柱建物跡5棟と井戸2基のほか、数基の土坑を検出している。これらのうち、M地区から検出した建物群は、舌状にのびる高まりの先端部分を選地しており、さらにL字形にきわめて整然と計画的に配置されている状況が看取されるものである。

また、L地区では須恵器窯の上部が大きく削平されていることが明らかとなっているものの、削平された面からは奈良時代の遺構が破壊されることなく検出されており、大規模な整地を伴う土地開発が古墳時代から奈良時代までの間に行われたことを示している。

建物群に伴う区画等は検出できなかったが、いずれの建物もほぼ正確に南北を指向しており、先の大規模開発が条里型地割の実質的な施行に伴うものであった可能性を示唆している。

建物群の時期を直接的に示す遺物は非常に少ないが、周辺で検出した井戸や土坑からの出土遺物には平城宮土器編年における平城宮II段階の特徴を有する土器群が出土しており、土地開発の時期が遅くとも8世紀前半には行われていたことを示している。

ただ、当調査区で検出した奈良時代の建物群は、限られた調査範囲内における所見ではあるものの、いずれも建て替え等の状況を見いだすことができない。調査範囲外への移動も考慮しなければならない

ものの、一過性の建物であった可能性も示唆されるところである。

### 3. 平安時代

平安時代の遺構として多数の掘立柱建物跡・井戸・土坑等を検出している。当該期の建物群は奈良時代の場合とは異なり、建物にも重複するものがあり、その分布や方向から数時期にわたって集落が存続していた状況が看取される。

建物では2間×3間、あるいは2間×2間の平面構造を有し、小規模で等質的なものが多いが、その一部では周囲に溝を巡らせるものや、庇をはじめとする付帯施設を有するものも認められる。また、その分布および建物の方向等から2～3棟が一単位となっていた可能性が高い。

また、K地区では表層条里型地割に対応するかたちで溝が検出されており、その北側では建物群、南側では黎溝群が検出されるという際立った相違を示しており、集落域と耕作域の境界部分である可能性が高い。L地区からM地区で検出された建物群も区画は検出しえなかつたが、正確に1町4方におさまっており、その造営に際して条里型地割の規制が働いていたことは明らかである。

ただ、当調査区で検出した平安時代集落の特徴としては井戸の数が非常に少なく、しかもL地区西側で検出した谷部の両岸にのみ分布している状況が看取される。これはII調査区で検出された中世の集落とは異なる様相であり、現状でみるとかぎり、谷部を水場とした井戸の共同利用の可能性も示唆される。

建物に直接的に伴う遺物は僅少であるが、9世紀末葉から11世紀中葉にかけて集落が営まれていた状況が明らかとなった。

### 4. 中世

中世には集落はまったく姿を消し、当調査区の東半は耕地化する。したがって、明確な遺構は検出していないが、M地区では鎌倉時代の土壙墓3基を検出している。3基の土壙墓群はやや距離を置いて造営されているが、その周囲からは区画溝を検出しており、計画的に造営された可能性が高い。

とくに2基の土壙墓からは青磁碗および土師器杯・皿がセットで出土している。その数は両者で共通しており、さらに一方の土師器がすべて精製された白色系の胎土を有するのに対して、他方は在地の粗い胎土である点も非常に興味深い事実である。両土壙墓の規模には大小があり、類例との比較からすれば、これらは埋葬された人物の性別に起因している可能性が高いものと判断している。

そういった意味においても、これらの土壙墓群は集團墓地ではなく、「屋敷墓」的な性格を有するものであったことが示唆される。

### 5. 近世以降

中世段階に土壙墓が営まれていたM地区も近世にいたって耕地となる。当該期の主な検出遺構はM地区的西半部にあたる今池・劍池で調査を実施した堤および橋である。いずれも部分的な調査ではあったが、堤の断面構造および橋の構造が考古学的な調査によって明らかとなった点で評価できる。

そのほか、現代の水田作土層からは第2次大戦当時に発砲されたと考えられる米軍の機関銃弾が南海高野線寄りのK地区で出土している。

第Ⅳ部　Ⅳ調査区の調査成果



# 第1章 遺構

## 第1節 調査の概要と前提

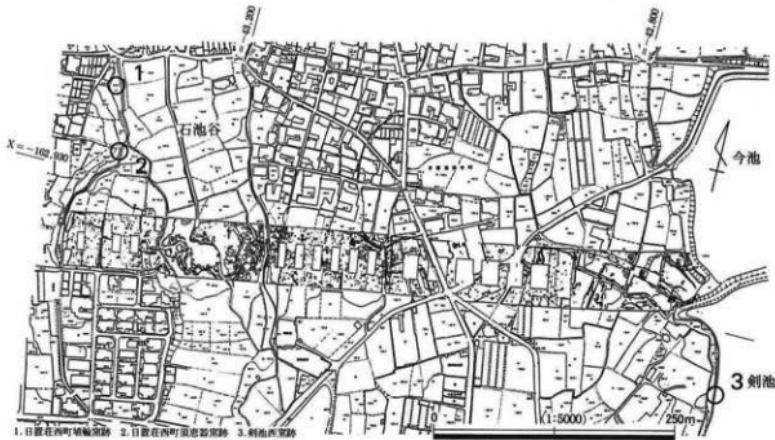
### 1. 位置と地形と地質

#### (1) 位置 (図IV-1)

IV調査区は日置荘遺跡・余部遺跡の長さ約2.3kmの中で最も西側に位置している。IV調査区の調査した範囲は幅約60m、長さ約650mで、総面積約24,500m<sup>2</sup>である。調査区は行政的には大阪府堺市日置荘田中町・日置荘西町・大美野に入る。当調査区は眺望が非常に良く、四周を望める地である。南には和泉山脈が南西側に次第に低くなり、紀淡海峡に沈むのが望める。南東から東には葛城山・金剛山・二上山の山並みが望め、北東には生駒山地が北に延びるのが望める。北には遠く北摂山系が見え、見通しの良い日には比叡山まで見える。北西側には六甲山脈が見え、見通しの良い冬の日にははるか遠く西の海上に淡路島を望む事ができる。このような四周の眺望の良さは、IV調査区が南側にある和泉丘陵から派生する比較的平坦な洪積世第四紀層高位段丘上にあり、しかも地形的に北側へ緩やかに下っている上に立地しているからである。

#### (2) 調査区の概要 (図IV-2, 4~6)

IV調査区には東から順にN・O・P・Qの4つの地区がある。この各地区内は、調査を行った区画ごとにトレンチ名を付けてさらに細分している。N地区的範囲は東限が今池・剣池の西岸、西限が5差路までで、長さ約270mを測り、1N~43Nトレンチに分かれている。O地区的範囲は、5差路から西側が開析谷に降りるまで、長さ約190m、1O~15Oトレンチに分かれている。P地区的範囲は、開析谷底と西側の



図IV-1 IV調査区全体図

高位段丘上の南に隣接する府営住宅東端部付近まで、長さ約110m、1P~8Pトレンチに分かれる。Q地区の範囲は、P地区に接する部分から府営住宅西端付近の石池から流れ出る農業用水路まで、長さは約90m、1Q~6Qトレンチに分かれる。

なお、各地区内の位置の表示については、トレントとは別に水田や畑等の現況の地割ごとに番号を与えている（図IV-3）。

### （3）地形（図IV-3,7）

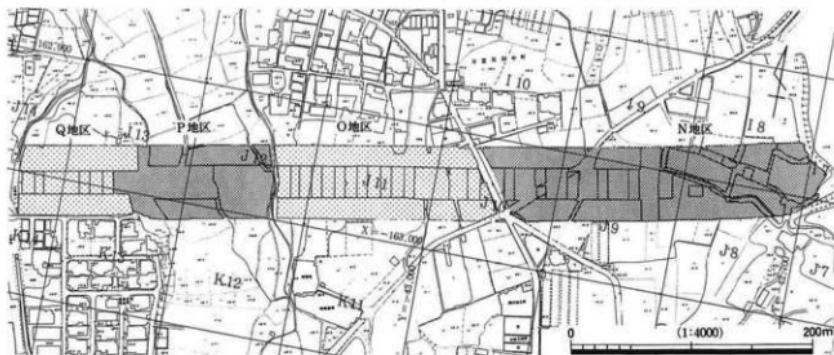
IV調査区は標高50m前後を測る高位段丘面上に立地し、段丘上は比較的凹凸が少ないが、間にに入る開析谷は北から南へ高位段丘層を奥深く侵食している。広い視野で見ると周囲には高位段丘上面と開析谷の2種類の地形が存在するが、細かく見ると、もう一つ異なる凹地状地形が見える。これは約1.5m程緩やかに窪んだ地形で、高位段丘形成時の上面の凹凸がそのまま残った地形と考えられる。凹地状地形は高位段丘上にあり、N地区に2個所、O地区に2個所、Q地区に1個所存在している。

次に各地区的様相を詳しく述べると以下のようである。N地区は標高49.8~51.9mを測り、雑地N-5、草地N-7付近にある水路周辺がやや高い。そして水田N-14・水田N-16・水田N-20・水田N-21、草地N-17付近に凹地状地形N-1があり、現状では埋没していてほとんど分からなければ、周辺の水田より約10cm低くなっている。凹地状地形N-2は畑N-2付近にあり、東隣の水田から約1.3m低くなっている。

O地区は47.2~50.8mを測り、多少起伏のある地形である。西端は開析谷側に向かって下る急な傾斜である。O地区内には東側に凹地状地形が2個所ある。凹地状地形O-1は5差路の西にある畑O-14、草地O-15部分にあり、約1m低くなっている。凹地状地形O-2は水田O-9、草地O-10、畑O-11・畑O-12の下層にあり、現状では窪んでいない。

Q地区は46.2~49.0mを測り、西側の西高野街道に向けて緩やかに高くなる。凹地状地形Q-1はQ地区西端にあって少し窪んでおり、現在においても石池から流出する農業用水路が通っている。

一方、P地区は高位段丘上と開析谷部分にまたがるが、開析谷内は周囲の高位段丘上と比較するとかなり低く、45.1~46.3mを測る。開析谷底部では西側の古墳時代の河川である河道P-2の埋没している部分が一段と低い。東側は、河道P-2より古い河川である河道P-1の堆積物で西側よりも高くなっ



ており、本書では台状部と呼んでいる。

いま述べた凹地状地形と開析谷は、IV調査区内の歴史的変遷を理解する上で最も重要な位置を占めている。以下の遺構の説明は、主として凹地状地形と開析谷部分に、人々がいかに関わりをもっていたかについての記述である。

#### (4) 地質（図IV-7）

N・O・P・Q地区の高位段丘上の地質は、上層、下層ともほとんど共通している。最上層には現耕作土層が厚さ約30cmで被っている。この下には高位段丘層最上層の土壤化した褐色から黄灰色を示す粘質土層が厚さ約50cm見られる。この層は、高位段丘上層の厚さ約2~3cmの互層状に堆積していた赤褐色と灰白色の粘質土層が、後世の植物や空気中の酸素の影響を受けて褐色などに変質した土層である。褐色などを呈する土壌は酸化が進んでいるので酸性土壌の性格を持ち、植物の生育に大きな影響を与えていく。野菜等の限られた植物がこの土壌に適応しているらしい。

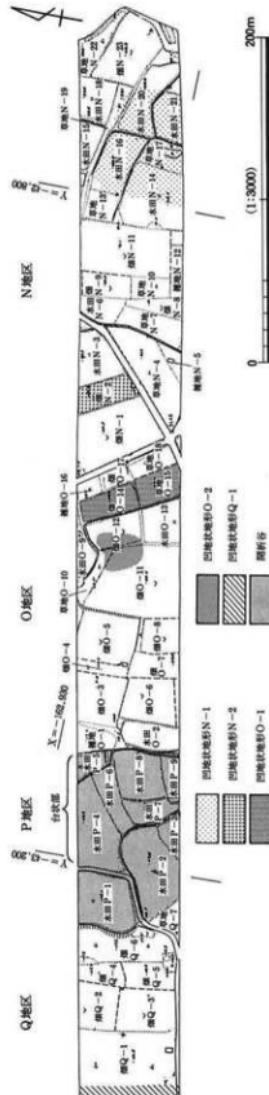
土壤化した層の下50cm~1m付近には、まだ土壤化していない赤褐色と灰白色的粘質土の互層が残存している。さらに下層は和泉砂岩を中心にして堆積した茶褐色系の土色を呈する段丘疊層に次第に変化していく。その下の約3~4m前後までこの傾向は変わらない<sup>1)</sup>。

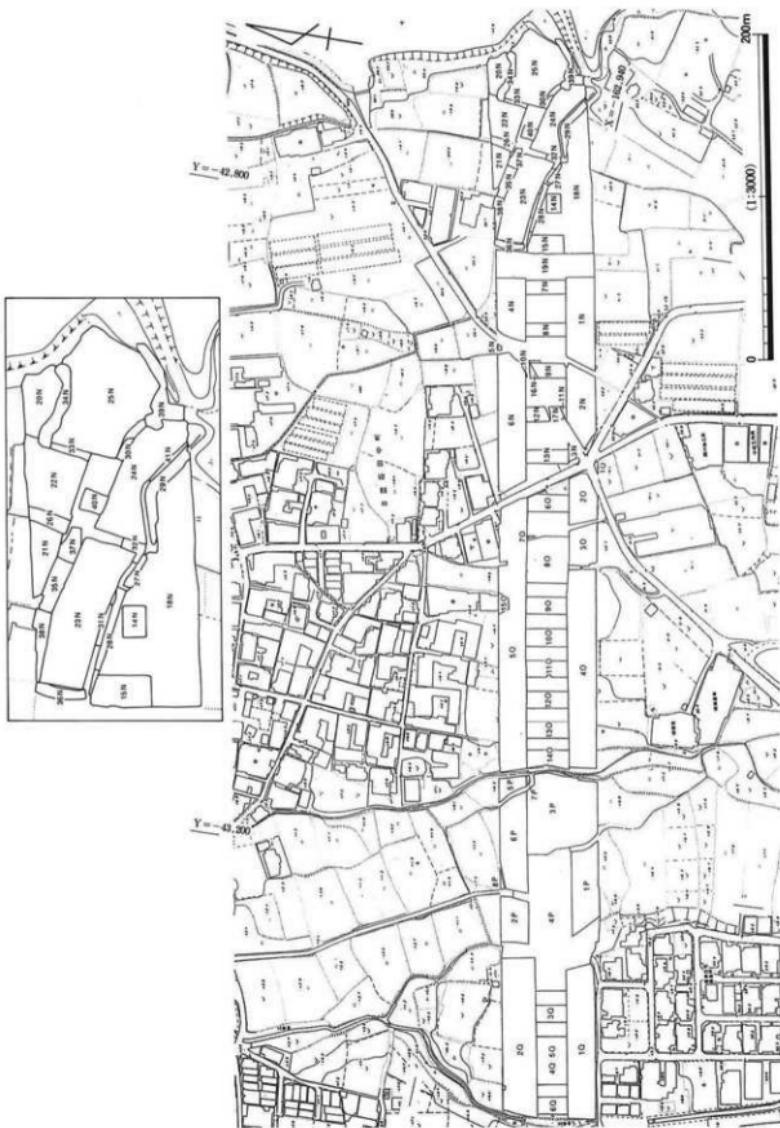
P地区東側の開析谷は、図IV-7に示したようにその東側に深い部分がある。これが河道P-1であり、開析作用が進んでいる。後に述べるP地区開析谷の中世の土坑が分布する範囲では、台状部東側に段丘疊層らしい層が堆積している。この疊層の性格については2つの考え方があり、1つは高位段丘層中の疊層がそのまま露出していると理解するのと、もう1つはその疊層が一旦崩れて再堆積した層と理解するものである。ここでは前者の考えを採っている<sup>2)</sup>。

### 2. 歴史的環境

#### (1) 周辺の調査（図IV-1）

IV調査区周辺の高位段丘上の考古学的な調査は、あまりなされていない。これまでに近くでなされた幾つかの調査は、ほとんどが堺市教育委員会の手によるものである。1982年にIV調査区北側約300m付近の石池谷の西側斜面での調査が始まると、埴輪窯灰原が検出されている。この調査によって日置荘西町窯跡群の埴輪窯の存在が初めて考古学的に知られるに至った。この後、1984年と1985年にも石池谷の西側斜面で前回の調査区の近くが調査されている。この調査では須恵器窯灰原、埴輪窯灰原が検出されている。





図N-4 トレンチ配置図

1989年の調査では須恵器窯灰原と埴輪の集積遺構が調査されている。これ以降に石池谷の調査ではなく、他の地域で若干の調査が実施されている。1991年に調査地南東約900mに位置する丈六池の周辺で調査が実施され、須恵器窯と須恵器の原料の粘土採掘坑が検出されている。これが丈六大池遺跡である。1992年には調査地西側の西高野街道を越えた和泉側であるが、高位段丘層の水路部分で須恵器窯の灰原が調査されており、これは深井畠山窯跡群に含まれるものである。また当センターで調査した福田遺跡でも、須恵器の不良品を多量に含む廢土が再堆積した状態で検出されており、付近に須恵器窯があると推測されている。

これまでの調査で、高位段丘上に刻まれた石池谷を始めとした開拓谷の斜面に須恵器窯や埴輪窯が散在的に分布している事が明らかになっている。今のところ分布密度はそれほど高くはないが、発掘調査の過程で新規発見の窯跡が続々と検出されており、実際にはこれまでに判明している須恵器窯、埴輪窯の数倍が過去に操業していたものと推測される。ちなみにIV調査区は須恵器窯に関しては陶邑古窯址群の範囲内に含まれているし、埴輪窯も日置荘西町窯跡群の範囲内に含まれていて、2種類の古墳時代の窯業生産が交差している地である<sup>3)</sup>。

いま古墳時代の様相を述べたが、それ以外の遺跡は高位段丘上の至近距離には見あたらない。

この一帯の高位段丘面は、水を得にくいという制約から永らく耕地化が不可能とされてきたが、近世に入って多くの新田が開発された。そのため、土砂の流出による古くからの溜め池の埋没や從来の水利慣行の変更等の新たな問題が生じている。

## (2) 大阪文化財センターによる調査

以上のようにIV調査区周辺は、調査事例のほとんどない地域であった。陶邑古窯址群の外縁地帯で須恵器窯や埴輪窯の存在は知られていたが、耕地としての開発は近世と非常に遅く、遺構の分布状況についても調査前に知りうる点は少なかった。このような地域を(財)大阪文化財センターは1987年から1991年まで5カ年にわたって調査を行ってきた。この経過は以下の通りである。

### 3. 調査の概要

#### (1) 基本層序(図IV-7, 8, 9)

IV調査区の基本層序は、各時期の厚い堆積層のあるP地区の開拓谷部分を除けば非常に単純な構成を

表IV-1 IV調査区調査年次一覧表

調査年度	トレンチ	調査担当者	調査面積	概要報告
1987年度	1N~13N, 10~140, 1P, 2P, 5P, 6P, 8P	國乗和雄・入江正則	約7,640m <sup>2</sup>	①
1988年度	150, 3P, 4P, 7P, 1Q~6Q	岡本健一・入江正則	約9,000m <sup>2</sup>	①
1989年度	14N~17N	國乗和雄・入江正則	約420m <sup>2</sup>	③
	18N	國乗和雄・入江正則	約1,690m <sup>2</sup>	②
1990年度	19N~22N	入江正則	約1,820m <sup>2</sup>	③
1991年度	23N~41N	入江正則	約3,930m <sup>2</sup>	③

- ①日置荘遺跡(その5) -調査の概要- 大阪府教育委員会 (財)大阪文化財センター-1989  
 ②日置荘遺跡(その2-2 その6) -調査の概要- 大阪府教育委員会 (財)大阪文化財センター-1990  
 ③日置荘遺跡(その2-3 その6-2) -調査の概要- 大阪府教育委員会 (財)大阪文化財センター-1991

示している。N・O・P・Q地区の高位段丘上では、凹地状地形部分以外は高位段丘層の上に直接現耕作土が被っている。N・O地区の凹地状地形部分には、両層の間に中世や近世の堆積層が存在する。

開析谷の中で複雑な堆積状況を示すP地区と、中・近世の堆積層の存在する凹地状地形については、次項で詳述する。

なお、堆積層については堆積過程とおおよその時代で区分し、現耕作土層をI層、近世の床土や堆積層をII層、中世の堆積層をIII層、古墳時代の堆積層をIV層、古墳時代以前の堆積層をV～IX層に細分して表記している。

## (2) 各地区的層序

### ① N地区（図IV-3, 7, 8）

N地区の東部分の水田N-14・水田N-16・水田N-20・水田N-21、草地N-17付近に凹地状地形N-1があり、幅約50mの範囲で北側に開き、緩やかに中央部に向かって傾斜して最深部は深さ約1.5mを測る。現地表面は埋没して、先の水田や草地は周囲の水田より約10cm程低いだけで、旧地形の痕跡をわずかに残しているだけである。この下層には落込N-1～落込N-8が埋没しており、中世から近世にかけて小さな溜め池として機能していた。落込N-1～落込N-8は中世以降削平と埋没が繰り返される。凹地状地形N-1の堆積層はI層が暗灰色粘質土で現耕作土層である。II-1層が灰褐色シルト層で落込N-8、II-2層が赤褐色粘質土層で落込N-7、II-3層が灰黄色粘土層で落込N-6、III-1層が黄色粘土層で落込N-5、III-2層が灰紫色粘質土層で落込N-3・落込N-4にそれぞれ相当する。また落込N-1は灰褐色粘質土層、落込N-2は灰白色砂質土層を示している。日置荘その6の概要報告書において報告したII層が新II-1層に、III-a層が新II-2層に、III-b層が新II-3層にそれぞれ対応させていく。日置荘その6-2の概要報告書では、各トレンチを通じた層序の統一を行っていないために層序の関連が分からなかったと思われる所以、今回の報告ではN地区のそれぞれの調査時の成果を取りまとめて遺構と層序の統一を図って表記している。

N地区西側の畠N-2に凹地状地形N-2があり、現状でも周囲の水田から約1.3m低くなっている。この凹地状地形は高位段丘層の末端に形成された崖と推測される。

### ② O地区（図IV-3, 7, 8）

凹地状地形O-1はO地区東側の畠O-14、草地O-15にあり、現状でも約1m低くなっている。この範囲も段丘崖と推定される。ここには良質な粘土が堆積しているので、近代に煉瓦用として掘削されている。この粘土の採掘跡が落込O-2～落込O-12である。凹地状地形O-2は水田O-9、草地O-10、畠



図IV-5 地区割図（西半部）

O-11,12の下層にあり、現状は埋没して平坦であるが、旧地形は現地表面から約1.0m窪んでいた。落込O-1部分は重複部と呼び、III層灰色粘質土層の上面は重複部第2遺構面として付図IV-3に載せている。この上層には茶灰色粘質土層が周囲とほぼ同一の高さにまで客土されて高くなり、この部分を重複部第1遺構面と呼んでいる。

### ③P地区(図IV-3, 7~9)

一方P地区の堆積層は高位段丘上とは比較にならない程複雑である。基本的な構造は開析谷最下層に段丘疊層を深く削った谷に入る。それより上部は東西で大きく様相が違っていて、開析谷東側下層の河道P-1の河道底に段丘疊層の2次堆積層が3~4mの厚さで堆積している。石池谷の西側部分は、埋没した河道P-1の堆積層の上に河道P-2が流れている。河道P-2は河道P-1と違って変化に富んだ層序で、複雑である。河道P-2の層序の概略は図IV-8の水田P-1・水田P-2の下層部分に表示している。古墳時代層の上に中世層と近世層が順次堆積する。しかし近世の溜め池や水路の開削で削られて消失した層や、逆に盛土を行っている層もあり、基本通りに堆積していない個所が多い。このため図IV-8にP地区的水田下層の様相を区画1枚ごとに図示している。

水田P-1は北端部分を表示しているが、II-1層の灰褐色粘質土の下層にはII-2層の客土層があり、この下にある近世の落込P-21のII-3・II-4層は中世層を削った小溜め池の中に堆積している。この下層には河道P-2堆積層や、埴輪窯P-1灰原、須恵器窯P-1灰原があるなど非常に複雑な層序である。

水田P-2は南端部分を表示しており、図には下層部分に河道P-2堆積層だけが現れているが、このすぐ北側には河道P-1の台状部が伸びているので、この水田の下層は東と西で異なっている。IV層が古墳時代河道P-2堆積層で、この上層にIII層中世層が堆積し、III-2層は足跡の見られる中世の水田の耕作土層と思われる層である。この上層に近世の客土層II-4層がある他、埴輪溜まりもある。II-2, 3層が西側の須恵器窯周辺の高位段丘層を削り取って客土した層である。

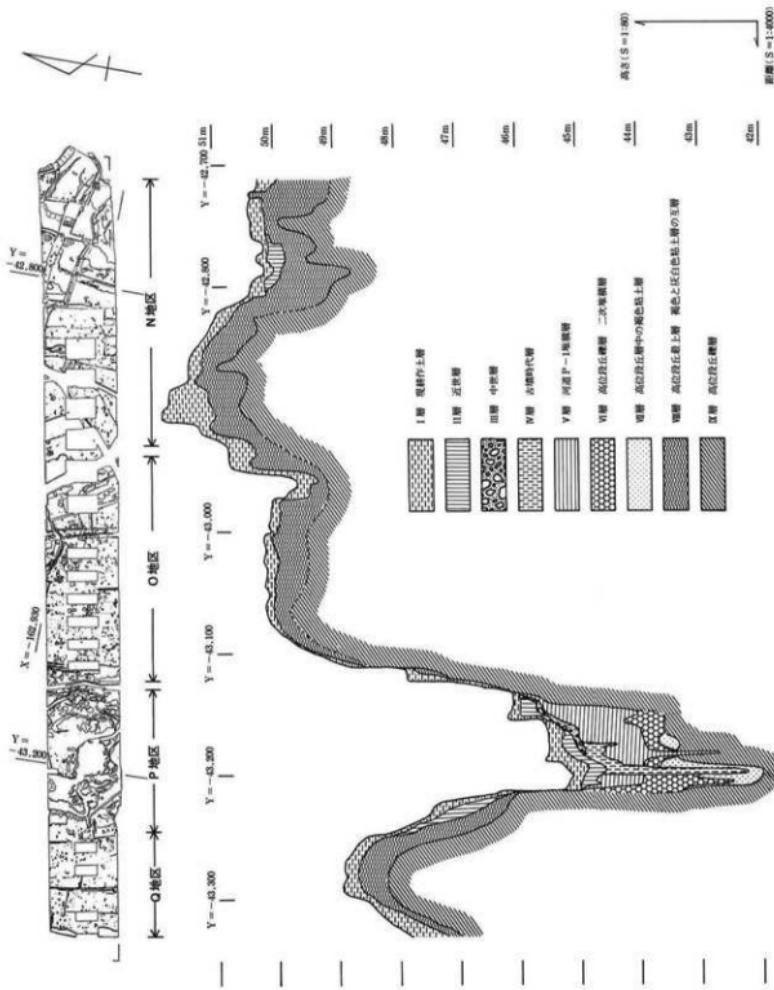
水田P-3には下層に河道P-2内の2Aに属する堆積層が3層あり、上層にII-3, 4層を客土して、湿地状の土地を改良している。

水田P-4は河道P-1の形成した台状部であり、この上面に堆積したIV-2層淡灰色砂質土層の上面が古墳時代後期の遺構面である。この上層にはIV-2層に似た砂を含んだ土層が被る。東側には中世のIII-1層があり、この下層には足跡面がある。上層に近世の客土層が2層あるが、層の厚さも薄く、土質も西側の客土層とは違って整った層で、あまり遺物を含まない。

水田P-5には中世のIII層灰色粘土層があり、下層に足跡が見られる。この上はII層の褐灰色粘質土



図IV-6 地区割図(東半部)



図IV-7 基本層序概略図

層の床土が被り、この層の中から貨幣が数枚出土している。

水田P-6には下層にⅢ層の中世の水田耕作土と思われる暗灰色粘質土層・灰紫色粘土層があり、この下に足跡がある。この上層にⅡ層の茶褐色粘質土層があり、畠溝が掘られている。この上にもう一枚Ⅱ層が被る。

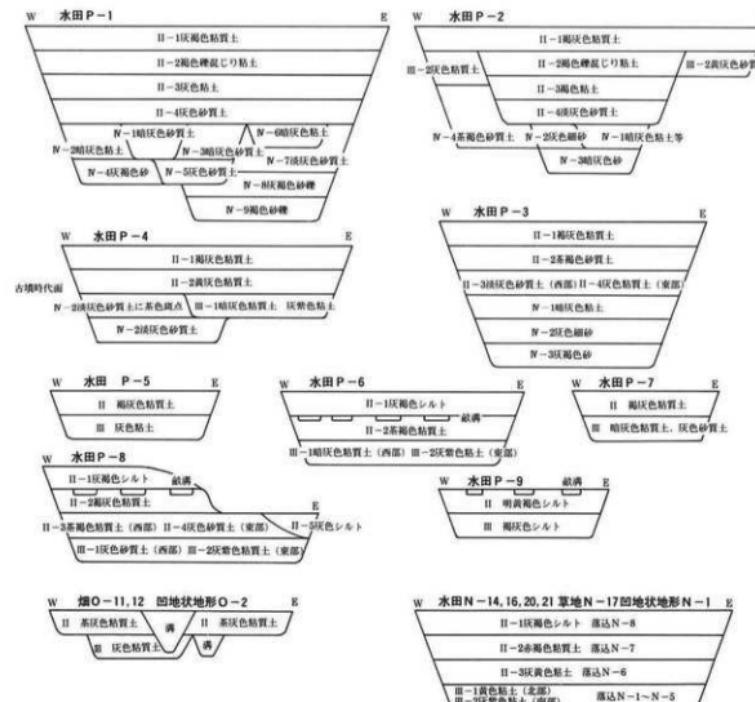
水田P-7には下層にⅢ層の中世堆積層、上層にⅡ層の近世堆積層があり、床土を盛り上げている。

水田P-8には下層にⅢ層の中世の堆積層があり、この下で足跡が検出される。この上層に近世の堆積層が2枚あり、相当盛り上げられている。東側には落込みがあり、Ⅱ層が堆積している。この部分は中世の井戸の代わりをした土坑があった個所である。

水田P-9には下層にⅢ層の中世堆積層、上層にⅡ層の近世の床土がある。

#### ④Q地区(図IV-3,7)

凹地状地形Q-1はQ地区西端にあり、高位段丘疊層が窪んでいて、この中に2次堆積らしい層が埋没している。



図IV-8 P地区開析谷、O・N地区凹地の基本層序模式図

## 第2節 旧石器・縄紋・弥生時代

## 1. 遺構

この時代の遺構は調査範囲内には存在しなかった。しかし遺構ではないが、時期不詳の石器を出土した河道P-1がある。

### (1) 河道

### A 河道P-1 (図IV-10)

河道P-1はP地区の開析谷の東側を深く掘り下げながら流れていたが、開析作用が終わる頃から今度は逆に両側に越流堆積を繰り返すようになり、河道が次第に高くなる。時には西側に破堤堆積をおこした上で、木枝状の堆積層の高まりを西側の低地に延ばしている。河道の堆積層の下層には褐色砂混じり砂礫層である高位段丘礫層の2次堆積層が厚く見られる。上層には黄灰色粘質土層が堆積している。これは河道の流れが次第に緩やかになり、堆積作用が弱くなっている事を示している。堆積層は開析谷の東側に主に堆積して、西側にはあまり堆積しておらず、河道の堆積の最終段階では西側が低く窪んだ状態になっている。河道P-1は最終的に西側の低い部分へと流れを移し、河道としての機能を失ってしまう<sup>4)</sup>。

河道P-1からは時期不詳の石器1点以外、遺物は全く出土していない。

この河道P-1の年代を知るために、河道P-1の河岸堆積層の青灰色粘土内で検出した木根と流路内の疊層に埋没していた木片の<sup>14</sup>C年代測定を依頼した。測定値は、木根がB.P.1690±10 (A.D.360±100)、流路内木片がB.P.3520±25 (B.C.1880±20) であった<sup>10</sup>。なお、( ) 内の値は年輪年代法による補正値である。木根の測定値が非常に新しいのは、採取土層そのものは古いものの、採取地点の上部に河道P-2が存在していることから、その河岸もしくは斜面に生育していた樹木の根を採取した可能性が高い。流路内の木片の測定値については、繩紋時代後期頃のものであり、もしかしたらおおよそその河道P-1の年代を示すものかも知れない。同じ河道内から出土している石器は、形態からして旧石器時代から弥生時代までどの時代のものであってもおかしくない<sup>11</sup>。このような遺物と<sup>14</sup>C年代とをもって河道の埋没時期を決定するのは早計であり、もう少し資料の集積を待って判断したい。

## 2. 遺物

### (1) 土器

西側の河道P-2内から土器片が出土している。土器は弥生時代後期から古墳時代前期ごろに相当する。



図IV-9 P地区基本層序模式図

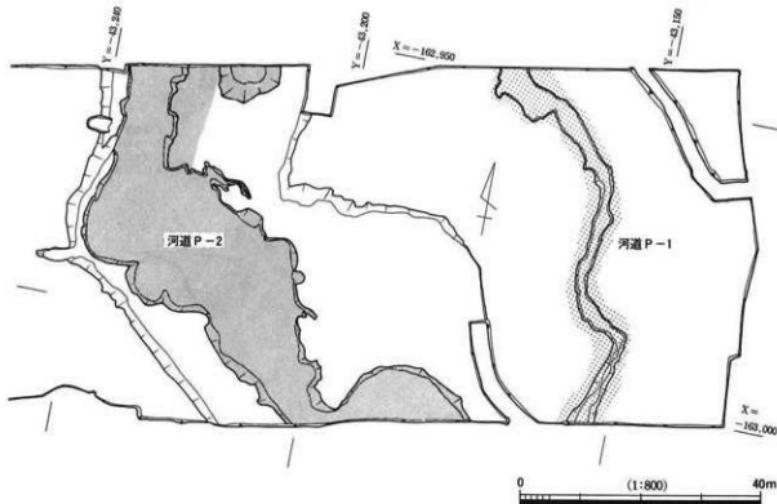
る平底の壺の底部である。

(2) 石器 (図IV-56,57)

N・O地区の凹地状地形やP地区の開析谷の河道内および段丘疊層の2次堆積層から、旧石器時代の船底型石器（図IV-56-1）、弥生時代の石鎌（図IV-56-4,5）等が出土している。剝片も數多く、約20点ほどが出土している。現耕作土層は機械掘削して除去しており、高位段丘層上に現耕作土しかない部分では見かけ上石器は全く出土していないが、現耕作土内にも石器が含まれていた可能性は高い。ともかく、後世の土層中にこれだけ多くの石器が含まれるという事は、本来高位段丘層の最上層に存在していた石器類が、後世の開発等による土層の削り込みのために元あった位置から動いてしまった結果と考えられよう。

四

- 大阪府教育センター 豊田兼典氏に開析谷成立に関してご教示を得た。
  - 註1に同じ
  - 樋口吉文氏、八木正徳氏、十河稔郁氏を始めとする堺市立埋蔵文化財センター職員各位のご教示を得た。
  - 大阪府教育センター 豊田兼典氏及び立命館大学理学部 高橋 学氏にご教示を得た。
  - 京都産業大学理学部 山田 治氏に分析をお願いした。結果は「第4部 自然科学的調査」に掲載している。
  - 大阪文化財センター 松山 聰氏にご教示を得た。



図IV-10 P地区河道平面図（河道P-1内の実線は中世溝P-1）

### 第3節 古墳時代の遺構と遺物

#### 1. 古墳時代前・中期の遺構と遺物

##### (1) 遺構

この時期に属すると思われる遺構は見当たらない。

##### (2) 遺物(図IV-102,103)

遺物が少量出土している。河道P-2から、古墳時代前期から中期にかけてかと思われる土師器高杯  
杯部破片(図IV-103-6)が出土している。この他、二重口縁を持った小型の甕の口縁部、単純「く」  
の字状の甕(図IV-103-7,8,10~12)や、コップ状の厚手の鉢形土器(図IV-103-9)等が出土してい  
る。

これらの土器の出土から見ると、古墳時代前期・中期に人々は継続して石池谷に何らかの活動を行っ  
ていたらしいが、当調査地内では、その痕跡はうかがえなかった。

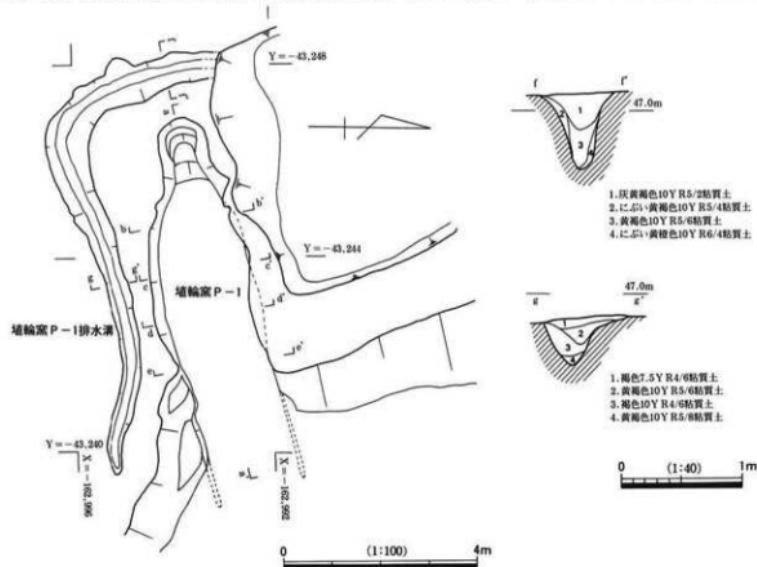
#### 2. 古墳時代後期の遺構

##### (1) N・O地区(図IV-3)

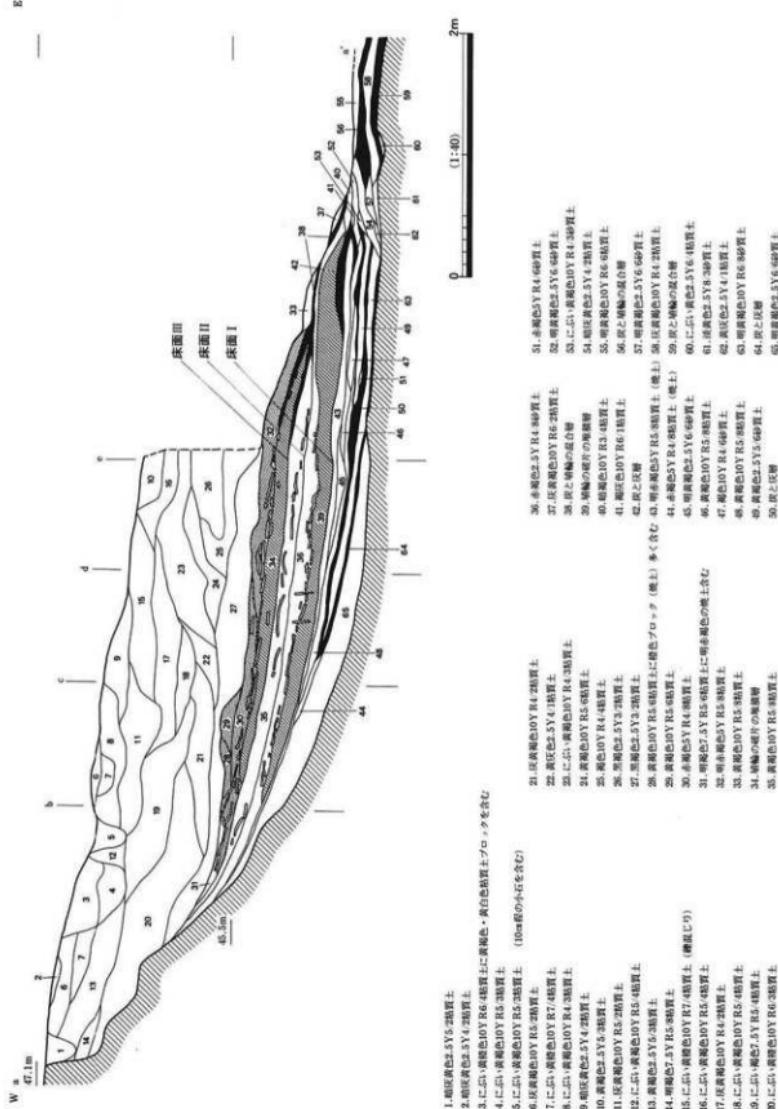
この時期に属する遺構は存在しないが、N地区の凹地状地形N-1内の落込や溝N-1、O地区の凹地  
状地形O-2や溝O-6等の後世の遺構から埴輪や須恵器等の破片が出土している。

##### (2) P地区

この時期、石池谷の段丘崖に埴輪窯と須恵器窯が築かれる。それらに伴う灰原・土坑・落込や須恵器



図IV-11 P地区埴輪窯P-1平面図・埴輪窯P-1排水溝断面図



図IV-12 塙輪窪P-1 縦断面図

や埴輪片を多量に含む河道が検出される他、後世の遺構や整地層の中からも多数の須恵器や埴輪片が出上している。

#### A 増輪窯

石池谷でこれまでに堺市が3基の増輪窯の灰原を調査してきた。今回これらの窯と一群になる増輪窯が1基調査できた。

a 増輪窯P-1<sup>11)</sup> (図IV-11~18、写IV-1~4)

##### 立地と規模

増輪窯P-1はP地区の開拓谷の西側崖面に東向きに掘り込んで構築されており、主軸方位はN-101°-Wを測る(写IV-1-1)。窯は、周囲の段丘崖の間では最も比高差があり、しかも崖面が奥まった個所に位置している。窯は斜面に直交して開削されている。窯の上部から南側側面にかけて窯壁から1m前後離れてV字状の排水溝が掘られている(写IV-1-2)。この排水溝は、北側側面にも巡らされていたのであろうが、その部分は擾乱を受けており、不明である。

開拓谷側に落ち込む高位段丘端の標高は46.2m、増輪窯P-1築造時排土を敷きならして造られた作業場の標高は44.1mを測り、両者の比高差は約2mである。古墳時代の人々は、この崖を巧みに使って増輪窯P-1を構築している。

残っていた増輪窯の全長は、煙道部上端から焚き口付近の高位段丘層が落ち込んでいる下端までで約7.0mを測る。現存長は左右で違っていて、奥に向かって右側の窯壁が長さ約5.6m、左側は約7.0mを測る。最大幅は約1.95mである。窯内の最も深い部分は高位段丘面上から約1.5m掘り下げている。しかし、これら数値は後世に削平を受けてなお残っている部分の計測値であって、過去の姿はもう少し大きいと考えられる。窯の焚き口付近の高位段丘2次堆積層の平坦面に、熱を受けて赤変した窯体の壁の残存部分が東側に延びている。この残存している窯体壁部分を含めた窯の全長は約7.9mを測る。増輪窯の構造としては半地下式と考えられ、天井部は人為的に造られていたものであろう。そして焚き口付近は先に述べた検出状況からすると、窯体側壁の下部は高位段丘疊層の崖面をそのまま生かして、側壁の崖部分の足りない高さは人工的な側壁を設け、さらに上部にも人工的な天井を被せていました可能性が高い。このため焚き口先端付近では段丘崖の高さがなく、床に接する位置から人工的な側壁と天井部を造っていたらしい。

増輪窯窯体の縦断面(図IV-12)は、床面に全く貼り床をしていない窯掘削当初の状態では、焚き口から窯体中央部付近まで緩やかな傾斜であり、窯体中央部より奥は曲線を描きつつ急な傾斜を作っている。そして、奥の煙道部付近では窯体幅が狭くなり、煙道は窯奥部で立ち上がりながら一旦中央の窪んだテラス面を作り、ここから上方に立ち上がって地表面に開口していたらしい(写IV-4-1)。焼成が何回か行われて床面が上昇した後は、焼成部の床の傾斜も緩やかになっているようである。床面は、横断面方向で見れば中央部が最も窪み、両側壁部分が少し高くなるU字形の曲線を描いている(図IV-13)。床面I、II、IIIを通して床面の傾斜角度を見ると、焼成部は急な傾斜を示し、燃焼部は緩やかな傾斜を示す傾向が見られる。また焼成部と燃焼部の長さは、ほぼ同じ長さを測るようで、窯全体からすると焼成部は意外と短いようだ。

窯体内的層序と床面の概要(図IV-12,13、写IV-1-1~4)

増輪窯の天井部は残存せず、窯内の上部は層厚1m程の茶灰色粘質土等がブロック状に入り混じった状態で埋没していた。埋土中に薄くレンズ状に堆積した砂層や砂質土層がない事から、一気に埋没した

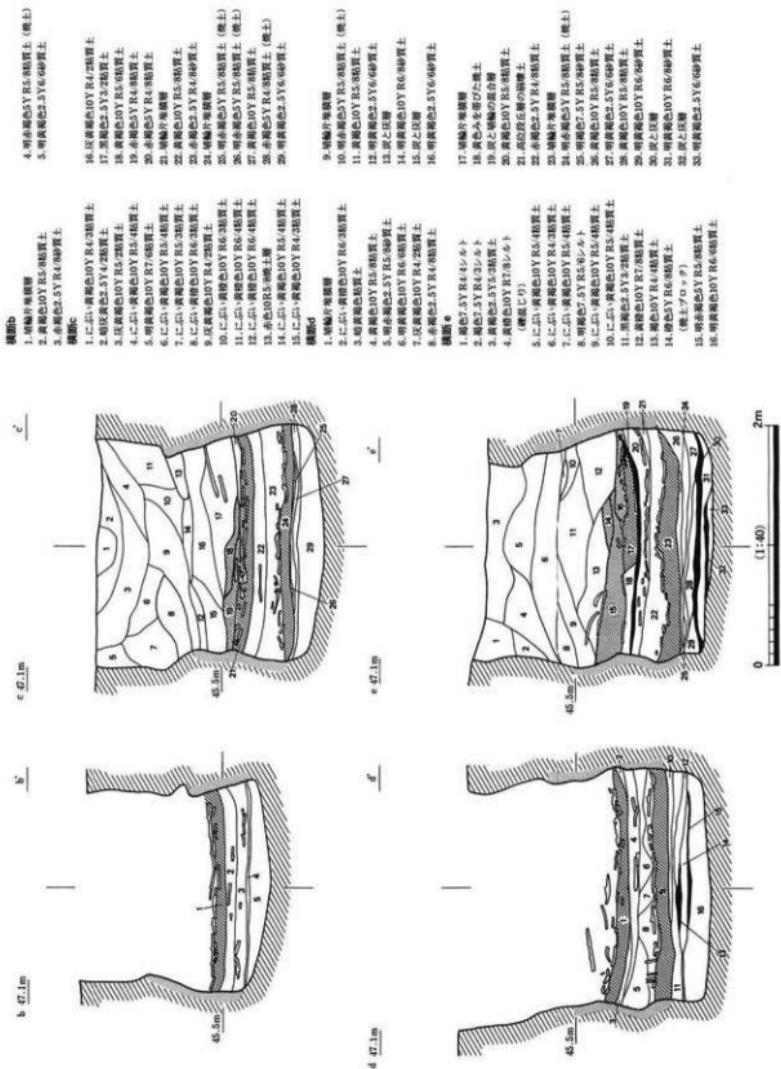


図 IV-13 塗輪窓P-1 横断面図

と思われ、人為的に埋められた可能性がある。

天井部はまったく残っていないかったが、その一部と思われる赤褐色を呈する薄い板状の土が窯の埋土中に一部分壁面に引っ掛けた状態で残っていた（写IV-3-1）。また、埋土上部の茶灰色粘質土層を取り除いた段階で、赤褐色粘質土層が窯の床面全体に被った状態で検出された（写IV-3-2）。この下層に床面Ⅲの埴輪片がある。これらの赤褐色粘質土層は、もともと半地下式窯の天井としてあったものが崩落し、途中の礫層に引っ掛けたり、床面Ⅲの埴輪片を覆う形で残ったと考えられる。

赤褐色粘質土層と上層の茶灰色粘質土層との間には腐植土層が見られない。この事から天井部の崩壊と茶灰色粘質土層の埋没がほとんど同じ頃であったと推測される。

上層の茶灰色粘質土層等の埋土を除去した時、明赤褐色粘質土層上面には（写IV-3-2）大きな円筒埴輪が壊れた状態で窯の左右に1本ずつ全体が出た状態で見えていた。右側の埴輪は横倒しの状態で、左側の埴輪は立った状態のまま土圧で壊れたような状況であった。

窯体側壁を構成している高位段丘の粘土層や礫層は、窯の中位より下が赤変している。また、煙道部分は地表面まで赤変している（写IV-3-2）。側壁部分には、貼り壁らしいものはまったく見られなかっただ事から、高位段丘礫層が露出した状態で焼成されていたと推測される。

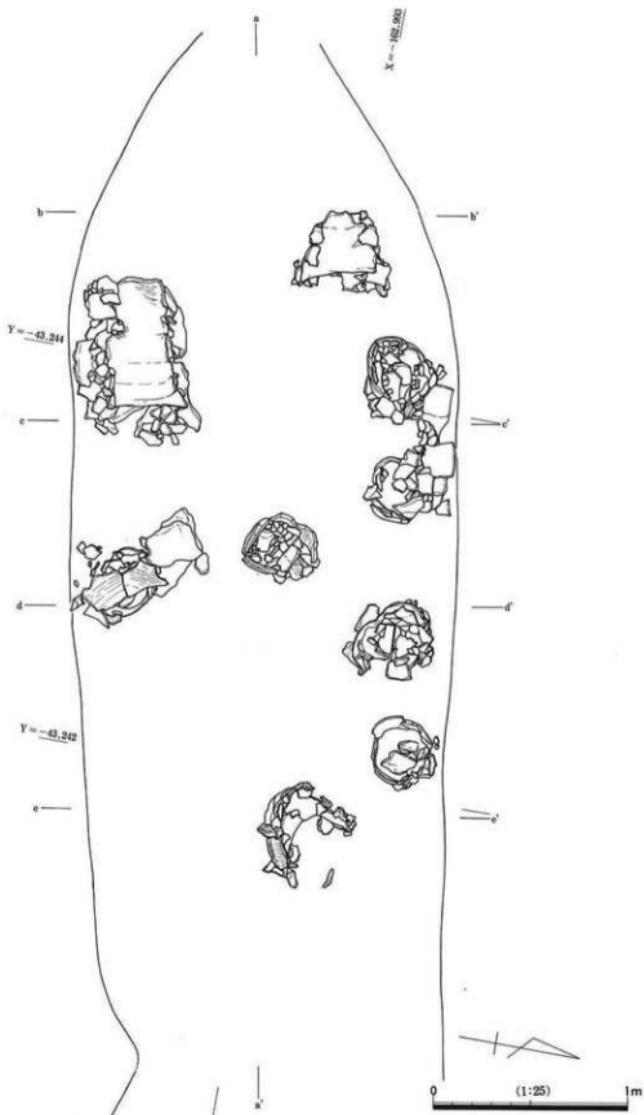
埴輪窯床面は、概要報告書の記述のように床面Ⅰから床面Ⅲまである。さらに床面Ⅰの下層に3枚の炭層がある。厚さ2~3cmの炭層は細かい炭からなり、上面から埴輪等の遺物は出土しない。この炭は窯内で植物を燃焼させたもので、他所から炭を運んで意識的に置いたのではないようだ。炭層はそのまま残され、上部に盛土が行われている。断面観察の調査結果からしか判断できないが、床面Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに対応する燃焼部の炭層の範囲よりはるか奥の、窯中央部付近よりさらに少し奥側まで炭層は延びているようだ。この炭層が埴輪焼成の際の燃焼部とすると、残っている窯体の2/3以上を燃焼部が占める事になる。そのため、床面Ⅰより下層にある炭層は、埴輪窯開削後に窯体を乾燥させるために空焚きを行った痕跡ではないかと考えられる。3枚の炭層があることから、この作業を同一床面で繰り返すではなく、1回ごとにか、あるいは一定回数ごとに床面を貼り直したのであろう。そして、窯体を充分に乾燥させた後に、再び床面を貼りなおして本格的に埴輪の焼成を始めたと考えられる。

埴輪窯の側壁や床面に残る埴輪は大半が赤褐色である。意識的にこの色調に焼き上げようとしていた様子がうかがえる。床面Ⅱの埴輪の中には黄褐色のものがあり、他の床面遺物とは少し異なる。灰原や河道出土の埴輪は灰黄色を示して赤褐色ではない。埴輪窯内から出土した破片と灰原出土の破片が接合した場合に、一方は赤褐色、他方は灰黄色を示すことから、地下水等の影響を受けて赤褐色から灰黄色に変色していると考えられる。

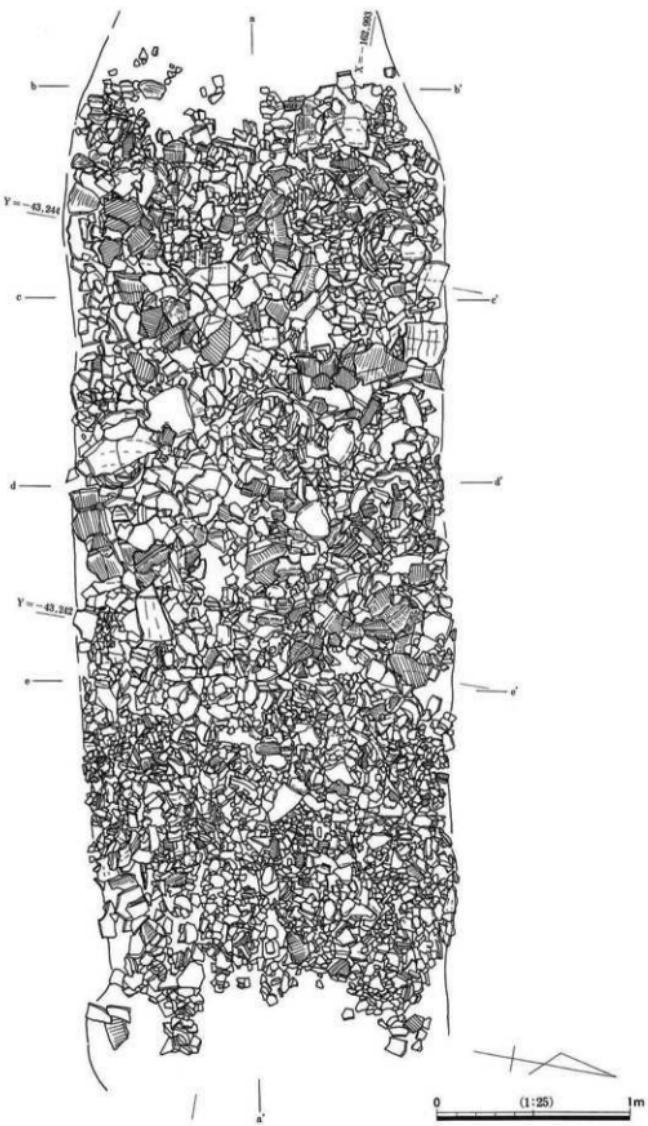
埴輪窯焚き口付近の前面には河道P-2がある。この河道の堆積層の上部に、埴輪窯P-1を開削した時の堆土を客土して整地している（写IV-1-1, 3-3）。ここは埴輪焼成のための薪や未焼成の埴輪の置き場等の作業場、および埴輪焼成の失敗品を廃棄する場所として利用された。窯築造の堆土をこのように用いる計画が、窯を開削する前から立てられていたと考えられる。

床面Ⅰ（写IV-14, 15、写IV-1-2, 3）

床面Ⅰは窯体中央付近まで傾斜が緩やかで、傾斜角度約7°を示し、これより奥では約14°を示す。床面Ⅰでは幾度目かの埴輪焼成の途中で、天井部と側壁が崩落したらしい。直立した状態の円筒埴輪の基底部が10数本分、焼成時の原位置かその周辺から出土している（写IV-1-2）。これらの資料は焼成時の状況を復元する良好な手掛かりとなる。円筒埴輪の基底部の周囲に同じ埴輪の破片が非常に細かく碎



図IV-14 増輪窯P-1床面I樹立埴輪出土状況



図IV-15 増輪窯P-1床面I埴輪出土状況

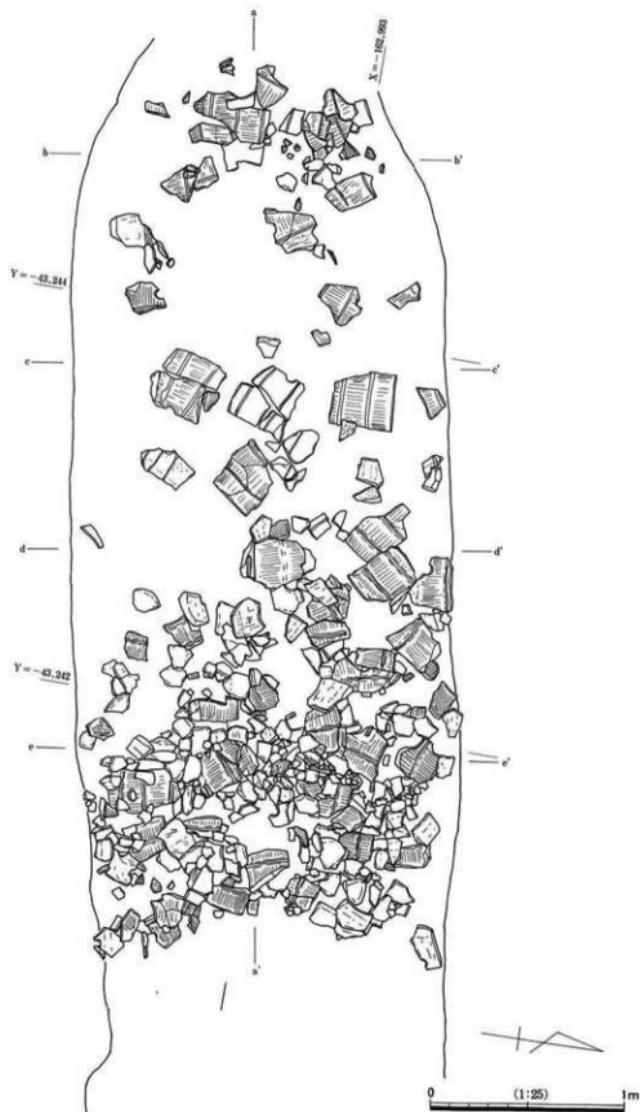


図 IV-16 塗輪窯P-1 床面II 壁輪出土状況

けた状態で出土している。これは壊れた埴輪破片を意識的にさらに小さな破片に割って窯の効率を高めようとした結果ではなさうである。焼成途中で焼き損じた埴輪破片を敷きならべた上に、再び埴輪を並べて、幾度も焼成作業を繰り返した結果、焼成時の高温が原因で非常に細かな碎片になってしまったらしい。

これらの埴輪破片が細かく碎けて層をなしている上層に黄褐色系の粘質土層が部分的に見られ、さらには赤褐色粘質土層も見られる。この2つの土層の存在は、側壁と天井部が不時に崩落したとも考えられるし、あるいはむしろ天井部と側壁を意識的に崩し落として、この上を整備し直して床面IIに転用したとも考えられる。

窯内部の炭層は、現在遺存している窯体の入口側から約1m窯内に入った範囲まで分布している。すなわち、削平された窯体部分も含めて考えると、窯の全体の半ばあたりまで炭層が延びている事になる。そうすると窯の中央より上半部が焼成部であり床面は急傾斜となる。緩やかな傾斜部分の下半部が燃焼部であったらしい。

窯内部に残っていた焼成時の痕跡を残す樹立埴輪から推測すると、残存している埴輪は両側壁に各1列と中央やや右寄りの1列のみであるが、中央の列がやや中心からずれていることから本来は4列並んでいた可能性が高い。その場合、1回の焼成時に並べられた埴輪の数は、両側壁側に1列4本、中央2列に5本ずつ合計18本となる。ただ、残存している埴輪からして、配置は横に重ならないようにしているようである。18本という数は、床面Iに残っていた基底部径35cmの円筒埴輪を基準に考えている。これより太い埴輪を焼成するのであれば焼成本数は減少し、細い埴輪を焼成するのであれば本数は増加する。実際は様々な円筒埴輪および形象埴輪の組み合わせで焼成されていたと考えられる。

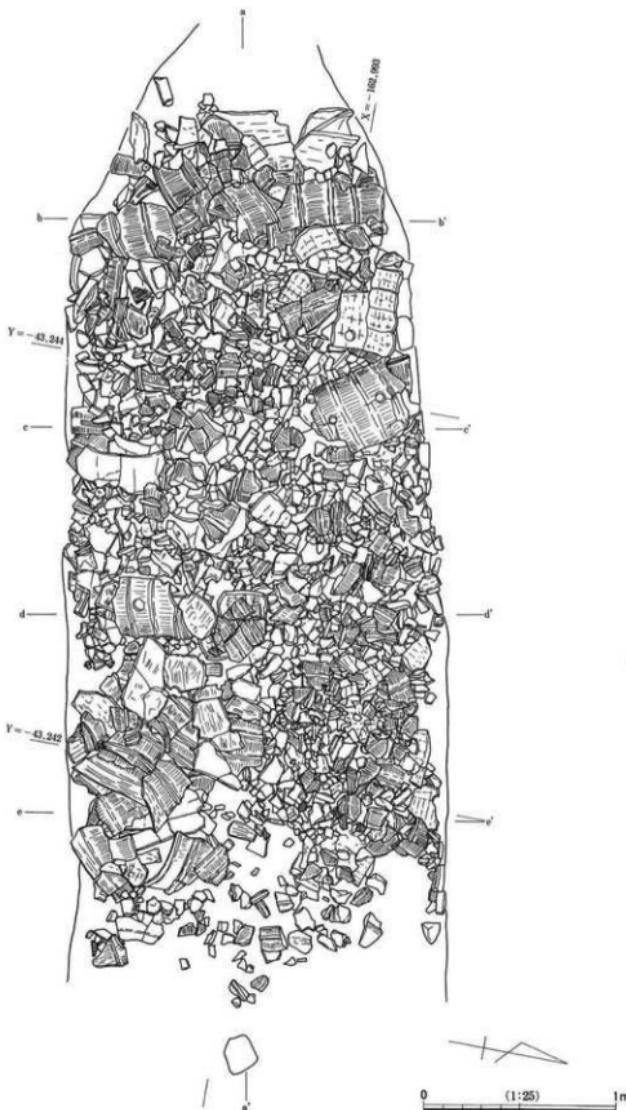
#### 床面II（図IV-16、写IV-2-1）

床面I上層に赤褐色粘質土層を敷きならして床面IIを造り上げる。この厚さは最大約15cmを測る。土層中に風化した高位段丘中の礫が入っている。そして上層の一部には赤褐色と黄褐色の粘土が互層状に堆積している部分も見られる。床面に礫が混ざるのは、意識的かどうか分からぬが両側の壁上部が崩れて落ちた土砂を平坦に敷きならして床面に仕上げた結果と考えられる。床面IIの焼成部の傾斜角度は、曲線を描いているので正確ではないが約7°を測り、燃焼部の傾斜角度は4°である。この床面の場合は埴輪片を一面に敷きつめる事なく、比較的大きな埴輪片が窯中央付近に散在している状態で、床面I、IIIとは床面の状況が大きく異なっている。床面の使用期間が短かったのか、あるいは失敗品を出す事が少なかったのか、その理由は今一つ判断し難い。

床面の埴輪は意識的な配列も感じられず、細片にも砕けていない。なぜこのように大きい破片のままだのか今一つ理由が分からぬ。焚き口付近の炭層の上部を取り除くと、少し炭層の範囲にまで埴輪が広がって出土している。床面IIでは燃焼部と焼成部の境目は床面Iより少し下側の焚き口側にある。

#### 床面III（図IV-17、写IV-2-2,3）

この床面の焼成部の傾斜角度は約6°を測り、燃焼部は短くて正確には測り難いがおよそ9°を測る。燃焼部は何らかの手が加わったために当時の状況とは変わっているので、床面I・IIとは異なって、焼成部より急な角度を示しているのかも知れない。床面IIIは床面IIとは異なり、大量の埴輪細片が床面に一見敷きつめられた様な状態で出土している。そのため、むしろ床面Iに似た様相を示している。焼成に失敗した埴輪の破片を床面に敷き並べておいたものが、窯内の高温のためにさらに細分化したと考えられる。この厚い埴輪層の上部の埴輪片は小片であるが、下部の埴輪は小さく破碎されておらず、比較



図IV-17 墓輪窓P-1床面III埴輪出土状況

的大型の破片の状態で積み重なっている。なお、これらの細片化した埴輪とは全く異質の出土状況を示す埴輪が2本存在している。それらは埴輪窓の左前方と右奥側の2個所にあり、倒壊しているものの比較的原形をとどめている。右手奥側の埴輪の上部には天井部の残骸かと思われる赤褐色粘質土の薄い土塊が引っ掛かっており、天井部が落ちるまでは完全があるいは完全に近い形であったと推測される。また左手前方の大型の埴輪も、直立状態のものが土圧を受けて破損したような状況で出土している(写IV-2-3)。そのため、これらの埴輪は窯操業の最終段階に焼成されてそのまま放置されていたかあるいは何か意味を持たせて置かれていたものが埋没時に崩れたと考えられる。

天井部と思われる赤褐色粘質土層は、現在残っている窯の内部全てを覆っている。下端は高位段丘崖が上がり始める所まで延びている。すなわち、天井部ももう少し長く東側まで覆っており、しかも段丘崖からはみ出た部分も覆っていたようである。床面IIIの埴輪碎片の大きさは、焼成部中央付近までの破片が非常に小さく、中央より奥側の破片はやや大きい。なぜこのように差が生じるのか明らかではないが、窯内の温度差によってこのような現象が生じた事も考えられる。燃焼部では窯体下端から約2m入った範囲まで黒々と炭が広がっており、境界線がはっきりしている。こうしてみると実際に焼成に使用された範囲は窯全体の約1/2である。しかし、窯の奥には煙道部があり、実質焼成可能なのは4m程の範囲である。大型の窯であるにもかかわらず焼成本数は以外と少ないようである。埴輪の下の床面は高温のために硬化している状況は全く見られず、叩き締めた状況のままである。そのため、床面IIIの最初の焼成時から、すでに壊れた埴輪片を敷き詰めていた可能性がある。

窯の奥の煙道部直前に、埴輪を縦に1/4に分割した縦長の破片を凸面を上にした状況で横に1列並べている。何か意味を持たせていたのかも知れない。

#### b 塩輪窓P-1排水溝(図IV-11,18、写IV-4-2)

埴輪窓P-1排水溝は、窯から少し離れた位置に窯を囲むように掘られている。右側部分は後世の搅乱で破壊されているが、上方と左側部分はよく残存している。溝の規模は、煙道上方付近の最も高い位置で幅約60cmを測り、深さもこの頂部付近が最も深くて60~70cmを測る。溝の断面はV字形で、斜面を下って高位段丘崖に近くなると浅くなる。そして末端近くは窯から離れて外側へ流れ落ちるように造られている。ただし、溝の末端は段丘崖まで達していない。窯の焼成時に降雨で半地下式窯の天井が崩れ落ちる事がないようにする目的で掘られたと考えられる。

埴輪窓P-1排水溝の埋土は埴輪窓P-1上部堆積層に似ており、茶灰色粘質土層である。溝の埋土中に水成堆積層である灰黄色粘土層がなく、恐らくは埴輪窓と同時に人为的に埋められた可能性が高い。

#### c 塩輪窓P-1築造時排土(図IV-18,19,26、写IV-1-1,3-3,7-1,3)

埴輪窓P-1の東側を蛇行しつつ流れる河道P-2Dの堆積層の上に、青灰色の礫層が存在している。その範囲は、埴輪窓P-1前面から北へ約9.0mまでである。この土層は、整然とした層序ではなく、土の塊が積み重なっており、盛り上げて敷きならしているらしい。この土の塊は埴輪窓を掘った時の排土と考えられる。排土の広さは南北方向約9.0m、東西方向約6.0mである。しかし須恵器窓P-1灰原まで延びずに、埴輪窓P-1灰原と須恵器窓P-1灰原の間は約5m開いている。盛り上げられた土層は断面観察から青灰色を示しているが、もともと茶褐色を示していた高位段丘礫層が地下水の影響でグライ化し変色したと考えられる。

埴輪窓P-1築造時排土は、狭い段丘崖下に埴輪窓用の作業場を確保するために最初から意識的に造成していると考えられる。また、河道P-2Dの東岸の台状部から延びている堆積層の一部も、排土と同

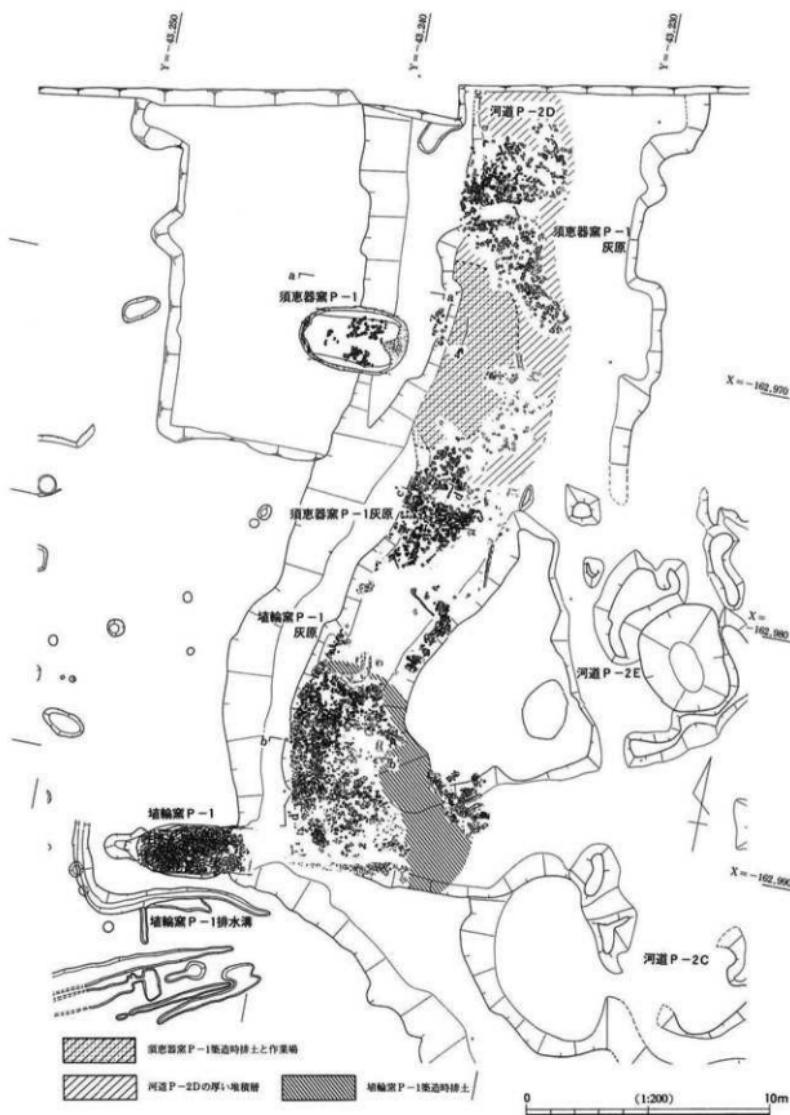
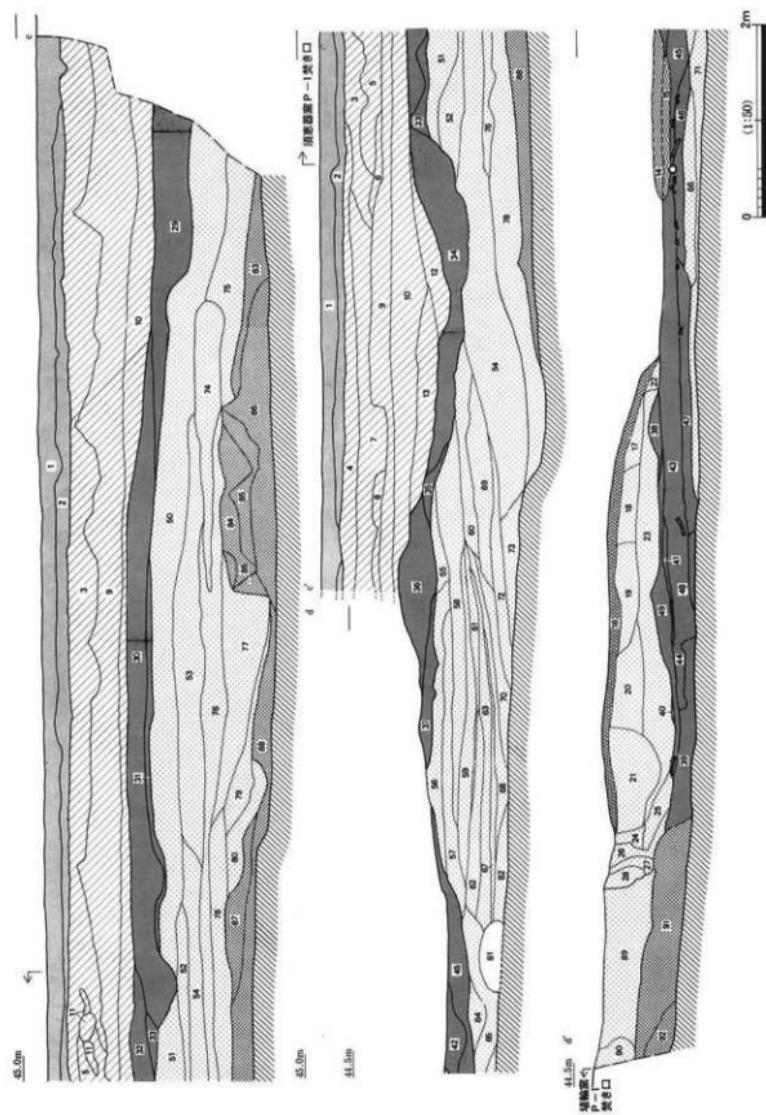


図 IV-18 堆輪窓P-1・須恵器窓P-1周辺位置図



図IV-19 塗輪窯P-1灰原・須恵器窯P-1灰原・河道P-2D堆積層断面図

じ高さに削って平坦にしており、ここも作業場にしたようである。

埴輪窯の南側にはやや広い平坦地があり、そこでは灰原や準備作業用の広場を確保ができる広さがあるにも関わらず、この場所に埴輪窯を築かなかったのは、埴輪窯が奥まった地形と比高差が得られる場所を必要とした事が最大の理由と思われる。

作業場の機能としては、焚き口周辺を中心に焼成前後の埴輪や燃料の薪置き場等に使用されていたのであろう。そして、その北側に燃料の燃えかす・焼土・炭・灰とともに、焼成に失敗した埴輪破片を積み上げていたと考えられる。

埴輪窯P-1 築造時排土下層に河道P-2Dの堆積層がそのまま残っている。この河道堆積層は必ずしも整然とした堆積層序を示すではなく、凸凹して非常に乱れている個所がある。これは、あくまでも断面観察からの所見であるが、人々が河道堆積層に踏み込んでできた足跡の可能性がある。河道P-2Dが流れている頃に入々が河道P-2Dの中を歩き回っていたとすれば、それは窯を造る人が構築すべき場所の選定のために河道の中を歩いていたのかもしれない。あるいは埴輪窯を築造する場合には直前にまず周辺の繁茂しているであろう植物を伐採する事から始めたはずであり、この作業時の足跡であるかもしれない。しかし、埴輪窯P-1 築造時排土との間に水平な河道堆積層がある事から、埴輪窯築造以前のものである事は間違いない。いずれにしても窯築造以前に人々がこの地に入り込んでいた事は確かである。この河道堆積層中から須恵器の大型の甕の破片・高杯・杯身・杯蓋等が出土する(写IV-7-2.4)。

また埴輪窯P-1 築造時排土と西側の高位段丘層のある側面との間に、断面では一見溝状の灰色粘土層が挟まっている。この

中にも須恵器大甕の破片が埴輪窯P-1 築造時排土と高位段丘層の間に横一列になって挟まれている(写IV-7-1)。これらの破片は、埴輪窯P-1 築造時排土の下層の河道堆積層中に廃棄されていた須恵器大甕の破片が、埴輪窯P-1 築造時排土の重圧で横に押し出されるとともに、上向きにも押し上げられ、高位段丘崖面の間に挟まれる形で残ったものと考えられる。

#### d 塩輪窯P-1 灰原(図IV-18,19,20、写IV-1-1,3-3,4-3)

埴輪窯P-1 築造時排土の一角に埴輪片が積み重なっている。これが埴輪窯P-1 灰原である。灰原の範囲は埴輪窯P-1 前面から北へ約7.6m、東西約4.0mである。東側の河道P-1 堆積層上で排土層と同



図IV-20 塩輪窯P-1 灰原・河道P-2D 土層断面図

じ高さに削られている個所の約3.2m×2.1mの範囲内にも埴輪片が集中している。そして、一部の埴輪片は河道P-2Dの東側斜面に貼り付いて出土した。ここからは調整の粗雑な床面IIIと同様の埴輪片が出土している。埴輪窯P-1灰原には炭・焼け残った燃焼用の木片・白色粘土・灰・焼成に失敗した埴輪片が積み上げられている。埴輪窯P-1灰原の北端と須恵器窯P-1灰原南端は約5.0m離れている。両灰原の間に暗灰色粘土の堆積層があり、中世には滯水しているか湿地化していたと思われ、この中から瓦器碗が出土している。これが落込P-15である。

埴輪窯P-1前面には薄い炭層が埴輪窯P-1灰原の堆積層の間に見られる(写IV-4-3)。ところが、焚き口の北側の灰原では炭層が間に挟まれておらず、埴輪片と焼土と炭が入り混ざった状態にあり、幾度かかき混ぜられた可能性がある。この炭層が灰原全域に広がっていないため、炭層を鍵層にして灰原を分層発掘できなかった。灰原の堆積層からは、大部分が焼け焦げた大きな木材片も出土している。灰原出土の埴輪片は窯体内出土の埴輪片より大きな破片が多い。埴輪片の表面の色調は灰黄色から灰白色を示している。窯体内出土の埴輪片の色調が褐色から赤褐色であるのに比べると随分異なっているが、両者が接合することから、灰原出土の埴輪が後世の地下水等の影響を受けて灰黄色や灰白色へ変色したと考えられる。

埴輪窯P-1灰原堆積層(図IV-18,19,20)は、現状で最も厚く残っている個所で約20cmである。埴輪窯P-1灰原の埴輪の堆積は、埴輪窯が操業していた当時の廃棄物の状態そのままでなく、中世と近世の削平を大きく受けた後にかろうじて残った状態である。近世の整地層や近世水田の床土内から大量の埴輪片が出土する事から、削平されて運ばれた埴輪はかなりの量と推測される。

## 註

1) 埴輪窯に関して、数多くの方々のご教示を得た(敬称略・五十音順)。

<浦添市教育委員会>安里 進 <大阪大学>都出比呂志 <大阪府教育委員会>一瀬和夫・今村道雄・岩瀬透・大谷治孝・岡本敏行・尾上 実・瀬川 健・高島 徹・玉井 功・辻本 武・中井一夫・廣瀬和雄・折本哲・渡辺昌宏 <大谷女子大学>中村 浩 <岡山理科大学>亀田修一 <権原考古学研究所>ト部行弘・坂靖 <京都大学>高橋克壽 <堺市教育委員会>池峰龍彦・石田 修・内本勝彦・鹿野吉則・北野俊明・近藤康司・鷗谷和彦・白神典之・十河稔郁・張 洋一・續伸一郎・土山健史・豊西文雄・野田芳正・樋口吉文・藤井克己・増田達彦・森村健一・八木正徳 <(財)大阪府埋蔵文化財協会>田中一廣 <(財)君津都市文化財センター>小高幸男 <(財)京都市文化財研究所>小森俊寛 <(財)古代学協会>川西宏幸 <(財)東京都埋蔵文化財センター>飯塚武司 <四條畷市教育委員会>野島 稔 <高槻市教育委員会>大船孝弘・森田克行 <豊中市教育委員会>柳本照男・山元 建 <奈良市教育委員会>鐘方正樹 <羽曳野市教育委員会>笠井敏光・河内一浩 <松原市教育委員会>芝田和也 <宮城県教育庁>古川一明

## B 須恵器窯

### a 須恵器窯P-1 (図IV-18,21,22,23、写IV-5-1,2,3)

#### 概要

須恵器窯P-1の窯体は、埴輪窯P-1と同様に開析谷西側にある高位段丘崖面を崖面と直交方向に掘り抜いて構築されている。南側の埴輪窯P-1とは、約17m離れている。須恵器窯の築かれた高位段丘崖の比高差は、埴輪窯部分よりは低い。埴輪窯は高位段丘疊層を掘り下げていたが、須恵器窯は段丘疊層まで達していない。そのため、旧地表面からあまり掘り下げていないと推測される。

遺存していた須恵器窯P-1の窯体は、燃焼部の上部から焼成部の下部にかけてで、主軸の長さ約4.4m部分だけであった。床面最大幅は約2.0m、残存している最も深い個所で約0.7mを測る。この窯は須恵器窯にしては幅が広く、全長も他の須恵器窯と比較して長いと推測される(写IV-5-3)。窯の主軸方位は、残存部分が短いので正確ではないがN-91°-Wを示し、真東に近い方向を指す。残存している最上部は標高45.25m、焚き口の低い部分の標高は44.05mを測る。窯体内的堆積層中には2枚の床面が存在していた<sup>11)</sup>。下部の床面Iは緑灰色砂質土層上面に、上部の床面IIは灰色粘質土層上面にある。床面傾斜角度は床面Iが約17°、床面IIが約12°を測り、床面IIは床面Iより少し緩やかになる。

須恵器窯P-1は、窯本体の前・後部が大幅に削平を受けて遺存している範囲が狭いにもかかわらず、床面には意外と数多くの遺物が残存していた。床面Iからは陶邑編年II-3段階、床面IIからはII-3～II-4段階の須恵器が出土している(写IV-5-1,2)<sup>21)</sup>。

窯は貼り壁部分が灰青色で硬く変化している。この外側の高位段丘層が白く変色し、さらに外側が赤色化している。層状に順次変色しており、相当高温で焼成されていた事が推測される。

この窯は、周囲の高位段丘層の高さや窯の深さから推測すると、埴輪窯のように窯全体が高位段丘層の中に掘り込まれる形態ではなくて、燃焼部と焼成部の一部分が高位段丘層中に位置するだけで、焚き口や燃焼部下半部は盛土した上に造り、焼成部は高位段丘を少し掘り下げただけの床面を造り、さらにその上部に天井部を被せていた可能性が高い。須恵器窯と埴輪窯は距離的に近い位置にあるが、構造は同じ半地下式であっても相当違っている可能性がある。

須恵器窯P-1の前面に流れている河道P-2Dは、西側の高位段丘側に寄った所に砂層等を厚く堆積させて微高地を形成している。須恵器窯前面のこの厚い河道堆積層の上層に、須恵器窯P-1築造時に掘り出した排土を盛り上げ敷きならして平坦にしている(図IV-23、写IV-8-1,2)。須恵器窯P-1の北側付近では高位段丘層と同様の土層が旧河道P-2D堆積層上を覆っている。恐らく高位段丘層を削り出して厚い河道堆積層上層に被せていると考えられる(図IV-20、写IV-8-3)。このようにして須恵器窯P-1の焚き口前面にも平坦な場所を造り、燃焼用の薪置き場や須恵器の詰め替え場所や、失敗品を廃棄するなどの作業場として用いているらしい。

作業場の南側と北側に須恵器焼成時に溶着したもの、ひび割れたもの、焼成不良なものなどの失敗品や壊れた破片・灰・焼土などを大量に廃棄している(写IV-6-1～3)。須恵器窯P-1灰原は焚き口の左右両側に廃棄物を盛り上げており、廃棄している量も多いようだ。須恵器がうまく焼き上がる割合は、埴輪に比べると低いようだ。焼成温度は須恵器窯がかなり高く1200°C前後と考えられているのに対し、埴輪窯は焼成された埴輪が土師質なので須恵器窯より低い温度と考えられて、この焼成温度の差が完成品を生み出す割合の差をもたらしているのかもしれない。

須恵器窯P-1焼成部上半と煙道は近世に削平を受けて消失していた。須恵器窯P-1東側のP地区開

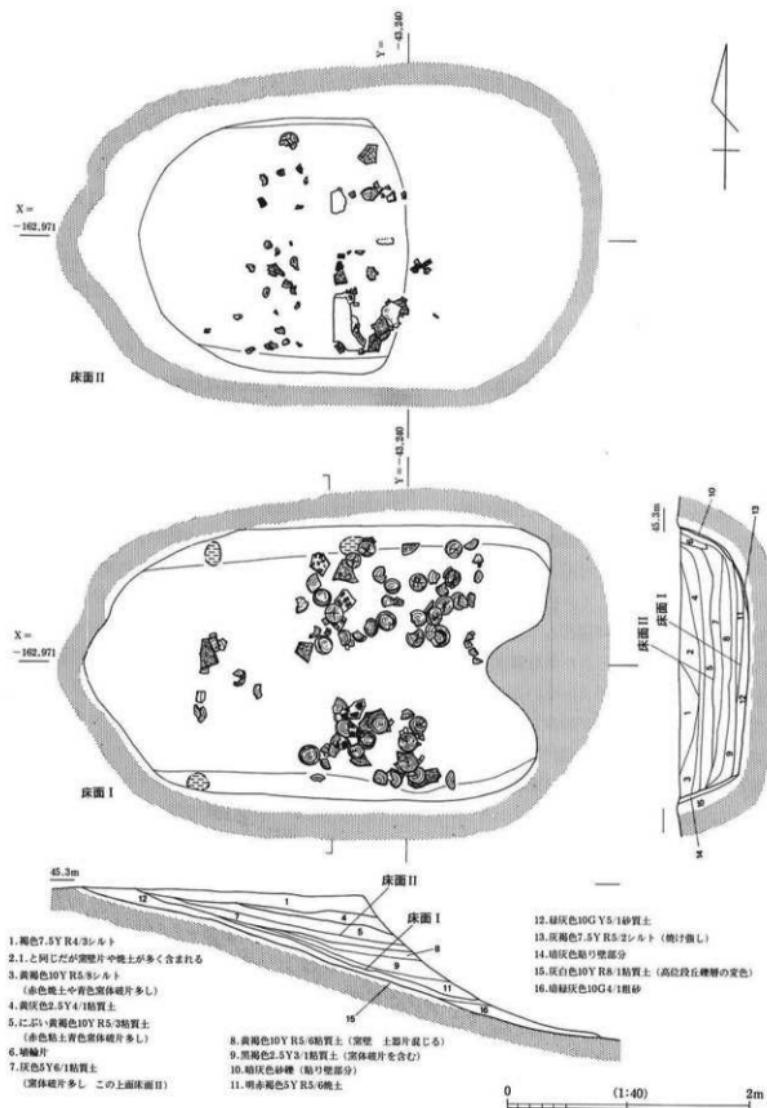


図 IV-21 須恵器窯P-1 平面・断面図

折谷の水田に、削り取った土を客土するために相当な厚さで須恵器窯P-1周辺の高位段丘層を削り取っている。一方須恵器窯焼き口付近と窯体焼成部下半部付近は、近世に落込P-20を開削した時と、この後に水田P-1の周囲を迂回した農業用水路を開削した時の2回、大幅に削られて、すでに消失している。

床面I（図IV-21,22、写IV-5-2,3）

高位段丘層を掘り抜いた上に大きさが均質な緑灰色の砂粒を敷き、これを床面としている。この床面I上に赤褐色焼土層が堆積しており、その上面から多数の完形品を含む須恵器が出土した。その中に、組み合わされた状態の完形の杯身・杯蓋が20セット近く含まれている（図IV-22）。これらの須恵器は、大半が窯体の下半部から出土している。

出土した須恵器には、組み合わされたままの杯身・杯蓋の他に単独の杯身や杯蓋、大甕の体部破片等も含まれる。組み合わされた杯身・杯蓋のいくつかは、須恵器大甕の体部破片の上にのった状態で出土している。

杯身・杯蓋を組み合わせて焼成する方法が、この床面Iの段階の焼成方法であった可能性が高い。杯身・杯蓋の組み合わせは2つの置き方がある。1つは杯蓋を上にする正常な形で置かれている例と、天地逆転して杯身が上、杯蓋が下の例もある（写IV-5-2）。正常な置き方の例は3組、天地逆転した例は10組見られる。杯身と杯蓋の完形品の単独出土は数少ないが見られる。また杯身・杯蓋の破片の出土例も相当数あり、単独の完形品と重なっている場合がある。

完形品の杯身底部外面と杯蓋天井部外面にはヘラで描かれた記号がある。V字形・X字形・鳥足形・一文字形、そして複雑な記号の5種類が見られる。床面I出土の須恵器のヘラ記号は、個々に出土の杯身や杯蓋の完形品にはほとんど刻まれていないにもかかわらず、杯身・杯蓋を組み合わせたセットには多く刻まれている。そして、杯身・杯蓋を組み合わせた須恵器のヘラ記号は、必ず同じ記号が付けられている。また、杯身・杯蓋ともヘラ記号と同じ方向に向けて重ねている。さらに、同じ記号の杯身・杯蓋で上下に組み合わせられた須恵器はそれぞれ一群となって出土している場合が多く、この一群ではヘラ記号の向く方向も似かよっている。

これらの遺物は、天井が崩落したために残ったと考えられるが、焼成時の状況をそのまま残しているとは考え難い。赤褐色焼土層が焼き口及びその周辺で形成された土層と考えられ、その上にこれらの須恵器がのることから、焼成時の原位置ではなく、少し下方に動いた可能性が高い。それは、床面の下部にだけ完形品が集中して残っていて、上部には破片しか残っておらず、上部の須恵器は大半が取り出されていると考えられるためである。また、杯身や杯蓋の破片が人為的に重ねられていると思われる状況で出土している。なお、天井が崩壊したと考えられるが、天井部らしいものは全く残っていないかった。

それでは床面Iに残された杯身・杯蓋セットの完形品約20点は一体何を意味するのであろうか。それらは窯の操業を終了するにあたって、個々の須恵器製作集団が、それぞれのヘラ記号を描いて製作した杯身・杯蓋を焼成部に残し、窯の神に対して感謝の意思を表わしたものではなかったか。すなわち窯鎮めの行為ではなかったかと推測するのである。須恵器窯P-1構築以前から予定の工程が立てられており、工程を完了した時に須恵器窯を廃絶している。すなわち体系的な須恵器製作工程が立てられており、それに沿った行動ではなかったか。単純に日々同じ須恵器を作成し続けていたようなルーズな作業体系ではなく、意識的な工程管理がすでにされていたと考えられる。

須恵器窯P-1床面Iには柱穴が3個存在している。それらの柱穴は、図IV-21の床面Iの中に点線のスクリーントーンを貼りつけた椭円形で示している。柱穴の中には、炭化した木片が残っていたもの

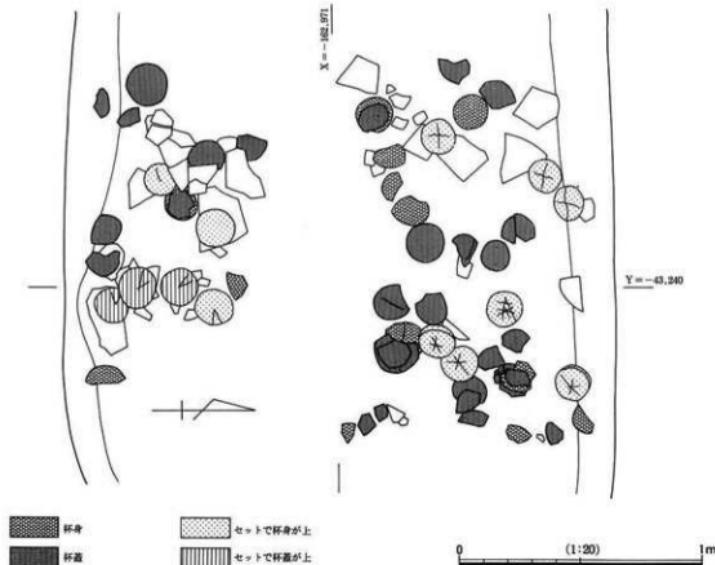
もある(写IV-5-3)。本来ならば柱穴4個が妥当な形であると考えられるが、本来有るべき残り1個所は精査したものの発見できなかった。

#### 床面II(図IV-21)

須恵器窯P-1は、床面Iの段階で一旦廃絶している。そして、暫くして新しく床面を貼り直して再構築している。それが床面IIである。

床面IIは灰色粘質土層上面にある。この上面から須恵器の杯身や杯蓋の破片、大甕の大きな破片とともに、灰色に還元されて表面に白色や緑色の自然釉が付着した窯体壁面の大きな破片等が出土する。この床面からは陶邑編年II-3～II-4段階の須恵器杯身・杯蓋が出土する。この他、大甕の体部破片の上に須恵器杯身・杯蓋の完形品が置かれて出土している例がある。須恵器大甕の体部破片は、自然釉がかかっているのか、2次焼成のために高温で変質したのか不明であるが、通常の須恵器とは少し異なって表面の調整が甘く丸みを帯びている。そのため、焼き台として使用されたと思われる。

これら以外に、床面に付着したり床面から浮いた状態で円筒埴輪の小破片が出土している。円筒埴輪の色調は褐色から褐灰色の色調を示しているが、2次焼成を受けて還元された色調ではない。埴輪の一部には須恵器窯の自然釉の飛沫痕らしいものが僅かに付着しているものを見られる。なお、この自然釉の飛沫痕については、そうではないとする意見もあり、見解が分かれている。これらの埴輪片は、須恵器焼成時の焼き台として使用したものとも考えられるし、あるいは色調が褐色から褐灰色で埴輪窯焼成時から全く変わっていないことから、須恵器窯P-1廃絶以降の単なる混入とも考えられる。混入とすれば、須恵器窯P-1廃絶時の、窯破壊後の埋め立て作業時に混入した可能性が高い。



図IV-22 須恵器窯P-1床面I出土遺物詳細図

この床面の円筒埴輪は、外面調整がタテハケで、凸帯も低いものが多く、中には低位置凸帯埴輪も混じっている。この事から、これらの埴輪は隣接する埴輪窯P-1で焼かれたものと考えられる。

床面IIの段階では、廃絶時に床面Iのような窯鎮めの儀礼を行った痕跡はない。しかし、この窯の最終段階には窯を操業時の状態のままで終えていないようだ。床面から少し浮いた状態で窯壁が幾つか出土している事から、意識的な窯の破壊行為を考えても良いのかもしれない。すなわち、床面IIでも窯再構築から廃絶までの予定の工程があったようである。しかし、窯の焼成部の大半は削られており、定かな状況は今ひとつ分からない。

また、床面IIの段階の須恵器焼成方法として、床面Iとは異なり、杯身と杯蓋の凹面を同一方向に積み重ねて焼成している例が数多く見られる。あるいは床面Iの段階でも焼成時の須恵器工人単位で重ね方が異なっている事も考えられるが、溶着した須恵器で見る限り、床面IIでは積み重ね焼きで焼成されている。ところが、組み合わせ焼きの失敗例も少なからずあるが、積み重ね焼きで溶着させての失敗例の方がはるかに多い。この事から、床面IIの段階で失敗率は高いけれども、数多く積み重ねられる積み重ね焼きを採用したということは、この頃に生産量を一層増す事が要請されていた可能性がある。

大量生産を図るという動きは、作成技術的にも杯身立ち上がり部先端の端面を作る事を止めて単に丸めるだけの形態に至るし、杯蓋口縁端部も同様な動きが見られる。体部形状も少し器高が減少して扁平に近い形態が多くなる。器壁が薄くなることとも相まって、形態的にも使用粘土量が減るなど、様々な部分での工程の省略が進み、生産量の拡大が一層図られているようである。このように床面IとIIの間の短い期間でも、須恵器生産の合理化の波が襲っていたようである。

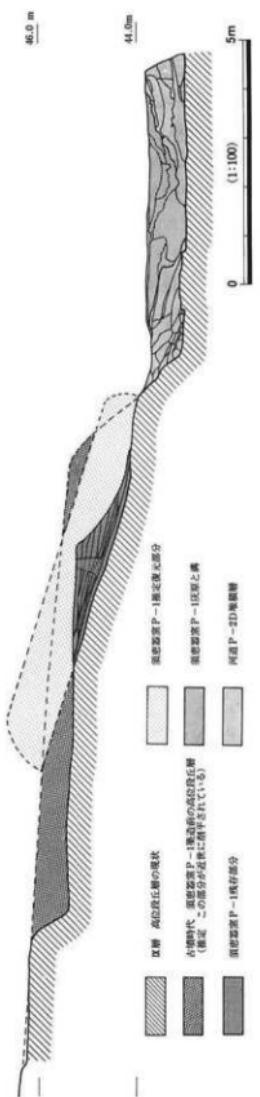
#### b 須恵器窯P-1 築造時排土（図IV-18,26、写IV-8-1）

須恵器窯P-1灰原の下層には、層厚約30cmのブロック状の灰色碌層が存在する。この碌層は砂質土と碌からなり、須恵器窯P-1を掘り抜いた時に出る排土を敷きならしていると思われる。敷きならされた範囲を正確には限定できなかったが、おおむね窯の前面を中心とした幅10m以下の狭い範囲であったと思われる。この排土層とは別に、その北側に高位段丘層を削って敷きならした土層も土層断面で確認しているが、その範囲も特定できていない。これも、それほど範囲は広くないようである。

さらに、この下層には河道P-2Dの堆積層を周囲から集めて積み上げた土層が存在する。この土層は20~30cmの単位でブロック状になり、古墳の封土と同様、作業工程で使用した用具1回の単位がはっきりと分かるので、鋤かスコップ状の用具で盛り上げたと考えられる。この範囲も、上の2層と同様それほど広くはないようである。これらの作業を行う事によって、河道にあたる場所に作業場と焚き口を造りだしている。本来なら乾燥していなければならない焚き口や燃焼部下部を河道上に造る事は不自然であり、構造的に非常に無理をして須恵器窯P-1を造っている。

なお、これらの人為的に積まれた土層の下には、より広い範囲で河道P-2Dの厚い堆積層があり、微高地を形成している。この層は周囲の河道には見られないもので、高位段丘に沿った下流側に堰状の施設を設けて、意識的に厚く堆積させた可能性がある。この微高地も須恵器焼成の際の作業場や灰原として利用されており、微高地造成を含めて、最初から意識的な須恵器窯P-1築造計画が立てられていたと考えられよう。

須恵器窯築造時排土である碌層からは、土器はまったく出土していない。下層の河道堆積層中から土師器が1点出土しただけである。



図IV-23 須恵器窯P-1推定復元図 須恵器窯P-1前面に形成された河道P-2Dの微高地の上流側には

c 須恵器窯P-1灰原(図IV-18,19,20,23、写IV-6,8)

須恵器窯P-1 前面の河道P-2Dには微高地が形成されるが、須恵器窯P-1 焚き口の南側と北側の微高地上に歪んだり溶着して焼成に失敗した須恵器破片を大量に廃棄している。また炭や灰・焼土・白色粘土も一緒に捨てられている。灰原は須恵器窯P-1 の南北両側に形成されるが、窯の前面にはあまり捨てられていない。須恵器窯P-1 灰原から、杯身・杯蓋・大型杯身・大甕・甕・壺・長頸壺・短頸壺・長脚無蓋高杯・短脚無蓋高杯・長脚有蓋高杯・壺蓋・高杯蓋・器台・提瓶・横瓶・こね鉢・甌が出土する。出土した遺物のうちでは杯身・杯蓋が最も多い。その他は数が少ない。これらの遺物の中で杯身・杯蓋の焼成の組み合わせには2種類見られる。1つは杯身・杯蓋を合子状に組み合わせてセットで焼く方法と、もう1つは杯身・杯蓋の口縁部を同じ方向に3、4個積み重ねた状態で焼成する方法である。

この他、灰原ではないけれども河道P-2Dの堆積層中から須恵器の杯身や杯蓋を主にして、完形品に近いもの、少しひび割れただけのもの、灰緑色で焼成不良のものなど僅かに完成品基準からはみ出たために廃棄されていると思われるものが相当数出土している。灰原堆積層中には黄褐色粘土層を含む焼土層も見られる。

なお、これらの須恵器を大量に含む灰原を形成する黒色炭層には埴輪片が入らない。須恵器窯P-1灰原を横切る暗灰色粘土層の溝や灰原の上層の2次堆積したと思われる層から埴輪片が出土している。

C 河道

a 河道P-2 (図IV-24, 25, 26、写IV-9, 10-1, 2)

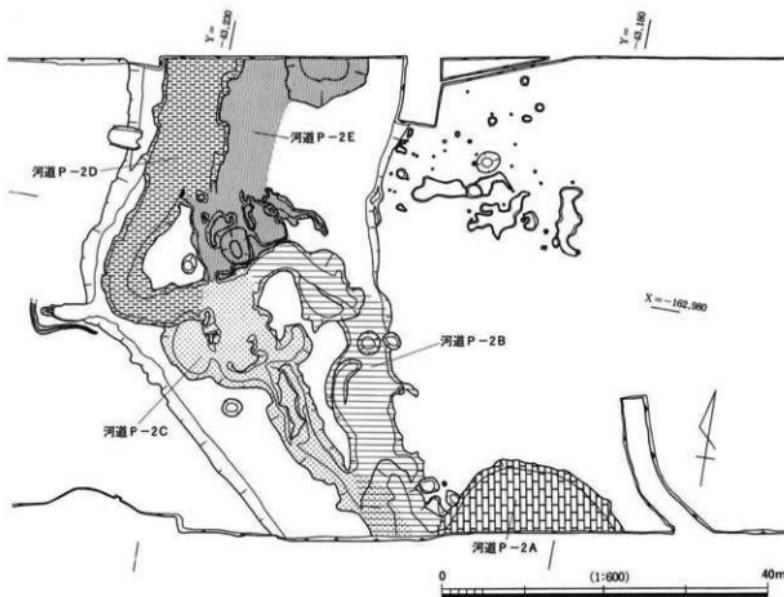
河道はP調査区区内を南から北へ大きくS字状に蛇行して流れている。南端で河道P-2Aが一部分姿を見せる。そしてS字状に屈曲して河道P-2Bに続く。河道P-2Bも南から大きくS字を描きつつ河道P-2Dに続く。河道P-2Dは段丘崖下に沿って北へ下る。これらの流れが本来の河道P-2の流路である。ところが、須恵器窯P-1を築造した際に、段丘崖下にその堆土を盛り上げて作業場を作ったために、河道P-2Dの流れが少し東側に振って河道P-2Eとなる。この後、埴輪窯P-1の築造と共に河道P-2Dを埋め立てて作業場を作ったために、河道P-2Dは廃絶する。このため、流れが大きく変わり、あまり灌んでいない所に水を無理に流すような状況が生じて流路が河道P-2C、河道P-2Eへと変わる。

須恵器窯築造後で埴輪窯築造前までに堆積した主に灰色系の粘土・砂・砂礫等の土層があり、層中には須恵器窯P-1で焼成されたと思われる須恵器が含まれる。

土層と出土遺物の関係を整理すると、以下のようなになる。須恵器窯築造前に堆積した河道P-2A・河道P-2B・河道P-2Dの下層の砂層には須恵器・埴輪は含まれない。また河道P-2Dの微高地形成層や須恵器窯P-1築造時排土中に須恵器・埴輪は含まれない。須恵器窯築造後に堆積した河道P-2Aや河道P-2Dの埴輪窯P-1築造時排土下層部分には須恵器は含まれるが埴輪は含まれない。須恵器窯P-1灰原には須恵器は含まれるが埴輪は含まれない。埴輪窯築造後に堆積した河道P-2B中・上層や、河道P-2Dの埴輪窯P-1築造時排土以外の部分の中・上層や、河道P-2C・河道P-2Eおよび埴輪窯P-1灰原、須恵器窯P-1灰原の上に被る堆積層や灰原を横切る溝には埴輪や須恵器が含まれる。

河道の底部の堆積層や下層の高位段丘層から判断すると、河道P-2は、高位段丘中の褐色粘土層が窪んでいる部分を縫うようにして流れているようで、結果的に蛇行して高位段丘崖下を流れるようになると思われる。河道底面の最も低い個所は周囲の褐色粘土層から約1.5m下がっており、河道はこのような窪んだ個所を結んで流れている（図IV-24,25、写IV-9-2）。

須恵器窯や埴輪窯の立地は、開析谷を蛇行する河道が段丘崖に沿っていて、周辺の段丘崖のうち最も比高差のある場所を選択している。



図IV-24 河道P-2A～河道P-2E平面図

## 河道P-2A（図IV-24,26、写IV-9-1）

1Pトレーナーの南東側を蛇行しつつ東から流れ込み河道P-2Bに続く。この河道部分は埋没時期が早かったらしく、堆積層は大きく2層に分けられる。河道P-2Bと埋土は比較的似ており、下層に灰褐色砂層があり、上層に暗灰色粘土層などの有機物をあまり含まない堆積層がある。暗い色調の有機物を含む堆積層は見られない。下層から須恵器片が出土する。この河道の埋没後、河道の北東端側に沿って、中世の溝P-5が掘られている。またこの河道の範囲の上層に現在の水田P-3がちょうど重なっている。

## 河道P-2B（図IV-24,25,26、写IV-9-1,2,10-1）

埴輪窯P-1の焼成が始まる頃まで流れていた河道で、河道P-2Aから続き、大きく屈曲して河道P-2Dに続くが、河道P-2Dとの境は河道P-2Cに切られるまでである。この間、開析谷の東寄りを流れていた河道が大きく屈曲して西側段丘崖際に近づく。

河道P-2Bの河道堆積層は大きく上下3層に分けられる。下層は黄灰色砂層で、中層は灰緑色シルト層、上層は暗灰色砂質土層等が堆積する。上層では暗灰色砂質土層の中に部分的に粗砂層が堆積する事から流れが速くなった時期があったようである。この河道P-2Bの河道堆積層中層の灰緑色シルト層から須恵器製作に用いた木製の叩き板1点（図IV-104-2）、当て具2点（図IV-105-1,2）が出土している（写IV-10-1）。出土地点は図IV-26に示す。この層には炭化物がほとんど含まれていない。むしろ植物遺体が多く含まれている。調査区より上流側で須恵器窯等がまだ構築されていない頃に堆積したために、あまり汚れていないと考えられる。また堆積層の土質が粘土に近いシルト層である事から推測すれば、河道の流れは緩やかであったと推測される。叩き板と当て具は、このような流れの中に廃棄されており、廃棄された地点から動いていないか、動いていてもごくわずかであろう。

河岸に土器群P-3～土器群P-5がある。東側の台状部から廃棄された須恵器・土師器が河岸に散乱している。叩き板、当て具もこれらの土器と一緒に廃棄物と考えられる。

## 河道P-2C（図IV-18,24,25,26、写IV-9-2,10-2）

埴輪窯P-1を建築した時の排土が河道P-2Dの堆積層上に盛り上げられる。この結果、河道P-2Dは水が流れなくなる。このため、従来の河道P-2B、河道P-2Dと流れていた流路から新たに河道P-2C、河道P-2Eへと流路が変わる。この変化は人為の可能性もある。河道P-2Cは北端で河道P-2Bと河道P-2Dを横切る。埋土は、河道P-2B・河道P-2Dの中・下層に堆積している灰緑色シルト層・黄灰色砂層等に該当する堆積層がなく、河道P-2B・河道P-2Dの上層に堆積している暗灰色砂質土系の埋土層が上層から下層まで堆積している。この堆積層は足跡らしい踏み込み跡があるので、水稲耕作を行っていた可能性も指摘されている<sup>3)</sup>。そして、河の流れが少し速くなった事を示すとともに、埋土層に大量の有機物や炭化物が含まれることが示唆される。この大量の有機物や炭化物の存在は、調査地点より上流側でもいくつかの窯が構築されるような石池谷全体での窯業生産が盛んになったことを示すと考えられる。この河道P-2Cの堆積層の中層付近から叩き板が1点（図IV-104-1、写IV-10-2）出土している。IV調査区で出土した2枚の叩き板のうちの大型の方である。この叩き板は、埋土の中層から出土したことから、上流で廃棄されたものが流されてきた可能性が高い。

## 河道P-2D（図IV-18,20,23,24,26、写IV-3-3,8,9-2,3）

河道P-2Bに引き続いてS字状に大きく屈曲して西側段丘崖に接近し、高位段丘崖下に沿って流れる。この河道の堆積層は同じ層が全面にわたって堆積する事ではなく、各個所の狭い範囲にしか見られない堆積層が多いので表示しにくいけれども敢えて取りまとめるに、下層には黄灰色系の砂層が堆積し、下流

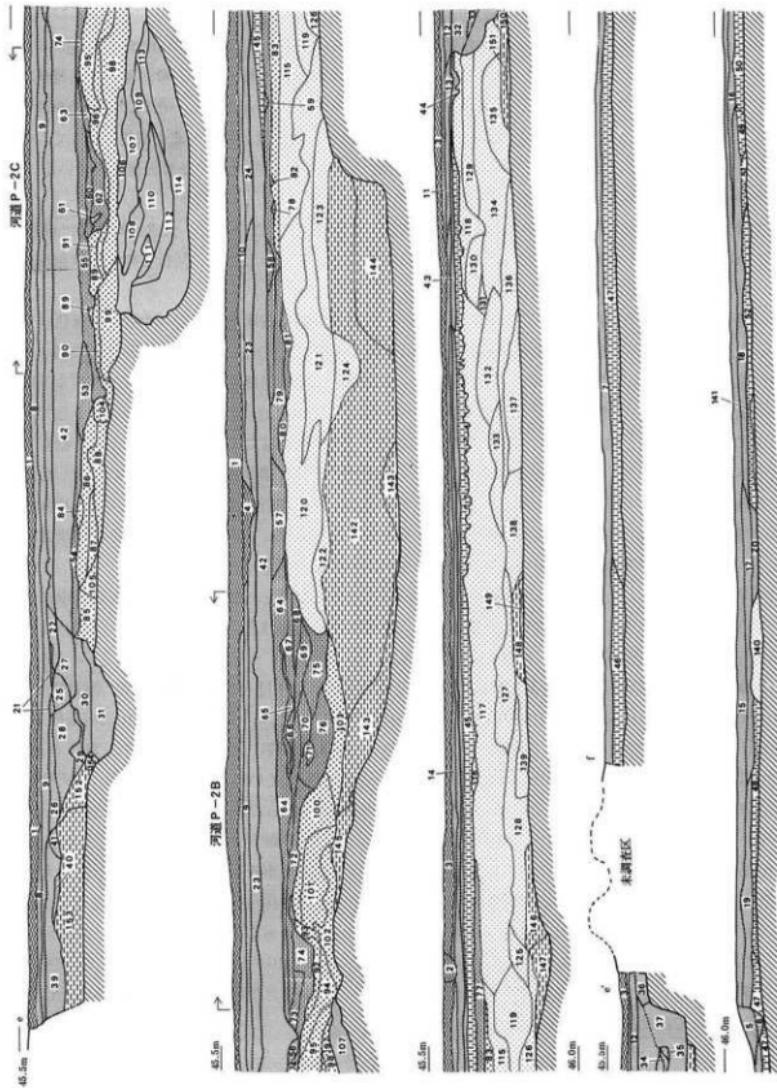
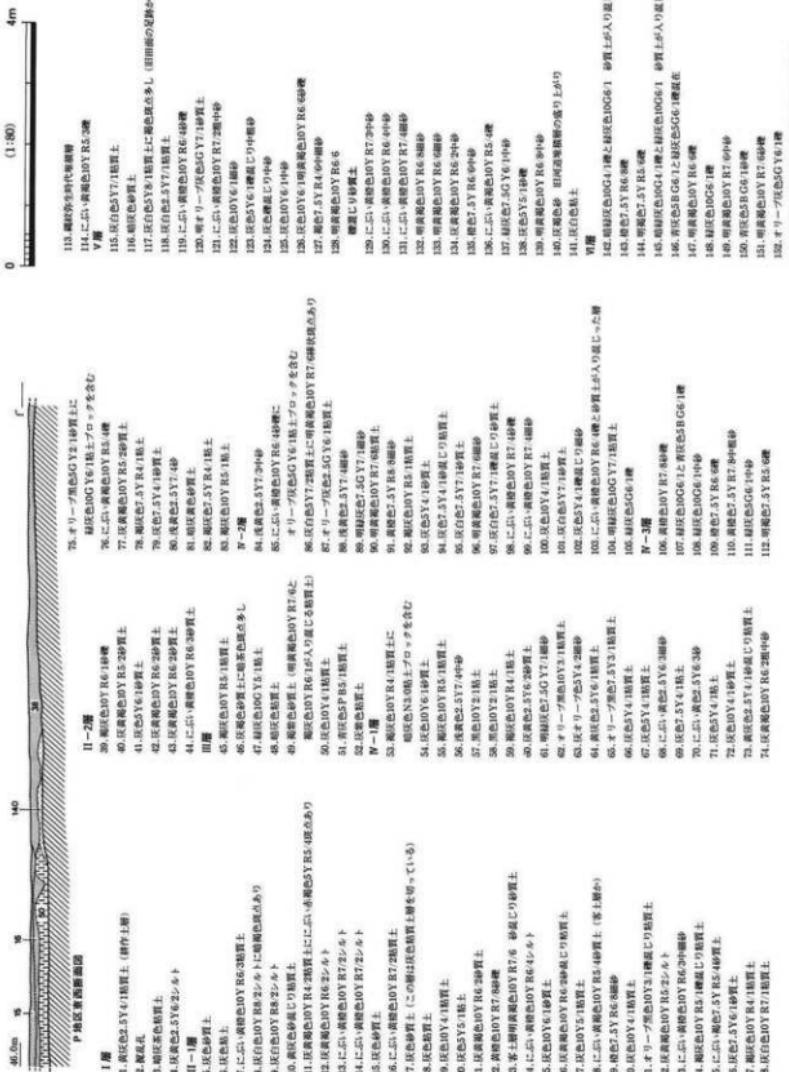


図 IV-25 P 地区開析谷部分



側では微高地状に高まっている。この層中には須恵器が含まれていない。須恵器窯P-1 築造時に須恵器窯P-1より下流側に堰を設けて、須恵器窯P-1周辺に厚く堆積するようにしたためか、下層の厚い堆積層である微高地が形成される<sup>43)</sup>。その上に須恵器窯P-1の掘削排土を盛り上げる。この時に河道の流路は少し東側に移動する。次に須恵器窯が操業を始めると中層の灰緑色系の粘質土層が堆積する。この中層内には須恵器が含まれている。次に埴輪窯P-1を築造すると、河道P-2D中層堆積層の上に埴輪窯P-1築造時排土を盛り上げている。この時に河道P-2Dは完全に廃絶し、流路が新しく河道P-2C、河道P-2Eに移るようである。埴輪窯の操業の開始とともに埴輪が埴輪窯灰原はもちろんの事、須恵器窯灰原と埴輪窯灰原の間や、河道P-2D上流側にも数多く含まれるようになる。そして南の河道P-2Cに接する辺りは暗灰色系の河道P-2C、河道P-2D上層にある堆積層が見られる。須恵器窯と埴輪窯の間の上層に落込P-15が形成され、中世まで湧水池となっていたらしい。

埴輪窯P-1築造時排土下層から須恵器の大型甕の破片・高杯・杯身・杯蓋等が出土している(写図IV-7-1)が埴輪は出土していない。埴輪は須恵器窯P-1の灰原上層に被る土層に含まれ、須恵器窯灰原と埴輪窯灰原の間の堆積層にも含まれている。埴輪窯灰原から上流側の河道P-2Dの中層以上にも、埴輪を含んでいる。河道堆積層は整然とした層序を示す個所と、非常に乱れている個所がある。この乱れている個所は断面観察から人の足跡の可能性がある。

#### 河道P-2E(図IV-18, 24, 26)

河道P-2Dが埋没した後に形成された、河道P-2Cの続きの下流側の流路である。河道P-2Eも、もともと河道ではなかった場所に形成されたので、高位段丘層中の堆積層である褐色粘土層や白色粘土層、また河道P-1の堆積層が河道底面に見られる。河道底面は河道P-2B・P-2Dより約70~80cm高い。このため、新しい河道P-2C・河道P-2Eの底面は非常に高くて、水が流れにくかったと思われる。

北側の須恵器窯P-1付近では、須恵器窯P-1の作業場が高位段丘崖に沿って造られた時に、河道P-2Dも流路を少し東側に振って流れていたが、埴輪窯P-1築造に伴う河道P-2Dの埋没に伴って流路が河道P-2Eへ移動した事により、河道P-2Cと流れが直線的につながるようになった。

底面には土器群P-1・土器群P-2があり、ここからは須恵器とともに埴輪片が出土している。

#### b 河道P-2内出土遺物(図IV-26, 95, 102, 103)

河道内の出土遺物は、須恵器がほとんどであるが、河道P-2Dの微高地の上流側全域と河道P-2Bの北側付近まで分布する。出土した須恵器は杯類が大半であるが、完形品を含み、少しひび割れたものや綠灰色に焼成されたものなど一見不良品には見えないような遺物も含まれている。これらの須恵器は、須恵器窯P-1灰原に廃棄されたものが一見して敗品とわかるのとは少し違っており、河道P-2D周辺で、窯から出された段階で第1次選別を受けた完形の須恵器を再度厳しい品質管理のもとに選別しなおした可能性がある。

埴輪窯P-1築造時排土の下層からは、須恵器大甕破片・杯身・杯蓋・高杯などが出土している。この後、埴輪窯P-1が操業を開始すると、埴輪窯P-1築造時排土の範囲外の河道P-2D、そしてその周囲の河道P-2B・河道P-2C・河道P-2Eから埴輪片が出土する。須恵器窯P-1灰原では、灰原を覆う堆積層と須恵器窯P-1灰原を削った溝状部分から埴輪が出土している。

河道内の出土の埴輪・須恵器は、埴輪窯P-1窯体内的埴輪、埴輪窯P-1灰原、須恵器窯P-1窯体内の須恵器、須恵器窯P-1灰原出土遺物と接合するので別項にて説明を加える。ここでは河道内出土遺物の概要だけ述べる。詳しくは別項を参照されたい。

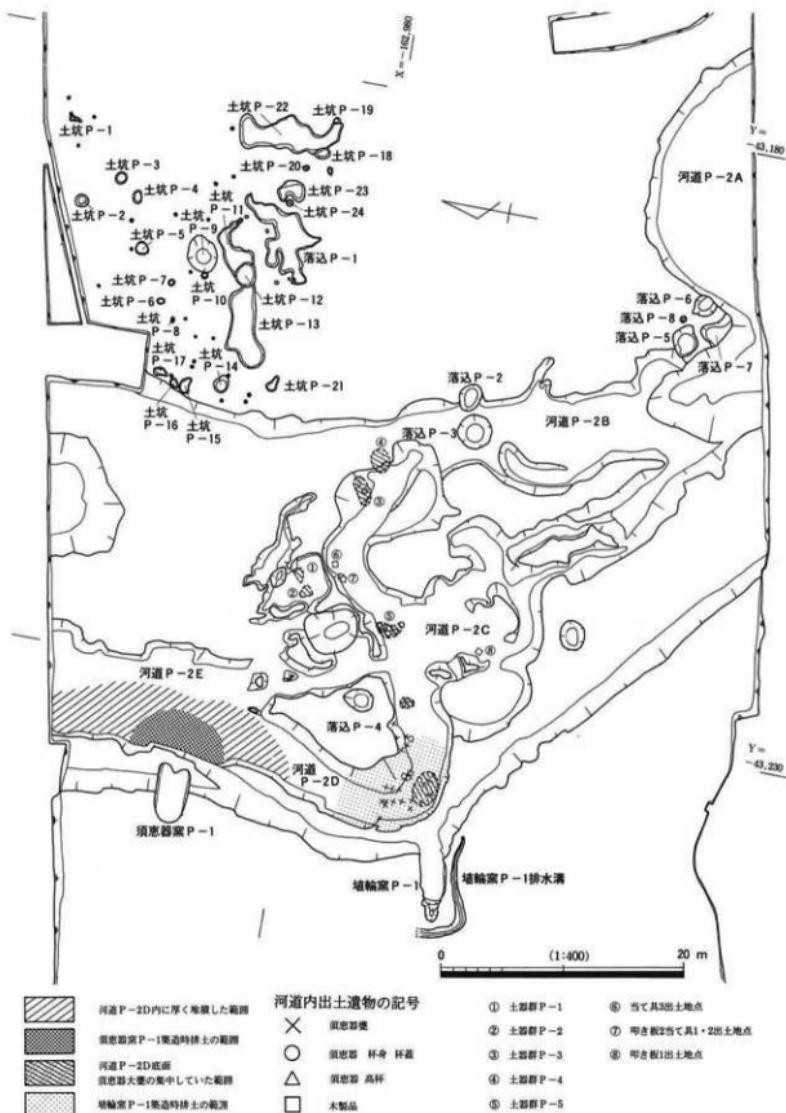


図 IV-26 P地区古墳時代後期遺構平面図

河道内からは須恵器杯身（図IV-95-24）のような底部がヘラ切りのままで回転ヘラ削りを施していない資料も僅かながら見られる。須恵器窯P-1で焼成された遺物の中で最終段階と考えられる資料で、陶邑編年II型式4段階である。この段階の須恵器を焼成し始めてすぐに須恵器窯P-1は何らかの理由で操業を停止し廃絶したようである。この他、埴輪窯P-1、須恵器窯P-1より遅るか、前後する時期かと思われる「く」の字状口縁を持った土師器甕が出土している（図IV-103-7,8,10,11,12）。この他、須恵器窯が廃絶した後の7世紀初頭頃の須恵器として図IV-103-1の資料がある。この資料は須恵器窯P-1で焼成されたものではなく、他の窯の遺物がこの地に運ばれて来たのではないかと考えられる。また須恵器大型杯も出土している（図IV-102-1,2）。

#### D 土器群

##### a 土器群P-1～土器群P-5（図IV-26）

土器群とするのは、河道の底面や河岸に遺物が集中していた個所である。土器群P-3・土器群P-4は北東側の台状部から廃棄されたような状況である。土器群P-1・土器群P-2は河道P-2Eの流路に付け替わった後に廃棄されたらしく、埴輪片・須恵器片が出土する。土器群P-5は河道P-2Dの河床底面から須恵器や杯身・杯蓋等が集中的に出土した。土器群P-5付近では埴輪片は出土しない。この周辺の河道内から出土している須恵器は完形品に近い物が多い。

#### E 土坑

##### a 土坑P-1・土坑P-4・土坑P-6～土坑P-24（図IV-26）

P地区中央の水田P-4の下層であるJ12f～h10、J13g,h1を中心とした範囲に、古墳時代の土坑や落込・ピットが集中して存在している。これより南側には広がらない。大型の遺構はなく、小さな土坑が多くある。この範囲の土坑内から少量であるが遺物が出土している。須恵器大甕・甕・杯身・杯蓋・壺・高杯である。この他に1点、O地区西端の落込内から須恵器杯身が出土している。これらの遺物は、およそ陶邑編年II型式3段階～4段階を示し、須恵器窯P-1が操業されていた時期と合致する。

これらの遺構が存在する黄灰色粘質土層は、旧河道P-1が堆積した層の最上層である。旧河道P-2が西側に流れ、この河道底面から約1.3m高い。この近くの台状部に須恵器製作に関与した工人の集落か、あるいは工房が存在していた事も考えられる。その範囲は調査区の北側と推測される。

##### b 土坑P-2・土坑P-3・土坑P-5（図IV-26,27、写IV-10-3）

形状は円形に近く、土坑P-3・土坑P-5からは須恵器の大甕の破片や杯が出土している。土坑P-2からは少量の須恵器が出土している。これらの遺構からは埴輪は全く出土しない。これらの遺構から出土した須恵器の形式は破片が小さいので判断し難いが、陶邑編年II型式2～4段階と推定される。これは西側にある須恵器窯P-1出土の須恵器型式と同じ頃である。この事から、これらの土坑群は須恵器窯P-1を操業していた人と密接な関係を持っていたと考えられ、調査範囲よりさらに北側の開析谷台状部上に須恵器工人の何らかの施設が存在していた可能性が考えられる。前述の河道P-2Bから出土した叩き板・当て具は、この工人達が使用し、何らかの理由で廃棄したものであろう。

後の中世の遺構が密集して検出された開析谷台状部の東側端に寄った範囲には古墳時代の遺構はまったく見られず、むしろ河道P-2に近い周辺に古墳時代の須恵器窯P-1が稼動していた時代の遺構が集中している。

## F 落込

## a 落込P-2～落込P-8 (図IV-26)

河道P-2内および河道に接した岸辺に大型で円形に近い落込がある。古墳時代河道が埋没し、機能を停止する頃の最終段階で形成されたのか、あるいは完全に埋没してしまった後に掘られたのか、今ひとつ明らかではない。これらは下層に黄灰色砂層等を含むか、あるいは黄色粘質土の埋土を持つことから、河道が機能している最終段階に形成された可能性もある。いずれにしても、人為的な掘削によるものではないらしい。

## G ピット (図IV-26)

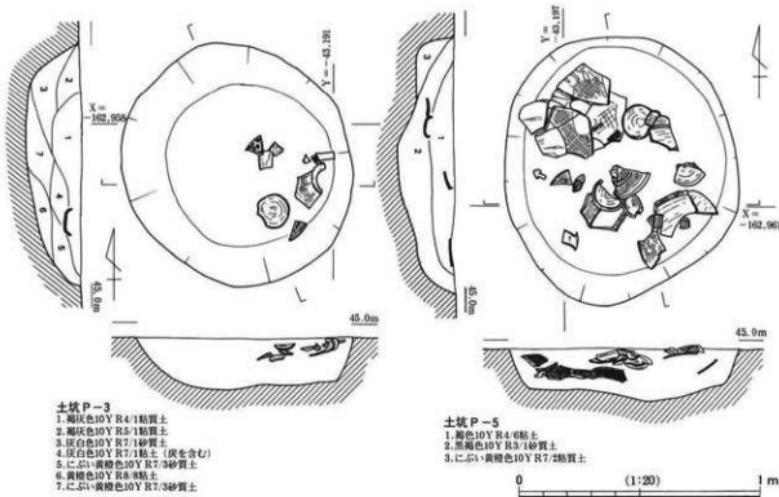
直径20cm前後を測る柱穴であるが、掘立柱建物に復元し得るものは見当たらない。P地区西端部およびQ地区的高位段丘上には、古墳時代の埴輪窯P-1および須恵器窯P-1に関連した工房や粘土採掘坑、工人の住居跡などは調査範囲内では全く検出できなかった。おそらく、北側の調査区範囲外に存在していたと考えられる。

## (3) Q地区

当該期の遺構は存在しない。

## 註

- 1) 大阪文化財センター調査課課長 中西靖人氏の判断を仰いだ。
- 2) 大谷女子大学 中村 浩氏にご教示を得た。
- 3) 立命館大学理学部 高橋 学氏にご教示を得た。
- 4) 大阪府教育センター 豊田兼典氏にご教示を得た。



図IV-27 土坑P-3・土坑P-5平面・断面図

## 第4節 古代・中世の遺構

### 1. 古代の遺構

この時代に属する遺構は全く検出されなかったが、遺物は少量出土している。河道P-2や近世の整地層内から飛鳥時代と思われる土師器甕(図IV-103-4,5)・須恵器(図IV-103-1~3)や奈良時代の須恵器などが出土している。

### 2. 中世の遺構

この時代に属する遺構や遺物の分布は、各地区によって大きな偏りがみられる。P地区が最も多く、N地区、O地区ではごくわずかに遺構・遺物が検出されている。Q地区ではこの時代の遺構は全く認められない。

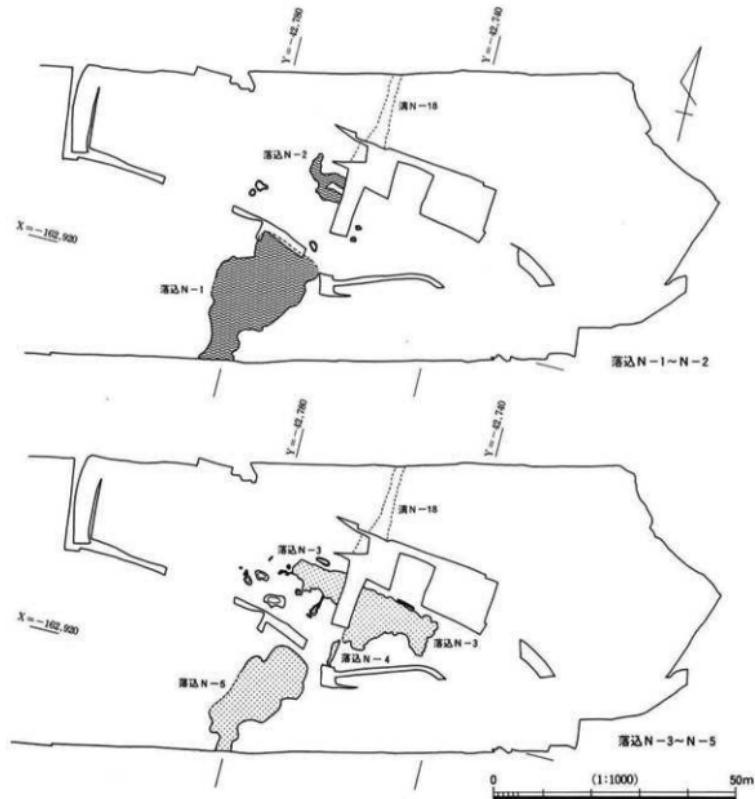


図 IV-28 N 地区落込平面図

## (1) N地区

## A 落込(図IV-28、写N-13-2,14-2)

落込N-1・落込N-2は、凹地状地形N-1に存在する。

凹地状地形N-1は、N地区の東側のI7,8ラインを中心として、南北方向を主軸とする窪みで、底面は北側に緩やかに下降している。東西幅約50mであるが、調査区中央部の北側付近は幅が狭くなっている。現地表面では水田N-16・水田N-20・水田N-21、草地N-17に相当する。凹地状地形の緩やかな斜面には落込や溝等が掘削される。落込は、埋没と再開発による掘削が繰り返される。その際に、深い部分のみが掘削を免れて残ったのが落込N-1・落込N-2である。落込の時期は、落込N-1から遺物が出土しないため詳しく述べられないが、再掘削後の落込N-5の埋土と推測される黄色粘土層から瓦器碗等が出土しているため、中世と推測される。

この後も、この落込を維持する作業が幾度となく繰り返される。落込N-3・落込N-4・落込N-5は、すぐ北側の凹地状地形の幅が狭くなった個所に小さな堤状遺構を設けることにより水を溜めている。なお、落込と表示した範囲は、落込内に堆積した土層のうち、後世の削平を免れたごくわずかな部分のみである。堆積層の層序は、III-1層黄色粘土層が落込N-5、III-2層灰紫色粘土層が落込N-3・落込N-4である。これらの落込の規模は、後世の落込N-6・落込N-7・落込N-8の再掘削時に幾度か削られて深かった個所が部分的に残っているだけで、かつての様相を復元する事は不可能なために不明である。これらの落込は、南側の高位段丘層の高い個所から湧き出た地下水や雨水を溜める小溜め池として機能していた。そして堤状遺構の北側に掘られた溝N-18を灌漑用水路として、北側の中位段丘上に開発されていたと思われる水田を潤していたと考えられる(写N-13-2)。おそらくは、中世には築造されていたらしい剣池から引く農業用水の補完的な役割を担っていたものであろう。すなわち、大きな基幹貯水池としての剣池と、それを補完する落込の小溜め池とからなる有機的な構造をもって、中世の灌漑用水体系が整備されていたと推測される。

落込N-3から瓦質のすり鉢・羽釜・香炉の獸脚部分等が出土している。中世でも後半期と思われる遺物である。

## B 溝(図IV-28)

溝N-18は、一部未調査で残された草地N-19や水田N-15・水田N-18の間にあり、検出されたのは全長約19m、幅約1.5mである。落込N-3・落込N-4・落込N-5に溜められた水を下流に流す水路である。

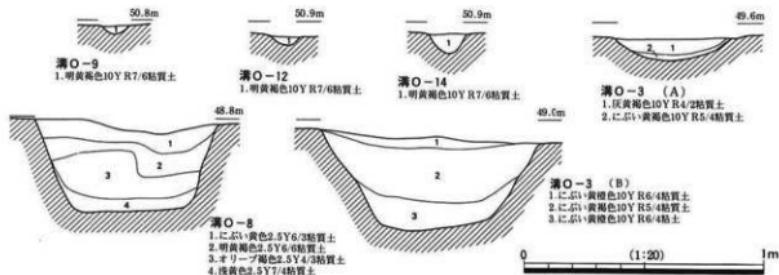


図 IV-29 O地区中世溝断面図

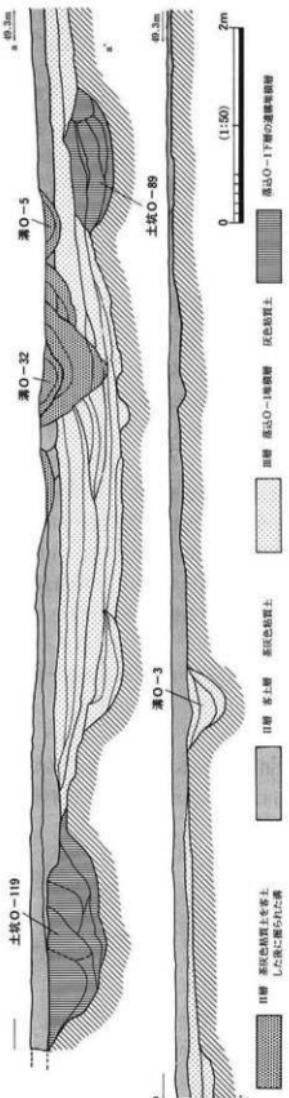


図 IV-30 O地区落込堆積層層序図

る。落込N-1・落込N-2と落込N-3・落込N-4・落込N-5の両時期に使用されたらしい。

#### C 土坑(図IV-28)

落込N-3・落込N-4・落込N-5の堆積層の下層や凹地状地形の緩やかな斜面の西側に土坑がいくつか存在している。これらの土坑から遺物は全く出土しない。また性格がはっきりしている遺構もない。これらの遺構の上層に近世の落込N-6の堆積層が被る。

#### (2) O地区

##### A 落込(図IV-30, 39、写IV-11-2)

凹地状地形O-2にある落込O-1は、現況では水田O-9、畑O-11・畑O-12、草地O-10付近に相当し、北側に開く窪んだ地形であったと考えられる。ある時期に、水田O-9の南端付近の窪みが深くなっている部分に堤状構造を設け、溝O-6から流れ込む地下水、雨水を上流の南側に溜めていたようである。堤を設けてから、この上流側に粘質土層が堆積している。層序は、下層のⅢ層が灰色粘質土層、上層のⅡ層が茶灰色粘質土層である。落込の堆積層は、図IV-30に示すように薄く2~3cmごとに堆積している。堆積層が常に変化している事からみて、滯水する事は少なかったのかもしれない。この点、N地区の落込とは異なった様相を示している。堤状構造は、後に溝が掘られてほとんど破壊されているため構造は不明である。落込O-1に溜められた農業用水は、落込北側の水田O-9の東西両側の少し小高い部分に溝(溝O-18・溝O-19)を掘ることにより、下流に導かれていたようである。また、西側に通された溝は、調査区端でさらに分流させられている。これらの溝により、北側の中位段丘上に既に開発されていた水田へ導水していたと考えられる。

なお、これらの落込としている小溜め池は、後に周囲の水利環境が整備されてくるに従って不要となり、機能を失って埋没する。そして、上流から農業用水を流してくるための溝が必要となり、落込が埋没した跡に新たに溝を掘っている。

落込O-1から瓦質羽釜が出土している。これらは東に位置する日置荘集落との関わりが考えられる遺物である。

##### B 溝(図IV-29, 30、写IV-11-2)

溝O-3は、落込O-1と同時期か少し古い時代に掘られていたと思われる。この溝は、小さな窪みに沿った少し小高い位置に掘られており、調査地南側の上流に湧きだした地下水

と雨水を北側に開発された水田へ導くためのものであつたらしい。溝O-3が先行して掘られた後に、その性格を受け継ぎ、発展させるという意図で落込O-1と溝O-6が整備されたと考えられよう。

落込O-1に溜められた農業用水は、先述したように溝O-18・溝O-19を経て下流に導かれていたと推測される。溝O-18・溝O-19は、断面観察からも幾度か埋没しては再び掘り直されている。埋土は灰黄色粘土層で、レンズ状に堆積している。これは流水による堆積層である。層序は上下2層に大きく分けられる。一度ほとんど埋没するまで堆積したのち、半ばまで掘り直され、その後再び埋没している。堆積作用が著しくて補修作業が追いつかなかったようである。

落込の近くから短い小溝、すなわち溝O-9～溝O-17が検出された。落込O-1がまだ小さな溜め池として機能している頃のもので、畠溝と思われる。このことから小さな畑の存在が考えられるが、他の個所では全く見られず、分布範囲は非常に狭い。

#### C 土坑（図IV-30、写IV-11-2）

落込O-1の底面の高位段丘層上面には風倒木痕や土坑が存在しており、また落込O-1が埋没した後にも再び土坑が掘られている。この事からIV調査区に数多く見られる土坑は、この落込O-1の埋没前と埋没後それぞれに掘られたものがあり、新しいものと古いものとが混在していると考えられる。O地区には土坑や風倒木痕が数多くあるが、遺物の出土しているものもなく、時期は全く分からぬ。また、性格のはっきりした土坑もない。

#### D 風倒木痕

風倒木痕の埋土は周辺と中央部で異なっている。遺構の外半分に茶黒色粘質土層があり、一方、中央には明黄褐色粘質土層がある。中央部の色調は、高位段丘層上層で土壤化した黄褐色層の色調より明るくはっきりしている。外半分の茶黒色粘質土層は、腐植土層と考えられる。風倒木痕の中央部分の土壤化は進行しておらず、風倒木痕ができるのも比較的新しい時代と考える事ができる。断面観察では、高位段丘上層は、通常は赤褐色と灰白色の互層で水平に堆積しているが、風倒木痕の中央部分の明黄褐色粘質土層では垂直方向に近い角度で堆積している。そして黄灰色粘質土層の周囲に茶黒色粘質土層が底部まで入り込んでおり、断面観察からは中央の明黄褐色粘質土層が浮いた状態に見える。

#### (3) P地区（図IV-33、写IV-11-3）

中世の石池谷は、前代までの地形を利用して水田開発に伴う水路網の整備や水田化が図られる。東側台状部に湧水源となる土坑群があり、ここから湧き出た水は溝P-3・溝P-4を通して、下流側の水田

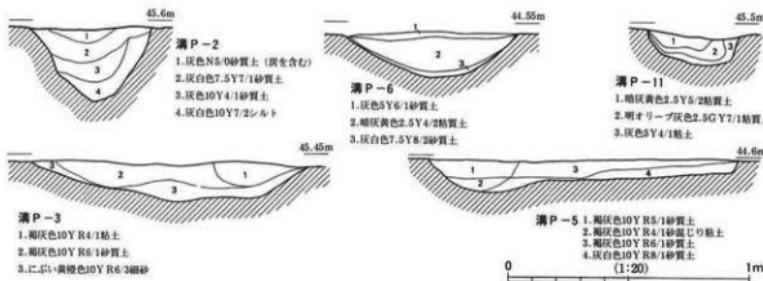


図 IV-31 P地区中世溝断面図

に導かれている。調査区内の水田には、調査区南側の旧河道から湧き出る水を溝P-1を使って導かれている。また、調査区内の湿地状の落込P-14から湧出する水は、溝P-6を流れて下流の水田に導かれている。湧水源から長い溝でも100m前後の導水距離の水利体系と言えそうである。

#### A 落込（図IV-33）

旧河道P-2の痕跡は、落込P-14として、深い個所が湿地状に残っている。この湿地状部分は湧水池として用いられていたらしい。しかし河道の浅い部分は既に埋没していたようだ。

落込P-10・落込P-11・落込P-12は、旧河道から分流した流路の窪んでいる所である。これらの窪みに地下水や湧水を溜めて、小溜め池として用いたと推測される。これらに溜められた農業用水は、P地区東側の台状部にある足跡が残っている中世の水田に導かれたと考えられる。

#### B 溝（図IV-31,33、写IV-11-3）

溝P-1は、旧河道P-1の旧流路が再度掘削されたもので、調査区南側の旧河道から湧き出た地下水を調査区内の水田まで導いていた時期もあるようだ。

溝P-2は調査区外の南側から流れ込んでいるが、3Pトレーナー中央付近で浅くなり、消える。これは後世の開発の削平を受けて溝が消えたのではないようだ。溝の断面形状がU字形から浅い形状に変わっていることから、この位置付近が終端として機能し、この終端付近に広がる周囲の水田に水を導いていたと考えられる。

溝P-2（図IV-31）は、南側の調査区外の旧河道にある湿地から湧き出た地下水を、ほとんど埋没していた旧河道P-2Aの東端付近の旧河道P-1が形成した台状部に沿って北側の水田に導くものである。この溝は、近世の小溜め池を開削した時に大きな削平を受けて寸断されたり破壊されたりしているので、溝の続き等は分からぬところが多い。

溝P-11は先端付近で二股に分岐しており、一方の溝は、北側にある足跡の密集した水田跡に導かれていたと考えられる。

#### C 土坑（図IV-32,33、写IV-11-3,4,13-1）

土坑P-36・土坑P-39・土坑P-40・土坑P-46・土坑P-52・土坑P-54・土坑P-55などは、P地区的開拓谷東側台状部の段丘崖裾部で検出された大きな土坑である。これらの土坑は、高位段丘の礫層もしくはその2次堆積した礫層を掘削しており、高位段丘礫層から湧き出た大量の地下水が溢れ出している。このことから、土坑はこれらの礫層から湧き出る地下水を得るために井戸のような性格のものとして用いられていたらしい。調査時点でも土坑底部から湧水する量は著しく、このような状況は中世からほとんど変わらなかったと考えられる。これらの土坑群から湧きだした地下水は、溝P-3・溝P-4に集められて、下流側にある調査区外の水田に導かれていたと考えられる。概要報告書での記述はこのあたりを南側から溝が流れ込む形で理解していた。この考えを改めて上記のように変更している。

土坑P-36は、現在使用中の農業用水路の下にまで広がる。形状は不定形であるが、中央付近が最も深く、段丘礫層が露出して、湧水は調査時でも激しい。ここに湧き出る地下水は溝に集められて調査地北側の小区画水田に導かれたと考えられる。この土坑と後世の東側にある幹線農業用水路は重複しており、この事から中世にはまだこの農業用水路が造られていなかった事を示している。そして現状のような水利体系もまだ形成されていなかったと考えられる（写IV-13-1）。

土坑P-30・土坑P-36・土坑P-39・土坑P-52、落込P-11・落込P-12から瓦器の椀、瓦質の小皿が出士している。これらの遺物の出土状況から判断するとN地区、O地区の高位段丘上にある凹地状地形な

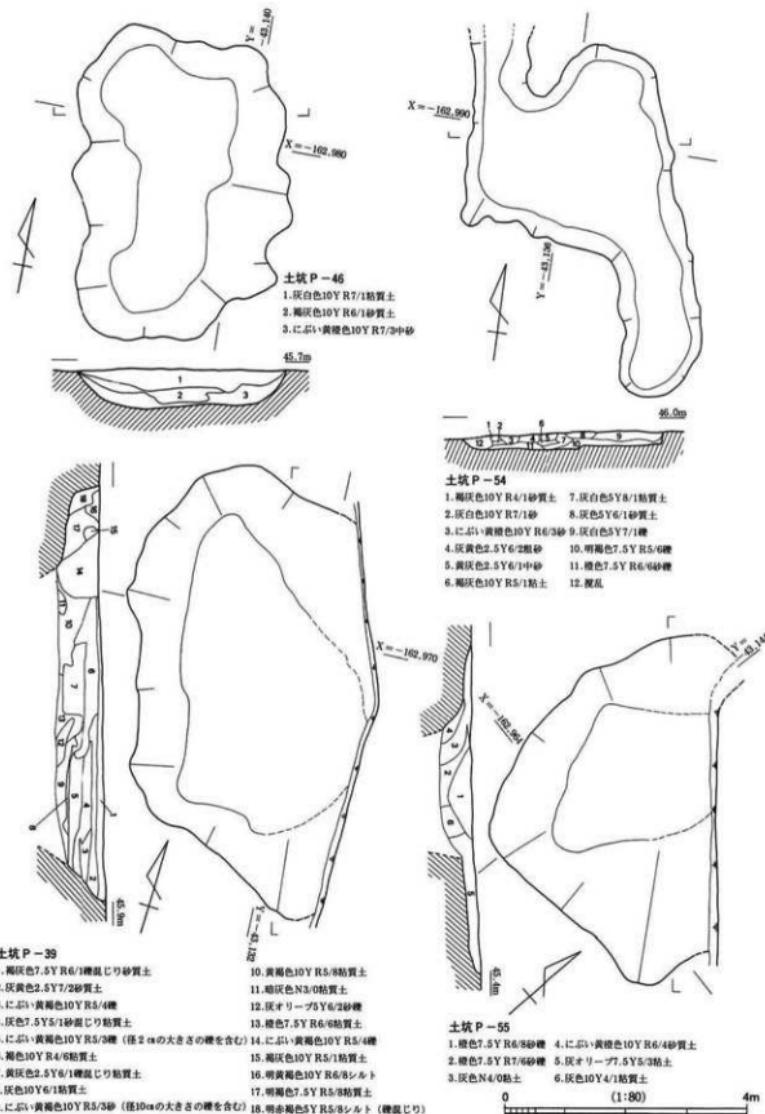


図 IV-32 P 地区中世土坑平面・断面図

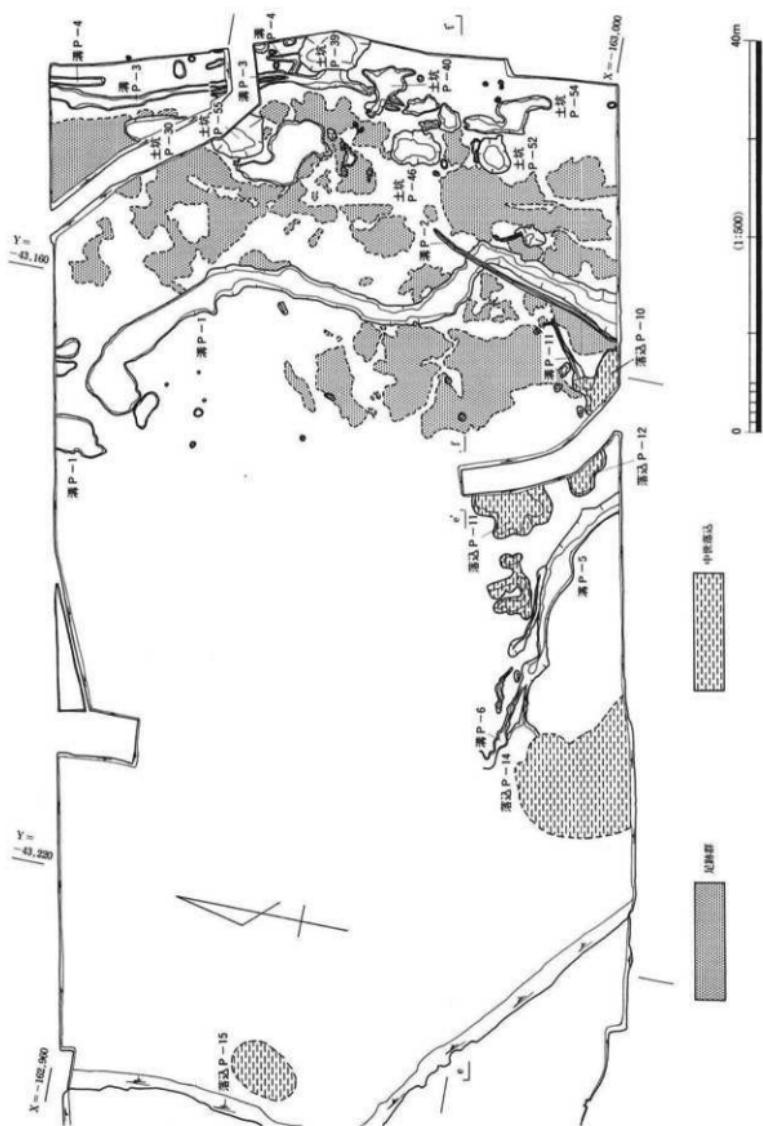


図 IV-33 P地区中世遺構図

どに掘られた落込み利用され始めたのは中世の後半期であるようだ。

P地区水田P-7の整地層下層出土遺物や、中世水田と思われる層から出土した遺物には、瓦質から須恵質に変わり始めている頃のこね鉢や須恵質の鉢、叩き目を施した瓦質甕等が含まれる。これらは、時期的には中世末から一部は近世初頭に入るかも知れないと考えられる遺物である。

水田P-8下層の中世水田層からは、7世紀代の須恵器杯身（陶邑編年III型式1段階頃）が出土している。調査当初は、この遺物がP地区的台状部の下層水田の時期を示すのではないかと考えたが、他の遺構の出土遺物や水利の問題などを考えた場合、この時期にまで遡らせる事はできないと考えられる。この遺物は、周辺に所在する他の須恵器窯の遺物と考えるのが妥当なようだ。

#### D 足跡（図IV-33、写IV-12-2,3,4,5）

足跡は、河道P-2内と開析谷東側の台状部から数多く検出された。河道P-2Cの痕跡である落込みP-14の下層付近からは、砂層で埋没した偶蹄目動物の足跡（写IV-12-2）や、人の足跡（写IV-12-3）が多数検出された（写IV-12-4）。これは、河道P-2C跡の湿地がそのまま水田に利用されていて畜耕時についたのか、あるいは牛を連れて水を飲ませたり体を洗った痕跡なのかもしれない。ともかく、偶蹄目類と人が共存している事から、水田耕作に畜力を使用していたと考えられよう。

一方、台状部では足跡が中央より少し東側に集中して認められる（写IV-12-5）。この他、台状部西側の黄色粘質土層上面にも部分的に足跡の見られる個所がある。これらの足跡は、おおむね黄灰色粘土層上面に暗灰色粘質土が落ち込んでいるので、偶蹄目のものである。足跡の分布する範囲が5m×6m程度のまとまりとなっている所が数個所検出されており、それ以外にも台状部にある河道P-1の埋没最終段階の足跡もブロックごとに集中して検出されていることから、畦畔は検出されていないものの小区画水田が存在していたと思われる。

#### （4）Q地区

Q地区では中世の遺構は全く認められない。また中世の頃の遺物も全く出土しない。この頃のQ地区は、柴刈り場としての利用はあっても、人々のあまり立ち入らない地域であったようだ。しかし、西側約500m付近の尾根筋には西高野街道が通るので、調査地と街道周辺の状況は異なる可能性がある。

## 第5節 近世の遺構

### 1. 近世前半期の遺構

近世は、前半期が水利体系や開発手法が中世の延長上にあるのに対して、後半期には新たに全く異質な水利体系が完成する。このため、近世では前半期と後半期に分けて説明を加えたい。

#### (1) N地区

近世に入るとN地区でも落込が次第に大きくなり、それだけ貯水能力が要求されるようになったのであろう。

##### A 落込（図IV-34）

落込N-1・落込N-2・落込N-3は、中世の頃にすでに水を溜めるために開削された。近世にも、この落込の持つ貯水機能は、幾度も埋没しては掘り直され、補修しながら維持され続けている。落込にも幾時期があり、それぞれの時期に伴った北側の水田に導く灌漑用の溝が新しく掘られている。そして、各時期ごとに落込の持つ意味が少しずつ変わっているようである。各時期の落込の機能も、落込周辺の開発の状況に応じて変化していると思われる。

##### a 落込N-6（図IV-34、写IV-11-1,13-2,14-2）

N地区東側の凹地状地形N-1内の落込N-3を、より範囲を広げて掘り下げたものである。貯水できる水量を増加させているらしい。それだけこの小さな溜め池に対する需要が増大しているらしい。落込の西側端、東側端は、高位段丘層が直線状に急傾斜となって落ち込んでいることから、人為的に掘り下げた事を示している。この落込N-6東側の24Nトレーニチでは、断面観察からこの落込N-6に2時期認められた。ところが、これに対応する23Nトレーニチ側での断面観察では分離できなかった。

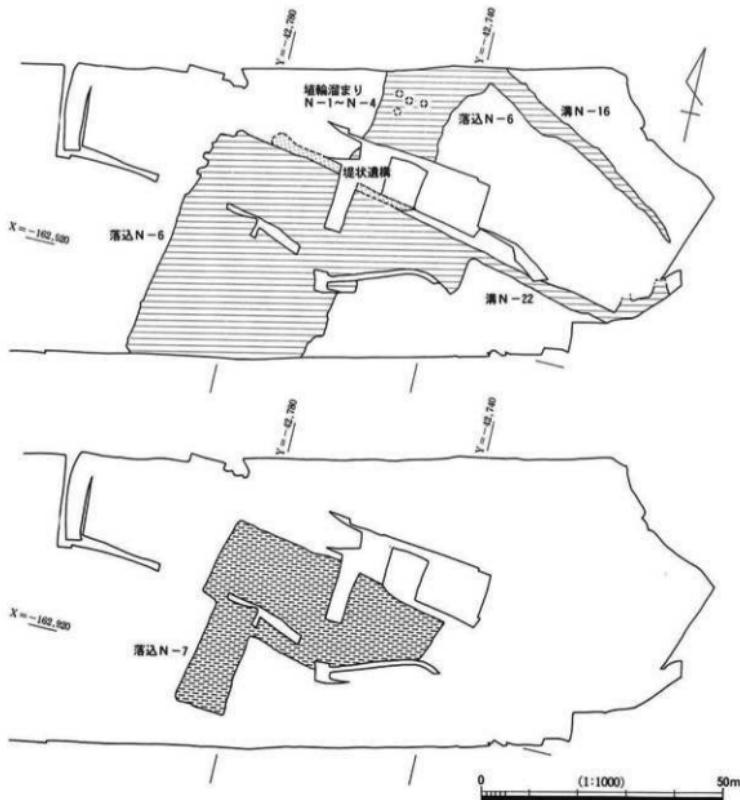
近世に入った落込N-6-1の段階で溝N-22が開削されて、剣池の農業用水が落込N-6-1に流入するようになったと考えられる。剣池に溜められていた農業用水は、溝N-22を経て落込N-6-1に一時溜められ、さらに溝N-23を経て北側に広がる水田に導かれていたと考えられる。落込N-6-1はある段階に溝N-22と共に埋没してしまう。そして、この埋没した落込N-6-1と溝N-22の上層に暗渠N-1～暗渠N-4が構築されている（写IV-14-2）。この暗渠は、大型の礫を使って断面形状を門形に組み、門形の中を水が流れやすいように造られている。おそらくこの暗渠は、溝N-23と接する付近まで延びていて、剣池から流れ出てくる埋没した溝N-22の湧き水を溝N-23に流し込んでいたと考えられる。この後に24Nトレーニチの落込N-6-1埋没部分が再び掘り直されたのが落込N-6-2である。落込N-6-2の範囲は、西側の23Nトレーニチはほぼ同じ大きさであるが、東側の24Nトレーニチでは落込N-6-1よりも大きくなり、暗渠N-2・暗渠N-4は新たに掘り直された落込N-6-2の所で切断されて、本来の溝N-23にまで続く事で地下水を直接流していた機能を失っている。すなわち、暗渠N-2・暗渠N-3・暗渠N-4は、落込N-6-1が埋没して落込N-6-2が機能するまでの間の、溜め池機能が無くなっていた期間に使用されていたと考えられる。西の調査区の23Nトレーニチでは、およそ落込N-6-1・落込N-6-2の大きさがほぼ同じで重複していたらしいので、その新旧の規模の差は分からなかった。この後、落込N-6-2も再び埋没する。この後に24Nトレーニチに暗渠N-5が構築される。同様な性格の暗渠であるが、暗渠N-1～暗渠N-4より暗渠N-5は少し新しい。そして暗渠N-2・暗渠N-3・暗渠N-4（図IV-36）は礫を門形に組み合わせて構築しているが、暗渠N-5（図IV-37）は瓦片・土器片を門形に組み合わせている部分と礫を集めている部分がある（写IV-13-3）。

## b 落込N-7 (図IV-34、写IV-13-2,14-3,15-1)

落込N-6・2が埋没した後に、部分的にその埋土を長方形に粘土採取が目的で掘り下げている。掘り下げた跡地には、約70cm間隔に低い畦畔状の高まりが残る。この高まりは、粘土を採取した時の作業単位の痕跡に非常に似ている。この掘り下げて窪んだ部分に赤褐色粘質土層を客土して再び平坦にしている写IV-14-3,15-1が、他の個所では赤褐色粘質土層が非常に薄く客土されている。

## B 溝 (図IV-35)

この頃の溝は、現代の土地区画を横切ったり、境界に沿った位置ではない個所に掘られている。そして、N・O地区では限られた範囲に溝が検出される。この事からIV調査区の高位段丘上は全面的な開発が進んでいなかった可能性が高い。



図IV-34 N地区落込平面図

a 溝N-1 (図IV-35、写IV-13-4)

N地区の4N・8Nトレンチで検出されたもので、両トレンチの間の未調査部分で直角に曲がっている。また、調査区北端部近くでT字形に東に分流している。なお、4Nトレンチ西端から約10m離れた6Nトレンチではこの溝の続きを検出できなかった（写IV-13-4）。溝の幅は幅広い個所と狭い個所があり、広い部分は深く、狭い部分は浅い。深い個所では高位段丘層の礫層に達している。この事から、この溝は自然の窪みではなく、人為的に掘削されたと考られる。この溝は、おそらく直線的に高位段丘上に水を通してN地区の北側の水田へ導くだけに掘られた灌漑用の溝とは考えないほうが良さそうである。妙

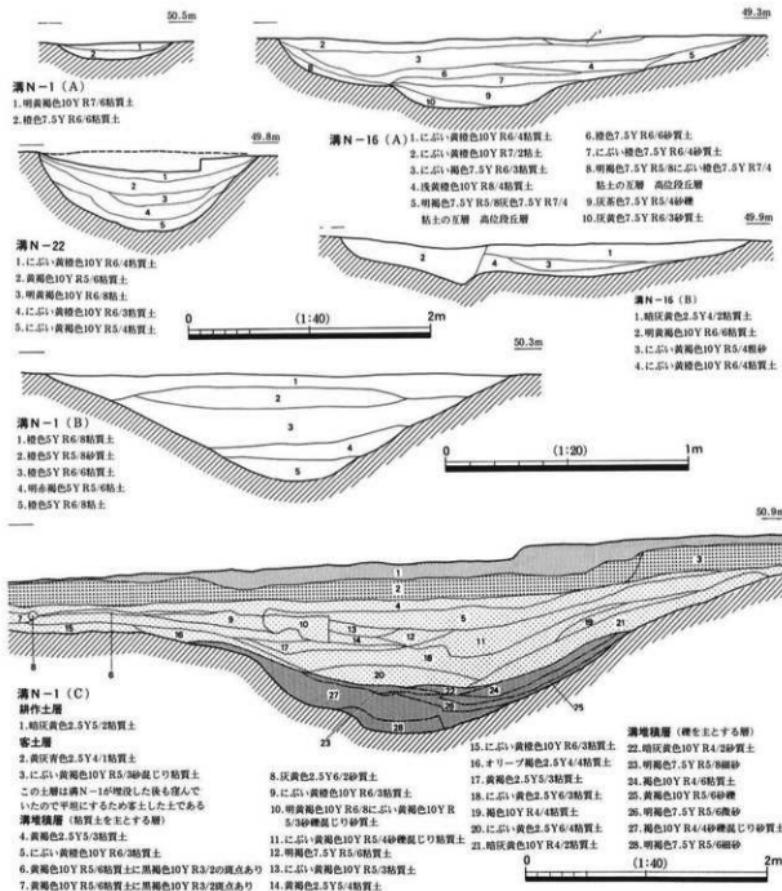


図 IV-35 N地区溝断面図

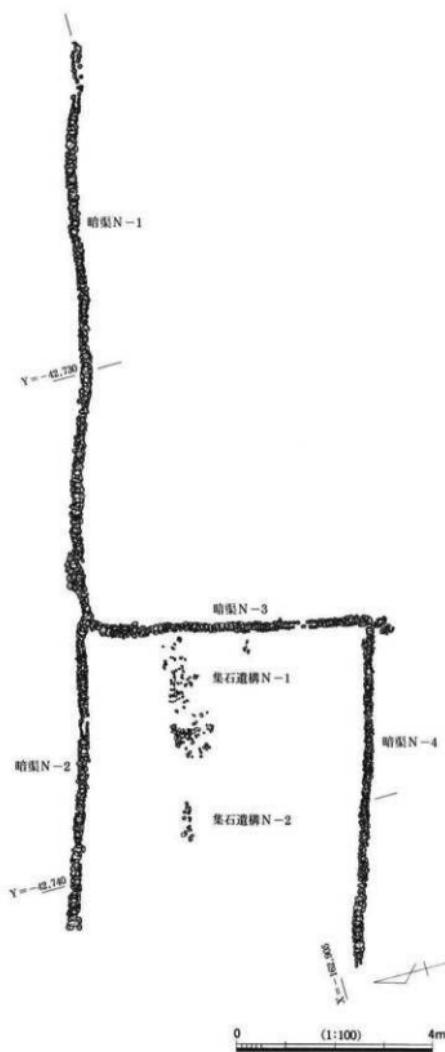
なL字状をした溝の性格は、溝の深い部分に水を溜める機能を兼ね備えているのではないかと考えられる。そして、この深い部分に雨水や地下水が貯えられ、満水となって溢れることがあれば溝N-1の東側の幅が狭くて浅い個所を経て、さらに東側にある落込N-6に流れ込むように考えられていたのではないかと思われる。落込N-6は、南側に広がる高位段丘層のより高所から湧き出る地下水や雨水を集めて貯えると共に、溝N-1に余剰の水がある場合には深い部分に溜められた農業用水を必要に応じて東側の落込に流し込んでいる。

そして水枯れの季節には農業用水を溝N-25に流して調査区北側の下流側に広がる中位段丘上の水田を潤していたと考えられる。

溝N-16（図IV-35）は、剣池に貯えられた農業用水を北側の中位段丘上の水田に落込を経る事なく導くためのもので、剣池の西端の堤が低くなった個所から取水していたようだ。埋土の中から瓦器類の破片が出でている。高台は比較的平坦な低いものである。溝N-22（図IV-35）は、剣池の西端の低くなった堤から農業用水を落込N-6に流し込む働きをする溝である。

### C 土坑

高位段丘上に数多く見られる土坑は、P地区の開析谷やN・O地区的凹地状地形内に見られるものとは違った性格であるものが多い。大きさ、形状、深さとも一定しておらず、長



図IV-36 N地区暗渠・集石造構平面図

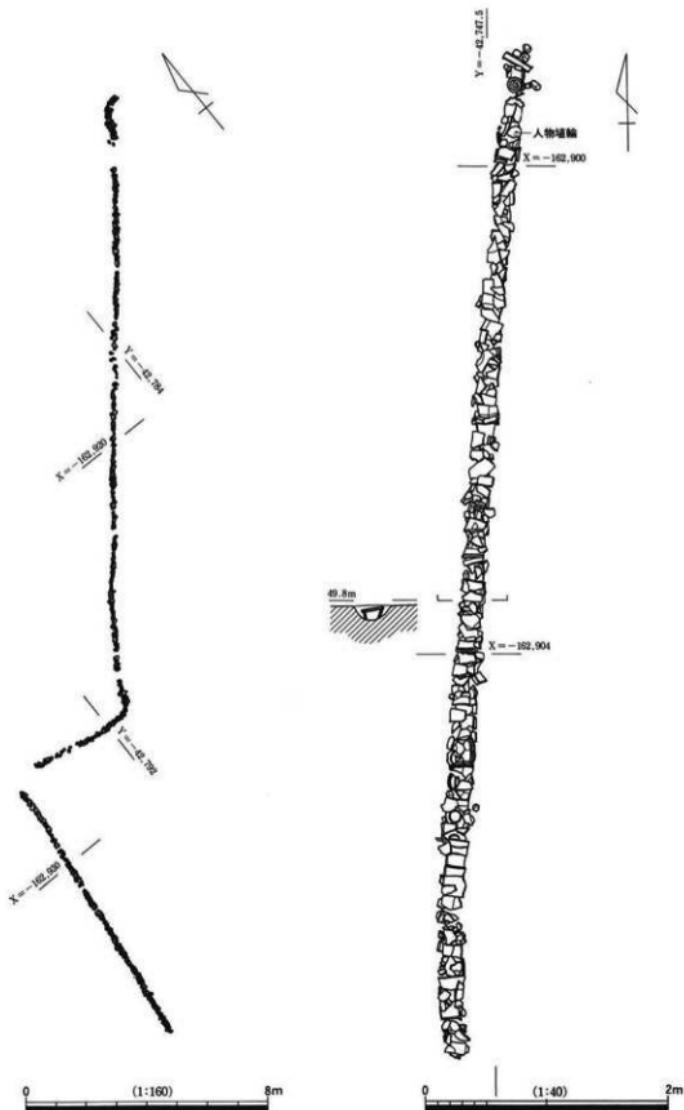


図 IV-37 N地区石列N-1・暗渠N-5平面図

軸方向や土坑底部の形状も定まっていない。埋土は黒茶色系の黒い色調を呈すものから、黄灰色を呈して高位段丘最上層とほとんど色調が違わない土坑までさまざまな色調を呈している。これらの土坑のうち、暗い色調の土坑は深いものが多く、底面も丸みを持つ。埋土の色調は、断面図では分層して各層ごとに土色表示しているが、実際には漸移的に変化しているため明瞭に分層出来ない場合が多い。また、高位段丘層最上層と土坑の埋土との境も、同様に非常に識別し難い。この土層の境目の区別の難しさが高位段丘上に群在する土坑群の際立った特徴である。それと共に、これらの土坑内から遺物がほとんど出土しないのも特徴である。遺物が出土したのは、14Nトレンチ風倒木痕N-7から須恵器片が1片と、O地区の土坑O-480から土師器小皿のみである。なお、この風倒木痕N-7は、埋土が灰黄褐色粘土層であり、高位段丘上に数多く見られる他の土坑とは異なっている。

#### a 土坑N-217

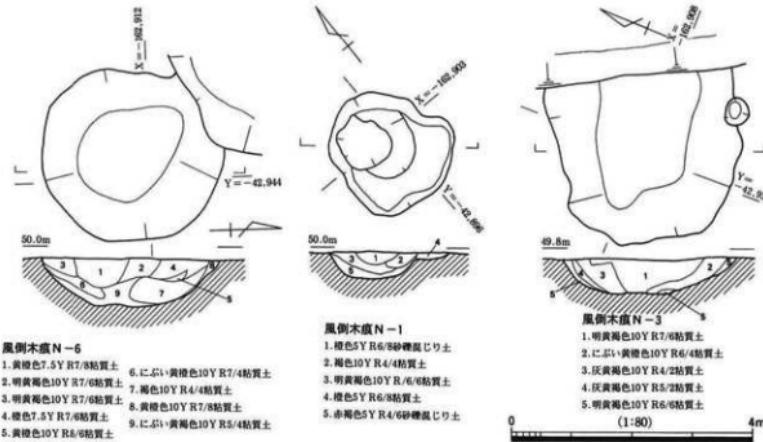
土坑N-217から赤変した粘土塊が出土したが、鉱滓等の破片は全く出土していない。

#### D 石列（図IV-37,45）

N地区では、石を用いた石列や暗渠が検出されている。石列とは、大きな疊を単に並べただけのもので、水を導く目的の無いものをいう。暗渠とは、水を導く事を意識しているもので、石を門形に組んで並べた構造のものや、溝の中に小石と粗砂がぎっしりと詰められているものをいう。石列はN地区にのみ存在している。

#### a 石列N-1（図IV-37,45、写IV-14-3）

石列N-1は、18Nトレンチの西側で2回折れ曲がって14Nトレンチに続き、調査した総延長が30mを越える長いものである。北端は近世溝N-26で、それ以上延びていない。南側は調査区外に延びている。落込N-7の掘削の際に、この石列のある両側約20cmは削り取っていない。また、落込N-7を埋める赤褐色粘土層もこの部分を覆っていない。石列は、長さ約30cm程の大型の礫を上下に重なることなく石列の主軸と直交方向に横に並べている。幅が足りない場合は小さな疊を足して幅30cmに仕上げており、



図IV-38 N地区風倒木痕平面・断面図

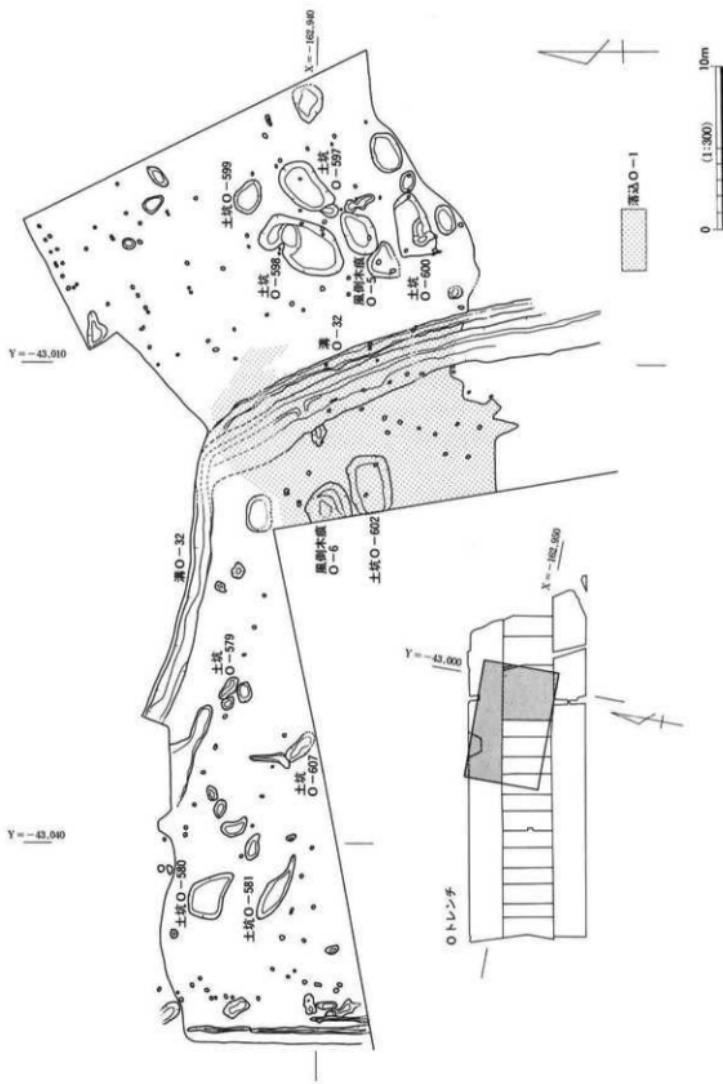


図 IV-39 O 地区近世重複部第 1 遺構面平面図

一定幅の石の列を作る意図が感じられる。水を通す意識はみられないで、何らかの区画としての機能を持っていたと考えられる。そして落込N-7の南側の1辺と石列の1辺が全く平行である（写IV-14-3）。しかし現状の土地区画とは一致していない。

#### E 暗渠（図IV-36,37、写IV-14-2）

暗渠には、大型礫・陶磁器片・埴輪片を門形に組んで内部に地下水が通り良い構造にしているものや、溝の中に石と砂を数多く埋めてやはり水を通りやすくしたものがある。いずれも地下に埋設されている事を特徴としている。

##### a 暗渠N-1～暗渠N-4（図IV-36、写IV-14-2）

24Nトレチナがあり、落込N-6-1が埋没した後に、落込を掘り込んで暗渠を造っている。溝N-22の東側から1条の暗渠N-1が西に延び、途中から南に直角に枝別れするが、暗渠N-1から直線で延びている方が暗渠N-2、枝分かれする方が暗渠N-3である。さらに暗渠N-3は分岐点から約6m南で90°西に折れ曲がるが、それを暗渠N-4としている。これらの暗渠は、大型の礫を門形に組んで、内部に地下水を通して意識が感じられるものである。暗渠N-2～暗渠N-4に埋まされた中に2～10cmの小石からなる集石遺構N-1・集石遺構N-2がある。暗渠と集石遺構にどのような関連があるのか分からぬが、何らかの意味を持たせていた事も考えられる。

##### b 暗渠N-5（図IV-37、写IV-13-3）

落込N-6-1が一旦埋没した後、再び掘り下げられ落込N-6-2が造られる。この時に暗渠N-2と暗渠N-4は再掘削部分から西側へは延びていない。落込N-6-2の再掘削部分で切断されたと考えられる。暗渠N-5は落込N-6-2が埋没した後に造られたものである。この暗渠には小石を集めた部分と、瓦片や伊万里焼・備前焼・湊焼等の陶磁器片、円筒埴輪片を組んだ部分がある。北側では礫の代わりに人物埴輪の顔の部分を使用して門形に組んでいる個所もある。しかし、この暗渠の南側は24Nトレチナ内で終わっており、北側は未調査区に入っている。

暗渠N-5から出土した遺物には瓦質甕・瓦・すり鉢・埴輪等がある。瓦は裏面に離れ砂を僅かに使用している。すり鉢もすり目が全面に見られるのではなく、心持ち間隔が開く。これらは落込N-6-2が埋没し、落込N-7が再掘削されるまでの一時期を示している。また埴輪片も暗渠内に栗石代わりに使用されている。これらの埴輪の中に人物埴輪の顔の破片、低位置凸帯埴輪等も見られる。しかし、P地区の埴輪窯出土埴輪とは異なり、凸帯の貼り付け時に割り付けたと思われる方形刺突や、細かなハケメが見られる。これらの埴輪は、P地区の埴輪窯から約400m近く離れていることから、そこから運んだとは考え難い。そのため、暗渠N-5の近くに未発見の埴輪窯があって、そこから採取された埴輪片と考えられる。埴輪の時期は、埴輪窯P-1に先行するか、もしくは一時期併行するくらいのものである。

#### F 売輪溜まり

##### a 売輪溜まりN-1～売輪溜まりN-4（図IV-34,45）

22Nトレチナ内の落込N-6北側の堆積層中に埴輪溜まりが4個所ある。これらは直径30cm程の範囲に3～7cm大の埴輪片が集中している。埴輪は非常に磨耗しているが互いに接合する資料があり、同一個体が細分したものもあるようだ。これらの埴輪の中には低位置凸帯埴輪や朝顔型埴輪も混じっている。

#### G 集石遺構

##### a 集石遺構N-1・集石遺構N-2（図IV-36、写IV-14-2）

暗渠N-2～暗渠N-4に埋まされた中の少し東側に寄った位置に、2～3cmの小石が重ならない程度に

平坦に集められている。集石遺構は2個所あり、集石遺構N-1が大きく、集石遺構N-2が小さい。この遺構がどのような目的で造られたか推測する手だてはなかった。

## H 堤状遺構

### a. 堤状遺構N-1（図IV-34）

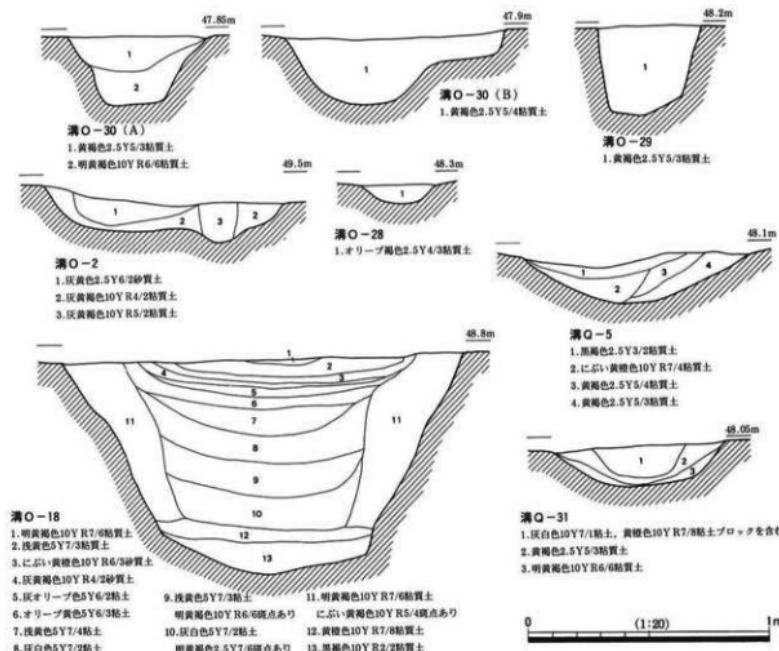
この遺構は23Nトレンチ北東隅と24Nトレンチ北西隅を調査中にその一部を検出したもので、数枚の薄い砂質土層で構成されている。調査当初はこの土層が何か分からなかつたが、整理段階で堤の役割を果たしていたのではないかと考えた。それは土質が落込の堆積層とは違っている事と、堆積層が薄く数枚で構成されているからである。しかし壁面図から復元しても堤状遺構はあまり盛り上がりせず、埋設された埴も無く、調査範囲の一部分が調査できただけであるので、この遺構の性格は推測である。

### (2) O地区

凹地状地形O-2内に掘削された落込O-1は、近世前半期にII層である茶灰色粘質土で客土されて、この上面が重複部第1遺構面となる。

### A 落込

凹地状地形O-2内に形成された落込O-1は、近世の前半期に最終的に埋没している。その後、茶灰色粘質土層が客土されて、畑地として用いられているようだ。この後に落込中央に溝が掘られる。



図IV-40 中・近世溝断面図

この頃に從来とは逆に、水を導く溝をかつては溜めていた跡に掘っている。落込O-1内に見られる土坑・風倒木痕の切り合いからすると、落込が埋没するまでの窪んだ段階、落込が埋没した後の段階にもそれぞれ風倒木痕や土坑が形成される状況が生じていたらしい事も推測される。

#### B 溝(図IV-39,40)

落込O-1が埋没して使用されなくなつてから、落込O-1を覆うより広い範囲にII層の茶灰色粘質土層が客土される。地盤が少し高くなり、安定した土地となる。この後に溝O-32が掘られて、南側の標高の高い個所からの雨水や地下水を下流に導いている。溝O-32は、凹地状地形O-2内の水田O-9を越えて直進せず、直前で西に曲がる。これは、すでに埋没していた溝O-19と重複しており、同じ場所に再び掘り直されたことになる。この時溝O-5・溝O-6・溝O-18・溝O-19などの溝は既に埋没している。新しく掘り直されたのが溝O-32である。溝O-32は調査区の北端で下層の溝のように東西に分岐せずに西側へ折れ曲がるだけである。溝O-19と溝O-32は一部重複するが調査区北端付近では溝O-32は経路を変えて北西に向き、水田O-1の縁辺を北へ流れているらしい。

#### C 土坑(写IV-16-2,4)

O地区も数多くの土坑がある。形態、深さ、埋土等N地区同様で、不定形な形と、層序も漸移的である事を基本としている。これらの土坑の中には風倒木痕ではないかと思われるものがいくつか認められるが、確実に風倒木痕と判断できるもののみ風倒木痕と表示している。

O地区西側にある土坑O-480は不定形であるが、深い部分も折れ曲がっている。ここから近世と思われる土師器小皿が出土している。また、もう少し西に下った土坑からは埴輪片が出土している。50トレンチ西端にある土坑O-511・土坑O-522などからも埴輪片が少量出土している。この事から石池谷東側の段丘上にも埴輪窯が造られていた可能性がある。

#### D 風倒木痕(図IV-41、写IV-15-3,16-1)

風倒木痕の埋土は、土坑のうちで大型で深いものに類似している。しかし形態は土坑のように不定形ではなく、円形かそれに近い形を示すのが特徴である。深さは40~60cmを測る。埋土は、赤褐色と灰白色の薄い互層からなる高位段丘最上層が、外周と下層を黒茶色系の粘質土に囲まれて、言わば浮いたような状態になっている(写IV-15-3)。正常な高位段丘の堆積層の場合には、赤褐色と灰白色の薄い高位段丘最上層は水平に近い堆積を示している。しかし、風倒木痕の中に浮いている高位段丘最上層の赤褐色と灰白色の互層は水平ではなく、垂直に近い角度で堆積している例が多い。この事は本来高位段丘層が水平に近い傾斜で堆積していたものが、何らかの2次的作用を受けて垂直に堆積したようになったと考えられる。これは次のような経過が考えられるだろう。大木が倒れた時に木の根とともに一緒にくついた状態で水平な堆積を示していた高位段丘層が持ち上がる。この時に水平堆積層が垂直に近い角度で木の根に張り付いた状態になっている。この後大木が倒れて根が持ち上がって窪んだ部分に、周囲に堆積していた黒茶色系の腐植土を主とする土壤層が入り込んで堆積する。この後時間の経過とともに倒れた大木が朽ち果てて、木の根に付着していた高位段丘層の赤褐色と灰白色の互層の土の塊が再び黒茶色粘質土系の堆積層中に落下する。この後の長い時間を経ているうちに全てのすき間に周囲の土壤層が入り込んで完全に埋没してゆく。このような経過を経た個所を現在発掘調査すると、大きな黒茶色系の土坑が見えて、この中央に周囲の黒茶色系の土質とは異なった明るい土壤化していない赤褐色と灰白色の粘土の互層部分が浮き上がって見える。そして断面観察では中央の赤褐色と灰褐色の互層部分が垂直方向に堆積しているのが見える。これが風倒木痕と呼ばれるものの形成過程であり、検出状況と考えら

れる。

このような風倒木痕の成立過程については、次のようなことが考えられよう。風倒木痕が形成されることとは、大型の樹木が生育していたらしいことと、地表面には落葉等からなる腐植土層が厚く形成されていたことが推測される。ところが現在ではこの調査地周辺に大木はほとんど残っていない。江戸時代の文献資料でも、草の生い茂った荒地として表現されているけれども、それより昔の時代にはこのような我々が知りえるような環境とは全く違った景観を見ていた時代があるようだ。このような風倒木痕の様相はN地区も同様である。しかし、Q地区には風倒木痕は見られなかった。N・O・Q地区ごとに少しづつ植生景観が異なっていたらしい。

また、各調査区に見られる土坑については、同様に形成された可能性もあるが、樹木が倒れたのではなく、自然に朽ち果てた痕に周囲の腐植土層が入り込んで堆積したのではないかと考えている。

風倒木痕はN地区・O地区とも集中して存在している事から、大きな木が生育していた個所は限られていた可能性がある。他の個所ではやはり樹木は生育していたが、風倒木痕を形成するような大型樹木ではなかったと考えられる。

風倒木痕の中央に見える高位段丘層の色調は、周囲の土壤化した高位段丘最上層のくすんだ黄色ではなく、澄んだ黄色である。このことから推測すると、風倒木痕が形成されて堆積したドーナツ型の中央部の高位段丘層最上層は土壤化が進行していないことから、比較的新しい時期に風倒木痕が形成されたと考えることができる。ただこの時期については分からぬ。

### (3) P地区

この時期には依然として落込や溜め池が残り、小規模な灌漑による水田經營が行われているようである。

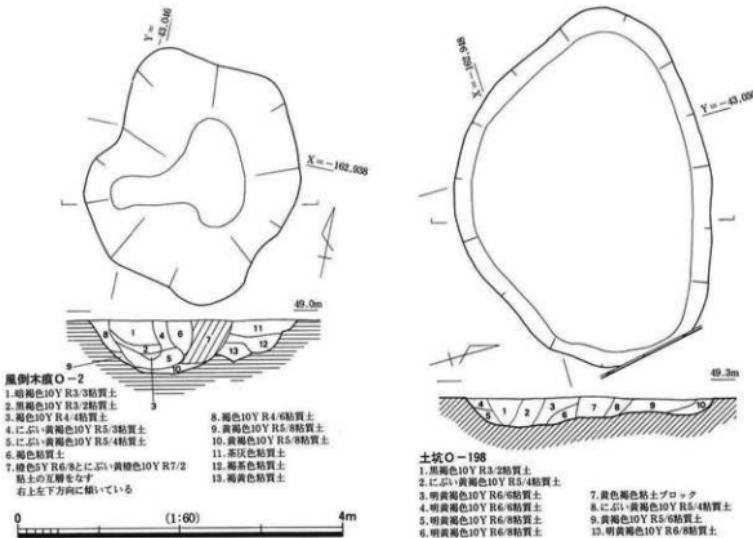


図 IV-41 O地区風倒木痕・土坑平面・断面図

## A 落込

### a 落込P-20 (図IV-49、写IV-17-1)

P地区西側の水田P-1の範囲より少し広い個所が掘り下げられて、落込P-20の小溜め池が造られる。溝P-36から流入する開析谷の湧水を貯水している（写IV-17-1）。この掘削の際に、埴輪窯P-1燃焼部・焚き口・埴輪窯灰原P-1、須恵器窯P-1燃焼部・焚き口・須恵器窯灰原P-1を大きく削り取っている。削り取られた埴輪・須恵器片の混じった土は、周辺の他の水田の床土に敷かれて用いられている。このため、周辺の水田の床土から大量の須恵器、埴輪が出土している。

### b 落込P-22・落込P-23 (図IV-49)

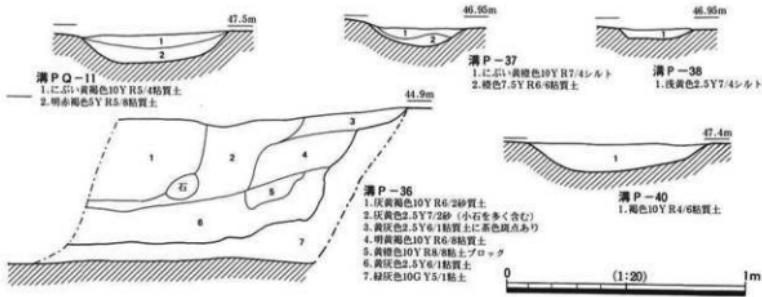
P地区台状部東側の中世土坑群が分布する範囲には近世前期には水田化しておらず、地下水の湧き出る湿潤地のままである。この部分には畝溝が見られず、埋めて開発されたのは近世も後期頃と思われる。また中世に地下水の湧水源として用いられていた土坑が集中する水田P-7・水田P-8の東側半分は水田化されず、落込P-23が依然として残っている。そのため、まだ埋められずに湧水機能を維持していた可能性がある。また河道P-1が埋没した跡地も湧水が著しく、河道P-1の窪みを中心にして上層に落込P-22が広がる。これらの結果から推測すると近世前半期の状況は現在の水田区画に近い部分もあるが、まだまだ水田として用いられない落込個所も多く存在していたと考えられる。

## B 溝 (図IV-42、写IV-17-1)

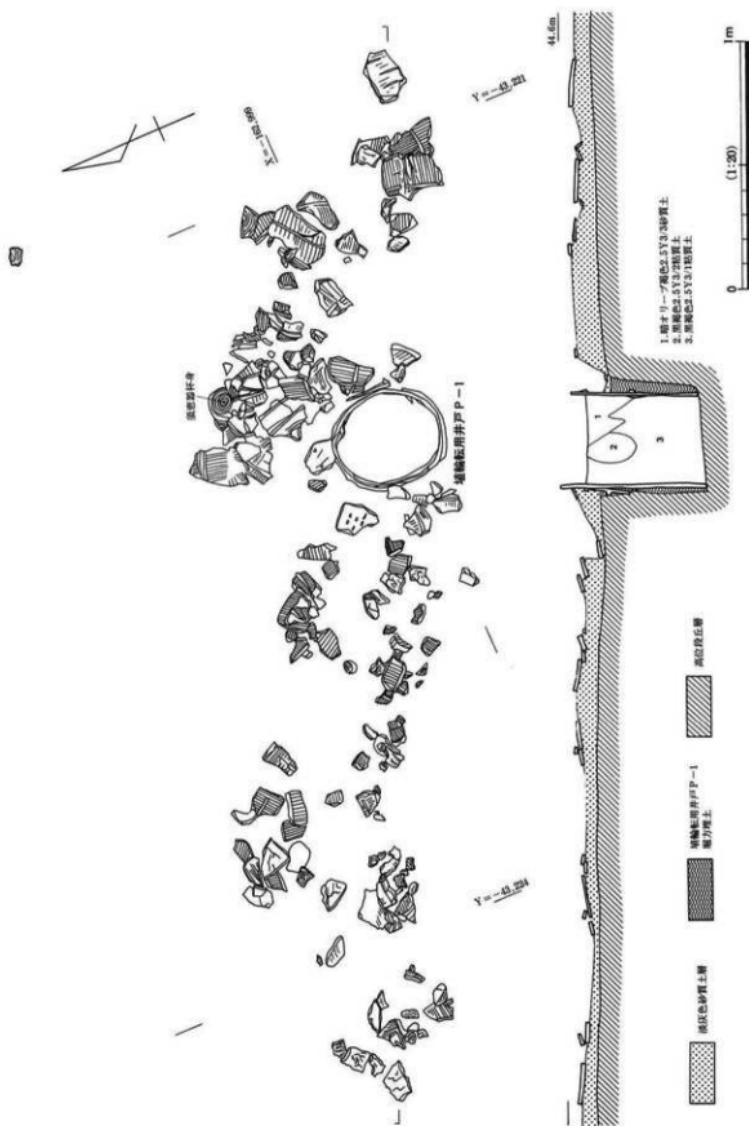
農業用水網としては、溝P-36が調査地南側の旧河道P-2に湧き出る地下水や開析谷の雨水を集めて落込P-20に注ぎ込んでいる。落込P-20に一時期溜められた農業用水は、調査地の北側に広がる下流の水田に導かれる。水田P-9の東半分にも溝がいくつかあり、上流に湧き出た地下水や東側の高位段丘崖から湧き出る地下水を集めて下流の水田に導いていたようである。また埴輪転用井戸も、近世の一時期旧河道付近に湧く地下水を得るために簡単な手法として用いられたらしい。この時代にはまだ石池も築造されておらず、大規模な農業用灌漑用水溝等が造られていない。水田区画は中世に比べて大規模化したものの、水利体系は地下水を水源とするのと旧河道の湧水を小さな溜め池に集めて利用していたような状況で、中世とさほど変わらない状態であったと推測される。そして、開析谷内には水田化していない個所も見受けられる。

## C 水田(図IV-43、写IV-17-2)

P地区東側の台状部では中世水田の上層に茶褐色粘質土をかなり厚く盛り上げて床土を造り、中世水



図IV-42 P地区近世溝断面図



図IV-43 塗輪転用井戸P-1・塗輪溜まりP-1平面・断面図

田より広い区画の水田を造る。P地区西側の水田P-2・水田P-3では淡灰色砂質土が客土され、下層の湿った土壌の上に敷きならしてかさ上げを行い、床土としている。この土層中から埴輪溜まりP-1(図IV-43)としている大量の埴輪片が出土する(写IV-17-2)。

この土層の上層に褐色疊混じり粘土層、褐灰色粘質土層が客土される。ますますかさ上げされて排水しやすい水田に造り変えている。水田区画は中世の水田よりひとまわり大きく、耕地面積の広い区画に造り直しているようである。

#### D 井戸

##### a 墓輪転用井戸P-1 (図IV-43、写IV-17-3)

VI層の高位段丘層の2次堆積層に穴を掘り込んでいる。旧河道P-2Cの河岸にあたる位置で、旧河道に落ちはじめている位置である。この頃には、既に河道は暗灰色砂層で埋没している。河跡から水を得ることは不可能であるため、河岸に埴輪転用井戸を掘ったと考えられる。この旧河道の河岸に直径45cm程の穴を開けて円筒埴輪を立てている。円筒埴輪は直径40cm程で大きく、基底部から凸帯2段分が残っている。透かし穴には周囲の砂が入らないように、円筒埴輪片を当てて塞いでいる。掘方埋土は井筒内埋土と同じ土質であることから、使用当時は掘方も埋没しておらず、使用中に埋没していったと思われる。埴輪転用井戸P-1の周囲には、埴輪溜まりの埴輪片が大量に出土しているが、井筒転用埴輪と埴輪溜まり埴輪片とは接合せず、両者は別物と考えられる。

#### E 墓輪溜まり

##### a 墓輪溜まりP-1 (図IV-43、写IV-17-2)

埴輪溜まりP-1の埴輪片は、埴輪転用井戸P-1の周囲に堆積している近世整地層である淡灰色砂質土層に含まれ、一見埴輪転用井戸P-1と同一遺構のような形で出土している。しかし、この両者は成立過程が全く異なると思われ、区別して考えるべきである。

埴輪溜まりの淡灰色砂質土層と井筒掘方埋土との関係は、土層観察断面を残した位置では切り合いが残っておらず直接的には分からず(図IV-43、写IV-17-2)。しかし、調査時に埴輪溜まりの中に埴輪転用井戸P-1の掘方に気が付かなかったことから、恐らくは埴輪転用井戸P-1が廃絶した後に、埴輪窯灰原周辺の埴輪を大量に含む淡灰色砂質土が客土されたと考えられる。そのため、両者が造られた時間には近世の間でも少しの差が存在していたと考えたい。なお、この土層からは相当量の埴輪破片が出土しており、また須恵器杯身や瓦器楕破片も混じって出土している。

#### (4) Q地区

Q地区では近世前半期の遺構は見られない。近世後半期に至って初めて遺構が出現する。

## 2. 近世後半期の遺構

この時期にはP地区を中心として大規模な耕地整理と水利体系の改変が行われて、従来の雨水や地下水に依存した水利体系から狭山池を基幹とした水利体系に組み込まれて、安定した農業用水を得ることのできる状況が生み出されてきた。この影響は高位段丘上のN・O・Q地区にも現れて、IV調査区全体の開発が急速に進む。

### (1) N地区

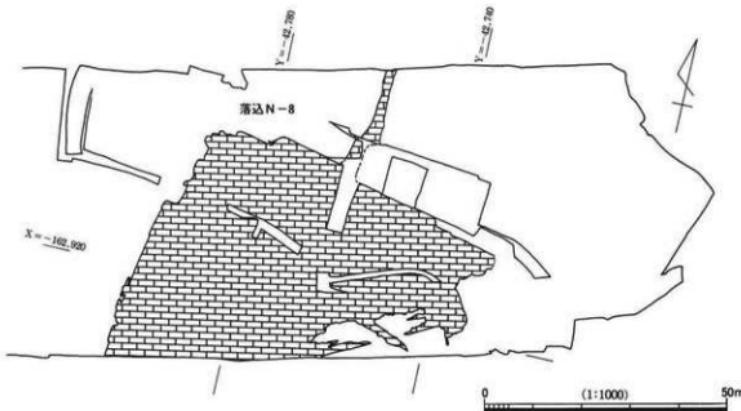
#### A 落込

落込N-8は近世後半に相当する。落込N-8が埋没した後に、現在の土地区画に分割されて、この土地区画を単位に水田や畠を営むようになる。

##### a 落込N-8(図IV-44)

落込N-7が埋められて平坦になった後に、凹地状地形N-1の依然として少し窪んでいた部分が次第に埋没していく。しかし、この時期の堆積層は、従来の落込が溜め池の底部に堆積する性格の土層で埋没していたのとは少し異なった堆積土層である。わずかに窪んでいる浅い凹地状地形の中の北側の堰状遺構の高さまで、自然堆積しているようだ。この堆積層によって暗渠N-5・石列N-1がそれぞれ埋没してゆく。これが落込N-8である。この落込N-8の埋没をもって、この凹地状地形の溜め池と窪みの歴史は終了する。この後は現在の土地区画に分割されているようである。この頃から周辺の土地は開発の対象として意識され、財産化しているようである。荒れ地で溜め池でしか利用価値が無かった土地が、農耕地として評価されるような経済的な変化が起き始めたと考えるべきであろう。そして、窪みの中の最も低い個所に溝が掘られて、用水路が造られる。すなわち、従来のような個々の小さな溜め池を使って農業用水を確保する必要が少くなり、狭山池を中心とした広大な灌漑用水網が高位段丘上面にも及んだための環境変化と考えられる。

落込N-8が埋没して以降、従来は落込に貯えていた上流から流れて来る貴重な雨水や地下水は、小さな落込に貯水するのではなくて、狭山池から続く幹線農業用水に連なった大きな溜め池に流し込むよ



図IV-44 N地区落込N-8平面図

うな変化が現れたと考えられる。意識して各所に設けられた小さな落込に貯水する必要が無くなり、むしろ流して大きな溜め池に貯水する方法が重要視されて、そのための排水溝が土地区画の境に掘られるに至ったと考えられる。

### B 溝

大きな溝が消失し、区画や灌漑用の溝が落込の埋没した跡の最も深かった個所に掘られている。

#### a 溝N-9・溝N-11・溝N-12（図IV-47）

現在の土地区画に沿って掘られている排水溝である。これらの溝内から染付が出土している。

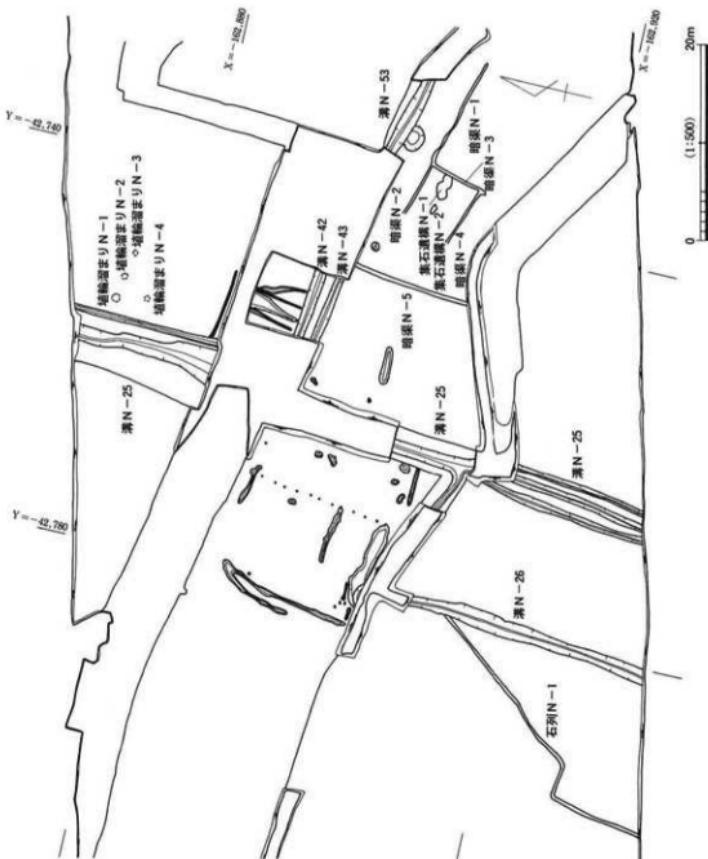


図 IV-45 N 地区落込N-8 上面遺構平面図

b 溝N-25・溝N-26 (図IV-45,47)

周辺の農業用水網も整備されて、高位段丘のより高い所にも溜め池と溝が掘られて体系化される。それとともに、凹地状地形の最も寝んでいた個所が幾時期かを経て埋没し、この上層に新たな溝が掘られて下流へ農業用水を導く経路となっている。

c 溝N-42・溝N-43・溝N-53 (図IV-45,47)

井戸N-25・井戸N-26で汲み上げられた地下水は、新たに掘られた溝N-42・溝N-43・溝N-53を通じて至近距離の周辺の田に給水されるとともに、溝N-25に注ぎ込まれて、下流への農業用水を補う役割も僅かながら果たしていると考えられる。

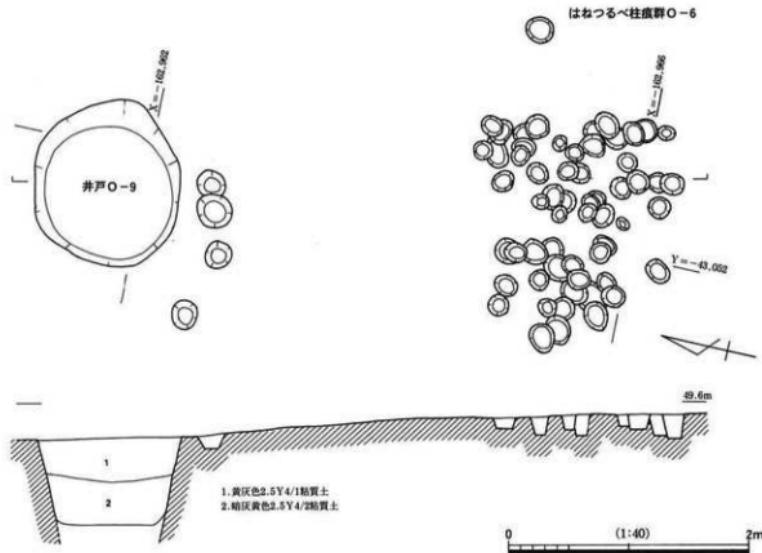
d 溝N-45・溝N-46・溝N-54 (図IV-47)

井戸N-26から汲み上げられた地下水は、溝N-46を経て、溝N-45・溝N-54を通じて、隣接する畑に給水される。同様な例がいくつか見られる。井戸は新しい農業用水網の完成によって廃絶したのではなく、隣接する耕作地を潤す場合に用いられ、機能し続けているようである。

一方、N地区の中で高位段丘層がより高くなっている西部では、溝N-1を除くと他の溝は浅く狭い。これらの溝は区画溝か、現在の農業用水路際から溢れる水を排水するための溝に限られている。すなわち、N地区西部では近世後半期の農業用水網が整備されてから、初めて耕作地として開発されたと考える。

C 井戸 (図IV-51)

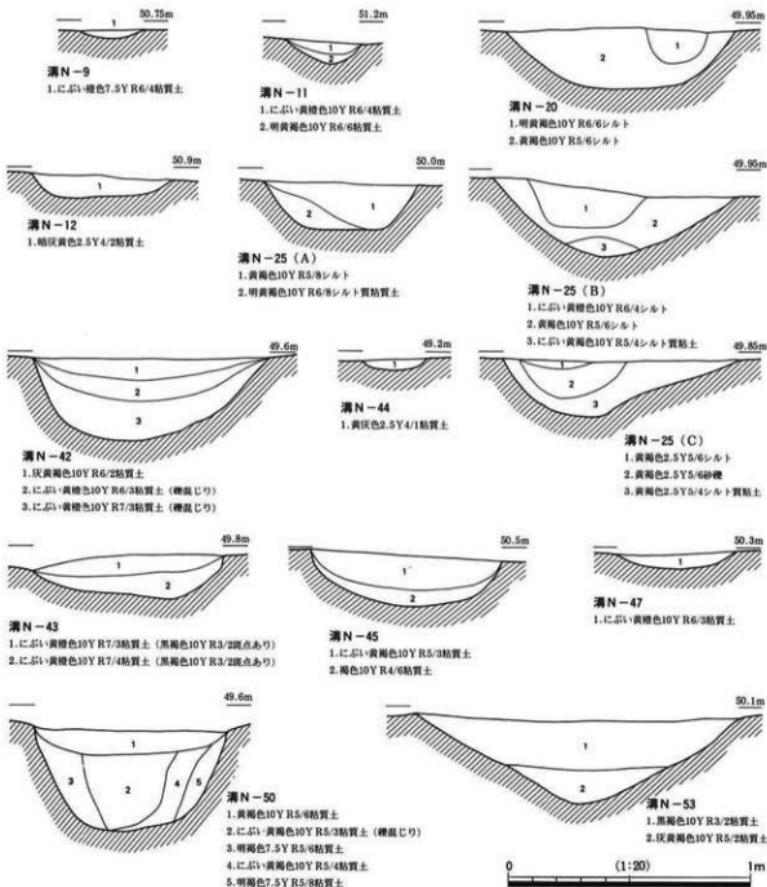
N地区内に井戸は33基認められる。N地区内の主要な水田・畑・草地の土地区画は23あり、隣接して一部分のみ調査範囲内に入っている区画の井戸も含まれているとすると、ほぼ土地1区画ごとに少なく



図IV-46 井戸O-9 とねつるべ柱痕群O-6 平面・断面図

とも1基以上井戸がある計算になる。区画以上の数の井戸が計上されるのは廃絶して埋められ、隣接して新しく掘られた井戸も存在するからである。井戸と耕作地の関係は基本的には耕作地1区画ごとに1基の井戸が伴うと考えて良いと思われる。

これらの井戸は、地表面に見えている開口部の直径は0.8~1.0mしかないが、地下の水の貯えられている部分は直径3~5m、深さ4~7mを測り、できるだけ多くの水を貯えることを目的とした巨大な水堀である。当地は、雨水と地下水の湧水以外に河川の水を直接的に取水しにくい高乾燥地であり、それを克服する手段がこの深くて中身の大きな井戸なのである。灌漑用水網が整備された現在では使用す



図IV-47 N地区近世溝断面図

る機会は減ってはいるが、依然として重要な機能を果している。これまで高位段丘上の高乾の地は水利の便が極端に悪く、小溜め池として使用される以外は草地か荒地として放置された土地であったと推測される。それが近世の後半期以降によく農業用の耕作地として区画して開発されるに至ったと考えられる。現在見られる土地区画に分割された近世の後半期以降に、農業用水網が完備されたにも関わらず、調査区周辺の高位段丘上は、農業を営むには貯水量が多くある井戸を依然として必要としている。なぜなら狭山池の農業用水は購入するものであり、井戸水は無料だからである。

#### D はねつるべ柱痕群

井戸の開口部から約2～4mほど離れた位置に掘立柱建物の柱掘方に似た遺構が密集して検出される。これらは、はねつるべ用の柱の痕跡であると考えられる。井戸は非常に深く、地下水位もあまり高くなないので、はねつるべ方式で水を汲み上げているらしい。掘立柱を1本建てて、この頂部付近に可動式の腕木を取り付ける。井戸側の片方の腕木の先端には水を汲み上げる紐付きの木桶をぶらさげる。腕木の反対側には木桶に水を入れた荷重とバランスの取れる程度の重し用の石をくくり付ける。木桶に水を満たした状態で、荷重が掛からないようにして汲み上げている。こうすると大量の水を汲み上げてもあまり疲れない。

これはねつるべ用の1本柱は地面に埋められているので、この部分が朽ちやすい。そのため、井戸が長期間使用されると、幾度も建替えが必要となる。このような累積の結果として柱の跡が密集するのが、はねつるべ柱痕群である。多いものでは数10個重複している例がある。

#### (2) O地区

##### A 落込

###### a 落込O-2～落込O-12

O地区東端の凹地状地形N-1の高位段丘の端に形成される崖付近に良質な粘土が採れるので、近代に煉瓦用に採取されて窯んでいる。これが落込O-2～落込O-12である。この窯は、後に埋め立てられて平坦にされて水田に使用されている。この中から染付が出土している。

##### B 溝

O地区では区画溝等が数条調査されている。これらから出土している遺物は染付や近世陶器であり、近世段階に急速に開発が進んだことを示している。

###### a 溝O-21・溝O-22

80トレンチの落込O-1はすでに埋没して、茶灰色粘質土層が被っている。ここに新たに灌漑用水路を掘削している。この溝も幾度か埋没し、改修されている。そして、新たに現在の土地区画に沿って溝が掘られている。溝O-21・溝O-22などがそうである。

###### b 溝O-27～溝O-30

溝O-27～溝O-30は集落から延びる道に沿ってあり、道路の側溝と思われる。開析谷に続く傾斜面にかつて萩原天神が所在していたと言う地元の伝承があり、萩原天神に至る道があったのかも知れない。

##### C 井戸(図IV-46,51)

O地区も各耕作地一筆ごとに井戸を開削している。井戸の開削が高位段丘上の耕地開発の必須の条件としてあることを示している。

##### D はねつるべ柱痕群(図IV-46)

井戸から2～4m離れた所に柱痕が密集している。N地区同様はねつるべの柱痕群と考えられる。

## E 挖立柱小屋（図IV-48）

N地区と同様の掘立柱小屋の柱痕跡が数10個一列に並び、この列が10数列認められる。O地区にも日除けの草簾を張った掘立柱小屋がいくつも建てられていたらしい。野菜などの商品作物を育成させるための設備の跡と理解される。少なくともこのようないくつかの掘立柱小屋は近世に入って初めて出現している。

## (3) P地区

## A 落込

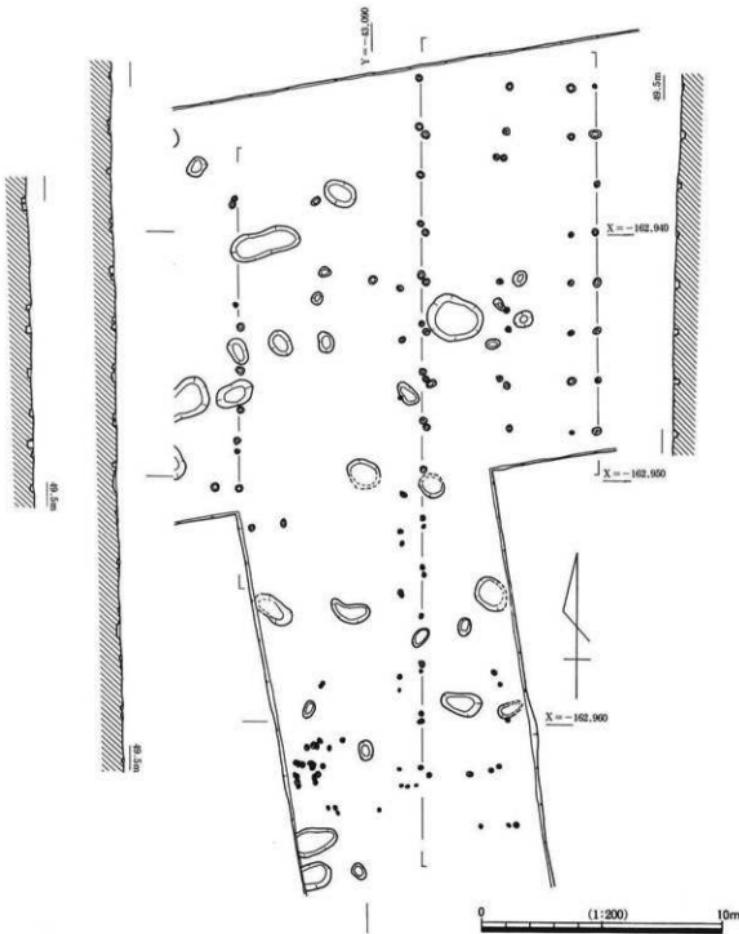


図 IV-48 O地区掘立柱小屋平面・断面図

### a 落込P-20（図IV-49,50）

開析谷北西部で近世前半期に小溜め池として掘られた落込P-20の堆積層は厚い水成堆積層であり、下層から灰色粘土層、灰色粘質土層が堆積している。これらの土層で埋没した状態で廃絶しており、再び掘り下げて溜め池として用いた痕跡がない。全面的に埋没して溜め池の機能が廃絶した段階で、埋没した灰色粘質土層を部分的に掘り込んで木組みを埋め込んでいる（図IV-50）。

木組みが埋め込まれた後に、西側の須恵器窯P-1のある周辺の高位段丘層の上層を削り取って、この土砂を落込P-20の柔らかく堆積した部分の上部に客土している。この時に須恵器窯P-1の焼成部の上半部分も大きく削り取られている。このため、水田P-1相当部に客土された土砂の中から須恵器窯の窯体破片や須恵器の杯身・杯蓋等の数多くの破片が出土した。さらに、この上部に床土を盛り上げて水田P-1を造成している。水田P-1の造成と同時に、この水田の端際に沿って、かつては落込P-20に注ぎ込む役割を果していた溝P-36がさらに東側から南、西側へ水田P-1の周囲を巡って、西側の高位段丘崖下まで農業用水路を新しく延長している。この水路を造るために掘り下げた時に、落込P-20掘削時と同様に埴輪窯P-1燃焼部・焚き口・埴輪窯P-1灰原・須恵器窯P-1燃焼部・焚き口・須恵器窯P-1灰原を大きく削り取っている。それらの土中に含まれていた埴輪・須恵器・窯体片は、東側の水田の床土に入れられたり、暗渠内の栗石代わりに使われている。

P地区台状部東側の中世土坑群が分布する範囲には近世前期には水田化しておらず、地下水の湧き出る湿潤地のままである。この部分には畝溝が見られない。近世前期まで残っていたP地区の落込はすべて客土等で埋め立てられて、近世後期には姿を消している。

### B 溝（図IV-42,49）

この時期の溝は、これまで農業用水を供給する役割が主であったものが、区画溝や棚田の漏水を排水するためのものに大半が変わる。

水田に近接して排水用の溝が掘られている。溝P-25・溝P-26・溝P-27・溝P-28・溝P-31が該当するが、これらの溝が上の棚田からの漏水を排水している。一方、西側のP地区高位段丘上に掘られている溝は畑に伴うらしく、溝PQ-11・溝P-37～溝P-42・溝P-44は南西側にある井戸で汲み上げた地下水を導くための溝と思われる。また水田の中にも排水用の溝が掘られている。これらは溝P-29・溝P-30である。

### C 畝溝（図IV-49）

新しく客土を行い、1枚の水田面積が大きくなるように造成された田の床土の最上層を除去すると、直下から畝溝が多数検出される。溝幅約0.1～0.3m、長さ約1～10m、深さ約0.03～0.01mを測り、大小様々である。これらは二毛作の畑作時の畝溝の跡かと推測される。水田P-6・水田P-7・水田P-8・水田P-9では畝溝の間隔は狭く密集しているのに対し、水田P-1・水田P-2・水田P-4では畝溝の間隔が非常に開いている。そのため、両者の性格や時期が少し異なるかも知れない。あるいは下層に旧河道P-2が流れていた個所と旧河道P-1上に造られた水田との土地条件の差なのかも知れない。すなわち、水田P-1・水田P-2・水田P-4では下層に厚い客土層が入るとはいえ、湿地に近い状態であったと推測される。このため、同じ畑作でも湿地に応じて作付植物を変えるなど、土地条件に応じた利用がなされていたことも推測される。

畝溝は、現在の水田の1区画ごとに1単位とし、畦の方向に平行して検出される。現在の階段状の水田に造成されて以降の土地利用状況を示している。現在では夏から秋にかけて稻を生育して、秋以降春

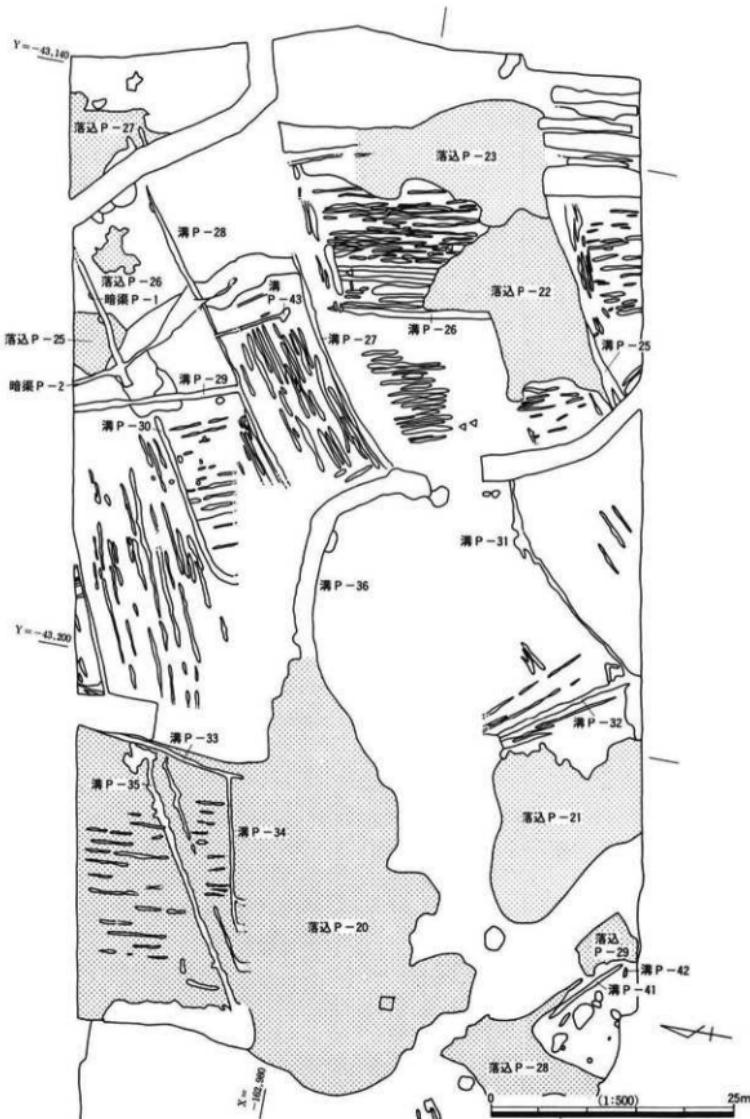


図 IV-49 P 地区近世後半期遺構平面図

までは放置するか一部分畑作を行っている。しかし近世には二毛作として水田と畑と交互に耕作し、土地の利用密度が高かったと考えられる。

P 地区の河道P-2A上層の灰色砂質土層中に2個所の狭い範囲内に畠溝を検出している。この溝は少し円弧を描いている。溝の間隔は狭く、長い溝と短い溝が混在している。この狭い範囲の畠溝の存在意味はいまひとつ分からない。

#### D 暗渠（図IV-49）

##### a 暗渠P-1・暗渠P-2

埋没した河道P-1の旧流路は地下水の湧出が激しく、湧き出る地下水を排水する対策が必要である。このため、暗渠P-1・暗渠P-2や溝P-33・溝P-34・溝P-35が造られている。この暗渠内の砾石は周辺の高位段丘層内にある砾が主に使用されているが、西側にある埴輪灰原付近から採取されたと思われる埴輪片も相当量使用されている。これらの破片の中には細かなハケメを持つ埴輪や須恵質の埴輪が混じるものなど、埴輪窯P-1で焼成されたとは思えない埴輪片も存在している。

P 地区には農業用水を供給する溝と地下水を抜く暗渠と溝の双方が共存している。P地区の開析谷内では水分が多くて植物がうまく生育しない状況がある反面、一方で水が少なすぎて植物が枯れてしまう状況もあり、このように適度に水の量を保つための色々な設備や工夫を行っている。

#### E 水田（図IV-3）

この時期に水田規模は大きく変化され、中世より広い水田になる。畜力が利用しやすい広い面積の水田に造り直している。近世前期に形作られた景観から、さらに一層の耕地の拡大を行っているのが近世後期の動向である。緩やかに北へ下降する地形の中で水田を造るために、水田一枚の中でも下流側に床土を厚く、一方上流側にはほとんど床土を盛り上げないか、あるいは削り取る事によって水平な水田を少しでも広く造っている。上下に隣接する水田の比高差は0.2~0.3mを測り、緩やかな階段状の棚田を石池谷の中に順次造り上げている。

近世に大規模な水田区画が造成された時の遺物が水田の各層から出土している。古墳時代の須恵器から埴輪・中世の瓦質土器・近世の染付まで含む。これらの資料から、新しい段階の水田区画の造成も近世の後半頃と推測した。

#### F 水路（図IV-51）

近世後期に農業用水路網が石池谷全域に大規模に整備される。大きな変化は、開析谷の南側の上流側に石池が築かれたらしい事である。そして、同時にP地区開析谷の東側端の小高い位置に幹線農業用水路が新しく掘られたらしい。新しい水路が開削されるとともに、これまで調査区内では石池谷開析谷の中心的な位置を占めて農業用水を導いていた溝P-36は、東側の幹線農業用水路が新たに開削されることによって、ここから給水されるだけの枝溝に性格を変えたらしい。そして、石池が築造されるとともに、今まで開析谷内におそらくいくつか掘られていたと思われる落込P-20と同様の小溜め池は全て必要がなくなった。落込P-20は次第に埋没してゆき、再び掘り直されることなく、最後には上部に客土されて新しく水田に生まれ変わる。そしてP地区の開析谷に存在する水田は、石池から供給される幹線農業用水網の配水下にまとめられる。こうして現在に見る水田の区画と同じ形態の水田区画が造られ、農業用水網も整備されて、現在にほぼ近似した景観が造られるに至る。石池の築造や大きな水田区画が造られるように、大規模な労働力が集結されて、大きな設備建設に投入されている。そして石池谷の上流にもいくつかの溜め池が造られて、この地域全体の大規模な変容がなされている。このような作業の

結果、安定した水田經營を営む条件が成立したと考えられる。この後、素掘りの溝がコンクリート製に造り変えられるなどの小さな変化は認められても、この時期に形成された水田区画と灌漑用水網は、基本的に現在も生き続けて機能している。

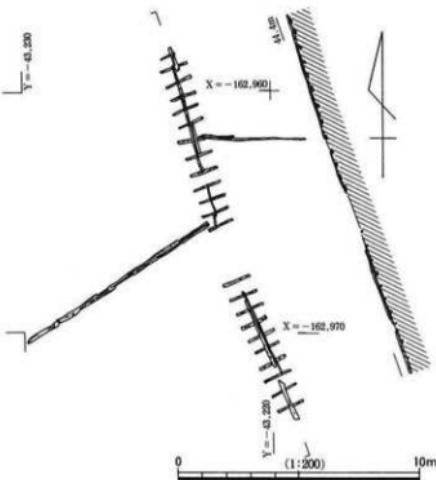
#### G 木組（図IV-50）

2Pトレーナーの灰色粘土層中に長さ1.5m、直径4~10cmの丸太をおおよそ1m間隔に平行に置き、この中央付近にそれと同様か少し太い程度の丸太を直交方向に置いている。しかし、両者は蔓などで結束している。構造的にはあたかも1本のレールと枕木の関係のようである。このような物が南北2群に別れて敷かれている。そして途中で南西側に1本枝別れしている。ここには2本の長い丸太を並べて置いているだけで、枕木に相当するものは無い。これらの木組みは溜め池堆積層を掘り込んで造っている。落込P-20が廃絶した時には、もともと旧河道の上層に掘られた落込なので非常に湧水が激しく、柔かな状態であったと推測される。落込P-20上層の灰色粘土層はあまりにも柔か過ぎるので、牛など農耕用動物の脚が層中にめり込むのを防ぐために木組みを入れたと推測される。この考えとは別に、灰色粘土層の上層に客土した時に土砂を運搬するために用いた設備等とも考えたが、灰色粘土層の中に埋められているので、このような考え方方は難しいと思われる。

#### H 貨幣（図IV-52）

水田P-6~水田P-9の水田の歓溝検出面やII層茶褐色粘土層を除去した直下から貨幣が数枚出土している。表面の文字が判読できて全体に遺存状況が良好なものから、貨幣の形は残るけれども文字が読めないものや、ほとんど腐食してしまって貨幣の種類が全く判明していないものなど、遺存状況は様々である。これらの貨幣の出土状況や遺存状況はそれぞれ異なっている。しかし全ての形状が残っている貨幣は水平な状態で出土した。出土した貨幣の中で唯一判読できたのは寛永通寶と記されていた。これらの貨幣は何らかの意味をこめて、水田の床土を敷きならす時に置いたか、ばらまいたのであろうか、あるいは何らかの事故の結果なのであろうか。もし意図的で積極的な行為だと推測すると、水田に対して当時の人々が豊作への祈りの気持ちを持った行為と考えられる。貨幣出土層は一時期ではないこと、床土の各層から出土していること、水平に出土したことから考え合わせると、意識的な行為の結果の可能性が強い。

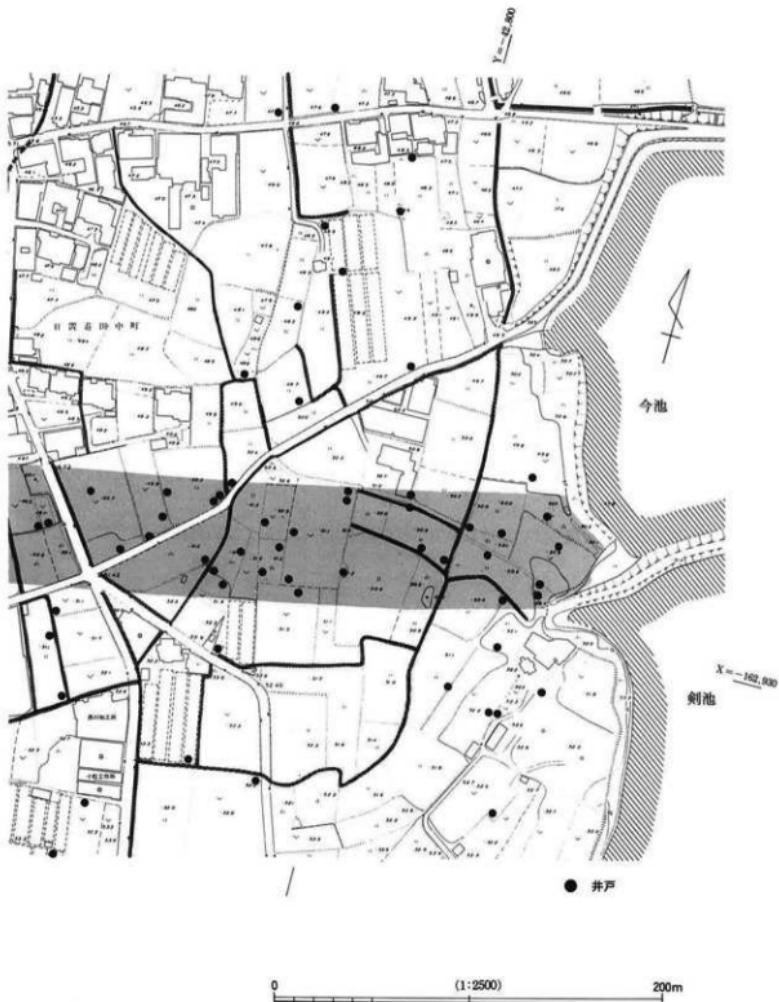
発見された貨幣の周囲は酸化したために茶褐色を示している。上方から見ればあたかもピット状に見える。この断面観察では地下部分が半円状をなしており、ピットとは考えられない。これらの貨幣は整地層を平坦にした後にお金を置いている。恐らくは整地の途中にお金を蒔いて、この後再び整地作業を行ったと考えられる。



図IV-50 P地区木組P-1平面・見通し図  
（1:200）



図 IV-51 IV調査区



周辺の水系および井戸位置図

#### (4) Q地区

この地区的様相は、N地区・O地区の大半の範囲と同様で、耕作土層がI層のみで、耕作土直下が高位段丘層であり、遺構の種類やあり方も類似している。

##### A 落込

Q地区の西側端に認められる落込は凹地状地形Q-1であるが、この部分はもともと地形的に窪んでいたらしい。この窪んでいる落込埋土は、高位段丘層の土質とは少し異なったやや暗い色調を示し、高位段丘層の2次的な堆積層であると考えられる。

現在も石油に灌められた農業用水の一部は、Q地区西端の落込個所を通って高位段丘上を西側に迂回させ、下流に導いている。このような流路を採用したことは、Q地区の高位段丘上も水田經營を行うことを前提として選択したものと考えられる。

##### B 溝（図IV-40）

Q地区に見られる溝は、大半が畑の区画溝か排水用の溝である。

##### C 土坑

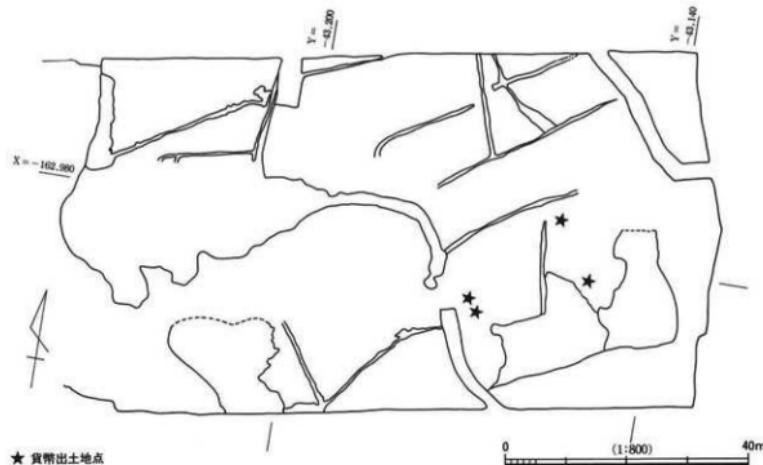
この地区にも数多くの土坑が見られる。しかし、小さな土坑が多く、土色の色調も薄いものが多い。また風倒木痕も全く見られない。Q調査区では、大木があまり育っておらず、地表面の腐植土層もあまり発達していなかったと推測される。しかし、近世では、荒れ地とされて和泉と河内の境界争いともなった土地の印象とは異なり、木々が少しあは生じていたのではないかと推測される。

##### D 井戸（図IV-51）

Q地区においても土地区画ごとに井戸が掘られている。中には埋没した井戸も多く見られる。

##### E はねつるべ柱痕群

他の地区同様、柱痕が重複しているはねつるべ柱痕群が井戸に伴って認められる。



図IV-52 P地区貨幣出土地点

## 第6節 まとめ

### 1. 時期区分

各時期を取りまとめるに以下になろうか。

- I期 P地区開析谷の形成
- II期 P地区開析谷の埋没期、河道P-1の堆積期
- III期 河道P-1の機能停止と河道P-2の活動開始
- IV期 須恵器窯の築造と操業の開始
- V期 墓輪窯の築造と河道の流路変更
- VI期 人々の活動の休止期、河道の湿地化
- VII期 開析谷の開発期 湿水地と溝
- VIII期 開析谷の開発の進展と用水路の整備
- IX期 用水路の再編を伴う大規模再開発の実施と高位段丘面の開発
- X期 現代

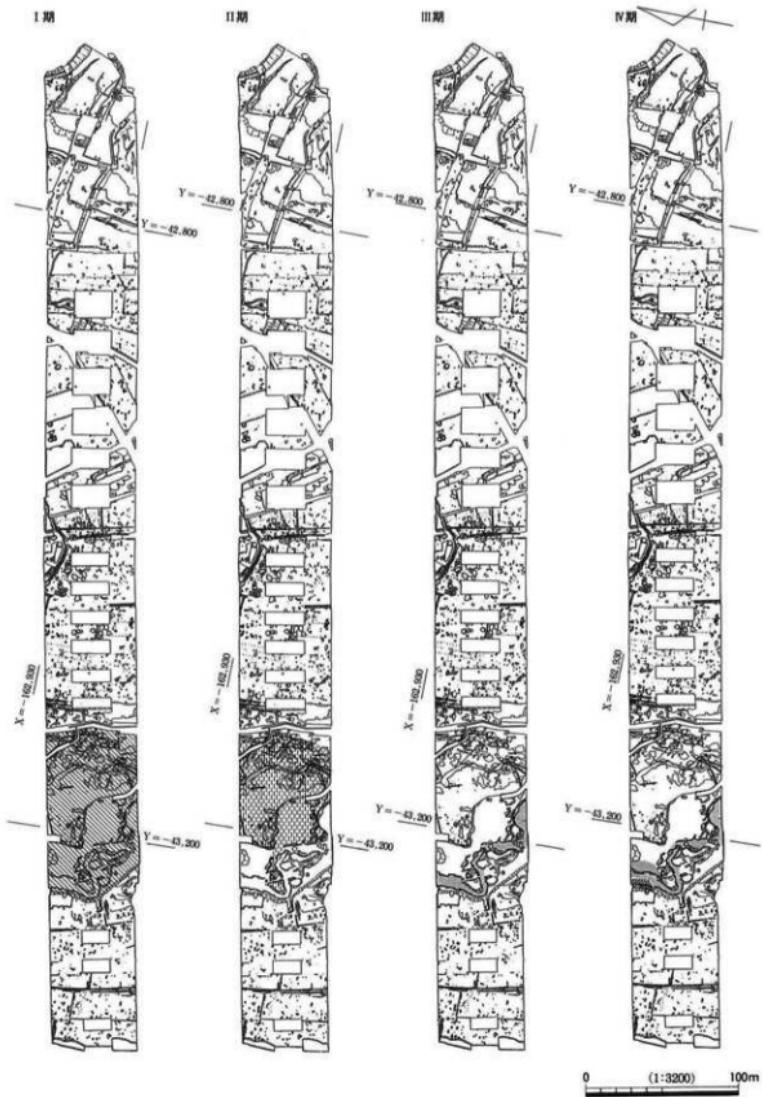
### 2. 各時期の様相

#### A I期 P地区開析谷の形成（図IV-53）

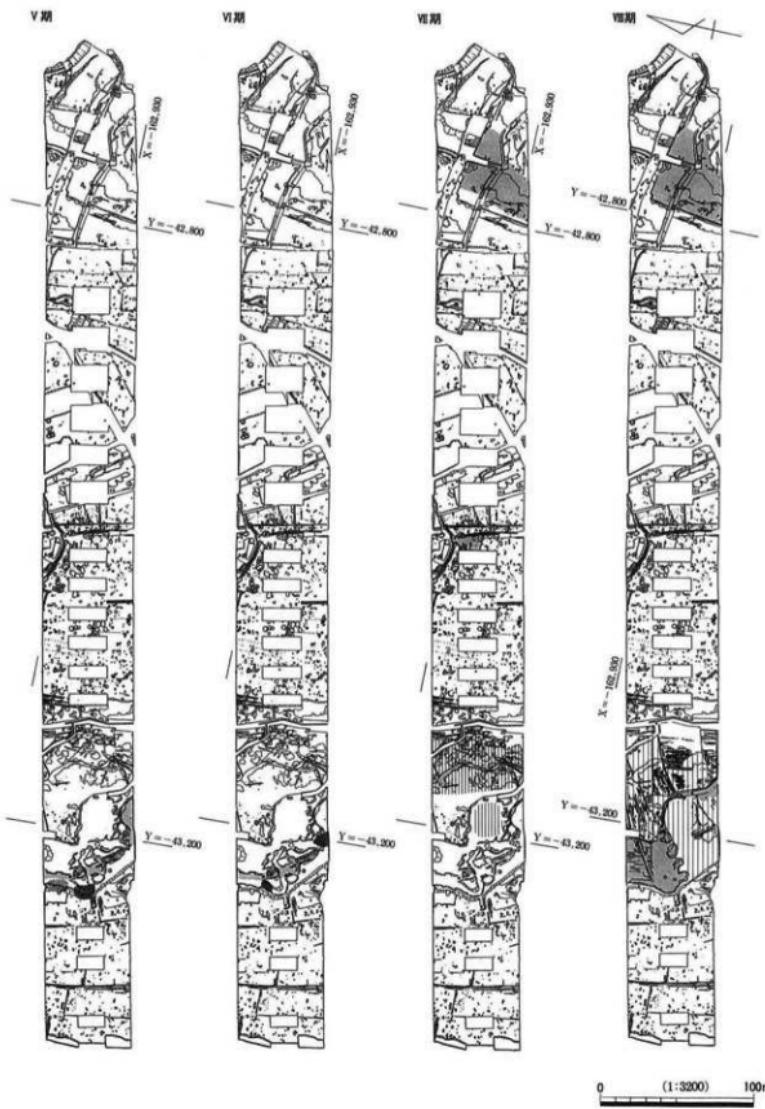
高位段丘層の疊層が堆積を終える頃の最末期には大型の礫を押し流す力もすでに失われており、細かな粘土層を堆積して、疊層の上層を覆っている。この粘土層は赤褐色粘質土層と灰白色粘質土層からなり、互層状に堆積する。このことからいわゆる高位段丘層を特徴付ける「トラ斑」が顕著に生成されている。このように形成された高位段丘層の地形は現在のIV調査区の大半を形作っている。このうちP地区は、現在も残っているO地区西端とQ地区東端の高位段丘層最上層の堆積層の傾斜から推測すると、もともと現在ほど深く掘り下げられた地形ではないけれども、ある程度は窪んでいたのではないかと推測される。そして高位段丘層の堆積作用が停止するとともに、今度は逆に侵食作用が始まる。まずP地区の少し窪んだ範囲の開析作用から始まる。開析谷の東側は、東端部では高位段丘疊層が露出するまで削られてテラス面を造り、そこから中央部にかけて急激に深く侵食されている。この部分が河道P-1の流路となる。西側は高位段丘疊層中に挟まれて堆積しているらしい褐色粘土層上面まで削り取られているが、その粘土層のためにそれ以下の侵食が進まず、東側に比べて浅い状態で止まっている。一方、高位段丘面が形成されて後は、段丘上面は樹木がかなり生育し腐植土層も発達していたようである。旧石器時代や縄文時代の人々がこれらの高位段丘上を活動の場として何らかの営みを行っていたことは、出土した石器・石器片から推測し得よう。しかし、石器が原位置を保って出土した例は全くなく、遺構も伴わないことから今一つはっきりしたことが述べられない状況である。

#### B II期 P地区開析谷の埋没期、河道P-1の堆積期（図IV-53）

開析された谷の東側は当時最も窪んでおり、この部分を開析していた河道P-1の開析作用が停止するとともに、周囲に砂粒を堆積し始める。河道P-1は開析谷西側の褐色粘土層の上層にも堆積している。褐色粘土層上面には、河道P-1の堆積層が東側から溢れて八手手状に枝葉を伸ばしつつ堆積している。このため、開析谷西側では河道P-1の堆積層が厚い所と薄い所があって凹凸が激しい。河道P-1は、開析谷の東側部分の下層には砂疊層、最上層は黄灰色粘土層を堆積させている。そして、最終的に西側より1.5mほど高い台状部を形成する。この層中からIV-57-2の石器片が出土している。



図IV-53 IV調査区時期変遷図(1) (I~IV期)



図IV-54 IV調査区時期変遷図(2)(V~VII期)

### C III期 河道P-1の機能停止と河道P-2の活動開始（図IV-53）

しだいに埋没して河床が高くなった河道P-1は、勢いを徐々に無くし河道としての機能を失う。開析谷の上流に湧き出る地下水は、河道P-1の流れる東側が高くなつたため結果的に窪む形となった開析谷西側を流れるようになる。これが河道P-2である。

この河道P-2は、先の河道P-1の堆積層が無いか薄くしか堆積しなかつた窪んだ部分や、I期に開析されて露出していた褐色粘土層の窪んだ低い個所をつなぐように蛇行しつつ流れる。この河道から出土する最も遡る遺物は、弥生時代終末期頃か古墳時代前期に入る頃と思われる、底部が突出した平底の壺である。これより以前には石鎚が出土していることから人々がこの谷に何らかの関わりを持っていたのかも知れないが、それは分からぬ。そして、弥生から古墳時代前期頃の壺と石鎚は、この石池谷のどこかで弥生人が何らかの開発を始めた可能性を示すのかも知れないが、調査区の範囲内では変化はない。この後にも古墳時代中期の土師器が出土していることから、人々が継続して何らかの関わりをこの谷に持っていたことを推測させるけれども、調査範囲内には全く変化が見られない。

### D IV期 須恵器窯の築造と操業の開始（図IV-53）

P地区開析谷西側斜面に須恵器窯が構築される。窯築造期には西側段丘崖際を流れる河道P-2Dでは人々が加わったのか堆積層が厚く盛り上がり、微高地を形成する。この上層に須恵器窯を開削した時に掘り出された排土を敷きならして平坦にし、須恵器窯の焚き口と作業場を造っている。この焚き口の南北両側に須恵器焼成時の失敗品・炭・灰・焼土等を盛り上げて廃棄し、灰原としている。このため、河道P-2Dは須恵器窯灰原付近で流れを東側に少し変えている。台状部では土坑が掘られて河道内に須恵器を廃棄している。

### E V期 増輪窯の築造と河道の流路変更（図IV-54）

次に増輪窯が築造される。この時すでに河道P-2D上にいくつか須恵器の失敗品が廃棄されている。その須恵器が埋没している土層の上部に増輪窯開削時に掘り出された排土を敷きならし、増輪焼成の際の作業場としている。増輪窯の操業開始とともに、増輪窯築造時の排土を敷きならした範囲の北側に焼成に失敗した増輪・炭・灰等を捨てて、増輪窯灰原としている。増輪窯が操業を始める頃には、河道P-2Dは完全に流路を塞がれて流れを変える。この時に河道P-2Bもあまり使われなくなり、これ以降河道P-2C・河道P-2Eに流れが変わる。そして須恵器窯、増輪窯の順に操業を終了してゆく。

### F VI期 人々の活動の休止期、河道の湿地化（図IV-54）

2つの窯の操業が終了した後にも、石池谷の上流側にはどこかで新しい須恵器窯が点々と操業し続けていたらしい。なぜなら、P地区の河道内に上流の灰原から流下してきたと思われる多量の有機物や炭化物を含むからである。また、ごく少量であるが、古墳時代後期から奈良時代にかけての遺物が出土している。この後は、人々はこの地から立ち去って人影のない無人の地になる。河道には堆積層が厚く積もり、しだいに埋没して湿地化してゆく。河道の中で深かった部分は溜め池状に残り、増輪窯灰原と須恵器窯灰原の間も深い湧水池のような形で沼地として残っていたようだ。

### G VII期 開析谷の開発期 湧水地と溝（図IV-54）

ある時期にP地区的開析谷や高位段丘上のN地区・O地区の一部分が開発され始める。P地区では小区域の水田栽培が始まられたようだ。これらの水田は、深い河道P-2跡の湿地からの湧水を利用していいるようである。また、開析谷東側に数個所掘られた土坑からの湧水は、下流に導いて調査区外北側の水田を潤していたようである。

高位段丘上もN地区の凹地状地形の中に堤状の施設が設けられて、小さな凹地を堰止めで小溜め池を造っている。O地区にも同様な施設が見られる。これらの溜め池は幾度も埋没しているようである。この高位段丘のN・O地区の開発と前後する頃に、東側の大きな開析谷を堰止めで剣池が築造されたらしく、剣池に貯水された農業用水は溝N-16を通して北側の中位段丘上に導かれる。

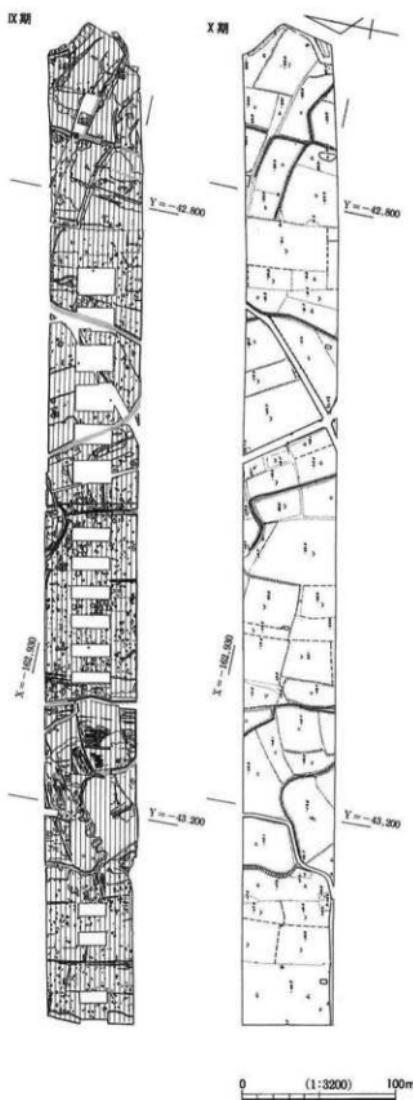
#### H VII期 開析谷の開発の進展と用水路の整備（図IV-54）

P地区の調査区内に小溜め池が築造され、VII期より水田一枚の広さがより大きな広い水田に区画整理される。耕作土層の下部に床土が張られた水田が造られる。P地区の落込を除いて水田化され、水田区画は現状に部分的に似てくる。N地区は一帯埋没していた小溜め池が再び掘削され機能を回復する。剣池から溝N-22を通して農業用水が導かれる。一方、高位段丘上の雨水も集められてN地区の小溜め池に導かれる。さまざまな方法で水を集め、一滴の水も無駄にせず使用している。

これらの農業用水は溝N-18等を通して、すでに開発されて北側に広がる中位段丘上の水田に導かれるのではないかと推測される。O地区の落込も埋没してゆく。埋没後の上層に農業用水路が掘られ、水田O-9の東側と西側に分岐して北流してゆく。高位段丘上は小溜め池等に利用されたが農業用の田畠はまだ開発されていない状況にある。

#### I IX期 用水路の再編を伴う大規模再開発の実施と高位段丘面の開発（図IV-55）

調査区の小溜め池はそれぞれすべて埋没し、その代わりとして最も低く窪んだ部分に農業用水路網が掘られる。井戸から汲み出された水も溝を通して農業用水路に導かれる。農業用水路網がN・O・Q地区の高位段丘上にも整備される。P地区の小溜め池は埋められ、開



図IV-55 IV調査区時期変遷図(3)(IX・X期)

折谷東端に農業用幹線水路が掘られ、枝溝がいくつか掘られる。この頃に石池谷の上流に石池が築造されることによって、安定した農業用水が得られる環境が作られる。この頃にこれまでほとんど未開発で人が入っていなかった高位段丘上も全面的な開発が始まる。今池・剣池の開折谷は上流側には高池・中池・九文度池があり、途中から別れて赤銅池・岸面池と続く。一方、下流側は新し池・坊ヶ池・灰原池・羽室池・新池・大津池と統いてゆく。このように上流から下流へ大きな溜め池が連続して造られる一方では、狭山池を幹線とする水利体系が整備され、それらが一体となって周辺の水田を充分に潤す水利体系が作り上げられる。

#### J X期 現代(図IV-55)

調査前までの状況である。畠地と水田とが入り乱れ、やや畠地の占める割合が高い。畠地ではキャベツ・青菜等の商品作物を栽培出荷する近郊農業が成立している。

そして、現在は近畿自動車道と府道松原泉大津線が建設され、高速道路と府道として用いられるに至っている。

#### 3. 各時期の年代

次に各期の時期を示すと次のように推測している。

I期 約17万年前以降に、開析作用が始まったかと考えられる。

II期 この堆積層中から出土した木片の<sup>14</sup>C測定年代が約3500年前後を示して、縄紋時代後期頃まで堆積作用が続いている可能性も考えられるが、再検討の必要がある。

III期 時期は明確にしがたいが、縄紋時代晚期以降？

IV期 古墳時代後期 陶邑編年II-3型式頃 6世紀前半の新しい頃か

V期 古墳時代後期 陶邑編年II-3～4型式頃 6世紀中頃を前後する頃か

VI期 古墳時代後期～中世前半期 6世紀末から7世紀初頃～12世紀前半頃か

VII期 中世後半期 12世紀前半頃以降

VIII期 詳しく判断する資料に欠けるが中世後半から近世前半期にかけての16世紀前後か

IX期 近世後半期 18世紀頃以降か

X期 現代

## 第2章 遺物

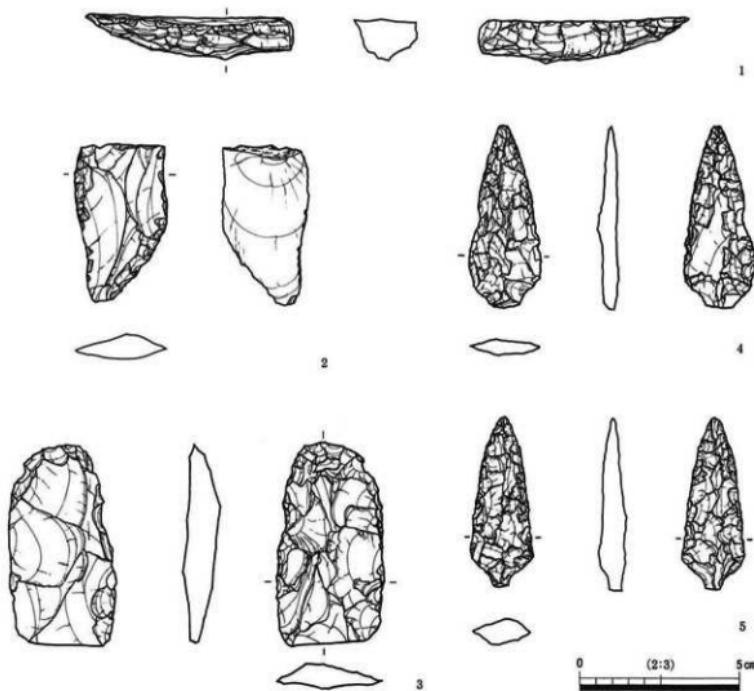
日置荘遺跡IV調査区から出土した遺物は、主にP地区に集中し、しかも、古墳時代後期の埴輪窯P-1および須恵器窯P-1の窯体内から出土した埴輪や須恵器等であり、それら窯からかき出されて灰原を形成するものが大多数を占めている。

他に、P地区の河川からは、この時期の遺物が大量に検出されているが、ほとんどのものが、前述の灰原と接合するものであり、同時期ないしは後世の河川に押し流されたものと考えられる。

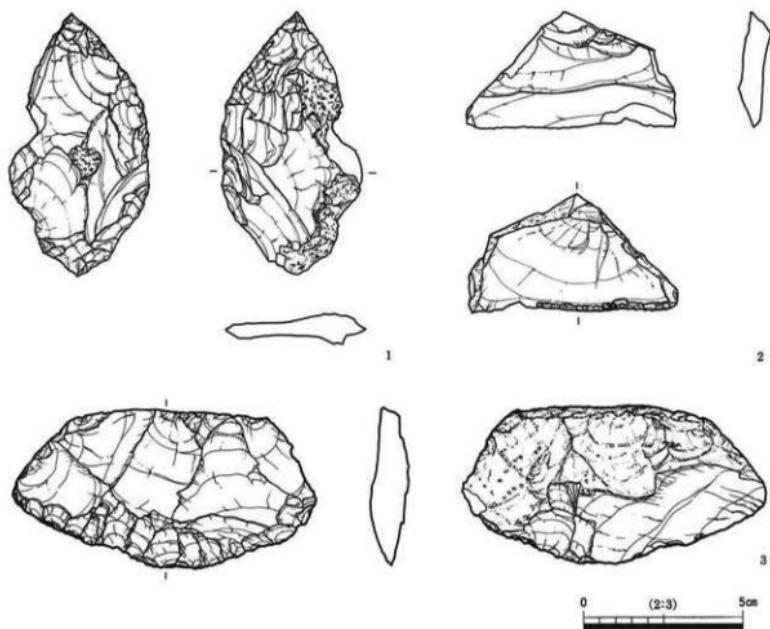
その他の時期の遺物は、調査区内からわずかではあるが出土している。

### 第1節 古墳時代前期以前の遺物

古墳時代前期以前の遺物としては、石器のみが数点ある。サヌカイト製の旧石器時代の船底形石器や弥生時代の石鎌等が出土しているが、いずれも、後世の河川や包含層からで、原位置を保っているものではない（図IV-56,57、写IV-18）。



図IV-56 石器(1)



図IV-57 石器（2）

## 第2節 古墳時代後期の遺物

IV調査区のP地区から出土した古墳時代後期の遺物は、前述したように、主に埴輪窯や須恵器窯から出土したものであり、他に、それらの灰原や河川からも多量に出土している。これらの遺物が、IV調査区出土遺物のはとんどを占める。

以下、遺構ごとに記述していく。

### 1. 塩輪窯P-1出土遺物（図IV-58~91、写IV-19~48）

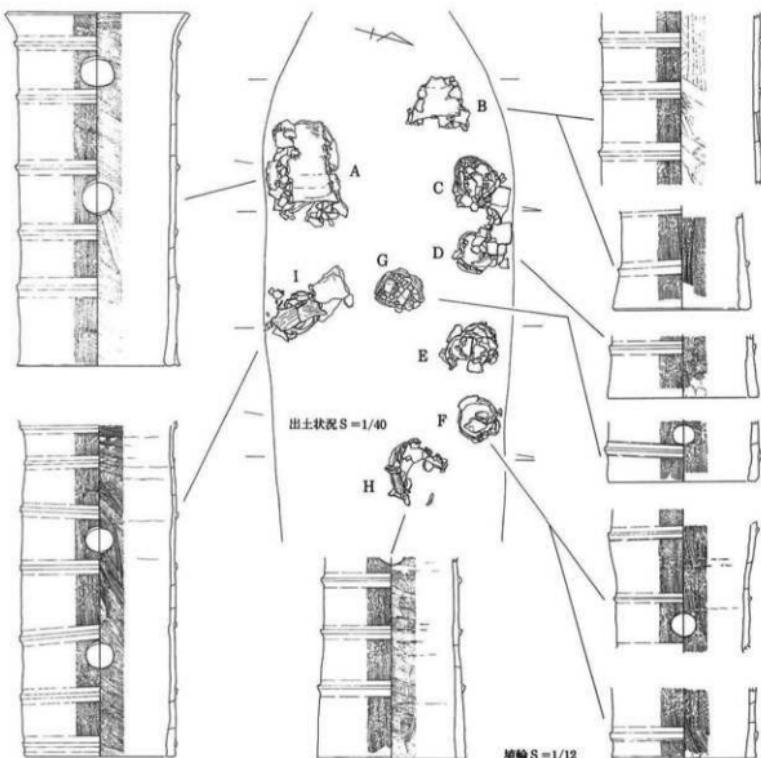
埴輪窯P-1は、P地区開析谷の右岸にあたる高位段丘の斜面に構築され、検出した時点で、天井部は欠落し、先端部は後世の削平を受けていた。

埴輪窯P-1の窯体内から出土した埴輪は、コンテナにして、約120杯を数える。これらは、すべて円筒埴輪である。円筒埴輪は、口径が約40cm前後、器高約90cm前後と大型のものが大半を占め、わずかに口径約60cm、器高約160cmの特大型の、いわゆる「日置莊西町窯系埴輪」が出土している。

遺構の項でも述べたように、埴輪窯の床面は、遺物の出土状況から3面以上あったとされているが、ここでは、あくまで遺物が出土した床面のみを取り扱っている。

以下に、遺物が出土した最下層の床面Ⅰから、順を追って記述していく。

なお、埴輪の個体確認は、通常、接合作業を経た後、口縁部を含む破片もしくは完形品を1点と数え



図IV-58 墓輪窯P-1床面I〔樹立埴輪〕出土状況

るか、あるいは口縁部の残存率から個体数を導き出しが、今回の場合は口縁部破片が非常に少なく、しかも完形になるものが少ないため、体部で凸帯が2~3帯以上残存しているものも含めて個体確認を行った。

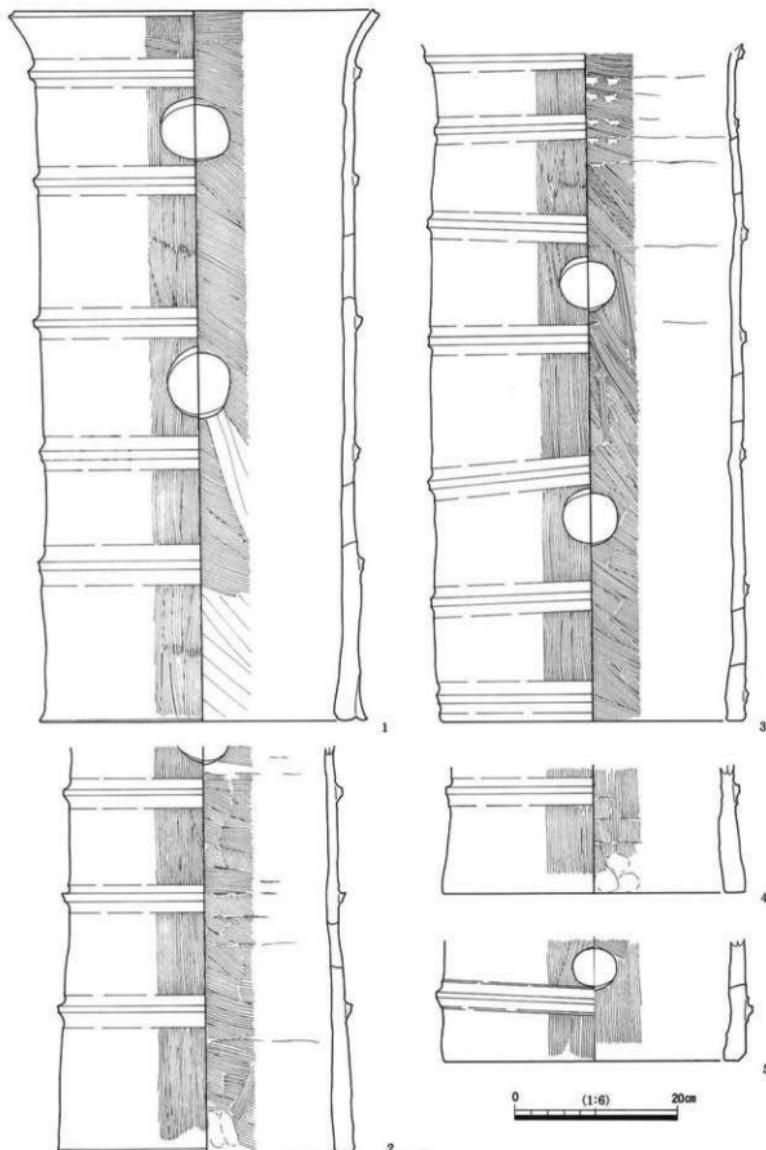
#### (1) 床面I出土埴輪(図IV-58~65、写IV-19~23)

床面Iから出土した埴輪は、コンテナにして約40杯(焚き口付近も含む)である。焚き口付近(実際には焚き口が2m程先にあったと推測される。巻頭図版29)出土の埴輪は、発掘当初、床面IIの段階で検出されており、埴輪の形態から床面Iに伴うものと理解され、概要報告書では床面Iに属するものとして報告されているが、ここでは、埴輪の特徴が若干異なるため別記することとする。

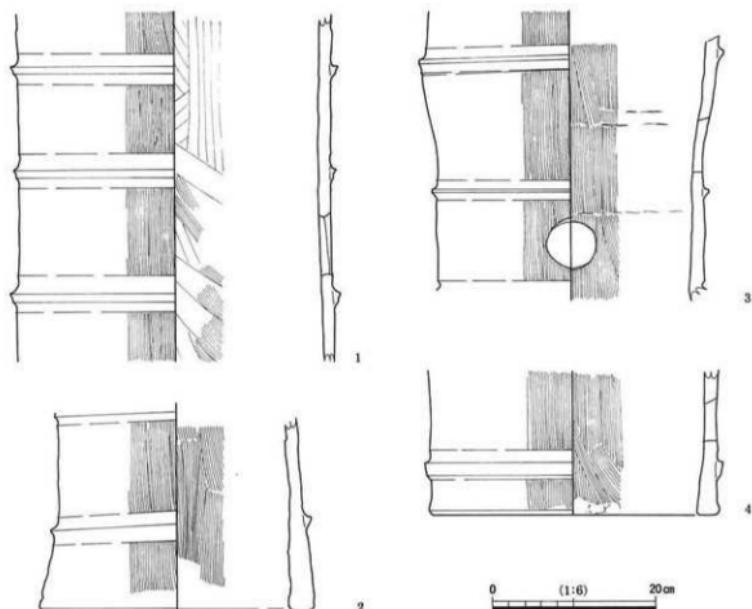
#### A 〔樹立埴輪〕(図IV-58~60、写IV-19,20)

床面Iに樹立したような状態で出土した埴輪9点の内、2点は転倒しており、7点の内4点は底部を残しているが、他は体部破片であった(図IV-58参照)。

A埴輪は、煙道の方向へ倒れ縦位1/2強が残存していた。体部6段凸帯5本で、口径44cm、器高87.6



図IV-59 墳輪窯P-1 床面I【樹立埴輪】(1)



図IV-60 塩輪窯P-1床面I【樹立埴輪】(2)

cmを測る。口縁部は短く外反し、口縁端部は凹面をなす。体部は寸胴形である。調整は、外面に一次調整のタテハケを施し、口縁部に部分的にヨコハケおよびナナメハケを施している。内面は、口縁部がヨコハケ、体部上半ナナメハケ、体部下半ナナメハケ後ナナメ指ナデを施す。底端部にヘラ状圧痕を残している。

凸帯は、断面M字形で上・下および凸帯上の3方にヨコナデを施し、凸帯貼り付けのための下描き線等は施されない。凸帯の間隔は、約13~17cmを測る。やや大きめの円形透かし孔を、凸帯間に2個1対交互に穿つ(図IV-59-1)。

I埴輪は口縁部を欠損するが、形態的にはA埴輪と同様の寸胴形で、体部8段凸帯7本を数える。

調整は、外面にタテハケ、内面の体部上端ヨコハケ、以下ナナメハケを施し、底端部にヘラ状圧痕を残す。断面M字型の凸帯の間隔は、約10~18cmを測り間隔が一定ではない。最下段の凸帯が底部間近に付く(図IV-59-3)。

H埴輪は、体部下半を残し4段凸帯3本で、A埴輪と同様の形態であろう(図IV-59-2)。B埴輪(図IV-60-1,2)およびF埴輪(同図-3,4)は、取り上げの状況から2個体分が一緒になっており、体部を4段残すものと底部2段残すものがあった。前者の体部は、A埴輪と同様の形態をしており、後者は床面I出土の図IV-63-5と同様の形態と思われる。底部を残す埴輪は、D埴輪(図IV-59-4)・G埴輪(同図-5)を含めていずれも最下段の凸帯の付く位置がやや低いものである。

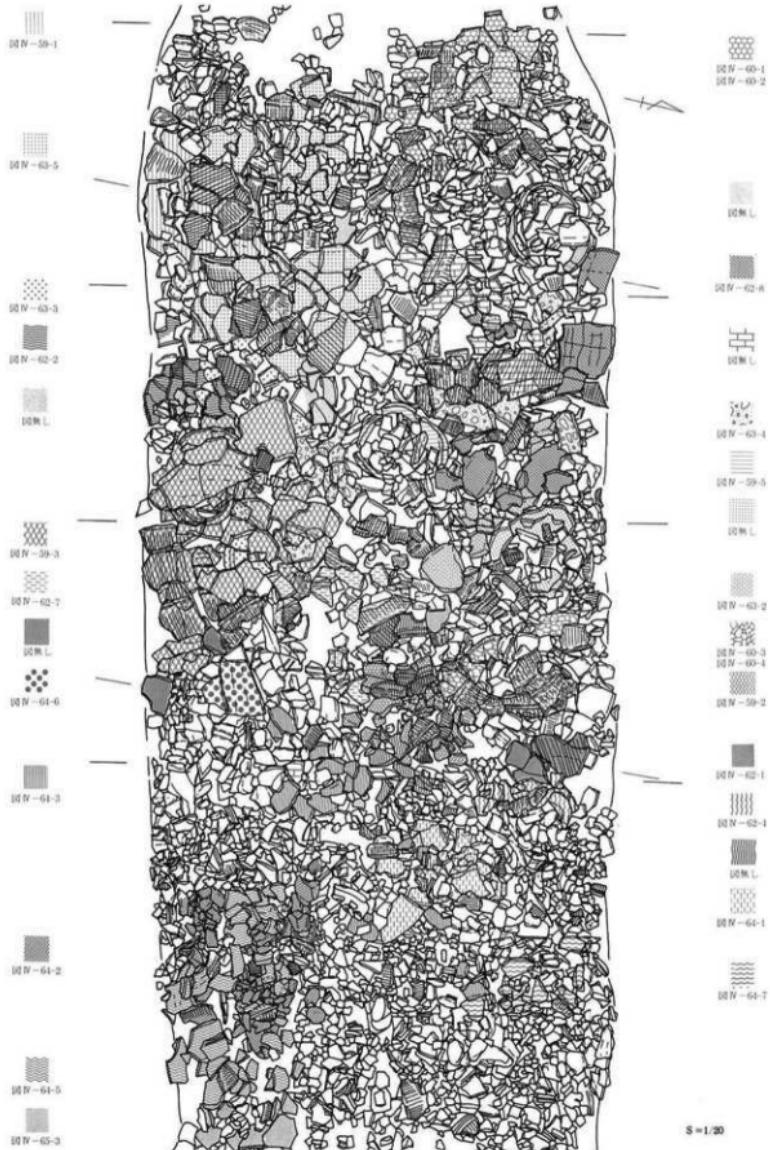
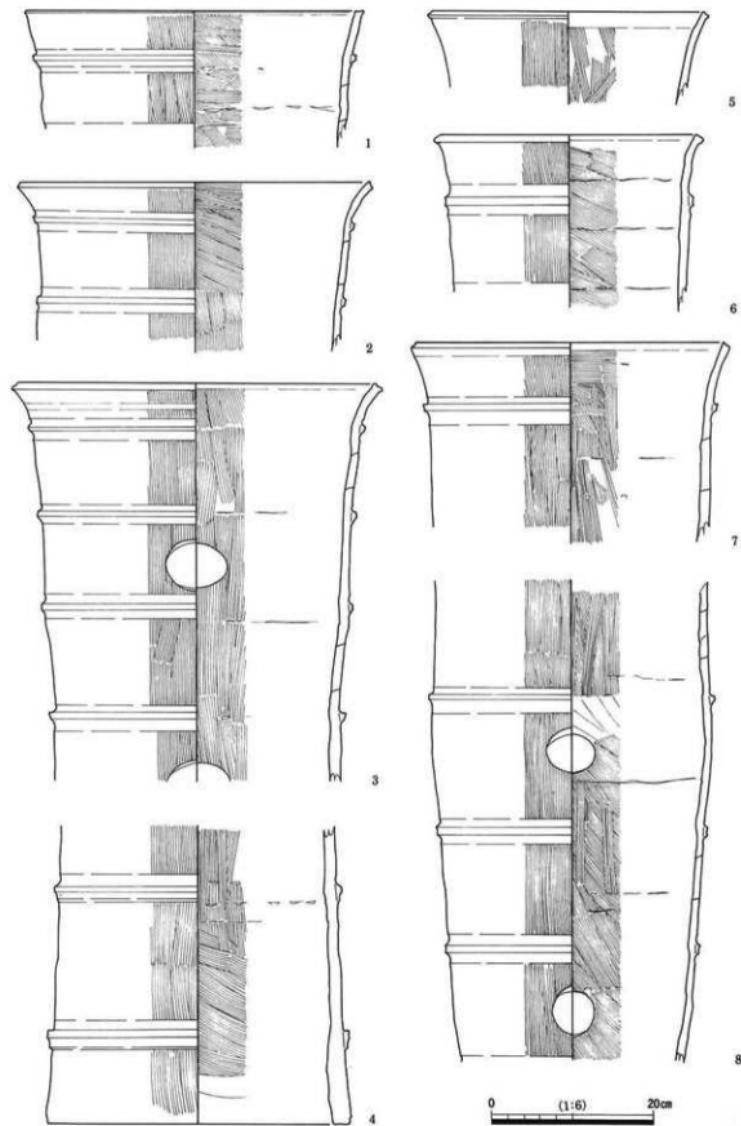
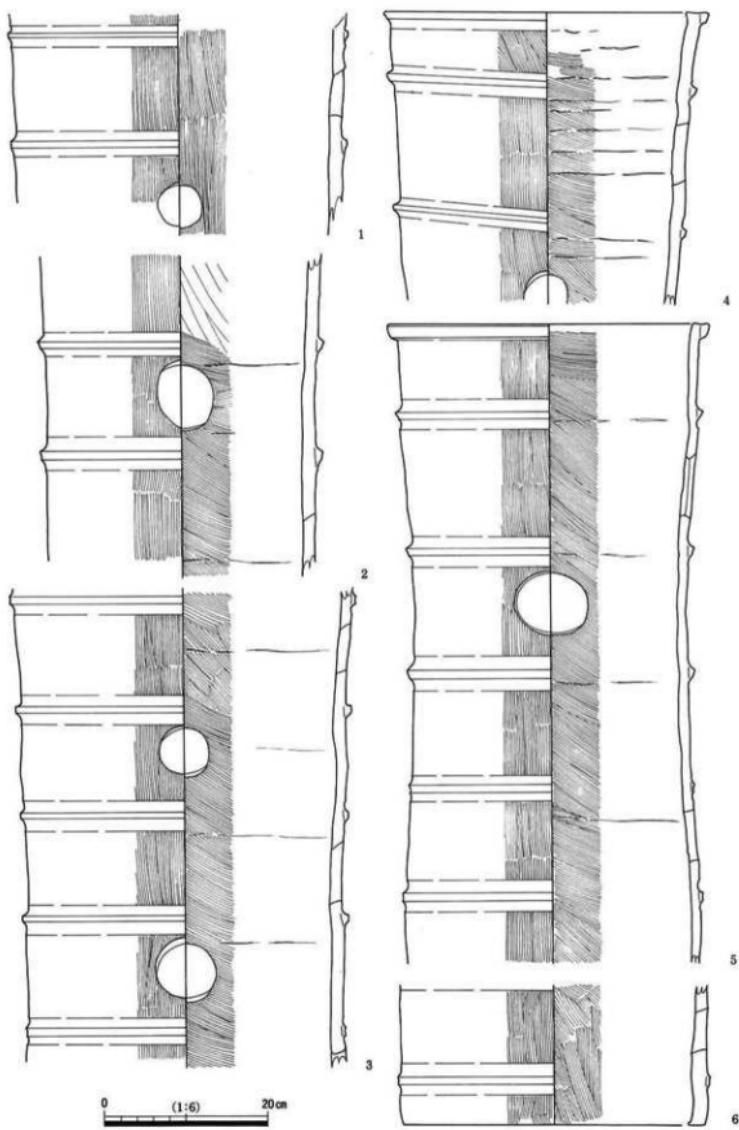


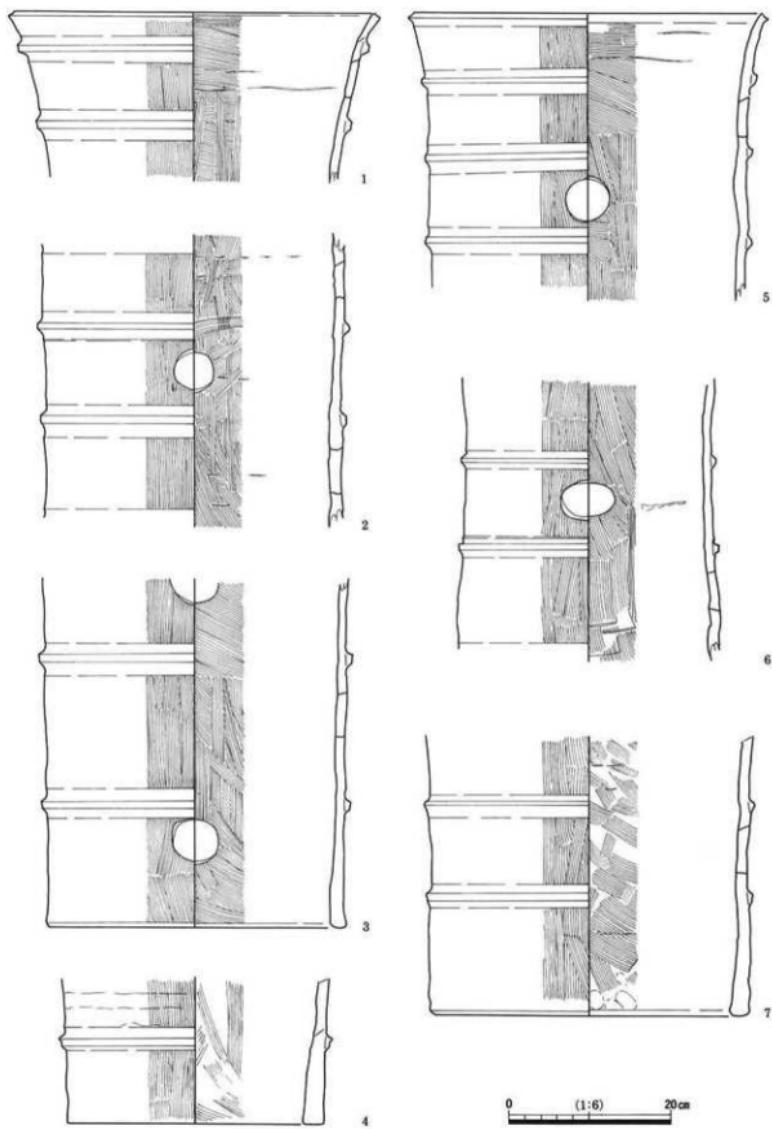
図 IV-61 塗輪窯P-1 床面I 塗輪接合状況



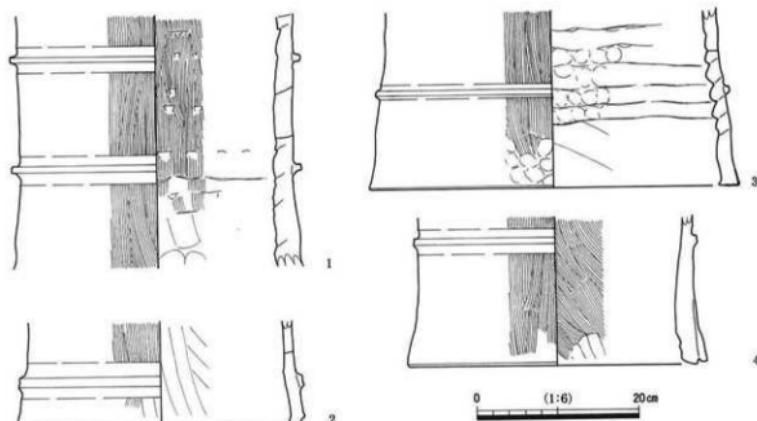
図IV-62 塗輪窯P-1床面I出土塗輪(1)



図IV-63 塵輪窯P-1床面I出土埴輪(2)



図IV-64 塗輪窯P-1床面I 焚き口付近出土塗輪(1)



図IV-65 増輪窯P-1床面I焚き口付近出土埴輪(2)

いずれも調整は、内外面にタテハケを施し、底端部に木の葉ないしはヘラ状圧痕を残す。

凸帯の形状は、M字形・台形・三角形と様々であるが、基本的には、上・下および凸帯上の3方向にヨコナデを施しており、凸帯下には下描き線を施してはいない。

#### B 床面I出土埴輪(図IV-62,63、写IV-21,22)

前述の「樹立埴輪」以外の床面Iから出土した埴輪は、図IV-61のように、南北方向のやや西に振った状態で破片が接合することから、ほとんどのものが原位置で倒壊していると考えられる。

個体確認できたものが21点、口縁部の小破片が61点である。

床面Iから出土した埴輪の特徴は、口径約40cm、器高約90cmを測り、体部の器壁の厚さが約1cmとやや薄く、寸胴形をしており、口縁部の形態がわずかに外反するものがほとんどを占める。他に、筒状の口縁部の外面に粘土紐を1条貼り付け、断面逆L字状のものが2点出土している。

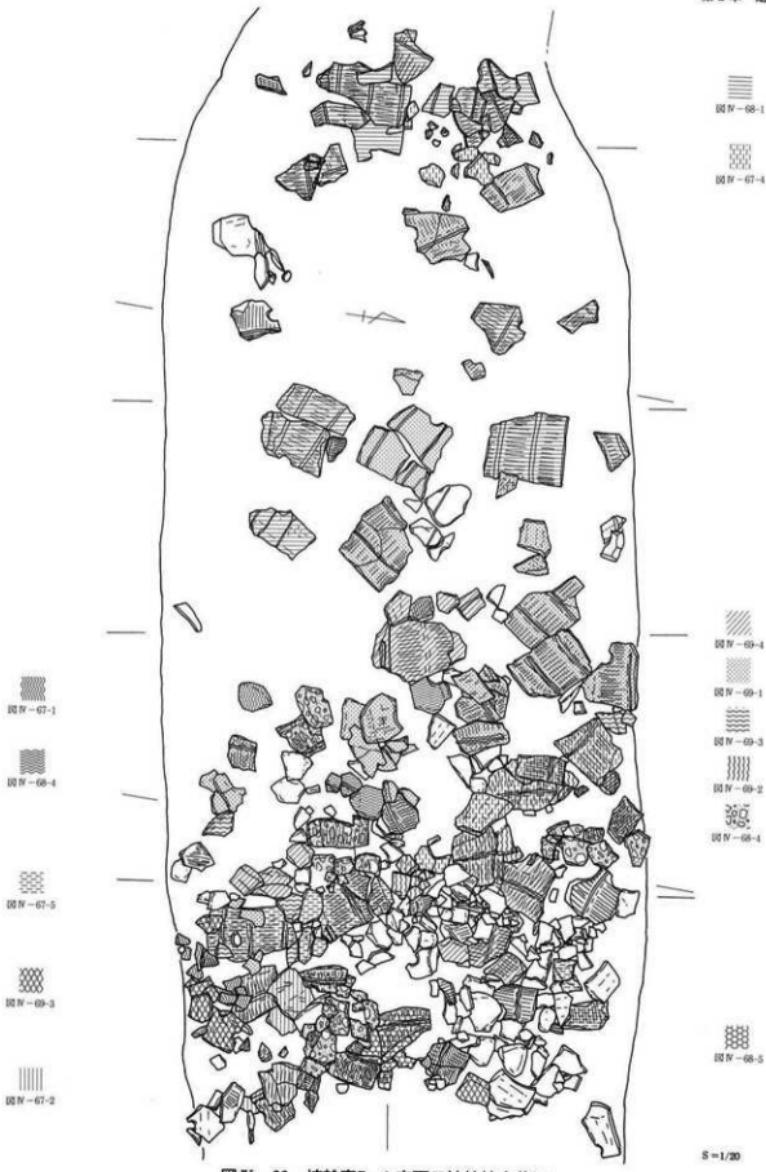
凸帯の間隔は、10cm～17cmを測り、断面M字型をしているものが大半を占めるが、断面三角形をしたものもある。1体の埴輪の凸帯で図IV-63-5のように2種類の断面をもつものもあり、概には、凸帯の断面形状で分類できるものではない。基本的には、凸帯の貼り付けが上・下および凸帯上の3方に指ナデで丁寧に施されており、凸帯のみが剥離するような例は、この床面Iでは見受けられない。

成形は、幅3cm程の粘土紐を5～6本積み上げ、それを一単位として7～8段一気に積み上げている底部のみ、粘土帶を2～3枚重ね合わせて器壁を厚くする例がある。

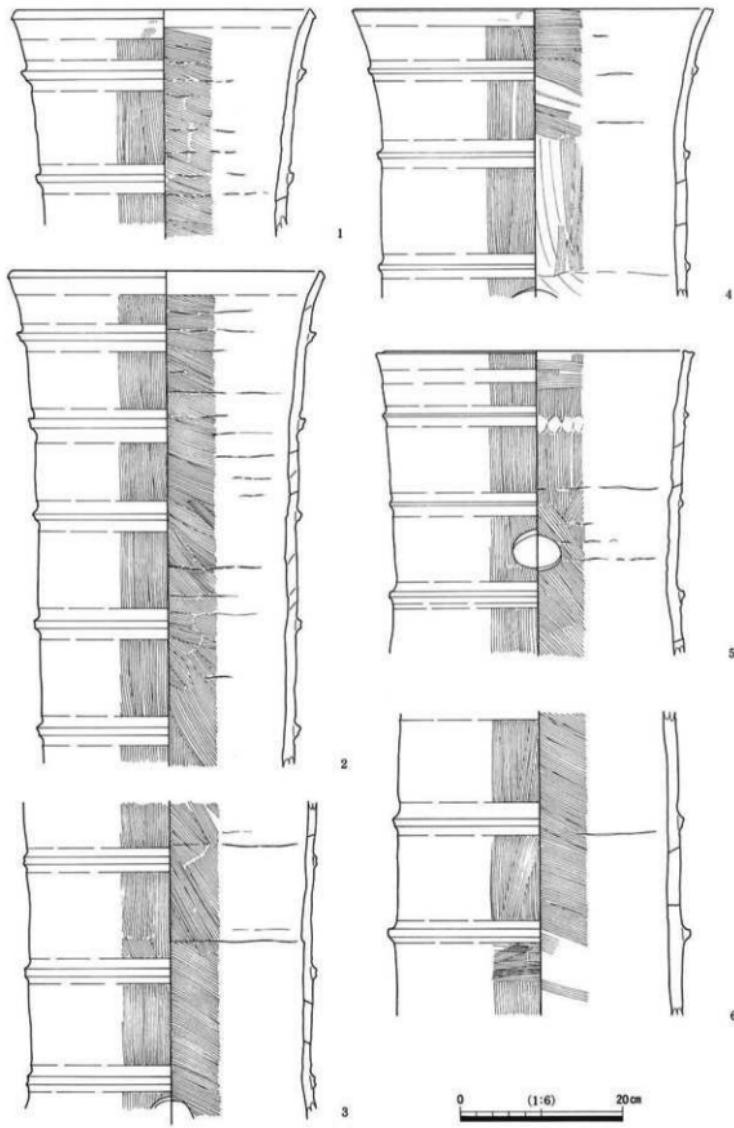
調整は、外面が一次調整のタテハケのみであり、生乾きの状態でハケメを施したため、ハケによる粘土の伸びが観察される。内面には、口縁部近くがヨコハケ、体部ナナメハケかタテハケを施すものがほとんどを占め、まれに、体部下半部にナナメ指ナデを付加するものがある。底端部には、木の葉の圧痕かヘラ状圧痕を残す。底端部の内外面は、成形時の指ナデを残している。

#### C 床面I焚き口付近出土埴輪(図IV-64,65、写IV-23,48)

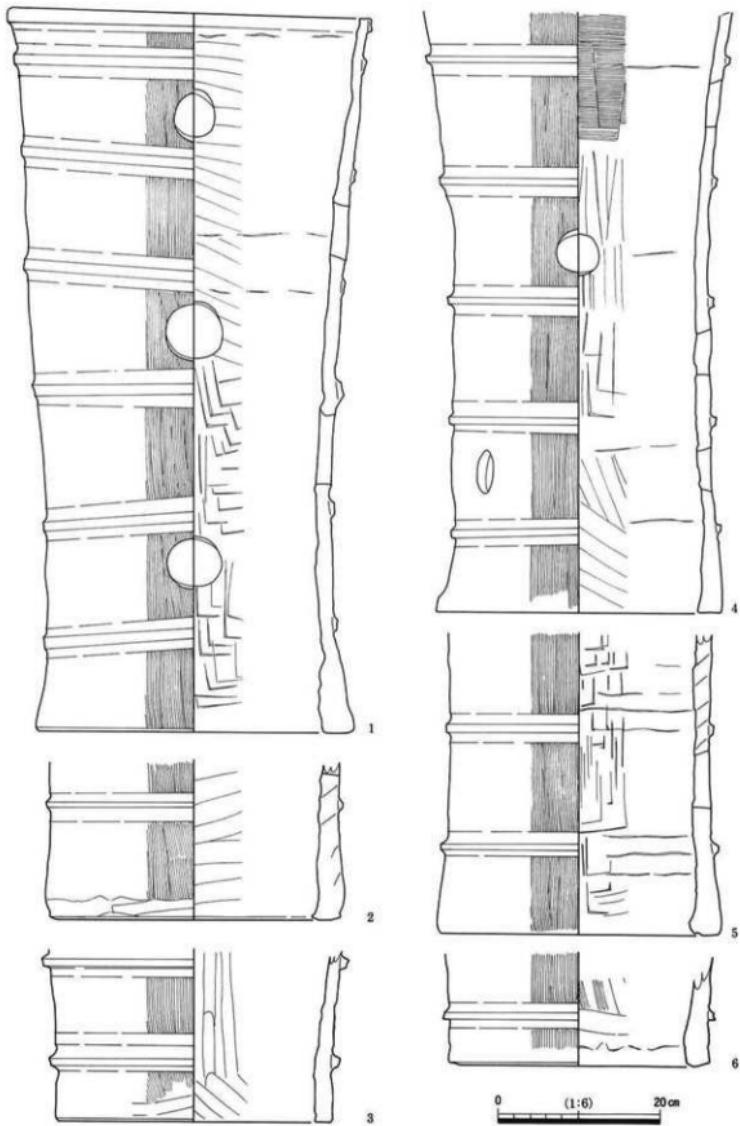
床面Iの焚き口付近から出土した埴輪は、小破片が多く、個体確認できたものが15点、口縁部破片80点、底部破片22点を数える。



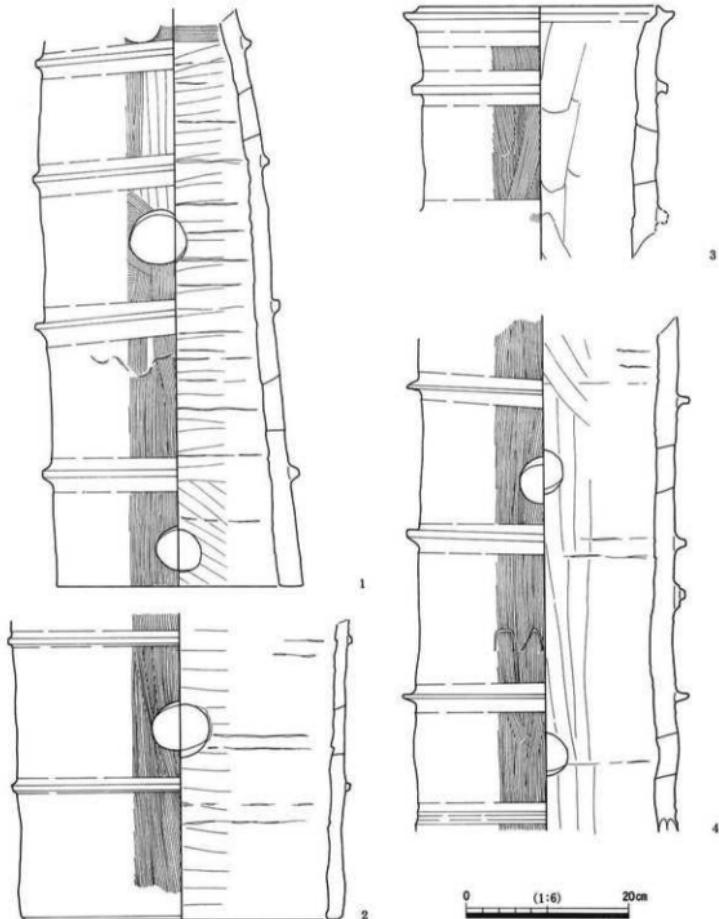
図IV-66 塗輪窯P-1床面II埴輪接合状況



図IV-67 増輪窯P-1床面II出土増輪(1)



図IV-68 増輪窯P-1床面II出土埴輪(2)

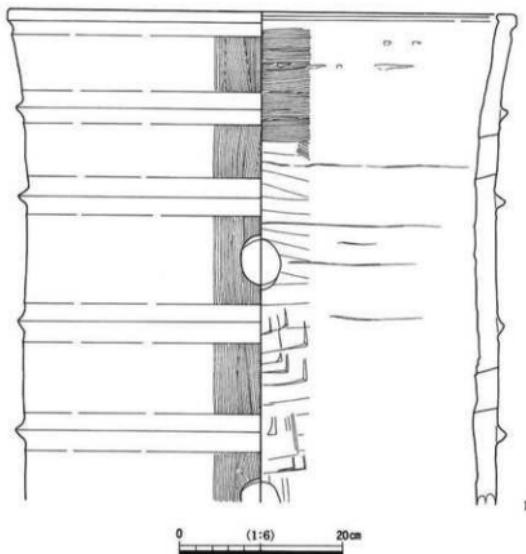


図IV-69 墓輪窯P-1床面II出土埴輪（3）

前述したように、床面I出土埴輪の特徴と若干差異のあるものがある。相対的には、床面Iの埴輪と同様なものであるが、器壁がわずかに厚みを増す一群がある。図IV-65-3のように、内面に粘土紐の雜目を顕著に残すものは、床面Iからは出土していない。

#### （2）床面II出土埴輪（図IV-67～70、写IV-24～27）

床面IIから出土した埴輪は、コンテナにして20杯と一番少ないものであるが、大きな破片があり、しかも、外面を上面にして敷き並べたような状態で出土している（図IV-66）。個体確認できたものが20



図IV-70 塙輪窯P-1床面II出土埴輪(4)

点、口縁部破片5点、底部破片18点を数える。

この床面IIから出土した大型の埴輪は、大きく2種類に区分できる。

その一は、床面Iの埴輪の形態・成形・調整等、余り変わらないもので、口径約40cm、器高約90cmを測り、わずかに外反する口縁部に寸胴形の体部をもつものである。

これらの埴輪を床面Iの埴輪と比較すると、大きな差異は、器壁が1.5cmとやや厚くなることと、内面の調整がタテハケおよびナナメハケを施すもの(図IV-67)の他に、ナデおよび板状工具圧痕を残すもの(図IV-68、69-2)がある点である。

図IV-68-1は、体部7段凸帯6本あり、口縁端部外面に凸帯を一本付加し、断面逆L字状の口縁部をもつ。約1/2が灰原から出土している。凸帯は、断面台形の厚みの薄いものである。底端部に木の葉圧痕を残している。

その二は、口径約30cmとやや小さく、体部が下ぶくれて底部が最大径をもつものと思われる。器壁の厚さは、約2.5cmと厚く、凸帯の形状は断面山形で大きく張り出し、凸帯下に指ナデによる下描き線が施される。凸帯の間隔は18~20cmと広くなる。体部外面の調整はタテハケを施し、内面の調整は指ナデを施す。図IV-69-1は、1段のみ体部外面にタテハケ後ヨコハケおよびナナメハケを付加している。図IV-69-3は、口縁部がわずかに外反し、口縁端部が凹面をなし内外面にわずかに拡張し、口縁部内面が凹面をなす。灰原出土のものと接合する。

同図-4は、体部4段凸帯4本残存しており、ヘラ記号および二重円形重浮紋を施す。紋様のある段には、透かしは穿たれない。この埴輪も灰原出土のものと接合する。この種の埴輪の透かしは、円形で



図IV-71 墓輪窓P-1床面III 墓輪接合状況

あるが2個1対で穿たれることは稀で、法則性がない。

図IV-69-1は、下端部が切られたように平坦面をもち、疑底部をなす。

図IV-70は、特大の埴輪で口径62cmを測り、体部5段凸帯4本を残す。口縁端部外面は、方形の凸帯を付加したように作りだし、以下、山形の凸帯を付ける。調整は、外面タテハケ、内面の口縁部付近がヨコハケ、以下指ナデおよび板状工具痕を残す。この埴輪は、床面Ⅲ出土および灰原出土のものと接合する。

以上から床面Ⅱで出土した埴輪の特徴には、床面Ⅰの埴輪の形態・成形・調整等を継承している一群（前者）と、器壁が極端に分厚くなり、凸帯の付け方も間隔・形態等が粗雑になるが凸帯下に下描きの指ナデを施し、透かしの配置も不統一になっているもの（後者）があり、両者に共通するものは、胎土のみである。

### （3）床面Ⅲ出土埴輪（図IV-71～78、写IV-28～32）

床面Ⅲから出土した埴輪は、コンテナにして約60杯である。個体確認できたものは53点あり、口縁部破片95点、底部破片50点を数える。完形のものが2点出土しており、それに近いものも数点あり、原位置を保っているものもある（図IV-71参照）。

この床面Ⅲの埴輪の形態は、大型のもので、大きく3種類に分けられる。

その一は、図IV-72-1のように、口縁部が約43cmと最大径を示し、底部の約1.5倍の、ラッパ形で、器高は90cmを測る。体部7段凸帯6本で、不定位置に円形透かしを穿っている。調整は、外面タテハケ、内面口縁部ヨコハケ、以下タテハケおよび指ナデを施す。底端部に木の葉圧痕を残す。

底側部内外面は、成形時の指ナデを残すのみである。凸帯の形状は断面方形ないしは台形で、上・下および凸帯上の3方をヨコナデで仕上げる。凸帯下に下描き沈線紋を残す。

この種の埴輪は、口縁部の長さが約15～20cmと長いものであり、口縁端部が丸みをもつ。

その二は、寸胴形の体部をもつもので、口縁部が短く直立するもの（図IV-73-1,4,5）と、わずかに外反するもの（図IV-74-1,3）等がある。いずれも、口縁部の端部は丸みをもつものと面をなすものがある。

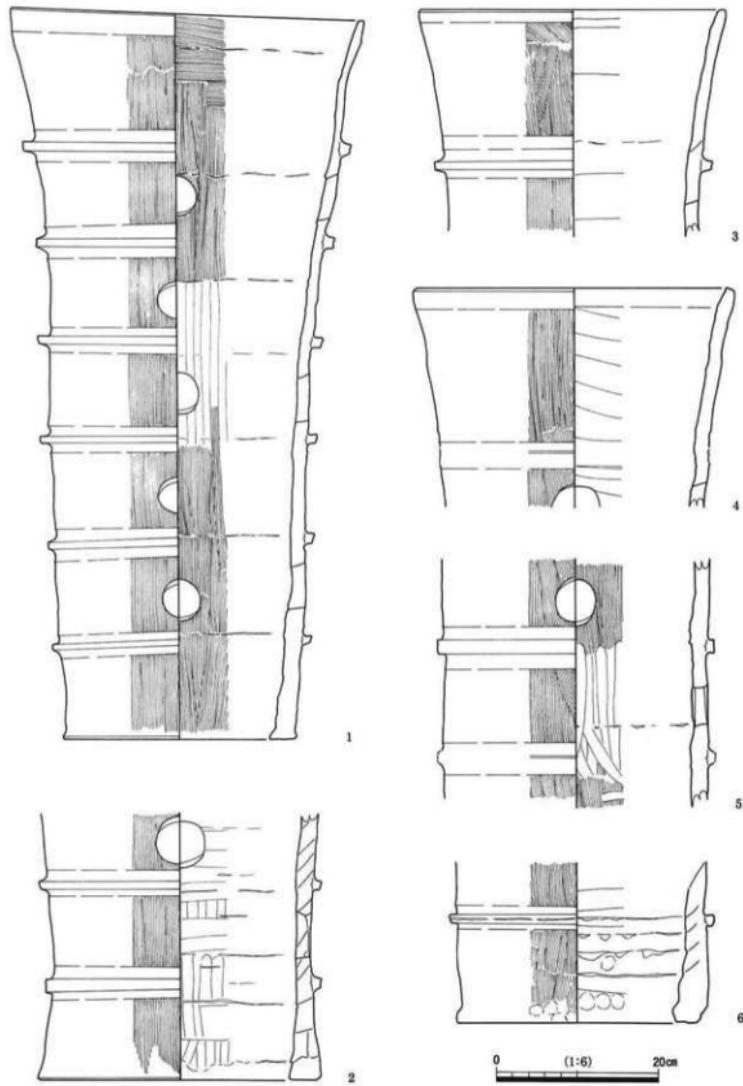
調整は、いずれも、外面タテハケを施すが、内面は多様である。図IV-74-1,2は、指ナデおよび板状工具痕、同図-4は、前者にタテハケが付加され、図IV-75-5はタテハケのみ、図IV-76-3は、指ナデのみである。これらの埴輪の凸帯は、その一の埴輪と同様である。

この埴輪の一群に、体部に装飾を施すものが数点ある（図IV-77-1,2,4）。同図-3は、底部の1個所に縱位の浮紋を付けたものである。

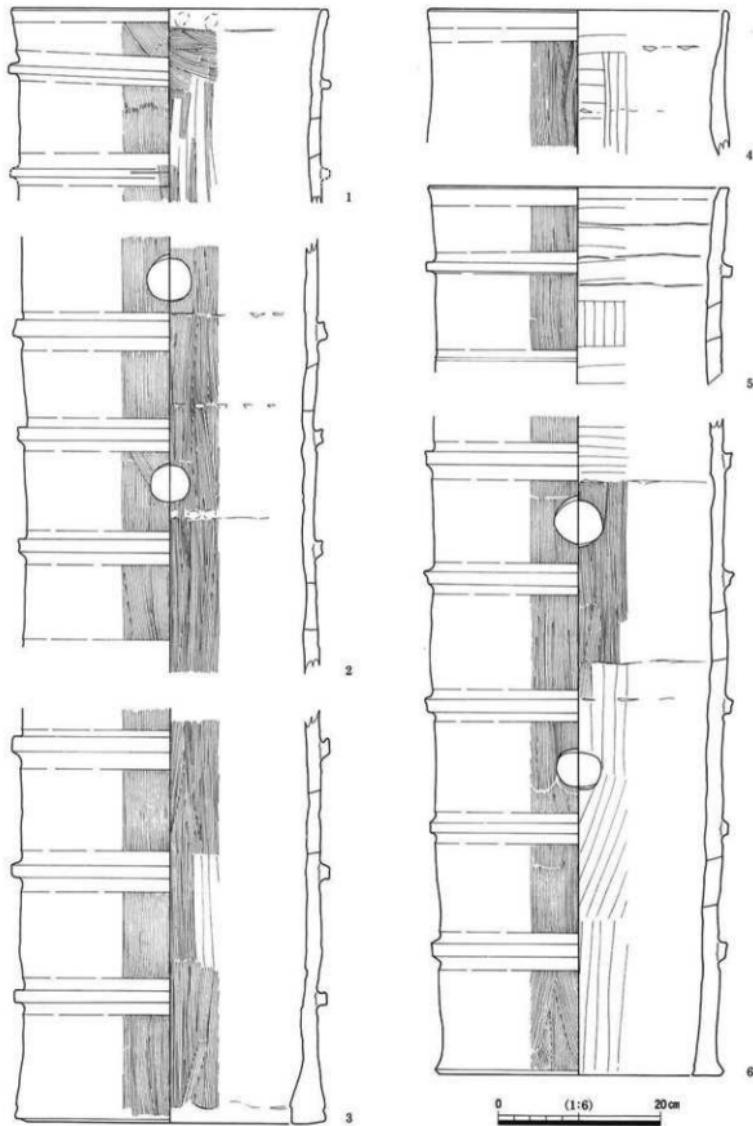
その三の埴輪は、全体形が定かではないが、やや幅広いM字形の凸帯が、前2種の埴輪の凸帯の間隔より狭く、最下段の凸帯が底部間に付く（図IV-78-2,4～6）の一群である。凸帯下には、下描き線は施されない。調整は、外面タテハケ、内面ヨコハケおよびナナメハケを施す。底端部には、木の葉圧痕が残る。この種の埴輪の口縁部には、図IV-78-3のような口縁が付くと思われる。

特大型の埴輪は、1点のみ出土しており口径48cm、器高92cm以上を測る。口縁部は、幅広の段をもち寸胴形の体部である。凸帯は、やや幅広の断面M字形のもので、その間隔は10cm程度である。調整は、口縁部外面ヨコハケ、体部外面タテハケ、内面ヨコハケおよびナナメハケを施す。円形の透かしを2個1対交互に穿つ（図IV-78-1）。

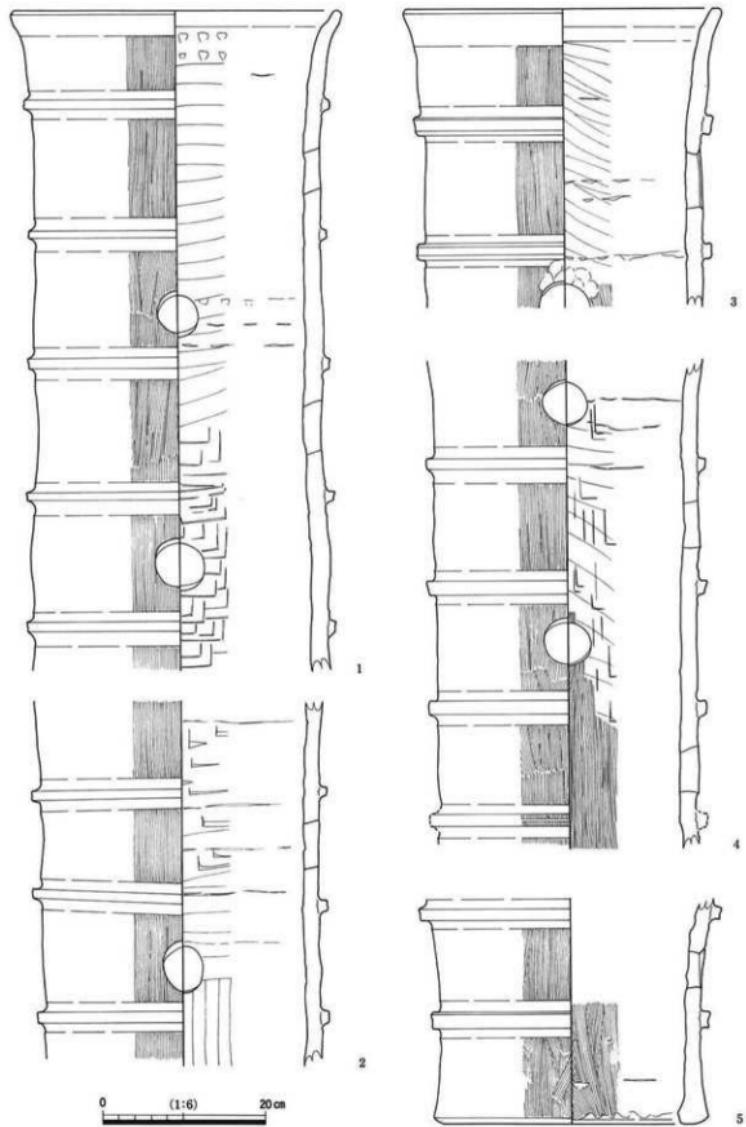
以上、床面Ⅲから出土した埴輪の特徴で共通するものは、器壁の厚さが2cm前後であり、凸帯の間隔



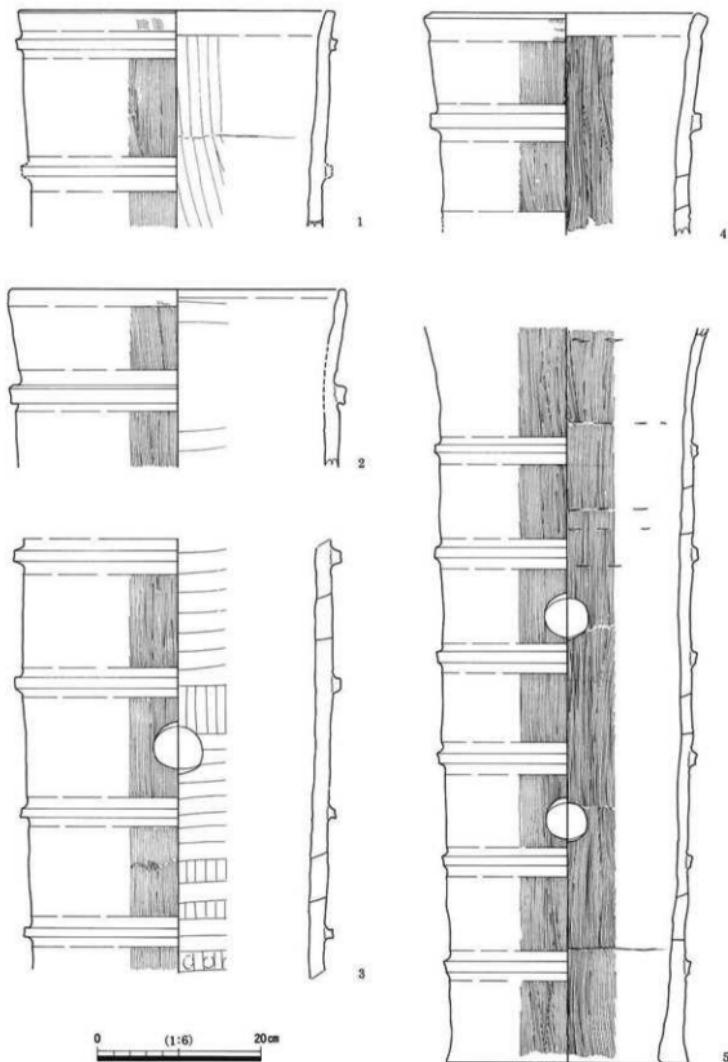
図IV-72 塗輪窯P-1床面III出土埴輪(1)



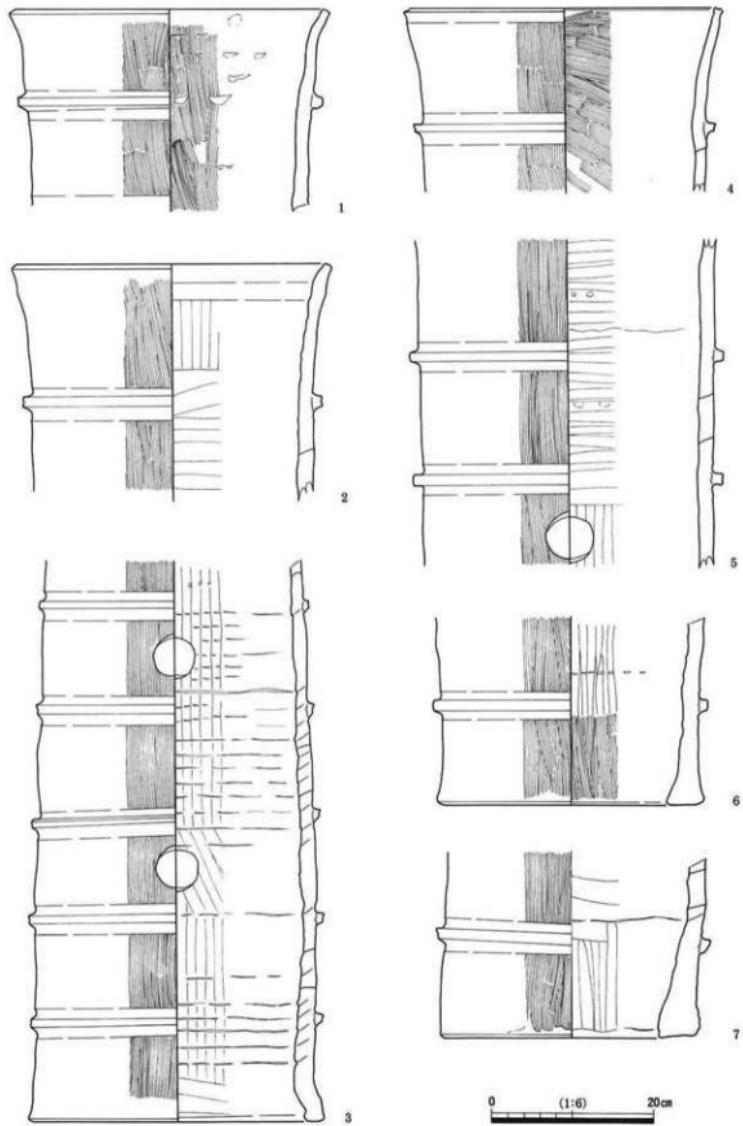
図IV-73 墳輪窓P-1床面III出土埴輪(2)



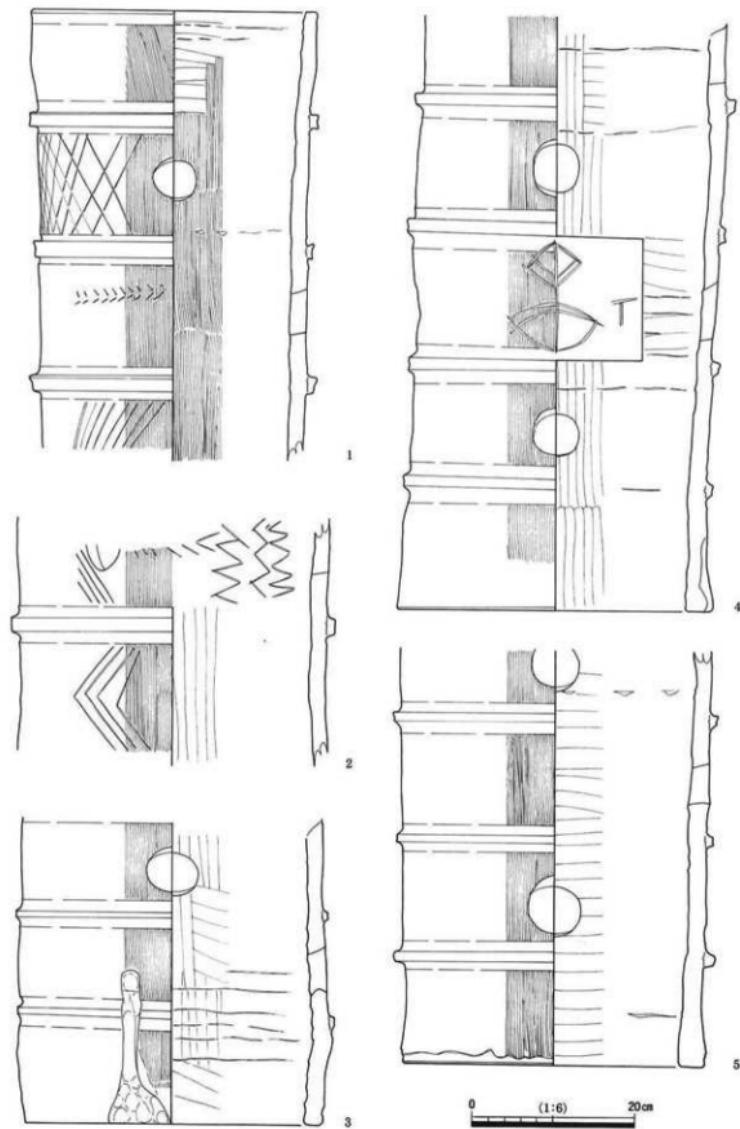
図IV-74 墳輪窯P-1床面III出土埴輪(3)



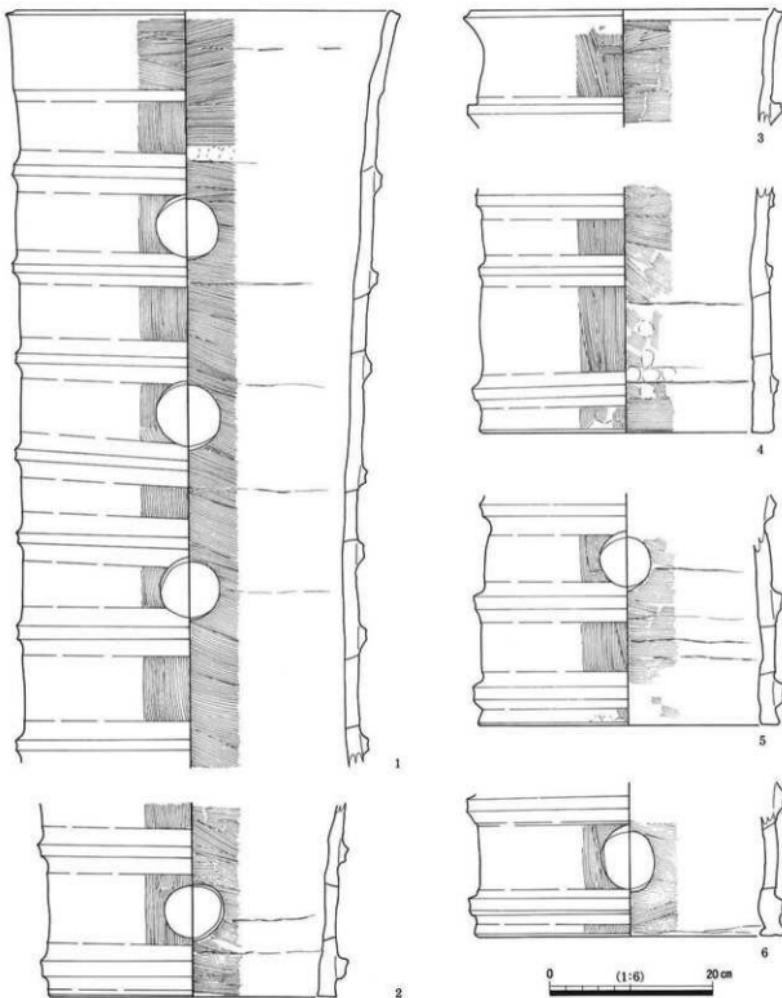
図IV-75 塙輪窯P-1床面III出土埴輪(4)



図IV-76 塙輪窯P-1床面Ⅲ出土埴輪(5)



図IV-77 増輪窯P-1床面III出土増輪(6)

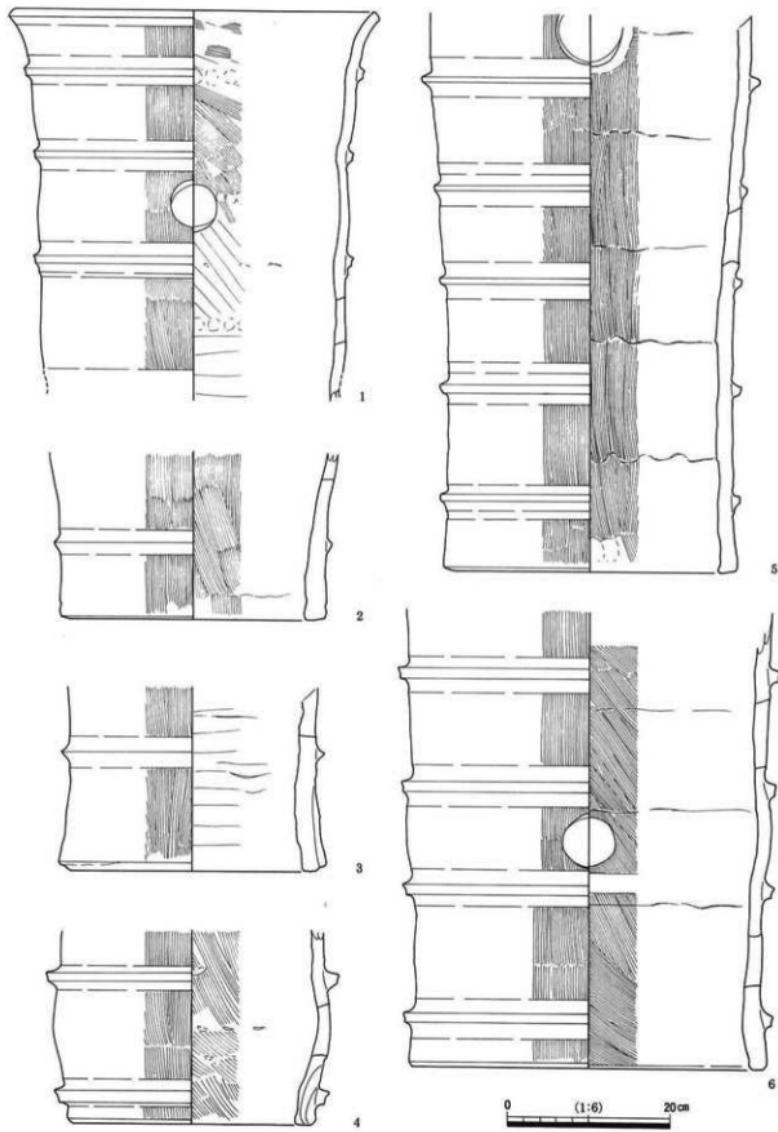


図IV-78 増輪窯P-1床面III出土埴輪(7)

がほぼ一定に施され、透かしが円形で2個1対を交互に穿っている点である。

(4) 灰原出土埴輪(図IV-79~91、写IV-33~48)

埴輪窯P-1の灰原から出土した埴輪は、コンテナにしておよそ300杯である。この数量は、厳密には須恵器の灰原に混入していた埴輪や、古墳時代以降の包含層から出土した埴輪をも含んでいる。これは、



図IV-79 塗輪窯P-1 灰原出土塗輪(1)

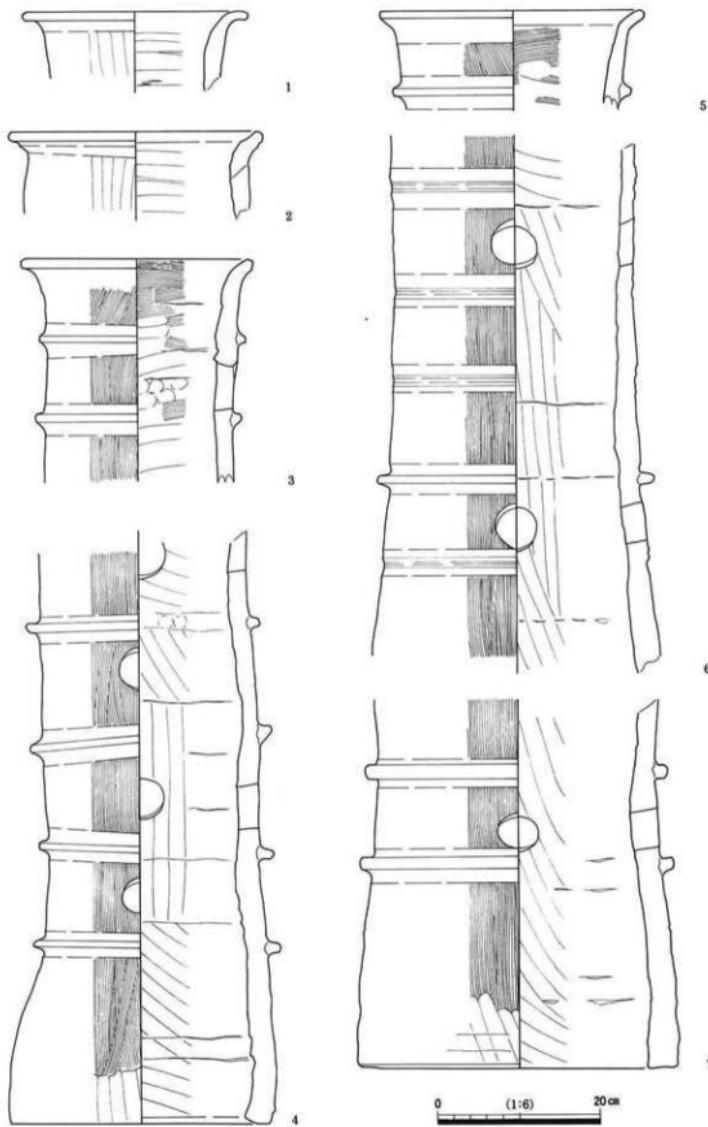


図 IV-80 塗輪窯P-1 灰原出土塗輪 (2)

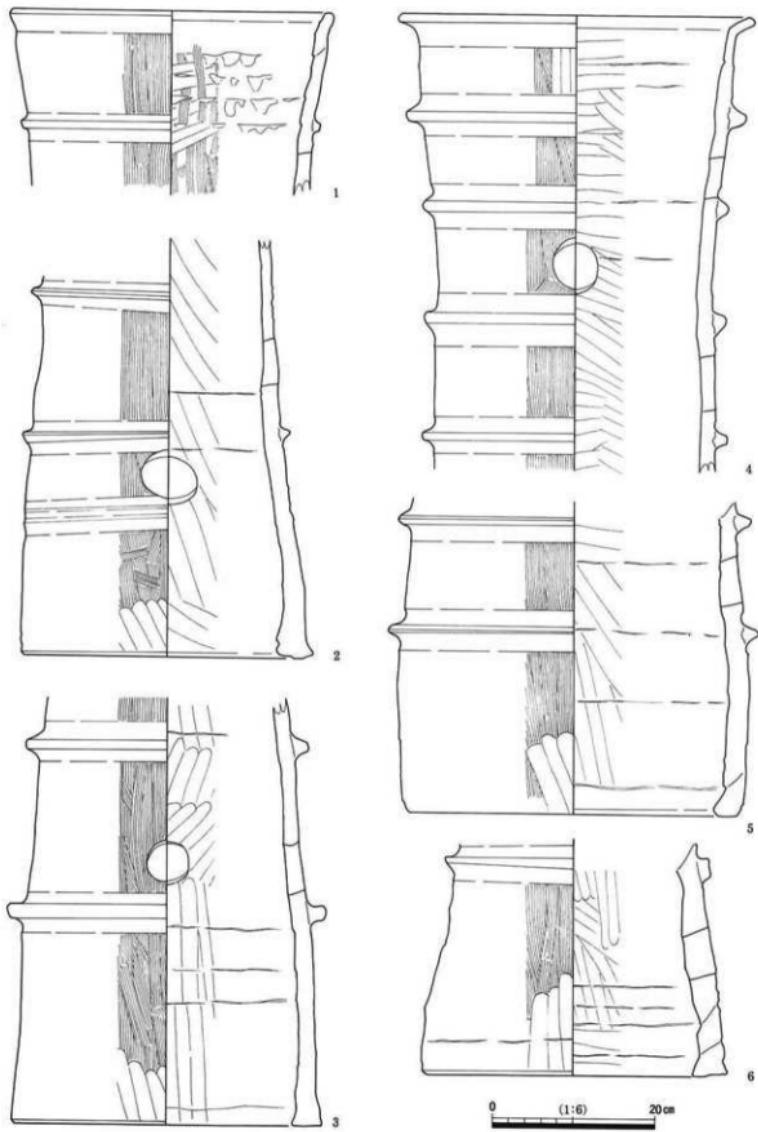
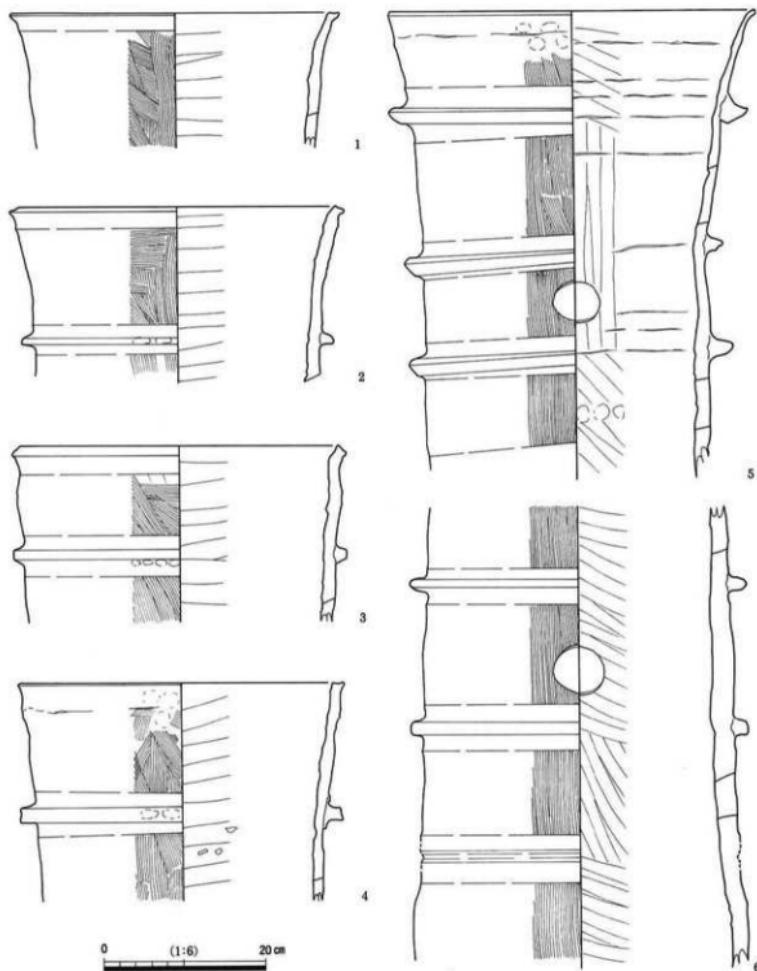


図 IV-81 増輪窯P-1 灰原出土増輪 (3)



図IV-82 塩輪窯P-1 灰原出土埴輪（4）

塩輪窯P-1の灰原が隣接する須恵器窯灰原と重なっており、須恵器と埴輪が混在していたこと、また、灰原が後世に削平を受けたために上層にかなりの量の埴輪が混入し、それらが灰原の埴輪と多々接合したためである。ここではこれらを一括して記述することとする。

灰原から出土した埴輪は淡黄褐色のものが多く、窯から出土した埴輪が赤褐色をしているのと対照的で違いが一目瞭然である。しかし、これは両者が接合することから保存状況の違いによるものと思われ

る。

灰原から出土した埴輪には、円筒埴輪が多量にあり、それ以外には、人物埴輪・家形埴輪等の形象埴輪がわずかにある。以下、器種ごとに記述していく。

#### A 円筒埴輪（図IV-79～83, 85～89、写IV-33～37, 40, 41, 46, 47）

灰原から出土した円筒埴輪は、大型の埴輪がほとんどを占め、特大型が数点、小型が1点のみある。個体確認できたものが60点以上ある。

以下、埴輪窯P-1の床面出土埴輪と対比させながら記述していく。図IV-79の埴輪は、床面Iもしくは床面IIから出土する埴輪と同様の特徴を備えるものである。量的には、この種の埴輪が一番少なく、図示できたもののみである。

図IV-80は、器壁の厚みおよび形態から床面IIに伴う埴輪の一群である。口径より底径が大で、器壁の厚さが2.5cm前後とかなり分厚いことから、体部を支えるために底部がより分厚く下ぶくれになるタイプで、底側部外面にタテハケ後縦方向の指ナデを付加するものである。これらの埴輪は、完形になるものが無く全体像が不明ではあるが、口縁部を残すものと約2/3を残すものから、おおよその形が復元できる。それは、図IV-80-3, 4を合体させたもので、短く外反する口縁部にやや裾広がりの体部6段に凸帯6本である。体部の径が小さく器壁の厚みが最も多く、凸帯の間隔が幅広く歪んで付けられることが多い一群である。調整は、外面タテハケ、底部付近のみ縦方向の指ナデを付加し、内面口縁部にヨコハケないしは横方向の指ナデ、以下縦および斜め方向の指ナデを施す。凸帯は、断面山形で丸みをもち、凸帯下に指ナデによる下描き線を残す。

前述の埴輪の形態・調整等同様なもので、器壁の厚みが1～2cmと薄い一群（図IV-81-1～4）がある。これらの埴輪の特徴は、口縁部が残存していたもので見れば、図IV-82-5のように内外面に粘土紐の維ぎ目が顕著に残るものがある。凸帯の付け方も指頭圧痕を凸帯の上・下および凸帯上に顕著に残すものが多い。これらの埴輪の一群は、灰原からのみ検出されており、窯からは出土していない。

なお、同種の埴輪で径20cmの小型のものが1点のみ出土している（図IV-83-3）。

図IV-85～89の埴輪は、床面IIIから出土した埴輪と同様の埴輪である。ラッパ形および寸胴形ないしはその中間タイプがあり、数量的には、これらが最も多量に出土している。

#### B 人物埴輪（図IV-83, 84, 90, 91、写IV-37, 38, 39, 42, 43, 44）

人物埴輪は、おおよその形態がわかるものが2点出土しており、他に顔や手の部分、衣服の一部等がある。最も残りのよい図IV-84を見れば、2点ともに、髪形が下げミズラをしていることから身分の低い農夫であろう。

図IV-84-1は、左胸に指を横に貼り付けてあり、右手を左胸に当てていたことがうかがわれる。腕は、体部に貼り付けた痕跡が見られる。衣服は省略されており、タテハケ後縦方向の指ナデを部分的に施している。顔の部分は粘土が1枚剥がれており、目・口を穿ち、眉は粘土を貼り付けている。頭部は指ナデにより、天頂部がやや平坦に仕上げられている。下げミズラを付けているが、他に髪の毛は表現されていない。脚部付近のくびれ部に断面方形のやや大きめの凸帯が1本付く。体部内部の調整は指ナデによる。頭部と胸部を別々に作り、接合している。このことは、頭部と胸部の粘土の厚みが違うところからもわかる。

図IV-84-2は、頭部の2/3を欠損するが、下げミズラを螺旋状に紐で結わえており、径0.9cmの円錐形の孔を穿ち耳の孔を表現している。目・口も穿たれている。この埴輪も前者と同様に衣服は表現され

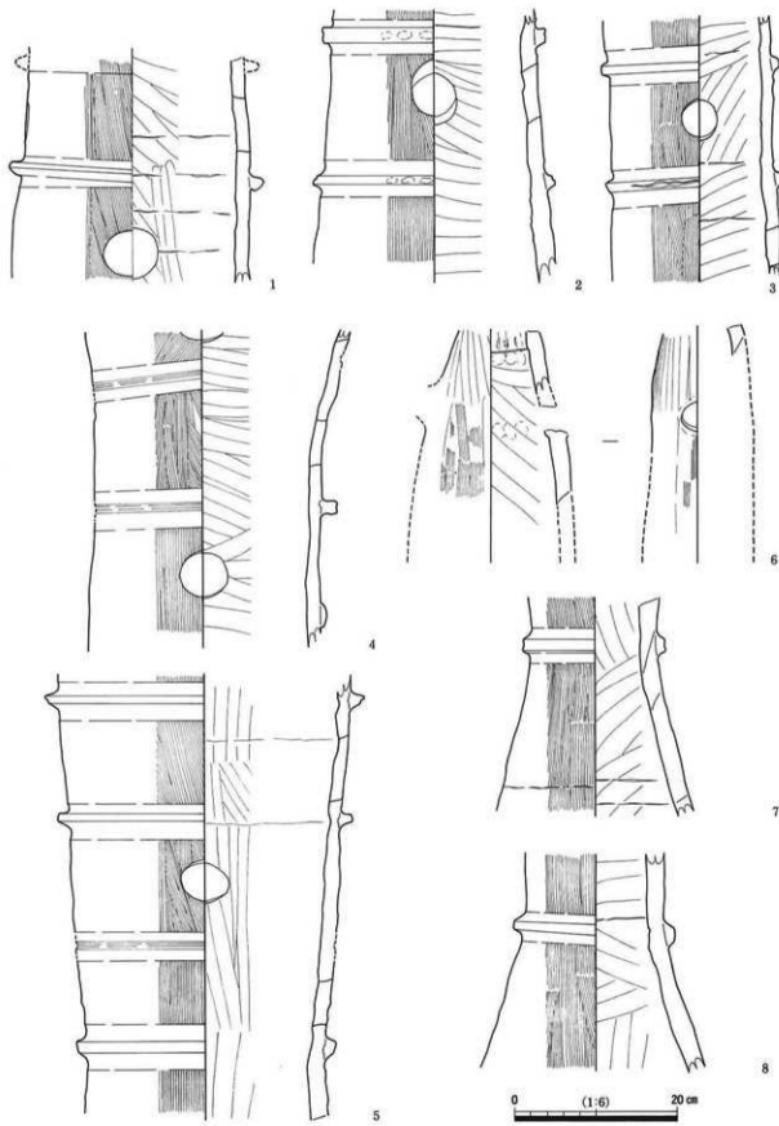
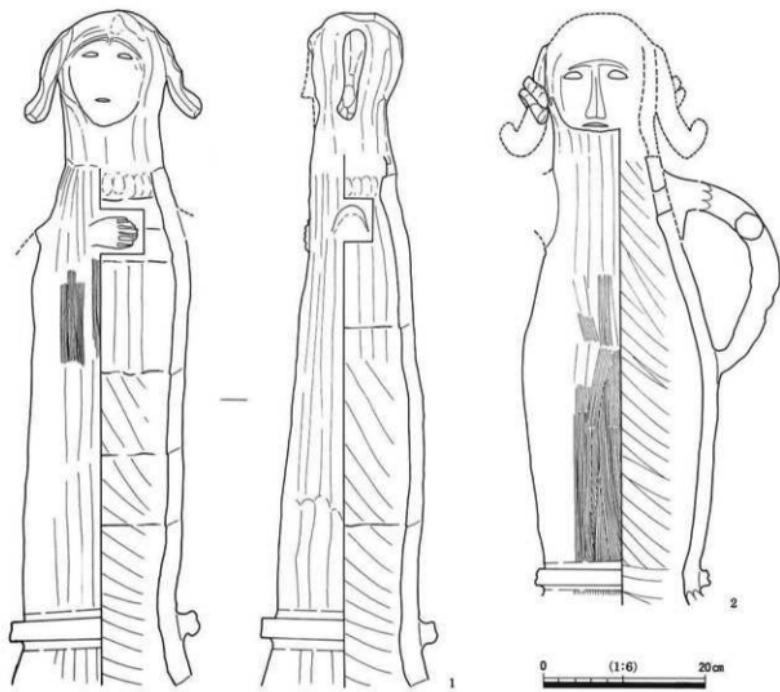


図 IV-83 塗輪窯P-1 灰原出土埴輪 (5)



図IV-84 墓輪窯P-1 灰原出土埴輪(6)

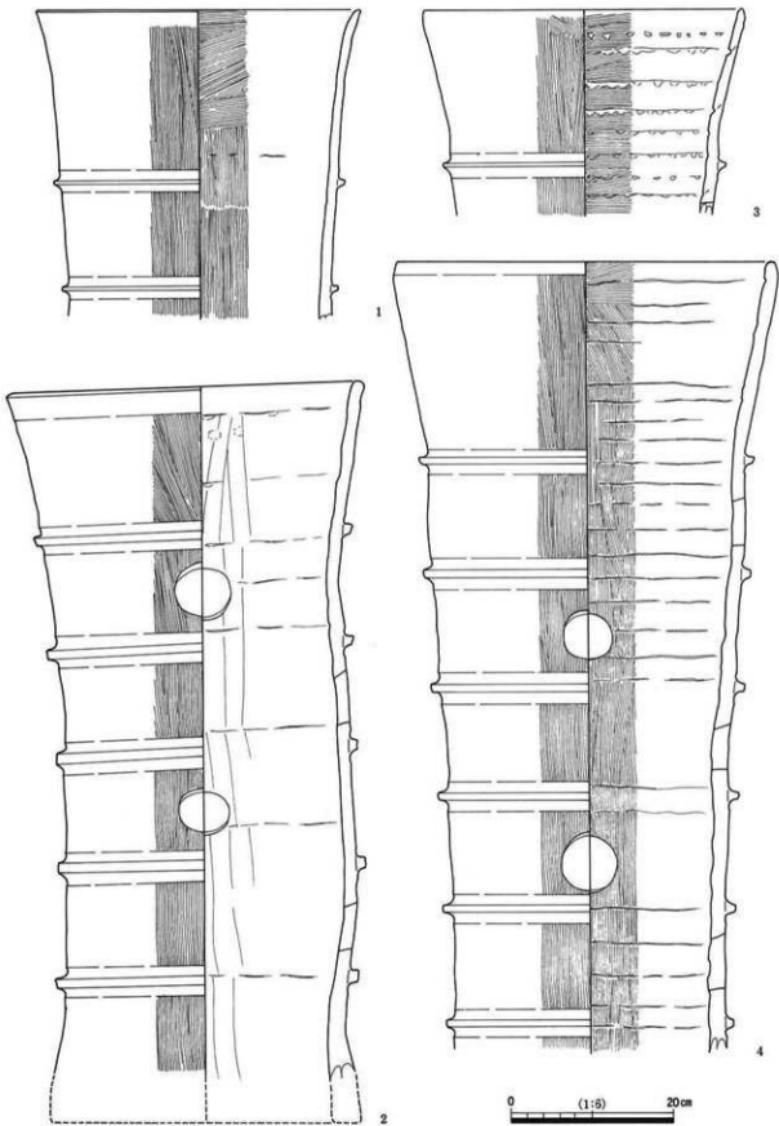
ておらず、タテハケおよび縦方向の指ナデを施している。手は左手が残存し、腰に当てた状態である。手は粘土を貼り付け、指は5本へラ描きによる。腕は挿入式であり、右腕は孔の穿たれ方から多く上方へ挙げられていた可能性がある。成形の仕方は前者と同様で、頭部と胸部が別々に作られ接合されている。脚部付近のくびれ部に方形の凸帯を1本付ける。凸帯下に下書き線は無い。

他に、人物埴輪の頭部（図IV-90-1～4）、下げミズラ（5）、腕（6, 8～10）、衣服（7）、脚（12, 14）、武人の草履（図IV-91-7）がある。

図IV-90-1の頭部は、髪を上で結わえたもので巫女の可能性がある。腕は（8, 9）のように、粘土を1枚被せてあり、衣服を着ていたものと思われる。脚は、中実のもの（14）と中空のもの（12）がある。いずれも屈曲しており、動物の脚の可能性がある。

#### C その他（図IV-90, 91、写IV-45～48）

その他の埴輪には、家形埴輪（図IV-91-1, 2, 5）、鞠形埴輪（3, 4, 6）等がわずかに出土している。図IV-91-1は屋根の上に乗る檼木で、両端にコンパス紋が描かれている。（2）は屋根の軒先で、（5）は屋根の大棟の一部でコンパス紋および斜格子紋が描かれる。鞠形埴輪は、部分のみであり、他の器種の可能性もある。



図IV-85 塗輪窯P-1 灰原出土塗輪 (7)

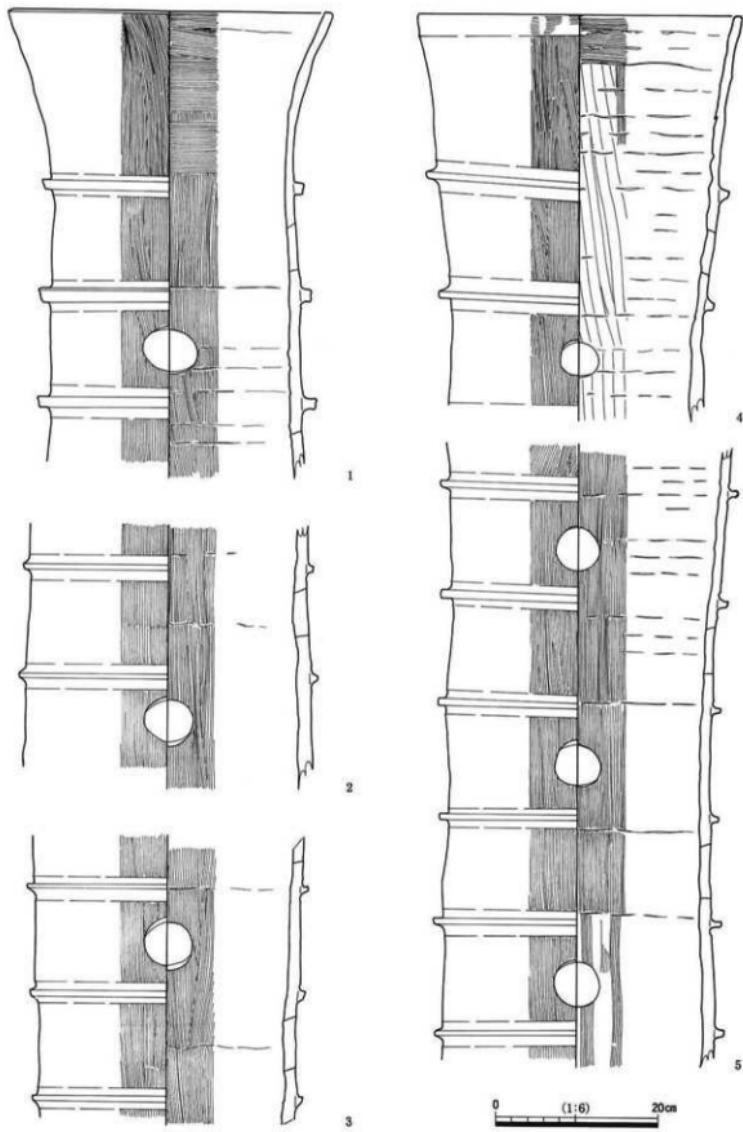


図 IV-86 塗輪窯P-1 灰原出土塗輪 (8)

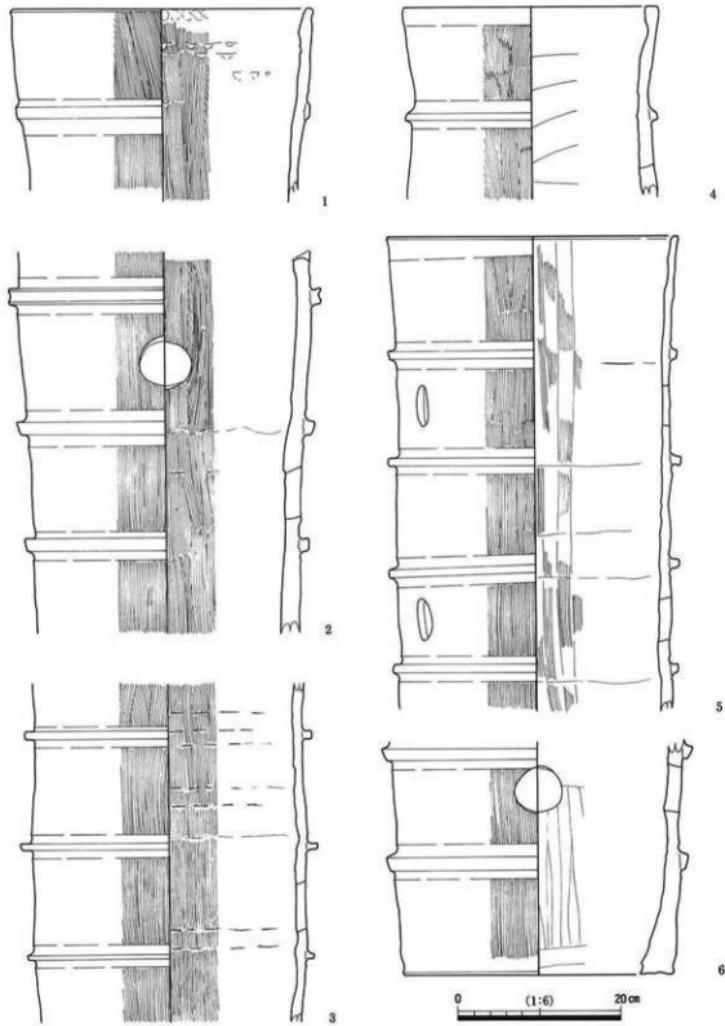


図 IV-87 塗輪窯P-1 灰原出土埴輪 (9)

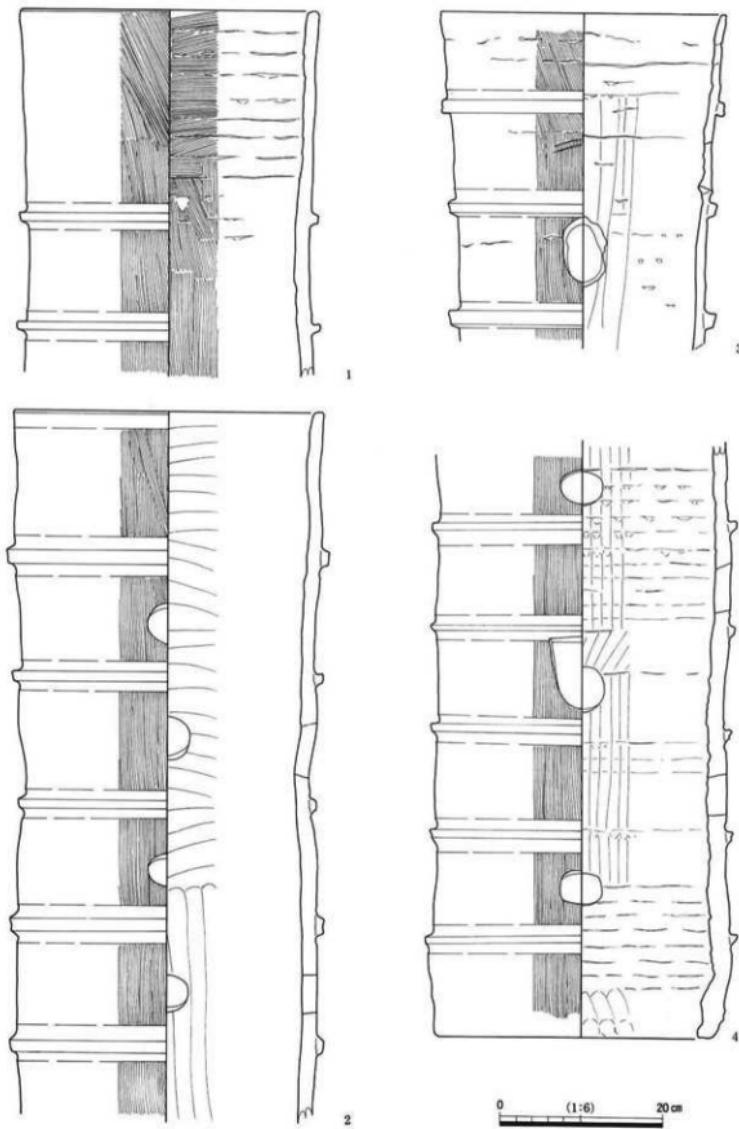
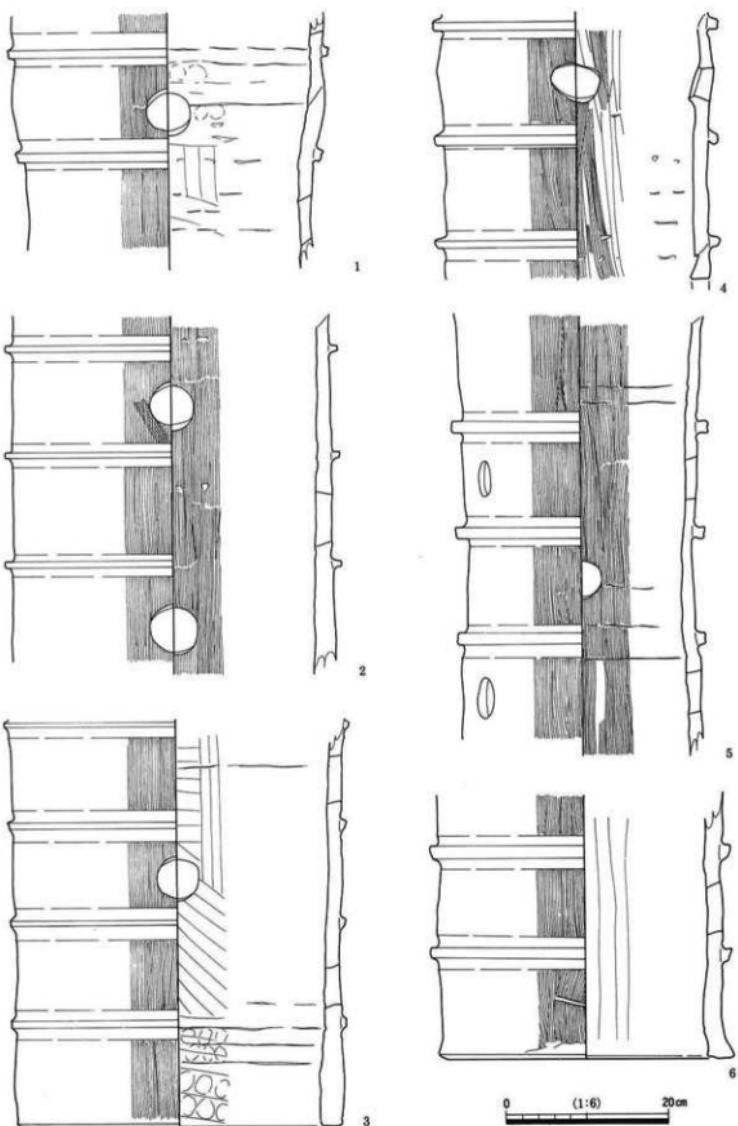
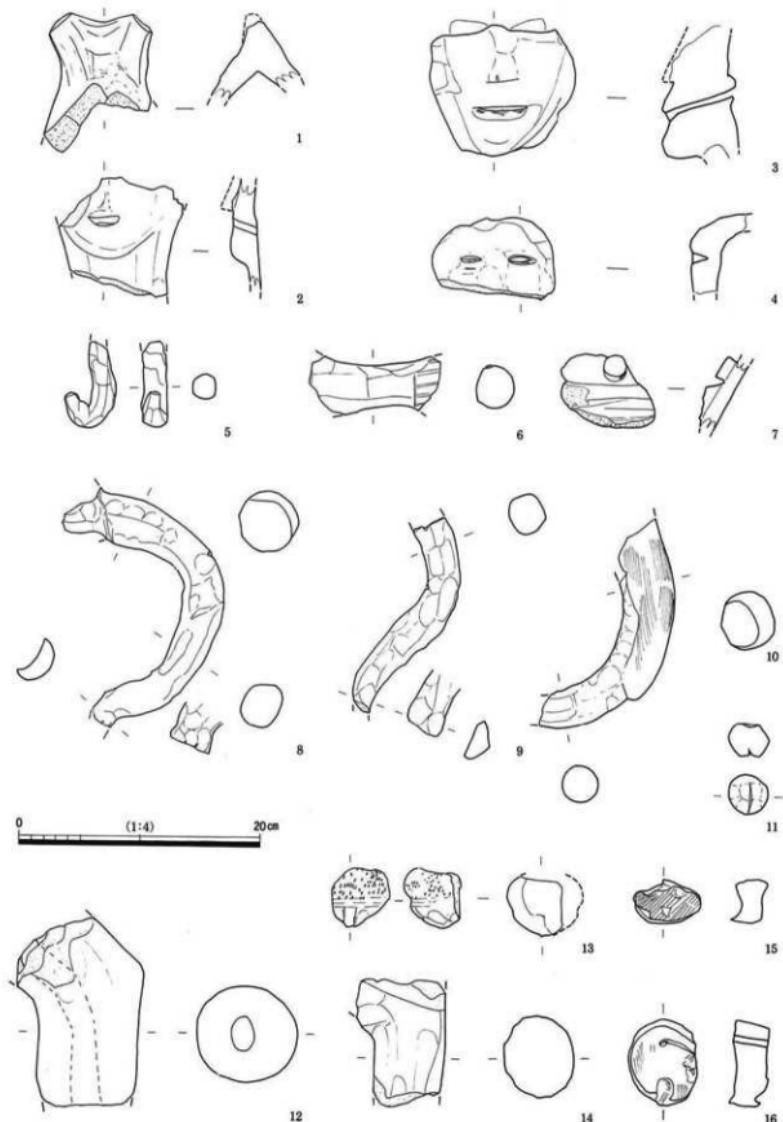


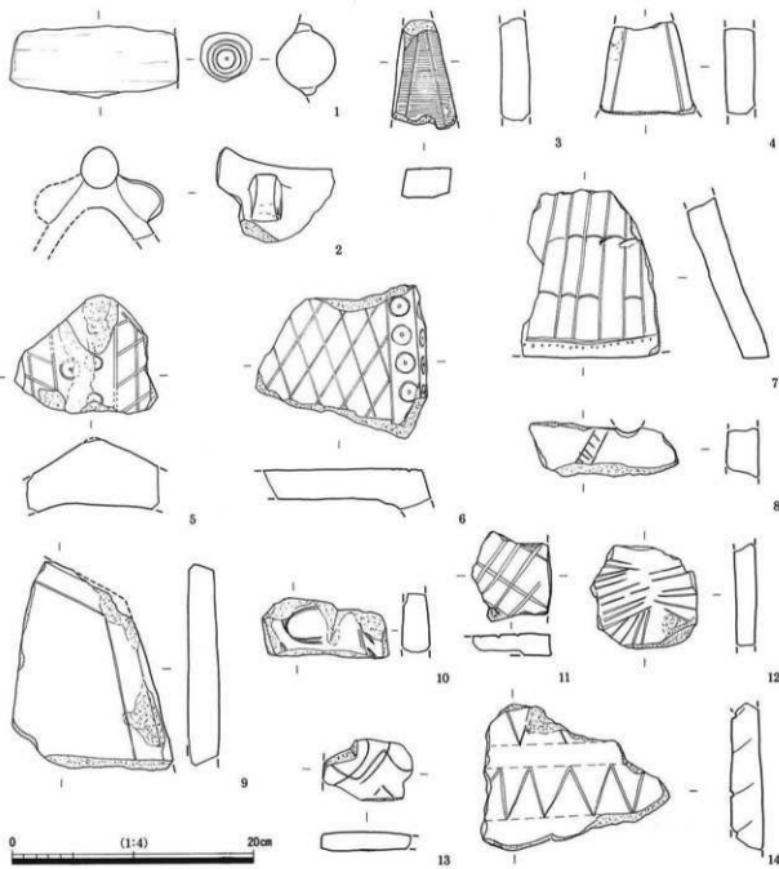
図 IV-88 塗輪窯P-1 灰原出土塗輪 (10)



図IV-89 塗輪窯P-1 灰原出土塗輪 (11)



図IV-90 増輪窯P-1 灰原出土増輪 (12)



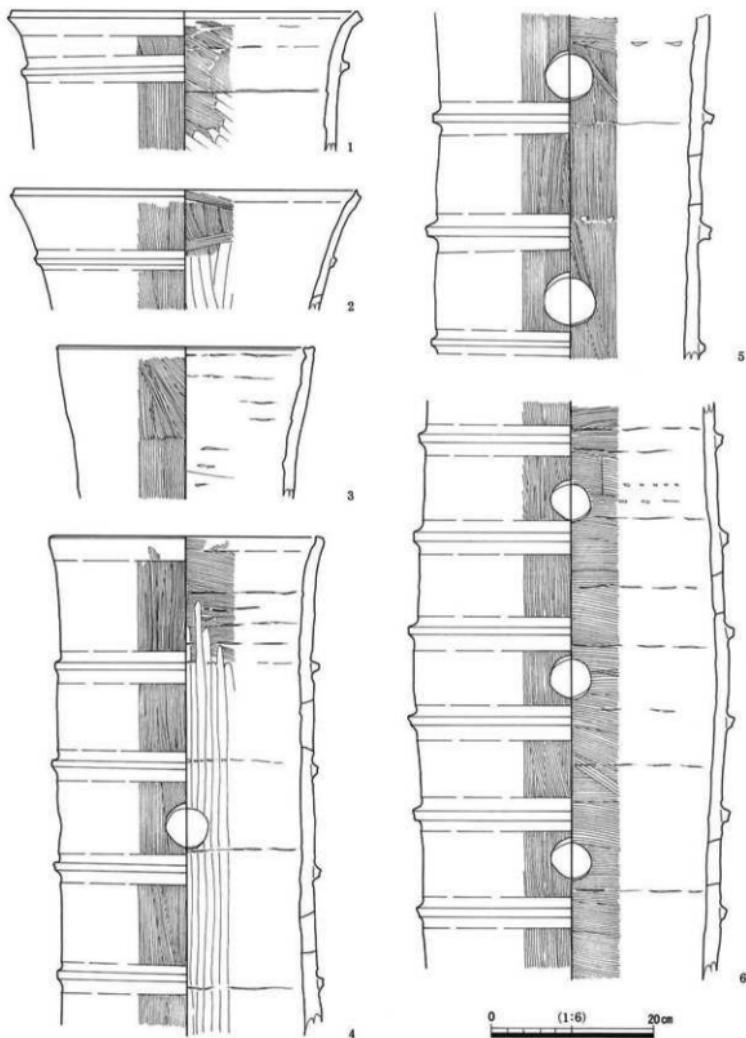
図IV-91 塗輪窯P-1 灰原出土埴輪(13)

図IV-90-11,13は鈴と思われ、人物埴輪の衣服ないしは馬形埴輪の馬具に付いていたものと思われる。同図15,16は、円筒埴輪の透かしを切り取ったもので、埴輪とともに焼成されたものである。その他に、写IV-46-1は陶棺と思われ、1角のみが残存している。周辺に方形の凸帯を2本巡らしていたと考えられ、内外面ともに丁寧なハケが施されている。角は、粘土紐の接合面で剥離している。

## 2. 塩輪溜まりP-1 および塩輪転用井戸P-1 出土遺物 (図IV-92,93、写IV-49)

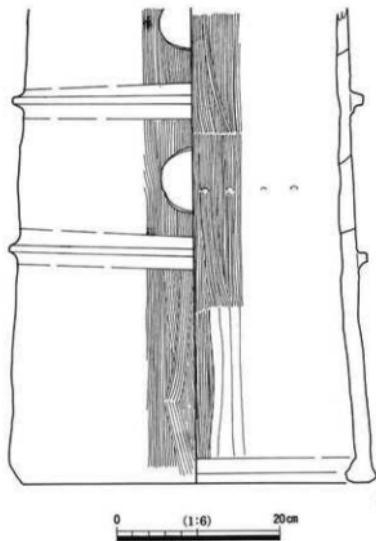
遺構の時期としては古墳時代以降に当たるが、埴輪としては、この時期に該当するためここで取り扱うこととする。

埴輪溜まりP-1は、埴輪窯P-1の東南東約20mの河道P-2の右岸に位置し、コンテナにして約3杯



図IV-92 墓輪溜まりP-1出土埴輪

出土している（図IV-92）。



図IV-93 増輪転用井戸P-1出土埴輪

前述の埴輪溜まりP-1のほぼ中央に、円筒埴輪を再利用した井戸（水溜め）があり、井筒に転用された埴輪は、下半部を残存しており、体部3段凸帯2本である。径45cmを測り、最下段の凸帯位置が高く、断面台形の凸帯を付ける。凸帯下に下描き線は施されない。調整は、外面タテハケ、内面タテハケおよび縦方向の指ナデを施す。円形の透かしを3方に穿つ（図IV-93）。

この種の埴輪は、埴輪窯P-1および灰原からは出土していない。

### 3. 須恵器窯P-1出土須恵器

（図IV-94～102、写IV-50～60）

須恵器窯P-1は、遺構の項でも述べたが、焼成部の床面の一部が残存していたのみで、全体形は不明である。床面は、遺物の出土状況から2面あったとされている。

以下、床面ごとに記述する。

#### （1）床面I出土須恵器

（図IV-94-1～31、写IV-50～52）

床面Iから出土した須恵器は、コンテナにして5杯と少量である。大甕の体部破片が2個体分ある。蓋杯は、セットの完形が20セットあり、その内落着しているものが7点であった。完形の杯蓋が22点、杯身が23点あり、他に小破片が杯蓋226点、杯身89点ある。

他の器種は、ほとんど出土しておらず、短頸壺の蓋・高杯・甕が各1点ずつあるのみである。

蓋杯のセットで出土しているもの内でヘラ記号を付しているものは、いずれのものも、同種のヘラ記号を杯蓋・杯身両者に施しているのが特徴である（写IV-50, 51）。

#### （2）床面II出土須恵器（図IV-94-32～38）

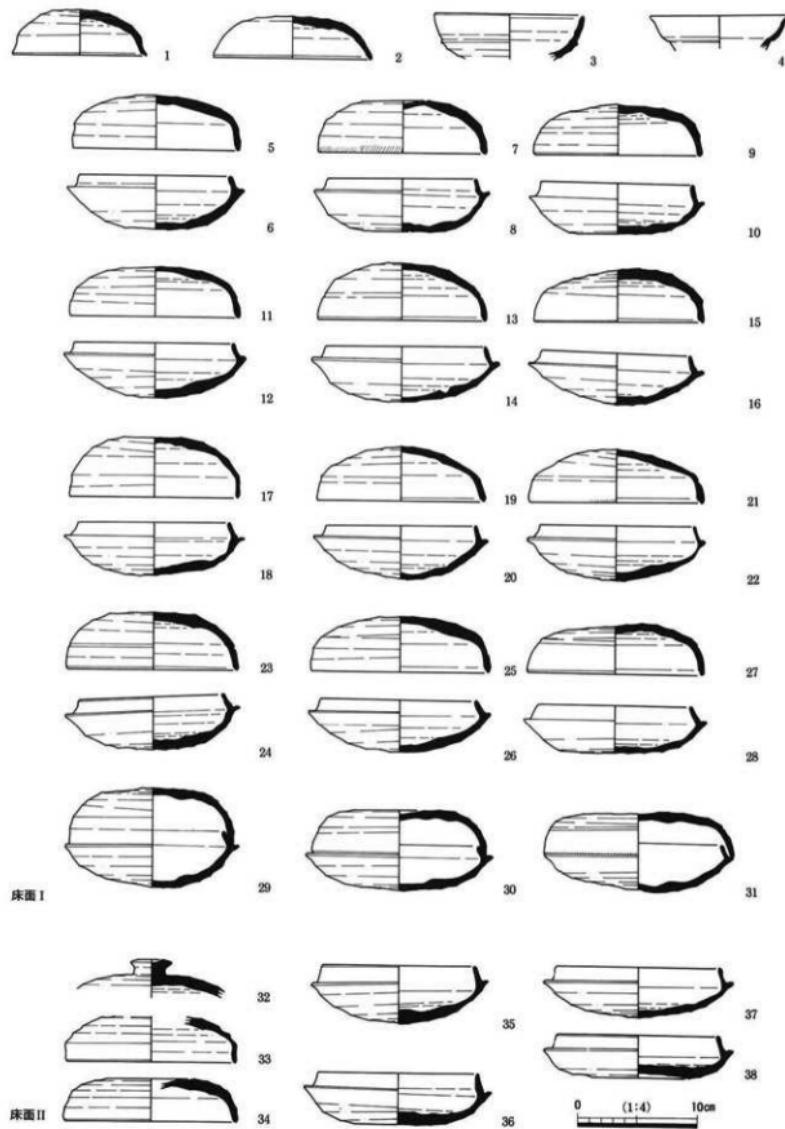
床面IIから出土した須恵器はわずかで、コンテナにして1杯である。小破片が多く、杯蓋13点、杯身22点である。他に、高杯の蓋・脚部が各1点、甕の体部破片等がある。この甕の破片は床面Iのものと接合した。その他、埴輪片がわずかに出土しているが、混入と思われる。

埴輪が混入することや、床面自体が「さほど焼けず暗茶色粘質土を示す」ことから、この床面IIは、床面では無い可能性もある。

#### （3）灰原出土須恵器（図IV-95～102、写IV-53～60）

灰原から出土した須恵器は、コンテナにして約300杯である。これらの須恵器は、前述した埴輪の灰原と同様で、埴輪の灰原からも大量に出土している。しかも、窯の前面の河道からは、最も多量に出土しており、灰原の須恵器と接合するものが多量にあることから、ここでは、時期差のないものを灰原出土遺物として取り扱うこととする。

灰原から出土した須恵器の器種は、蓋杯・高杯・甕・壺・甕・器台・堤瓶・横瓶等である。



図IV-94 須恵器窯P-1床面I・床面II出土須恵器

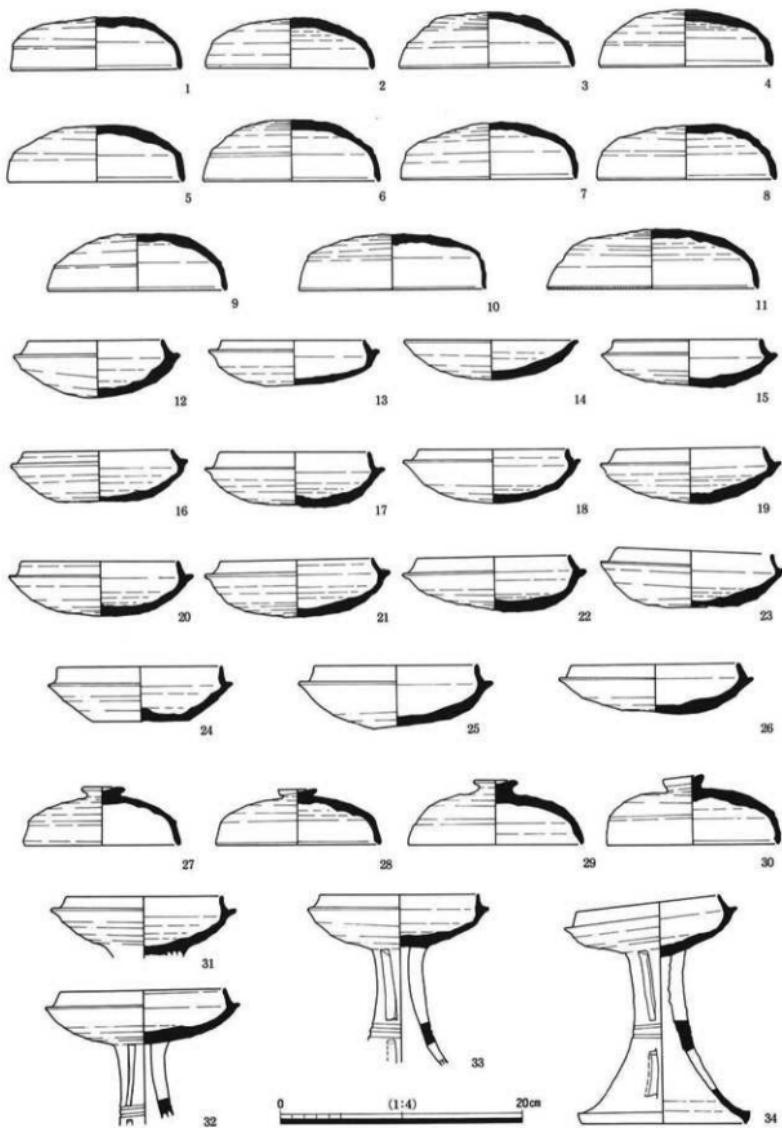
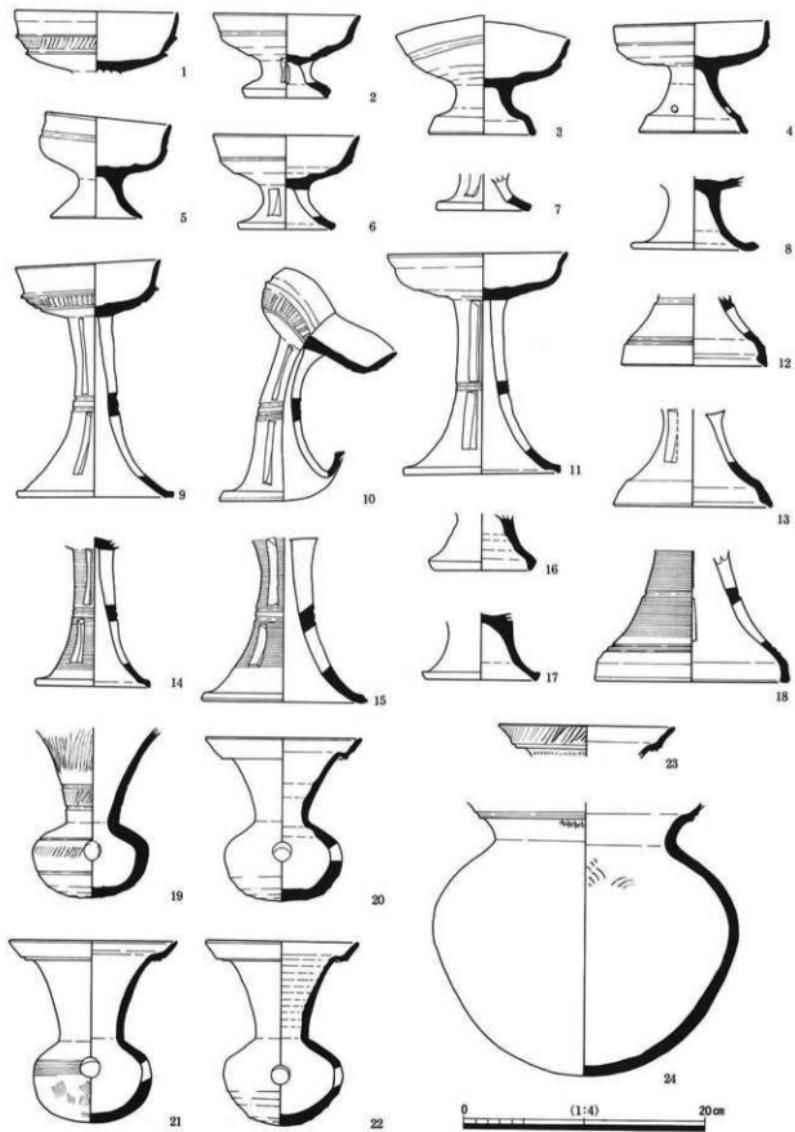


図 IV-95 須恵器窯P-1灰原出土須恵器（1）



図IV-96 須恵器窯P-1 灰原出土須恵器（2）

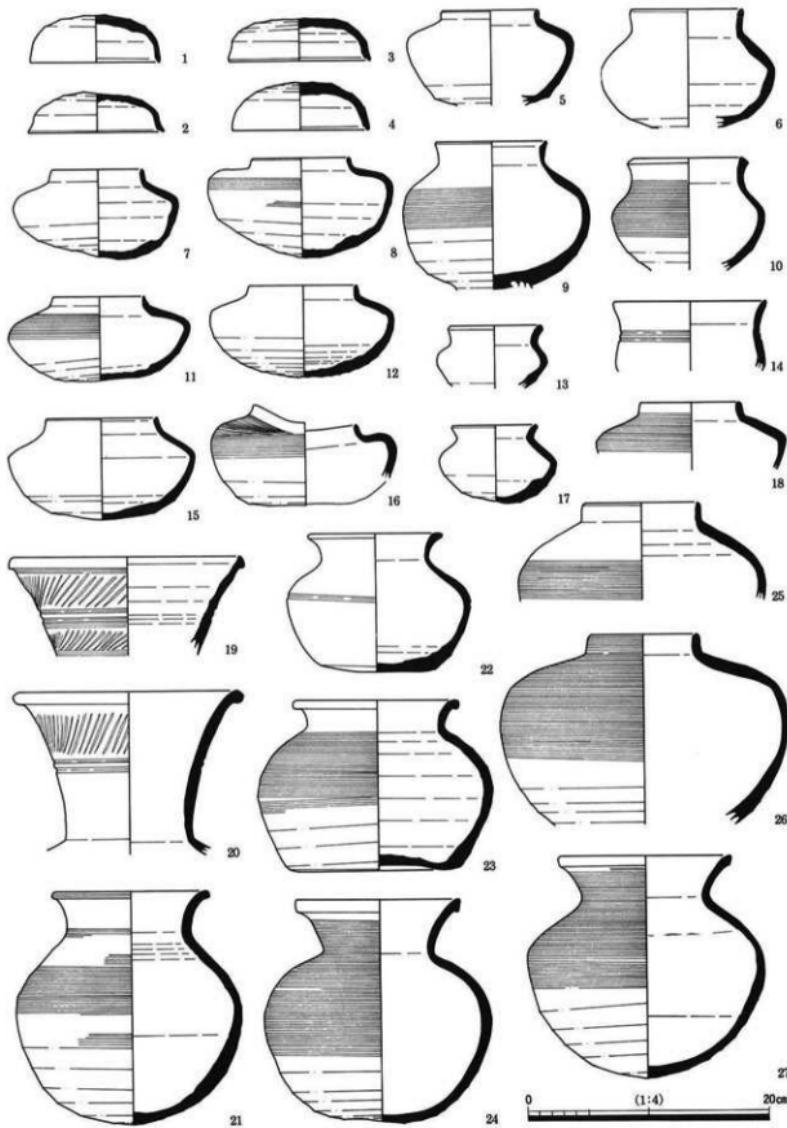
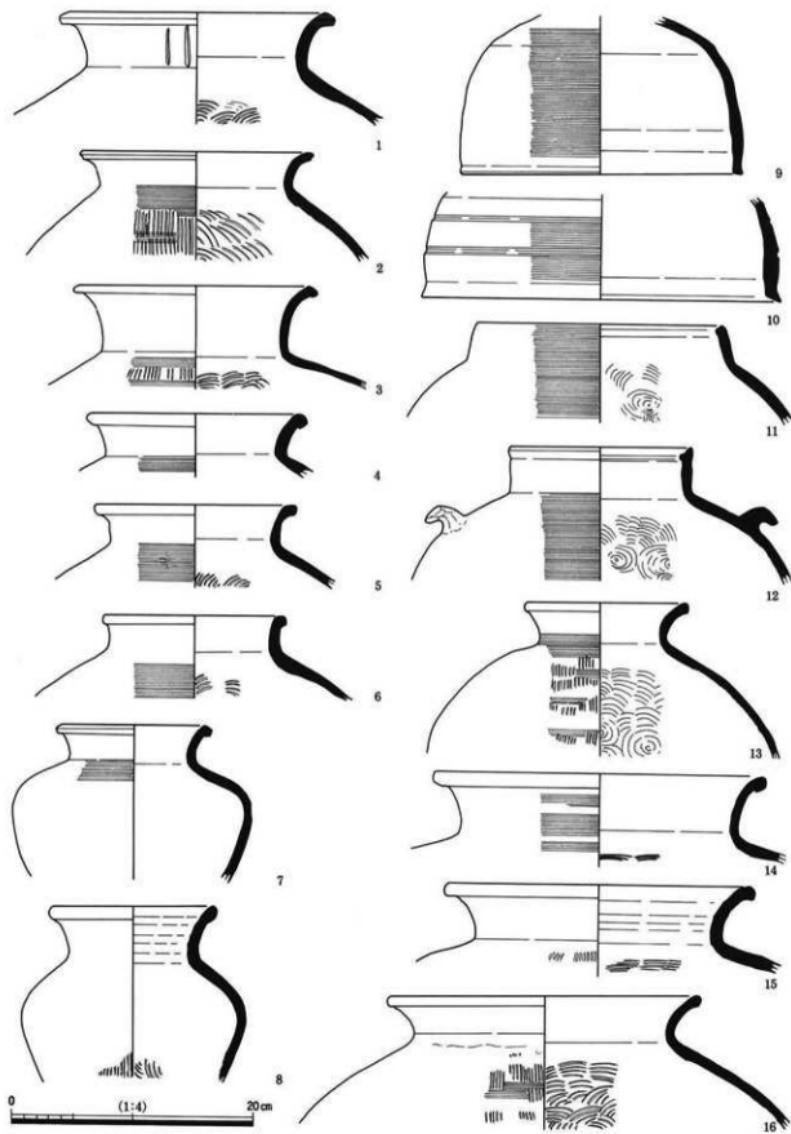


図 IV-97 須恵器窯P-1灰原出土須恵器（3）



図IV-98 須恵器窯P-1 灰原出土須恵器 (4)

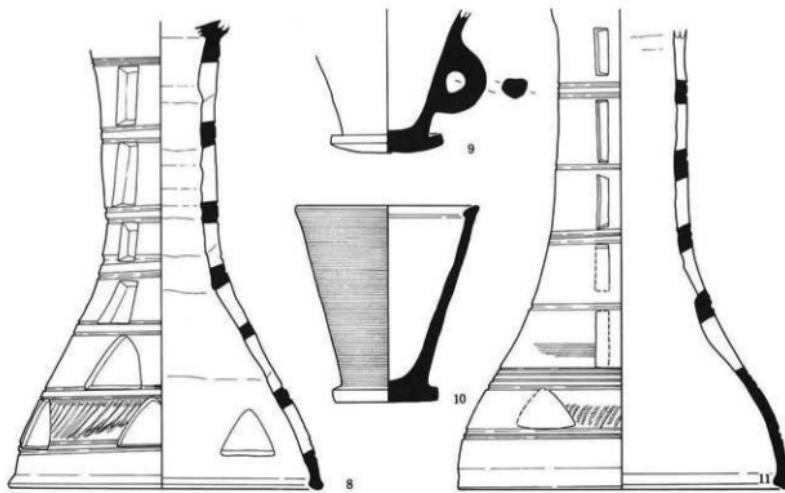
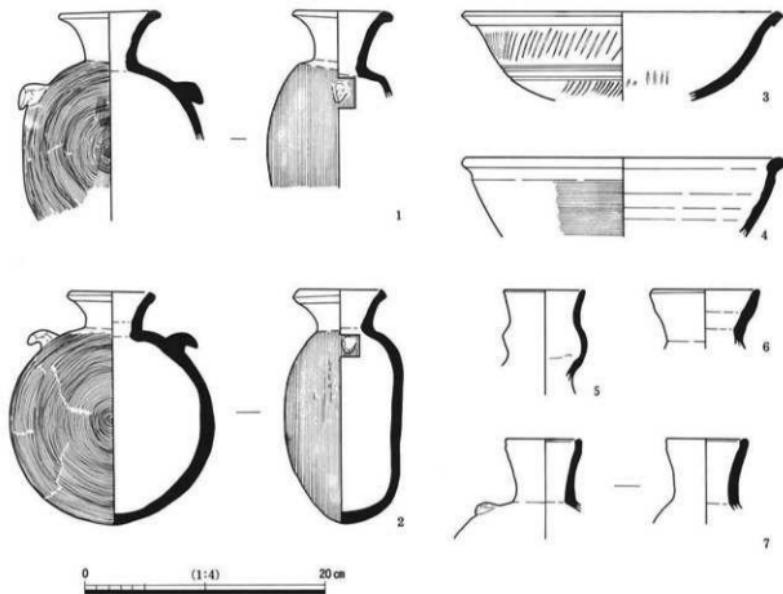
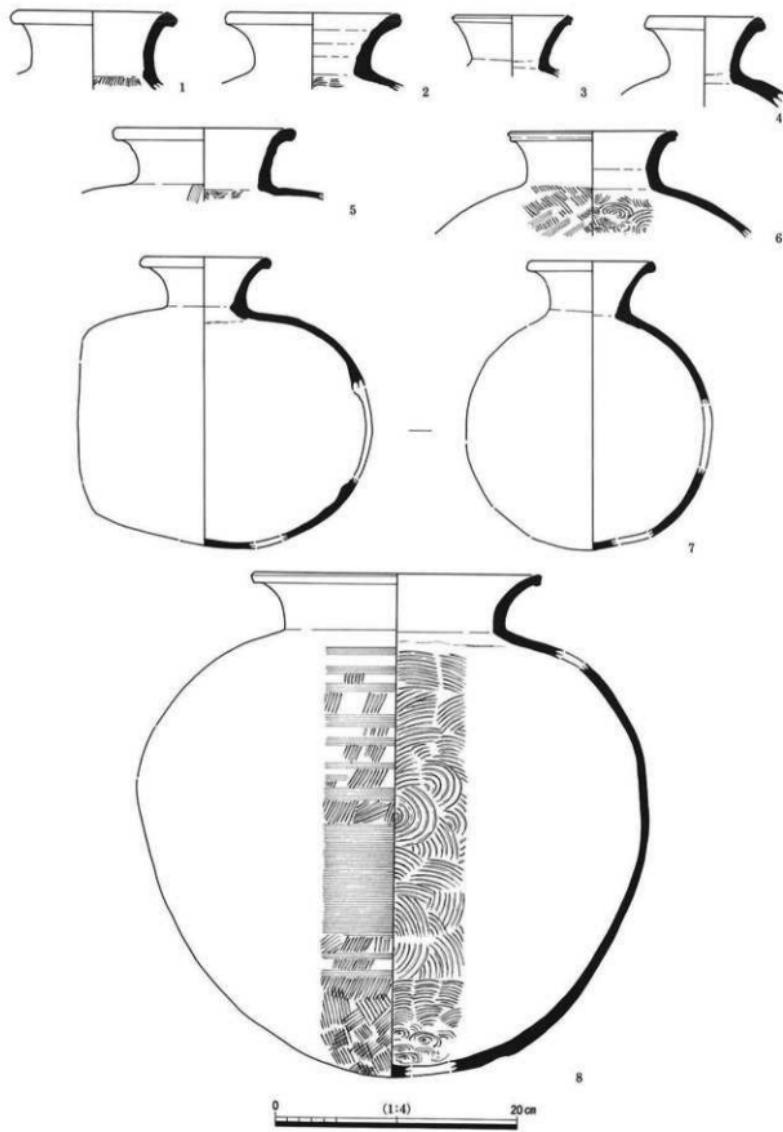


図 IV-99 須恵器窯P-1 灰原出土須恵器 (5)



図IV-100 須恵器窯P-1灰原出土須恵器（6）

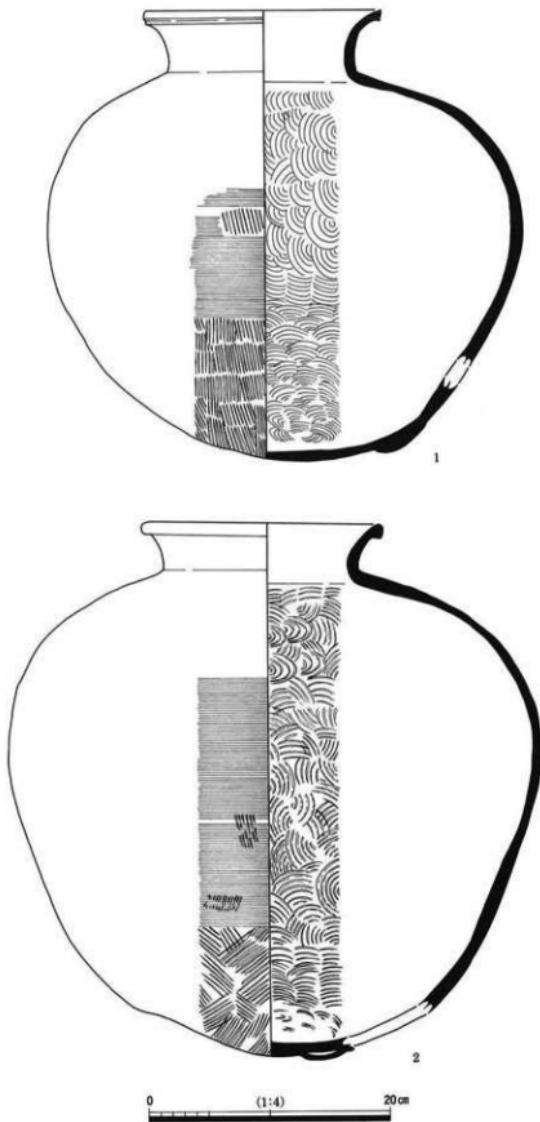


図 IV-101 須恵器窯P-1 灰原出土須恵器（7）

蓋杯が過半数以上出土しており、完形のものだけで85コンテナを数える。次いで、甕が65コンテナを数える。その他、短頸壺が多く出土している以外は、少數の出土である。

特筆できるものとしては、大型の蓋杯が2点出土している(図IV-102-1,2)。

焼け歪み、生焼けのものも大量に出土しており、特に口径50cm以上の大甕が3個体復元できた(写IV-60-4)。

灰原からは、須恵器以外に、土師器が2点出土している(図IV-102-3,4)。それ以外に、中世の瓦器碗が1点のみ出土している(同図-5)。

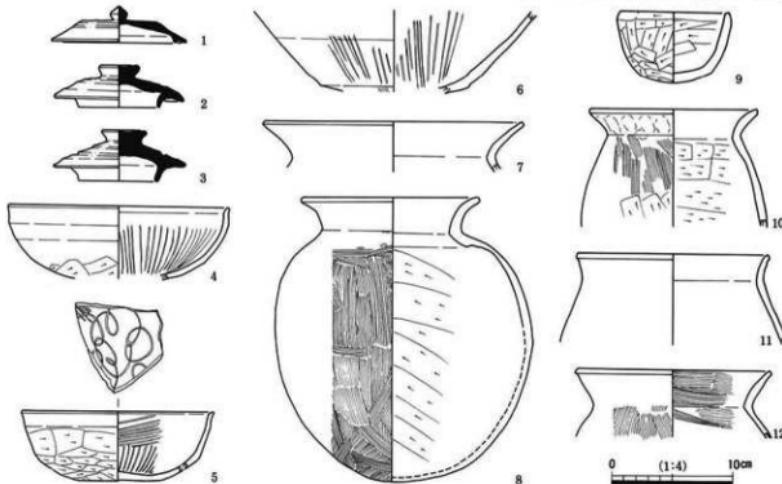
#### 4. 河道P-2出土遺物(図IV-103~105)

写IV-61~65)

P地区の河道P-2から出土した遺物には、先述したように、ほとんどが須恵器窯から焼き出された須恵器が占める。それ以外の土器としては、同時期の土師器や奈良時代の土師器・須恵器、中世の瓦器碗等が出土することから、この河道は中世の時期までは流れていることがわかる(図IV-103)。

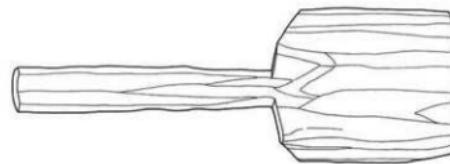
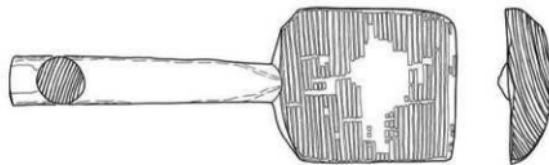
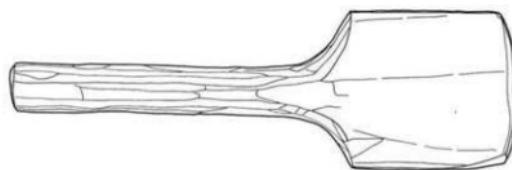
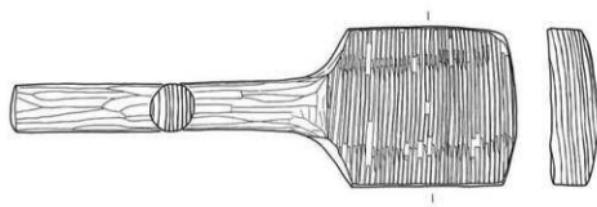
土器以外の遺物としては、木器が特筆される。

木器は、須恵器製作時に使用される工具の叩き板2点(図IV-104)、および当て具3点(図IV-105)



図IV-102 須恵器窯P-1 灰原出土遺物

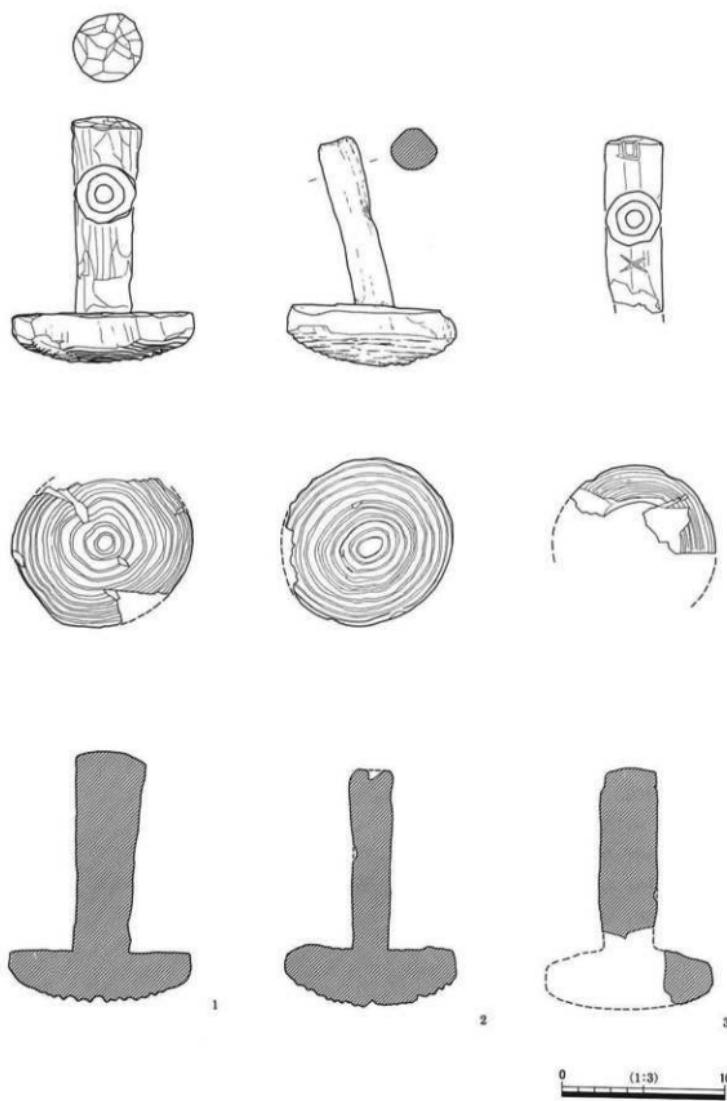
図IV-103 河道P-2出土土器



2



図IV-104 河道P-2出土叩き板



図IV-105 河道P-2出土當て具

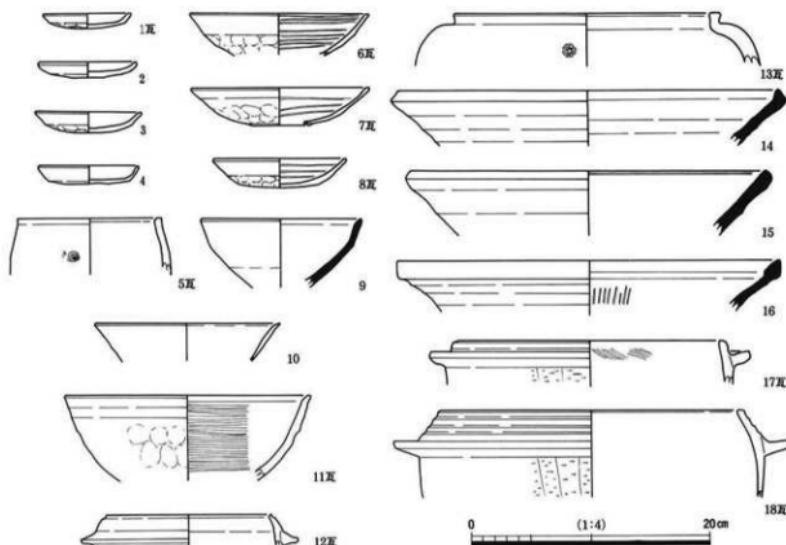


図 IV-106 中世包含層出土土器

の計5点である。詳細は、付表IV-25に記す。

### 第3節 中世以降の遺物

中世以降の遺物は、P地区ではほとんどが後世の耕作土からの出土であり、遺構からまとまって出土するものは無い。

完形になるものは無く小破片がほとんどで、磨滅しているものが多い。瓦器碗・瓦器小皿・瓦器鉢・瓦質火鉢・瓦質羽釜、土師器小皿、中世須恵器、常滑こね鉢、丹波入り鉢、中国製天目茶碗・白磁等である（図IV-106、写IV-66）。

他に、近世陶磁器がわずかに出土している。

なお、古墳時代の埴輪や近世以降の遺物が転用され、暗渠に使用されているものがある。

以上、古墳時代の埴輪窯および須恵器窯出土の遺物を中心に、遺物の記述をしてきた。個々の詳細については、付表の掲載遺物一覧表を参照されたい。

#### 第4節 まとめ—遺物から見ての一

遺物の項で先述したように、埴輪窯P-1から出土した埴輪には、様々な特徴があることが判明した。これらを、須恵器窯P-1との関係を含めて、遺物から見た見解および私見を述べる。

##### 1. 立地

窯の立地は、先述したように、開析谷（現地名 石池谷）の高位段丘崖に当たり、約20m離れて埴輪窯と須恵器窯が構築されている。この段丘崖の北方、約400mの沿線上に日置莊西町窯がある。本来は、P地区の埴輪窯および須恵器窯も、この日置莊西町古窯址群と一連のものと捉えられる。

須恵器窯に関しては、陶邑古窯址群の縁辺部に位置し、從来の支谷による地区区分からは外れる。

##### 2. 構造

〔埴輪窯P-1〕は、最終掘削状況写真（巻頭カラー29）から、埴輪窯の延長上に同幅の炭層が伸びていることが確認できることから、全長9m、幅2mを測ると考えられる。検出時では、すでに天井部が欠落し、焚き口付近は後世に削平を受けている。

窯の周辺に排水溝を穿ち、床面の傾斜角が約10°を測る。最終床面IIIから出土の埴輪が、高さ約1.6mを測ると思われることから類推すると、天井部の高さは、地山より高かった可能性が大である。

〔須恵器窯P-1〕は、一部分のみが残存し、残存長4.5m、最大幅2.5mを測る。床面の傾斜度が約15°を測る。灰原から出土した大型が高さ約1.2mを測ることから類推すれば、埴輪窯と同様に地山より天井部が出ていた可能性がある。

いずれの窯も、築造時には、前面に開析谷があり、そこを流れる河川の一部を埋め立て焚き口を造り出している。これは、III調査区の須恵器窯とも共通する造り方である。

##### 3. 焼成

〔埴輪窯P-1〕は、遺物の出土状況から最低3枚の床面が確認されている。床面Iでは樹立した埴輪の検出状況から、一度におよそ20本の埴輪が焼かれたと推定できる。床面および壁面は赤褐色に焼けているが、貼り床および貼り壁をした痕跡は認められなかった。

床面から出土する埴輪の検出状況から、床面Iおよび床面IIは、量の多さや完形になる埴輪があることや、1/2以上に復元できる埴輪が多いことからすると、焼成時に埴輪が爆発したか、何らかの原因で天井部が崩落した可能性が考えられる。特に、床面IIIの埴輪を覆っていた赤褐色の粘土は、天井部のものと考えられる。

また、床面IIの埴輪の検出状況では、大きめの破片を外面を上にして敷き並べたようになっていることから、床面を均すために焼成不良品が用いられたことがわかる。

〔須恵器窯P-1〕は、かなりの削平を受けており、確とはし難いが、床面といえるのはどうも1枚であったようである。これは、遺物の出土状況や床面を形成する層の状況からも言えそうである。なお、灰原から出土した須恵器の時期差がほとんど無いことからも言えよう。

この須恵器窯の床面は、從来検出されている須恵器窯と同様に、粘土で貼り床され、その上面に砂を敷いて床面を造っている。

##### 4. 遺物

〔埴輪窯P-1〕から出土した円筒埴輪は、先述したように、床面ごとに大きな差異を見せる。まず、埴輪が出土する床面は、3枚確認されており、それらは、正規的に堆積していることから、床面I・II・

IIIの順に新しくなることがわかる。それらを踏まえて整理すると、次のようになる。

床面I・II・III出土の円筒埴輪に共通することは、口径40cm前後、器高約90cmの大きさと、基底部を作ってから一気に口縁部まで作ってしまう製作技法である。

次に、各床面ごとに、器壁の厚み、凸帯の付け方、調整技法等に差異が顕著にててくる。これを、凸帯の付け方で見るならば、凸帯下に下描き線を施さないが、剥がれないようにしっかりと付けている床面Iの段階から、それを踏襲しているものと、指ナデによる下描き線を施すものに安易に貼り付けている床面IIの段階、ヘラによる沈線で下描きを施すものの、床面IIと同様に安易に貼り付けている床面IIIの段階に区分される。しかも、床面IIの段階で大きな変革が見られる。

窯からは、円筒埴輪のみが検出されているが、灰原からは、形象埴輪も出土しており、様々な埴輪が焼成されていたものと推測される。

## 5. 時期

〔埴輪窯P-1〕出土の床面特徴からみると、床面Iですでに埴輪の製作技法における崩壊が認められるものの、まだ埴輪としての認識が製作者にはある。床面IIの段階になると、それを繼承しながらさらに崩れた段階と、全く埴輪を見たことがない人物が「多分こういうものだろう」と推測して作成したために埴輪としての認識が困難な段階があり、この床面IIに関しては、大きなギャップが認められる。次に、床面IIIの段階になると、先祖帰りを起こし、一見すると丁寧な作りのようではあるが、粗雑さがさらに進行している。

これらから推測すると、床面I、IIで連続性があるものの、床面IIの段階で断続し、一次空白期があつて後、床面II、IIIと継続しているようである。

以上のような特徴からすれば、当窯の埴輪は、時期的には6世紀代ということで、川西編年の第V期に相当するが、その特異性から第IV期としたほうがよいようである。

さらに、特大型のいわゆる「日置莊西町窯系埴輪」で比較してみると、以下のようになる。

日置莊西町窯出土の埴輪は、口縁端部の外面に凸帯が付くこと、体側部にヒレが付くこと等が特徴である。また、透かし孔をコンパスで下描きしたり、凸帯下に位置決めの刺突紋を施している。

これに比して、当窯では、数点しか出土していないが、床面IIの段階で口縁部の凸帯が見せかけで終わり、床面IIIの段階では口縁部が幅広の粘土帯を付加している。いずれの場合も、体側部のヒレは施されない。凸帯は、床面IIの段階では断面山形、床面IIIではやや低い断面M字形で凸帯下の下描き線は施されない。

以上のことから、日置莊西町窯出土のものの方が、丁寧な作り方をしていることがわかる。前者が6世紀前半に比定されるならば、後者はそれよりは新しくなるであろう。

しかも、須恵器窯P-1の須恵器が田辺編年のMT-85の後半とすれば、前面の河川内より、灰原と接合する大甕（写N-60-4）が出土し、その河川の上面に埴輪の灰原が検出されることからも、それよりは埴輪窯P-1の埴輪が、新しい時期になろう。

なお、埴輪と須恵器の灰原が混在して検出された状況からすると、須恵器窯が築かれて間もなく、埴輪窯が築かれ、一時期同時併存しており、須恵器窯が操業を終了した後も、埴輪窯は操業を継続させていたと考えられる。

その最終段階は、埴輪の消滅した時期と重なるものと思われる。

# 報告書抄録

ふりがな	ひきょういせき							
書名	日置荘遺跡							
調書名	近畿自動車道松原すさみ線及び都市計画道路松原泉大津線建設に伴う調査報告書							
シリーズ名	_____							
シリーズ番号	_____							
編著者名	赤木克視・森屋美佐子・中村淳穂・市本芳三・江浦洋・入江正則・亀井聰・中谷幸太郎・森脇耕介・三辻利一・井上巖・前中一晃・伊達宗泰・山田治・大澤正己・市川秀之・藤澤一夫							
編集機関	財団法人 大阪文化財センター							
所在地	豊536 大阪府大阪市城東区蒲生2丁目10-28 大阪府城東庁舎7F ☎06-934-6651							
発行年月日	西暦 1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
ひきょういせき 日置荘遺跡	おおさかふさみいせき 大阪府堺市 ひきょういはらぢまち 日置荘原寺町 ひきょういしもち 日置荘西町 ひきょういたなまち 日置荘田中町	27201	184 59分 55秒	35度 59分 58秒	135度 59分 58秒	1987.04.01 1991.03.31	89,140	近畿自動車道松原す さみ線及び都市計画 道路松原泉大津線建 設に伴う事前の埋蔵 文化財調査
あまた 余部遺跡	おおさかふさみいせき 大阪府南河内郡 みはらわうちあまた 美原町北余部	27217	18					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
日置荘遺跡 I 調査区	城郭 寺	鎌倉・室町 鎌倉・室町	堀、掘立柱建物、溝、井戸、土坑 区画溝、井戸	土師器、瓦器、瓦質土器 護摩鉢、瓦質火鉢、灯明台座、輸入陶磁器、移入陶器、飾り金具、瓦、鎔型	大規模な堀に囲まれた城郭跡 大量の瓦に混ざって瓦質製品が多量出土 真言密教系寺院と考えられる			
II 調査区	屋敷地 鋳造遺構 墓	鎌倉・室町 鎌倉・室町 鎌倉・室町	溝により区画された 屋敷地 鋳造関連土坑 土壙墓	軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦、道 具瓦、瓦質土器、土師質土器、鐵瓶、鎔型	中世の屋敷地の変遷・平安末から室町の瓦の変遷が明らかとなった 鋳造関連遺構・遺物と「河内鋳物師」との関連			
III 調査区	窯 集落	古墳時代後期 奈良～平安	須恵器窯 掘立柱建物、溝、井戸、土坑、土器 埋納ビット 土壙墓	土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、銅鈴 青磁碗、土師器、瓦器、鐵釘	窯は浅い開析谷に単独で造営 条里型地割りに対応して営まれた集落 奈良時代の建物跡はL字形に整然と配置される 2基の土壙墓からはそれぞれ青磁碗と土師器とがセットで出土			
IV 調査区	窯	古墳時代後期	埴輪窯 須恵器窯	円筒埴輪、人物埴輪 須恵器、木製叩板、當て具	開析谷の斜面に埴輪窯と須恵器窯を隣接して検出 塩輪窯出土の円筒埴輪は終末期を考える上で良好な一括資料となる			



# 日置莊遺跡 本文編

近畿自動車道松原すみ線および府道  
松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書

1995年3月31日 発行

編集発行／大阪府教育委員会

大阪市中央区大手前2丁目1-22

財団法人 大阪文化財センター

大阪市城東区蒲生2丁目10-22

印刷／株式会社 中島弘文堂印刷所

大阪市東成区深江南2丁目6-8

